

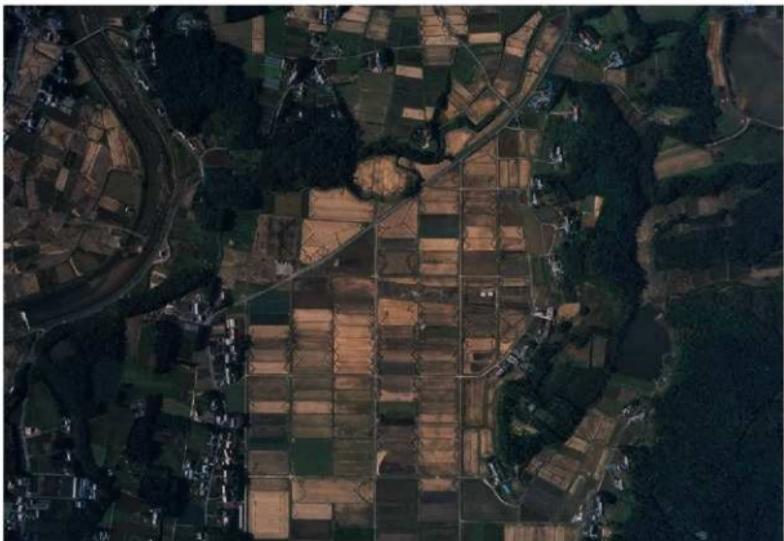
# 常磐自動車道遺跡調査報告49

さわひ御じ  
沢東B 遺跡（2次調査）





図絵 1 遺跡遠景(南から)



図絵 2 遺跡遠景(真上上空から)





図3 調査区全景(1次～2次調査 合成写真)



## 序 文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は、昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間、平成11年にいわき中央～いわき四倉間、平成14年にはいわき四倉～広野間、平成16年には広野～常磐富岡間が開通し、現在は富岡～相馬間で工事が進められています。

この常磐自動車道建設用地内には、先人が残した貴重な文化遺産が所在しております。周知の埋蔵文化財包蔵地を含め、数多くの遺跡などを確認しております。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であるとともに、我が国の歴史・文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では、常磐自動車道建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について、開発関係機関と協議を重ね、平成5年以降、埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い、その結果をもとに、平成6年度から、現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし、発掘調査を実施してきました。

本報告書は、平成18年度に行った双葉郡浪江町の沢東B遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。この報告書を県民の皆様が、文化財に対する御理解を深め、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書の作成にあたり、御協力いただいた東日本高速道路株式会社、浪江町教育委員会、財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、感謝の意を表するものであります。

平成19年12月

福島県教育委員会

教育長 野 地 陽 一



## あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大规模な開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査業務を行っております。

常磐自動車道建設にかかる発掘調査は、平成6年度から開始し、いわき四倉ICから富岡IC予定地間については植葉パーキングエリアの一部を除き、平成13年度までに発掘調査を終了しております。

また、平成14年度からは富岡ICから相馬IC予定地間にかかる遺跡の調査を本格的に開始し、平成18年度には大熊町・浪江町・南相馬市・相馬市に所在する18遺跡について調査を実施いたしました。

本報告書は、平成18年度に実施した発掘調査のうち、浪江町に所在する沢東B遺跡(2次調査)の調査成果をまとめたものです。

沢東B遺跡は、請戸川左岸の河岸段丘に立地する縄文時代と中・近世の複合遺跡です。縄文時代では竪穴住居跡が発見され、集落跡であったことがわかりました。中・近世では堀によって区画された屋敷跡が発見され、門跡や掘立柱建物跡の配置が明らかとなりました。

今後、これらの調査成果を歴史研究の基礎資料として、さらに地域社会を理解することや生涯学習に幅広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、この調査に御協力いただきました浪江町並びに地域住民の皆様に、深く感謝申し上げますとともに、埋蔵文化財の保護に対し、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年12月

財団法人 福島県文化振興事業団

理事長 富田 孝志



## 緒 言

- 1 本書は、平成18年度に実施した常磐自動車道(いわき工区)の遺跡発掘調査報告書である。
- 2 本書には以下に記す遺跡調査成果を収録した。  
沢東B遺跡 福島県双葉郡浪江町大字立野字沢東他 埋蔵文化財番号：54700137
- 3 本事業は、福島県教育委員会が東日本高速道路株式会社の委託を受けて実施し、調査に係る費用は東日本高速道路株式会社が負担した。
- 4 福島県教育委員会は、発掘調査を財團法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。
- 5 財團法人福島県文化振興事業団では、遺跡調査部遺跡調査グループの下記の職員を配して調査にあたった。

文化財副主査 稲村 圭一 文化財主事 坂田由紀子

なお、臨時に次の職員の参加・協力を得た。

嘱託 林 純太郎

また、赤彩土器の顔料及び漆器の成分分析については、文化財主事 小林 啓が実施した。

- 6 本書の執筆にあたっては、調査を担当した調査員が分担してを行い、文責は文末に示した。  
付章1・2の執筆にあたっては、文化財主事 小林 啓が行った。
- 7 本書に掲載した自然科学分析については、次の機関に委託し、付章にその結果と考察を掲載している。
  - 付章3 沢東B遺跡出土の炭化物・木質遺物の放射性炭素年代測定：パリノ・サーヴェイ株式会社
  - 付章4 沢東B遺跡より出土した土木材の樹種：古代の森研究室
  - 付章5 沢東B遺跡出土製鉄遺物の化学分析：JFEテクノリサーチ株式会社
- 8 本書に使用した地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を複製したものである。「(承認番号)平19東複第142号」
- 9 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 10 発掘調査および報告書作成にあたり、次の諸機関からご協力いただいた。  
(順不同・敬称略) 浪江町教育委員会、浪江町公民館

## 用 例

1 本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方 位 世界測地系で設定した座標北を図版の真上とした。それ以外のものは挿図中に座標北を指す方位を示した。
- (2) 標 高 水準点を基にした海拔標高で示した。
- (3) 縮 尺 各挿図中に縮尺率を示した。
- (4) 上 層 基本上層はアルファベット大文字Lとローマ数字を組み合わせ、遺構内の堆積土はアルファベット小文字ℓと算用数字を組み合わせて表記した。  
(例)基本層位—L I・L II…、遺構内堆積土—ℓ 1・ℓ 2…  
なお、挿図の土層注記で使用した土色名は、「新版標準土色帖22版」(小山正忠・竹原秀雄編著1999日本色研事業株式会社発行)に基づく。
- (5) ケ パ 遺構内の傾斜面は「TTT」で表現したが、相対的に緩傾斜の部分には「〒〒」で表している。また、「〒〒」は後世の搅乱が明らかである場合に使用した。
- (6) 線 の 表 現 波線は推定範囲、一点鎖線は貼床範囲を示す。
- (7) 網 か け 挿図中の網かけの用例は、同図中に表示した。

2 本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 土 器 斷 面 須恵器の断面は黒塗りとした。粘土積み上げ痕を一点鎖線で表記した。
- (2) 遺物計測値 ( )内の数値は推定値、〔 〕内の数値は遺存値を示す。
- (3) 縮 尺 各挿図中に縮尺率を示した。
- (4) 網 か け 挿図中の網かけの用例は黒色処理を示し、それ以外は同図中に表示した。

3 本書における本文中の遺物の番号は、挿図番号と対照できるようにして、以下のとおり記した。

(例)図1の1番 → 1図1

また、写真図版の遺物に付けた挿図番号は以下のとおり記した。

(例)図1の1番 → 1図1

4 文章中の遺物点数は、全て破片点数である。

5 本書で使用した略号は、次のとおりである。

浪江町……N E	沢東B遺跡…S H・B	遺構外堆積土…L	遺構内堆積土…ℓ
豎穴住居跡…S I	掘立柱建物跡…S B	特殊遺構…S X	土 坑…S K
井戸跡…S E	溝 跡…S D	柱列跡…S A	焼土跡…S G
小穴・ビット…P	グリッド…G		

6 参考・引用文献は執筆者の敬称を省略し、各編の末にまとめて収めた。

# 目 次

## 第1章 調査に至る経緯と環境

第1節 調査に至る経緯	1
常磐自動車道建設事業の概要と平成17年度までの調査経過	1
平成18年度の調査経過	2
第2節 遺跡の位置と自然環境	4
第3節 周辺の遺跡と歴史的環境	6

## 第2章 調査 経 過

第1節 遺跡の位置と地形	8
第2節 調査 経 過	8
第3節 調査 の方 法	11

## 第3章 遺構 と 遺 物

第1節 遺構の分布と基本土層	12	
第2節 竪穴住居跡	18	
1号住居跡(18)	2号住居跡(21)	
第3節 捶立柱建物跡	24	
8号建物跡(24)	9号建物跡(25)	10号建物跡(25)
11号建物跡(27)	12号建物跡(27)	13号建物跡(29)
14号建物跡(31)	15号建物跡(32)	16号建物跡(32)
17号建物跡(32)	18号建物跡(34)	19号建物跡(34)
20号建物跡(35)	21号建物跡(36)	22号建物跡(37)
23号建物跡(38)	24号建物跡(38)	25号建物跡(40)
26号建物跡(41)	27号建物跡(42)	28号建物跡(42)
第4節 特 殊 遺 構	42	
1号特殊遺構(43)	2号特殊遺構(45)	3号特殊遺構(45)
4号特殊遺構(50)		
第5節 土 坑	50	
7号土坑(51)	8号土坑(52)	9号土坑(52)

10号土坑(54)	11号土坑(54)	12号土坑(55)
13号土坑(55)	14号土坑(56)	15号土坑(56)
16号土坑(56)	17号土坑(58)	18号土坑(58)
19号土坑(58)	20号土坑(60)	21号土坑(60)
22号土坑(60)	23号土坑(61)	24号土坑(61)
25号土坑(61)	26号土坑(62)	27号土坑(62)
28号土坑(64)	29号土坑(64)	30号土坑(65)
31号土坑(66)		
第6節 井戸跡.....		
1号井戸跡(67)	4号井戸跡(67)	5号井戸跡(69)
6号井戸跡(69)	7号井戸跡(71)	
第7節 溝跡.....		
1号溝跡(71)	2号溝跡(76)	3号溝跡(83)
4号溝跡(84)	8号溝跡(86)	9号溝跡(86)
10号溝跡(93)	11号溝跡(94)	12号溝跡(94)
13号溝跡(95)	14号溝跡(95)	15号溝跡(95)
16号溝跡(96)	17号溝跡(99)	18号溝跡(100)
19号溝跡(100)	20号溝跡(101)	21号溝跡(101)
22号溝跡(102)	23号溝跡(102)	24号溝跡(102)
25号溝跡(103)	26号溝跡(103)	27号溝跡(103)
28号溝跡(104)	29号溝跡(104)	30号溝跡(105)
31号溝跡(107)	32号溝跡(107)	33号溝跡(108)
第8節 櫛列跡.....		
1号櫛列跡(108)	2号櫛列跡(108)	3号櫛列跡(109)
4号櫛列跡(109)	5号櫛列跡(109)	6号櫛列跡(110)
7号櫛列跡(110)	8号櫛列跡(110)	9号櫛列跡(112)
10号櫛列跡(112)	11号櫛列跡(112)	
第9節 焼土遺構.....		
1号焼土遺構(114)	2号焼土遺構(114)	
第10節 その他の遺構と遺構外出土遺物.....		
小穴群(115)	遺構外出土遺物(115)	
第4章 まとめ.....		
		118

## 付 章 自然科学分析

付章1 沢東B遺跡出土赤彩土器顔料の成分分析	133
付章2 沢東B遺跡出土漆器の成分分析	135
付章3 沢東B遺跡出土の炭化物・木質遺物の放射性炭素年代測定	137
付章4 沢東B遺跡より出土した土木材の樹種	145
付章5 沢東B遺跡出土製鉄遺物の化学分析調査	147

## 挿図・表目次

### [挿 図]

図1 常磐自動車道位置図	1	図27 3・4号特殊遺構	47
図2 常磐自動車道路線図	3	図28 3号特殊遺構出土遺物(1)	48
図3 周辺の繩文時代・中世・近世の遺跡	5	図29 3号特殊遺構出土遺物(2)	49
図4 調査範囲とグリッド配置図	10	図30 7号土坑	51
図5 遺構配置図(1)・基本土層図(1)	14	図31 8~11号土坑	53
図6 遺構配置図(2)・基本土層図(2)	15	図32 12~17・20号土坑	57
図7 遺構配置図(3)	16	図33 18・19・21~23号土坑	59
図8 遺構配置図(4)	17	図34 24~27号土坑	63
図9 1号住居跡と出土遺物(1)	19	図35 28~31号土坑	65
図10 1号住居跡と出土遺物(2)	20	図36 土坑出土遺物	66
図11 2号住居跡と出土遺物(1)	22	図37 1号井戸跡と出土遺物	68
図12 2号住居跡と出土遺物(2)	23	図38 4~7号井戸跡	70
図13 8号建物跡	25	図39 1~3・15号溝跡(1)	72
図14 9・10号建物跡	26	図40 1~3・15号溝跡(2)	73
図15 11~18号建物跡と出土遺物	28	図41 1号溝跡出土遺物(1)	74
図16 12号建物跡	29	図42 1号溝跡出土遺物(2)	75
図17 13号建物跡	30	図43 2号溝跡	77
図18 14号建物跡	31	図44 2号溝跡出土遺物(1)	79
図19 15~17号建物跡、1~3号柵列跡	33	図45 2号溝跡出土遺物(2)	80
図20 19号建物跡	35	図46 2号溝跡出土遺物(3)	81
図21 20・22・23号建物跡、7号柵列跡と出土遺物	36	図47 2号溝跡出土遺物(4)	82
図22 21号建物跡	37	図48 4・21~23号溝跡	85
図23 24・25号建物跡	39	図49 3・4号溝跡出土遺物	86
図24 26号建物跡	40	図50 8・9・20号溝跡	87
図25 27・28号建物跡	41	図51 9号溝跡出土遺物(1)	88
図26 1・2号特殊遺構	44	図52 9号溝跡出土遺物(2)	89

図53	9号溝跡出土遺物(3).....	90	図62	9~11号柵列跡.....	113
図54	9号溝跡出土遺物(4).....	91	図63	1~2号焼土遺構.....	114
図55	9号溝跡出土遺物(5).....	92	図64	遺構外出土遺物(1).....	116
図56	10・16・19・24~33号溝跡(1).....	96	図65	遺構外出土遺物(2).....	117
図57	10・16・19・24~33号溝跡(2).....	97	図66	中世・近世の遺構配置図.....	119
図58	11~14・16号溝跡.....	98	図67	沢東周辺の地籍図(明治22年:地籍図).....	121
図59	11・12・20号溝跡出土遺物.....	99	図68	館跡の変遷.....	123
図60	28・29・31号溝跡出土遺物.....	106	図69	館跡の出土遺物.....	125
図61	4~6・8号柵列跡.....	111			

[ 表 ]

表1 周辺の縄文時代・中世・近世の遺跡一覧..... 6

## 写真図版目次

1	調査区南半部.....	165	27	3・4号特殊遺構.....	178
2	調査区北側.....	165	28	3・4号特殊遺構細部.....	178
3	1号住居跡.....	166	29	7~11号土坑.....	179
4	1号住居内埋跡.....	166	30	12~17号土坑.....	180
5	1号住居跡細部.....	167	31	18~24号土坑.....	181
6	2号住居跡.....	167	32	25~31号土坑.....	182
7	2号住居内埋跡.....	168	33	1・4~7号井戸跡.....	183
8	2号住居跡細部.....	168	34	1~3号溝跡.....	184
9	8号建物跡.....	169	35	1~3号溝跡細部.....	184
10	9・10号建物跡.....	169	36	4・8~10号溝跡.....	185
11	11・18号建物跡.....	170	37	11・12号溝跡.....	186
12	12号建物跡.....	170	38	12号溝跡.....	186
13	13号建物跡.....	171	39	13~16号溝跡.....	187
14	14号建物跡.....	171	40	16・17号溝跡.....	187
15	15~17号建物跡.....	172	41	19号溝跡.....	188
16	19号建物跡.....	172	42	20~23号溝跡.....	188
17	20・22・23号建物跡.....	173	43	24~29号溝跡.....	189
18	24号建物跡.....	173	44	30~33号溝跡.....	190
19	25号建物跡.....	174	45	1・2号住居跡出土遺物.....	191
20	26号建物跡.....	174	46	11・23号建物跡出土遺物.....	191
21	27号建物跡.....	175	47	10・13号土坑出土遺物.....	191
22	28号建物跡.....	175	48	13・18・25号土坑出土遺物.....	192
23	1号特殊遺構.....	176	49	1号井戸跡出土遺物.....	192
24	1号特殊遺構細部.....	176	50	3号特殊遺構出土遺物.....	193
25	2号特殊遺構.....	177	51	1号溝跡出土遺物(1).....	194
26	2号特殊遺構細部.....	177	52	1号溝跡出土遺物(2).....	195

53	2号溝跡出土遺物(1).....	195	59	9号溝跡出土遺物(3).....	200
54	2号溝跡出土遺物(2).....	196	60	12・20号溝跡出土遺物.....	200
55	2号溝跡出土遺物(3).....	197	61	28号溝跡出土遺物.....	200
56	2～4号溝跡出土遺物.....	198	62	29・31号溝跡出土遺物.....	201
57	9号溝跡出土遺物(1).....	198	63	遺構外出土遺物(1).....	201
58	9号溝跡出土遺物(2).....	199	64	遺構外出土遺物(2).....	202

## 付章1 沢東B遺跡出土赤彩土器顔料の成分分析

(三四)

- 図1 赤彩土器1 ..... 134 図2 赤彩土器2 ..... 134

## 付章2 沢東B遺跡出土漆器の成分分析

(插 四)

- 図1 漆器(47図5)..... 136

### 付章3 沢東B遺跡出土の炭化物・木質遺物の放射性炭素年代測定

### [插 图]

- |                   |     |                   |     |
|-------------------|-----|-------------------|-----|
| 図1 历年較正結果(1)..... | 140 | 図4 历年較正結果(4)..... | 143 |
| 図2 历年較正結果(2)..... | 141 | 図5 历年較正結果(5)..... | 144 |
| 図3 历年較正結果(3)..... | 142 |                   |     |

( 表 )

- 表1 測定試料及び処理…………… 137 表2 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果… 138

#### 付章4 沢東B遺跡より出土した土木材の樹種

( 表 )

[写 真]

- 表 1 沢東B遺跡出土土木材の樹種…………… 145 写真1 沢東B遺跡出土土木材の顕微鏡写真 …… 146

## 付章5 沢東B遺跡出土製鉄遺物の化学分析調査

(挿 図)

- 図1 出土鉄滓類の全銅量と  
二酸化チタン量の分布図 ..... 156

(表)

- 表1 鉄津の顯微鏡鉱物組織とその観察状況……… 154 表3 鉄津の化学成分分析結果…………… 155

表2 調査資料と調査項目…………… 155

(写 真)

- |           |     |              |     |
|-----------|-----|--------------|-----|
| 写真1 外観写真1 | 157 | 写真3 跡微鏡組織写真1 | 159 |
| 写真2 外観写真2 | 158 | 写真4 跡微鏡組織写真2 | 160 |



# 第1章 調査に至る経緯と環境

## 第1節 調査に至る経緯

### 1 常磐自動車道建設事業の概要と平成17年度までの調査経過

常磐自動車道は、埼玉県三郷市を起点として、千葉県・茨城県・福島県浜通り地方を縦貫し宮城县に至る、太平洋沿岸の交通の大動脈として計画された路線である。この計画のうち、三郷インターチェンジ（以下 IC と略す）からいわき市のいわき中央 IC までは、昭和63年に供用が開始され、更に、いわき中央 IC からいわき四倉 IC までは平成11年3月に供用を開始している。

これら供用が開始された区間のうち、茨城県境からいわき中央 IC までの間に所在する 4 遺跡に関しては、昭和59・60年に、いわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に委託し、発掘調査を実施した。いわき中央 IC ～いわき四倉 IC 間に所轄する20遺跡の発掘調査は、平成6年度から9年度にかけ好間～平赤井・平窪地区の10遺跡の発掘調査をいわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に、四倉町大野地区の10遺跡の発掘調査は福島県教育委員会が財団法人福島県文化センターにそれぞれ委託して実施された。

いわき四倉 IC 以北の路線については、平成3年にいわき四倉 IC ～富岡 IC 間が整備計画路線に格上げされ、平成5年には施工命令がだされた。更に、富岡 IC 以北については、平成8年に相馬 IC までの区間が整備計画路線となり、平成10年に施工命令がだされた。

福島県教育委員会では、いわき四倉 IC 以北の路線内に所在する埋蔵文化財に関して、平成6年度より表面調査を実施し、平成10年度までに宮城県境まで終了している。この成果を受けて、平成

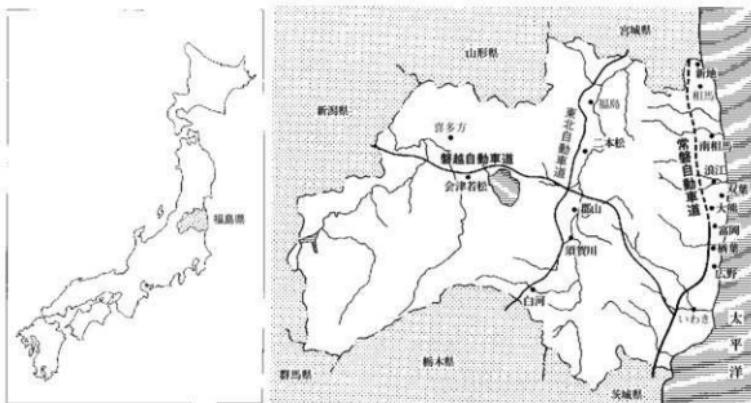


図1 常磐自動車道位置図

7年度よりいわき四倉IC～富岡IC間の試掘調査を実施した。

平成9年度からは、同区間に所在する遺跡の発掘調査が開始された。平成9年度はいわき市内の5遺跡と広野町内の1遺跡の発掘調査を実施し、平成10年度はいわき市内の4遺跡、広野町内の3遺跡、楢葉町内の3遺跡、富岡町内の2遺跡の発掘調査を実施した。この平成10年度の調査により、路線内に所在する遺跡のうち、いわき市内に所在する遺跡の発掘調査を全て終了した。平成11年度は、広野町内の4遺跡、楢葉町内の5遺跡について調査を実施した。平成12年度は、広野町内の1遺跡、楢葉町内の7遺跡、富岡町内の5遺跡について調査を実施した。この平成12年度の調査により、路線内に所在する遺跡のうち、広野町内に所在する遺跡の発掘調査を全て終了した。平成13年度は、楢葉町の1遺跡、富岡町内の5遺跡について実施した。平成13年度の調査では、路線内に所在する遺跡のうち、楢葉町内に所在する遺跡が楢葉バーミングエリア2期線部分に残された大谷上ノ原遺跡を残して終了した。平成14年度は、富岡町の1遺跡、大熊町の2遺跡について実施した。当初富岡ICまでについては日本道路公团東北支社（現：東日本高速道路株式会社東北支社）いわき工事事務所、富岡ICから大熊町以北については相馬工事事務所がそれぞれ管轄していたが、7月1日付けをもって富岡ICから浪江ICまでの区間についても、いわき工事事務所が管轄することとなった。平成15年度は、相馬市の2遺跡、浪江町の2遺跡について調査を実施した。平成16年度は、大熊町の3遺跡、鹿島町の2遺跡、相馬市の1遺跡について調査を実施した。また、平成17年度は、大熊町の3遺跡、双葉町の2遺跡、浪江町の2遺跡、小高町（現：南相馬市小高区）の3遺跡、原町市（現：南相馬市原町区）の1遺跡、鹿島町（現：南相馬市鹿島区）の1遺跡、相馬市の1遺跡について調査を実施している。

## 2 平成18年度の調査経過

平成18年度の常磐自動車道いわき工区の発掘調査は、福島県教育委員会の委託を受け、調査員7名を配置して実施した。発掘調査の対象とした遺跡は、大熊町に所在する上平A遺跡、浪江町に所在する沢東B遺跡・原B遺跡・朴迫C遺跡・後田A遺跡・東畑遺跡・仲禅寺遺跡の6遺跡であったが、条件整備等の状況により、仲禅寺遺跡が次年度以降に持ち越しとなり、代わりに優先順から朴迫B遺跡を調査することとなった。調査面積は総計21,450m<sup>2</sup>である。

各遺跡の発掘調査は、東日本高速道路株式会社東北支社いわき工事事務所（以下、いわき工事事務所と略す）との協議に基づき実施した。大熊町に調査員2名（1班）、浪江町に調査員5名（2班）を配置し、調査を実施することとした。大熊町の1班は上平A遺跡の調査に着手し、調査の終了次第、浪江町の原B遺跡→朴迫C遺跡の順に調査に着手することとした。浪江町では、1班が沢東B遺跡、他1班が東畑遺跡→後田A遺跡→朴迫B遺跡の順で調査に着手することとした。

各遺跡の調査成果は、大熊町上平A遺跡の調査は、平成14・16・17年度に次ぐ4次調査で、1次調査区と2次調査区に挟まれた農道部分の370m<sup>2</sup>の範囲を対象に4月10日から5月11日まで実施した。なお、調査部分については、いわき工事事務所の要望により埋め戻しを実施している。

また、浪江町東畑遺跡では、800m<sup>2</sup>の範囲を対象に4月11日から4月28日まで実施した。なお、

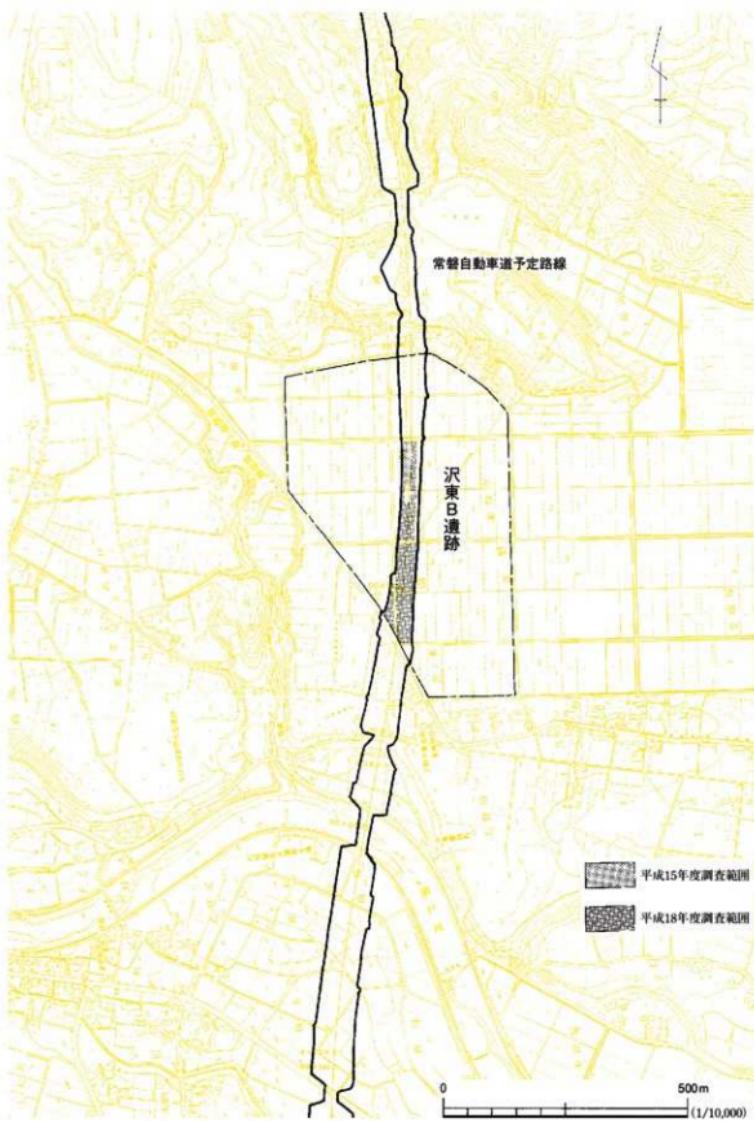


図2 常磐自動車道路線図

調査終了後は、いわき工事事務所の要望により、調査範囲を対象に埋め戻しを実施した。

浪江町沢東B遺跡の調査は、平成15年度の1次調査に次ぐ2次調査で、13,280m<sup>2</sup>の範囲を対象に4月11日から開始した。排土場所の確保の関係から調査区域を5箇所に分け、12月8日まで調査を実施した。なお、いわき工事事務所の要望により、調査範囲を対象に、いわき工事事務所の了承を得て順次埋め戻しを実施しており、12月15日には全て終了した。

浪江町原B遺跡は、900m<sup>2</sup>の範囲を対象に5月17日から7月28日まで、後田A遺跡は、1,900m<sup>2</sup>の範囲を対象に5月8日から8月31日まで調査を実施した。調査終了後は、いわき工事事務所の要望により、調査範囲を対象に埋め戻しを実施し、各遺跡終了後は朴廻C遺跡、朴廻B遺跡への調査へ順次移行した。朴廻C遺跡は、1,700m<sup>2</sup>の範囲を対象に8月10日から12月22日まで、朴廻B遺跡は、2,500m<sup>2</sup>の範囲を対象に8月21日から11月17日まで、調査を実施している。

なお、朴廻C遺跡は遺構の精査段階で深度を要し崩落の恐れがあるため、調査終了後はいわき工事事務所の要望により、埋め戻しを実施している。各班の調査終了後は、発掘器材を沢東B遺跡の器材倉庫へ搬送・収納し、朴廻C遺跡の発掘調査が終了する12月22日をもって、平成18年度における常磐自動車道いわき工区の発掘調査が全て終了した。

(福 村)

## 第2節 遺跡の位置と自然環境

福島県は東北地方南部に位置し、面積は13,782km<sup>2</sup>である。県上のおよそ8割は山地で占められ、東部には太平洋に沿って阿武隈高地が、中央部には奥羽山脈が連なり、西部には越後山脈が迫っている。これらの山地はほぼ南北に走り、県内は太平洋側より「浜通り地方」「中通り地方」「会津地方」の三つの地方に区分される。浜通り地方の地形は、おおむね西高東低であり、西の阿武隈高地から河岸段丘地帯・海岸低地の順に標高が低くなり、太平洋に至る。同様に、浪江町の地形も西半部は阿武隈高地東縁部の山地で占められる。また、太平洋から西へ約9km地点には、標高100mの等高線に沿うように双葉断層が南北に縱走し、山地と海岸平野域の境界をなしている。

浪江町を流れる主な河川は、北から請戸川・高瀬川である。これらの河川は阿武隈高地に源を発し、山間部で急峻で樹枝状の渓谷が形成されている。双葉断層の東側に入ると河床勾配は緩やかになり、請戸川や高瀬川の河川両岸には河岸段丘地形が発達している。この段丘は、標高の高い方(年代の古いもの)から、高位段丘、中位Ⅰ段丘、中位Ⅱ段丘、中位Ⅲ段丘、中位Ⅳ段丘、低位Ⅰ段丘、低位Ⅱ段丘と呼ばれる。浪江町には主に中位面が発達しており、その大部分は隆起扇状地的な山麓河成平坦地である。これらの中位段丘面は、更新世後期の最終氷期の海進・海退に伴って形成されたと考えられている(久保他 1994)。

平成15・18年度に調査した沢東B遺跡は、海岸線から約9km付近に位置し、請戸川左岸の河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は約52.4~53.1mで、請戸川の川床までの標高差は約30mである。遺跡の北側には南相馬市との境となる丘陵地が発達している。

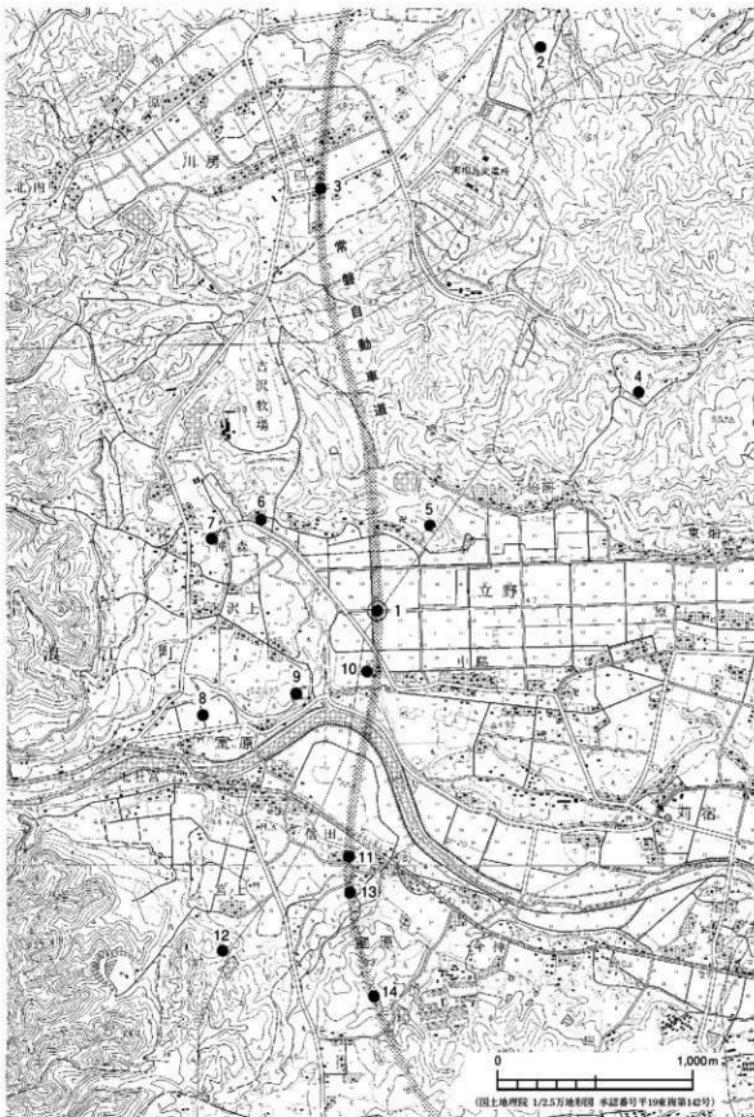


図3 周辺の縄文時代・中世・近世の遺跡

表1 周辺の縄文時代・中世・近世の遺跡一覧

No.	遺跡番号	遺跡名	所 在 地	遺跡の概要
1	54700137	沢東B遺跡	浪江町大字立野字沢東 他	縄文時代の集落跡、中世・近世の館跡、屋敷跡
2	56300125	栗成沢遺跡	南相馬市小高区大字上根沢字栗成沢	縄文時代の散布地
3	56300096	四ツ栗遺跡	南相馬市小高区大字川房字四ツ栗	縄文・平安時代の散布地
4	56300029	藤右衛門屋敷遺跡	南相馬市小高区大字神山字藤右衛門屋敷	縄文時代の散布地
5	54700109	立野古館跡	浪江町大字立野字寺道前	中世の城館跡
6	54700089	立野經塚	浪江町大字立野字園ノ倉	近世の塚
7	54700066	立野館跡	浪江町大字立野字仲ノ森	中世の城館跡
8	54700010	七社宮遺跡	浪江町大字室原字七社宮	縄文時代の散布地
9	54700011	順礼堂遺跡	浪江町大字立野字順礼堂	縄文・奈良・平安時代の散布地
10	54700088	沢海戸遺跡	浪江町大字立野字沢海戸	縄文時代の散布地
11	54700123	原B遺跡	浪江町大字室原字原	縄文・奈良・平安・近世の散布地
12	54700090	室原館跡	浪江町大字室原字室原	中世の城館跡
13	54700125	田子平遺跡	浪江町大字小野田字下原	縄文～平安時代の散布地
14	54700126	朴道B遺跡	浪江町大字室原字朴道	縄文時代の集落跡、平安時代の木炭窯跡

浪江町の地質構造は、浜通り低地帯の西縁を南北方向に走る双葉断層を境として東西で大きく異なる。断層の西側にあたる阿武隈高地の山間部には、中生代白亜紀の貫入花崗岩類が広く分布し、双葉断層に沿った周辺では、新生代新第三紀に形成された向山層・木野谷層・五安層・門平層が帶状に発達している。一方、断層の東側にあたる海岸低地域には、中世以降の主として堆積岩類が分布している。丘陵地の大部分には、新生代新第三紀に形成された大年寺層が分布している。(坂 田)

### 第3節 周辺の遺跡と歴史的環境

浪江町で最も古い時期の遺跡は、旧石器時代まで遡ることができ、遺跡の数は少ないものの手子塚A・西田原・北上ノ原・酒田原遺跡などの諸遺跡が確認されている。

縄文時代の遺跡としては、薄手無文土器が出土した乱塔前遺跡がある。中平遺跡では中期から後期にかけての竪穴住居跡や、中期の埋甕が確認されている。また、百間沢遺跡は中期以降に比定される遺跡で、土偶・上面も出土している。巡礼堂遺跡は後期に比定される集落跡で、石圓炉のある竪穴住居跡が確認されている。

弥生時代の遺跡は少ないが、散布地としては上原・台・西台・塚ノ前遺跡などの諸遺跡があり、上原・金ヶ森遺跡からは石包丁が出土している。

古墳時代には、請戸川・高瀬川に挟まれた沖積地と沿岸の段丘面に数多くの古墳が造られ、浜通り地方最古の古墳として知られる本屋敷古墳群や、浜通り地方でも有数の規模を誇る堂の森古墳・狐塚古墳がある。また、集落跡としては、鹿屋敷遺跡や塚の腰遺跡が挙げられる。

奈良・平安時代の代表的な遺跡としては庵屋敷遺跡があり、古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が多数確認されている。また、狐塚遺跡では9世紀中頃の竪穴住居跡が検出されている。太刀洗遺跡は9世紀前半の製鉄関連遺跡で、廃津場や木炭窯跡が確認されている。

中世の浪江は標葉氏の所領で、相馬氏との権力争いが頻繁に繰り広げられるが、明応元年（1492）には相馬氏により標葉氏が滅ぼされ、以後は相馬氏によって支配されている。城館跡は、標葉氏が居城とした大平山城跡、小丸城跡、權現堂城跡、泉古館跡などの他に、多くの館跡が残されている。

近世には、熊川以北の標葉郷までが相馬藩の所領となる。この時代の遺跡としては、北原御殿跡や出口一里塚、立野経塚などがある。また、元禄3（1690）年には相馬領大堀村で陶器生産が盛んになり、相馬藩の保護と規制のもとで発展する。これに関連する遺跡としては、窯跡が確認された大堀長井屋窯跡や後田A遺跡、灰原が検出された中平遺跡、散布地である神内遺跡、大堀A・B遺跡などがある。

(坂田)

#### 引用・参考文献

- 双葉町史編纂委員会編 1995 『双葉町史 第一巻 通史編』 双葉町
- 浪江町史編纂委員会編 1974 『浪江町史』 浪江町
- 鈴木敬治ほか 1991 『浪江・磐城富岡』福島県国土調査・土地分類基本調査 福島県農地林務部農地計画課
- 久保和也ほか 1994 『浪江及び磐城富岡地域の地質』 地域地質研究報告 地質調査所 通商産業省工業技術院
- 福島県教育委員会・財團法人福島県文化振興事業団・日本道路公团 2005 『常磐自動車道遺跡調査報告39』
- 福島県教育委員会 1996 『福島県道路地図 浜通り地方』
- 2003 『福島県内遺跡分布調査報告9』
- 2004 『福島県内遺跡分布調査報告10』
- 2005 『福島県内遺跡分布調査報告11』
- 2006 『福島県内遺跡分布調査報告12』

## 第2章 調査経過

### 第1節 遺跡の位置と地形

沢東B遺跡は双葉郡浪江町大字立野字沢東他、北緯37度31分00秒、東経140度56分40秒に所在する。浪江町は浜通り地方のほぼ中央部に位置し、東西に幅広く、北は南相馬市小高区（旧小高町）、南は双葉町と接している。本遺跡のある立野地区は浪江町の北端付近にある。遺跡はJR常磐線浪江駅から北西方向へ約3km、海岸線から約9km付近に位置している。遺跡のすぐ北西側を県道仲ノ森・加倉線が通り、約1km西側には県道いわき・浪江線がある。

浪江町の地形は、南北に走る双葉断層を境に西半部が阿武隈高地、東半部が丘陵地帯や河岸段丘、沖積地となっている。町の北部には請戸川、南部には高瀬川が流れ、太平洋に注ぐ。沢東B遺跡が位置する立野地区は、阿武隈高地から続く丘陵地帯の東端部にあたり、請戸川水系の河川等によって複雑に開析されている。

沢東B遺跡は、町の北部を東流する請戸川左岸の河岸段丘上に立地する。調査区内の標高は53.2～53.8mで、請戸川の川床との標高差は約30mである。遺跡の北側には南相馬市小高区との境となる丘陵地帯がある。遺跡の範囲は河岸段丘の平坦面を中心とする21,000m<sup>2</sup>で、今回の平成18年度の調査は13,280m<sup>2</sup>について調査を実施した。なお、平成15年度に実施した1次調査は、遺跡範囲の北側にあたる2,100m<sup>2</sup>の範囲について調査を実施している。現況は水田で、調査区内は水田造成に伴う削平を受けており、遺構の遺存状態は良くない。

周辺には、縄文時代後期の集落跡として有名な順礼堂遺跡や、中世の城館跡である浪江館跡・立野古館跡等が所在している。

(坂田)

### 第2節 調査経過

沢東B遺跡は、平成8年度に福島県教育委員会から委託を受けた財福島県文化振興事業団が実施した、常磐自動車道建設に伴う表面調査でN-B10とした遺跡推定地と登録した。平成14年度には、試掘調査が実施され、縄文時代や中世から近世にかけての遺構・遺物が確認されたことから、18,400m<sup>2</sup>が保存を要する範囲として提示され、新発見の遺跡として、本地点の字名から「沢東B遺跡（遺跡番号54700137）」と登録された。平成15年度には工事区北西側の2,100m<sup>2</sup>の範囲について発掘調査が実施され、中世から近世にかけての掘立柱建物跡や溝跡などが確認されている。

平成18年度の調査は、平成15年度に次ぐ2次調査で、本田部分を中心とした13,280m<sup>2</sup>の範囲をその対象とした。調査に当たっては、各遺構番号は基本的には1次調査からの継続番号とし、概要・検出等については第3章各節の冒頭等において記述している。

調査については、排土場所の確保の関係から、南側から3,700m<sup>2</sup>・1,300m<sup>2</sup>・4,300m<sup>2</sup>・2,900m<sup>2</sup>・1,080m<sup>2</sup>の5区域に小区分して実施している。調査員2名、作業員35名の体制で平成18年4月14日開始し、12月8日までの延べ123日間にわたって行った。以下に調査概要を記す。

4月11日から調査区南部の3,700m<sup>2</sup>の区域について重機による表土剥ぎを開始した。4月14日からは作業員を雇用し、遺構の検出・精査作業を開始した。また、遺構の検出・精査作業と並行して測量基準杭の設定と水準点の移動を随時行った。調査過程で、中世から近世にかけての文化面と、縄文時代の文化面の2層を確認し、中世・近世を中心とする遺構の調査終了後、下層の縄文時代の遺構の調査に移行していくこととなった。6月15日にはラジコンヘリによる高度からの写真撮影を行い、この区域の遺跡調査の成果を公表するため、福島県教育委員会が実施する「遺跡の案内人」による遺跡の公開を6月17日に盛大に行われた。また、調査が終了した8月8日には、いわき工事事務所の了承を得て重機による埋め戻しを開始した。

5月30日には、調査区中央付近の町道7081号の北側、2,900m<sup>2</sup>の区域について重機による表土剥ぎを開始した。6月中旬には順次作業員を投入し、本格的に遺構の検出・精査作業を開始した。また、7月25日には1次調査区の東側、1,080m<sup>2</sup>の区域について重機による表土剥ぎを開始し、8月上旬頃には本格的に遺構の検出・精査作業を開始している。なお、7月中旬から下旬にかけては、梅雨の影響により調査区内が冠水することが度々あり、調査の進歩に遅れを来したが、水中ポンプ等による排水作業を随時行なながら調査を展開した。この2区域については、9月21日にラジコンヘリによる高度からの写真撮影を行い、10月11日に福島県教育委員会・財福島県文化振興事業団・いわき工事事務所と協議の後、重機による埋め戻しを開始している。

8月31日には、調査区南側の1,300m<sup>2</sup>の区域について重機による表土剥ぎを開始した。9月上旬頃から遺構の検出・精査作業を開始した。また、10月4日には残りの4,300m<sup>2</sup>の区域について重機による表土剥ぎを開始し、その後本格的に遺構の確認・精査作業を開始した。この時期、台風・長雨等による悪天候が続き、雨の影響により調査区内が冠水することが度々あり、周囲の田畠からも雨水が流れ込むこともあり、排水作業にはかなりの時間を要し、調査の進歩に遅れを来した。

この2区域については、12月6日にラジコンヘリによる高度からの写真撮影を行い、12月7日には、現地において福島県教育委員会・財福島県文化振興事業団・いわき工事事務所の各担当者が集まり、調査経過や成果・状況等を説明し、現地調査が12月8日に終了することを確認した。また、12月8日からは、調査が終了した1,300m<sup>2</sup>・4,300m<sup>2</sup>の区域について重機による埋め戻しを開始し、12月15日に全て終了した。

最終的に今回の調査で確認された遺構は、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡22棟、特殊遺構4基、土坑24基、井戸跡5基、溝跡30条、柵列跡11列、焼土遺構2基、それに小穴群である。遺物は比較的希薄であったが、当地域では希少な例である中世～近世の館跡・屋敷跡と関連遺構の資料を得ることができた。

## 第2章 調査経過

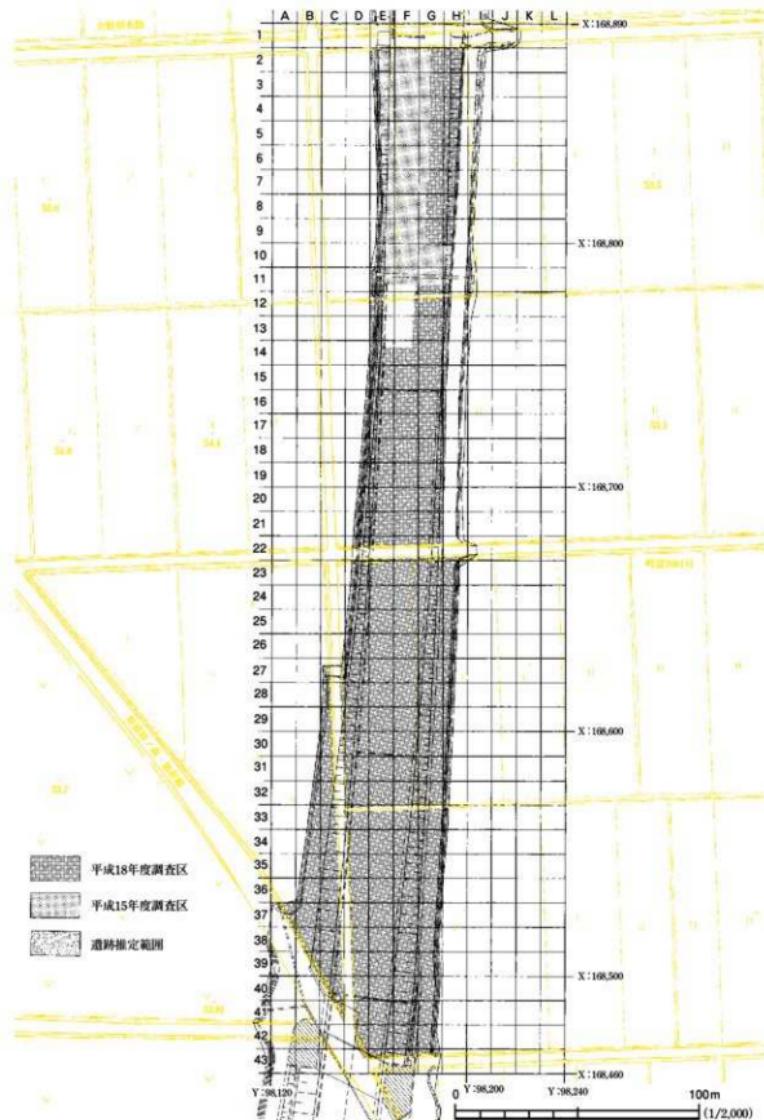


図4 調査範囲とグリッド配置図

### 第3節 調査の方法

平成18年度に調査を実施した沢東B遺跡の2次調査は、以下に基づいて行った。

**グリッドの設定** 平成15年度に実施した1次調査の基準を踏襲した。国土座標値は、世界測地系に一致させ、一辺10m方眼を単位とした。グリッドの座標値は、図4に示した。

個別のグリッドは、東西方向に西から東へアルファベットA・B…、南北方向に北から南へ算用数字で1・2…とし、両者を組み合わせて、D 6 グリッド、F 8 グリッドなどと呼称している。

**基準線の設定** 遺構の平面図を作成するに際しては、各グリッドを1mの方眼に分割し、これを基準線とした。基準線の座標上の位置については、各グリッドの北西端部を原点(E 0, S 0)とし、ここから東へ1m行くごとにE 1~9、南へ1m行くごとにS 1~9として表した。これにそれぞれのグリッド番号を組み合わせて、調査区域内全ての基準線の座標位置を表示した。例えば、F 10-E 2・S 9とは、F 10グリッドの北西端の杭から、東に2m、南に9m離れた場所を示す。

**発掘作業** 発掘作業では、表土は重機を用いて除去した。その後、人手により包含層を除去し、遺構・遺物の検出作業を行った。

遺構の掘り込み作業にあたっては、各遺構の形状・大きさ、重複関係に留意して、土層観察用のベルトを設定した。土坑など小型の遺構については、長軸方向にベルトを設定した。遺構内から出土した遺物の取り上げに際しては、上記の区画ごとに、層位を確認した上で取り上げた。

層位名を付す際は、基本層位はローマ数字を用いてL I・L IIと表した。遺構内堆積層は、アラビア数字を用いてℓ 1・ℓ 2と表した。

**記録作成** 調査の成果は、実測図と写真で記録した。遺構図の縮尺は、住居跡が1/20、土坑等の小さなものは1/10で作成した。微細な記録が必要と判断したものについては、1/10で随時作成し、調査区内地形図や遺構配置図は、1/200で作成した。土層観察における色調判断は、『新版標準土色帖』(小山・竹原1999)を基準とした。調査現場での写真撮影は35mm小型一眼レフカメラ、6×4.5判の中型一眼レフカメラ、デジタルカメラを併用した。

**遺物・記録の保管** 発掘調査で得られたすべての出土遺物と記録類一式は、報告書作成完了後、遺跡ごとに台帳を作成し、福島県文化財センター白河館(まほろん)に収蔵する予定である。(福村)

#### 引用・参考文献

- 浪江町史編纂委員会編 1974 「浪江町史」 浪江町
- 鈴木敬治ほか 1991 「浪江・磐城富岡」 福島県国土地理調査・土地分類基本調査 福島県農地林務部農地計画課
- 久保和也ほか 1994 「浪江及び磐城富岡地域の地質」 地域地質研究報告 地質調査所 通商産業省工業技術院
- 福島県教育委員会・財團法人福島県分化振興事業団・日本道路公団 2005 「常磐自動車道遺跡調査報告39」
- 福島県教育委員会 2003 「福島県内遺跡分調査報告9」

## 第3章 遺構と遺物

### 第1節 遺構の分布と基本土層

#### 遺構の分布（図5～8・付図、写真1・2、図版3）

沢東B遺跡の2次調査において検出された遺構は、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡22棟、特殊遺構4基、土坑24基、井戸跡5基、溝跡30条、柵列跡11列、焼土遺構2基と小穴895基である。平成15年度の1次調査時に検出された遺構を合わせた遺構数は、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡28棟、特殊遺構4基、土坑31基、井戸跡7基、溝跡33条、柵列跡11列、焼土遺構2基と小穴1,004基である。調査区内はほぼ平坦な地形を呈しており、現状から遺構の分布状況に地形的な要素は看取できない。

図5～8と付図には平成15・18年度の調査成果を合わせて示したが、平成15年度の調査で示された等高線については本来の標高より110cm高いことが確認されたため、削愛している。調査区全域は、近年の大規模な水田造成等に伴う掘削や整地によって改変された区域もあることから、遺構群への影響が少なからず存在しているものと考えられる。

今回検出された遺構は、主に縄文時代と中世・近世の時期のものに大別される。中世・近世の遺構は調査区のほぼ全域に分布するが、縄文時代の遺構は、縄文土器の出土した旧河川跡（SD11・12）が調査区中央付近で検出されたのを除いては、調査区南側の旧河川（SD9・10）に囲まれた範囲にほぼ集中している。1・2号住居跡はともに複式炉を伴い、出土遺物の特徴から縄文時代中期末葉に属する。また、1号住居跡と同じ検出面（LⅢ）からは焼土遺構が2基検出された。遺構に共伴する遺物の出土はなかったが、周囲から出土する遺物の特徴から、ほぼ縄文時代中期頃の所産と考えられる。また、住居域の南側に位置する旧河川跡（SD9）からは、同時期の縄文土器片が多量に出土したことから、河川沿いに営まれた小集落と推測される。

調査区北側からは、平成15年度に調査した1～3号溝跡の続きが認められた。溝の底は、障子の棧のような凹凸を施した「障子堀」構造が認められ、出入口等の通路施設を伴うことから、堀で囲郭された館跡が存在することが確認された。出入口部は、3・4号特殊遺構とした土橋状の通路施設が認められ、構築当初は橋脚を伴う板橋状の渡り口であったと推測される。堀の内側には、20・22・23号建物跡とした四脚門が存在し、数回の建て替えの状況が認められる。また、橋脚跡は後に埋め戻して整地され、土橋状の通路施設に改修されている。堀の内側には19号建物跡をはじめ、井戸跡や土坑、柵列跡が存在し、いくつかの変遷が窺える。また、堀堆積土中や土坑内から鉄滓が相当量確認されたことから、囲郭内部には鍛冶関連の遺構も存在すると推測される。

この館跡は、廃絶時に堀への砾や部材等の廃棄行為が認められ、出土遺物の特徴とその状況から、近世初期にはその機能を停止したと考えられる。

調査区南側から中央付近にかけては、中世から近世にかけての集落跡が散在する。遺構に伴う遺物の出土がほとんど認められないため、時期は特定できないが、柱間寸法や付近で出土した遺構外遺物の特徴から、概ね近世初期頃と推測される。また、調査区南側に位置する1号特殊遺構とした竪穴状遺構は焼失遺構で、出土炭化物の自然科学分析により13世紀の年代が示されたことから、付近には中世の集落跡の存在も考えられる。

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器2,380点、土師器2点、須恵器4点、陶磁器類70点、石器26点、古銭6枚、木質遺物27点、羽口片2点、鉄滓47点である。出土した縄文土器は、中期末葉の大木10式期を主体とするが、河川跡からは早期～晚期の土器も若干量出土している。陶磁器片は、ほぼ14～17世紀に比定され、その大半は調査区北側の堀跡で出土している。

#### 基本土層（図5・6）

本遺跡では、基本土層を大きく6層に区分した。土層観察は調査区境の壁面を利用し、南北に長い調査区の形状を勘案して、5地点で記録を行っている。前述のように調査区周辺は、昭和40年代に大規模な水田改修が行われており、基本土層が均一的で堆積していない。特に調査区中央付近から北側にかけては削平が著しく、L II～Vはほぼ欠層している。また、L II・IV・Vについては、土質や色調の違いにより更に細分され、アルファベット小文字のa・bまたはcを付けて表記した。

以下、堆積土の特徴と遺構・遺物の関係について概略する。

- L I : 現表土・水田耕作土の黒褐色土である。調査区全域に30～60cmの厚さで堆積する。調査に際しては基本的に本層のみ重機による掘削を行った。層中には縄文時代と中世・近世の遺物が僅かに含まれるが、全て水田改修時に混入したものである。
- L II a : 水田改修前の旧表土で黒褐色土である。そのほとんどは、水田改修時に削平されているが、部分的に免れ残存している状況が認められる。層厚は約10cm程度である。層中には縄文時代と中世・近世の遺物が僅かに含まれる。
- L II b : 褐色砂質土である。調査区南部の9・10号溝跡に挟まれた範囲にのみ認められることから、河川氾濫に起因する堆積土と思われる。水田改修時により上部は欠失しているが、層厚は5～15cmを測る。本層上面は、この範囲における縄文時代と中世～近世の遺構の検出面であり、層中に縄文時代中期末葉を中心とした遺物を含む。
- L II c : 黄褐色砂質土である。調査区南部の9号溝跡付近の極めて限定された範囲にのみ認められ、L II bと同様、河川氾濫に起因する堆積土と思われる。層厚は15cm前後を測り、遺物の出土は確認されていない。
- L III : 黒褐色土である。L II bと分布域が類似し、粗砂を多量に含むことから河川氾濫に起因する堆積土と推定される。層厚は20cm前後を測り、1号住居跡と焼土遺構は本層上面で検出された。層中から遺物の出土は確認されていない。
- L IV a : 暗褐色土である。1次調査においてL IVとした層であるが、今回の調査区内では削平等により認められなかった。調査区北側における本遺跡の基底面と考えられる。

第3章 遺構と遺物

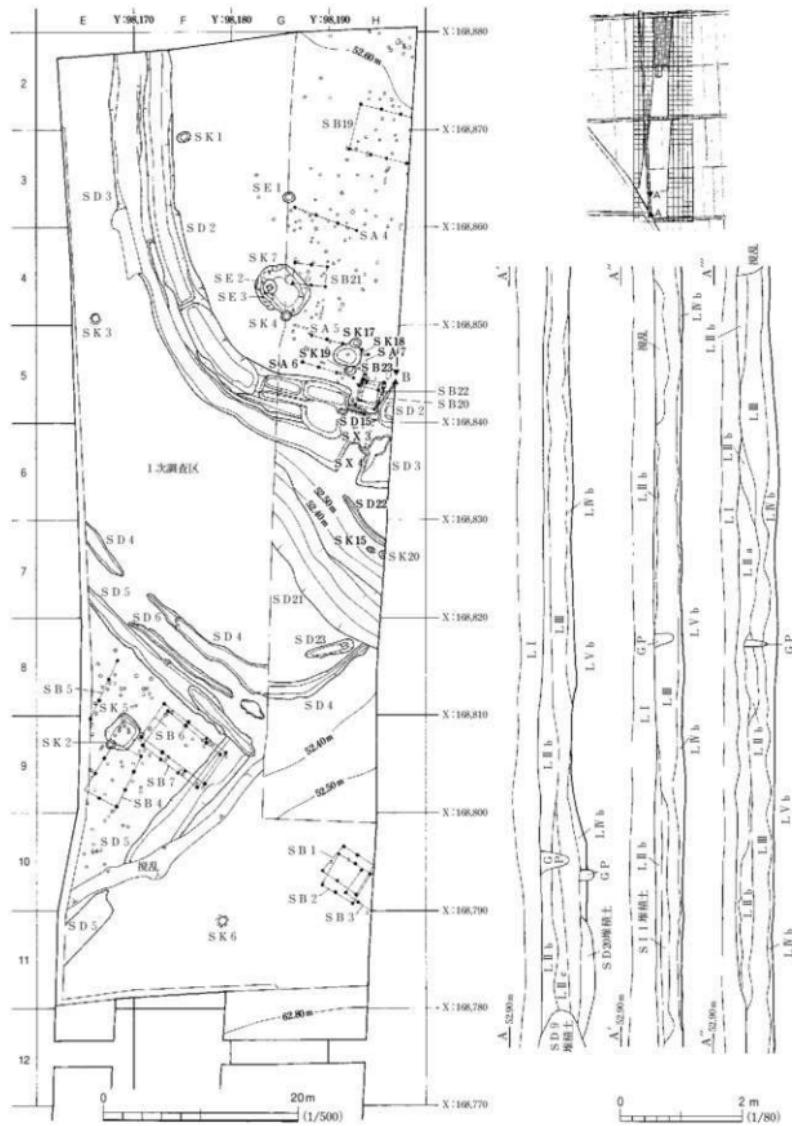


図5 遺構配置図(1)・基本土層図(1)

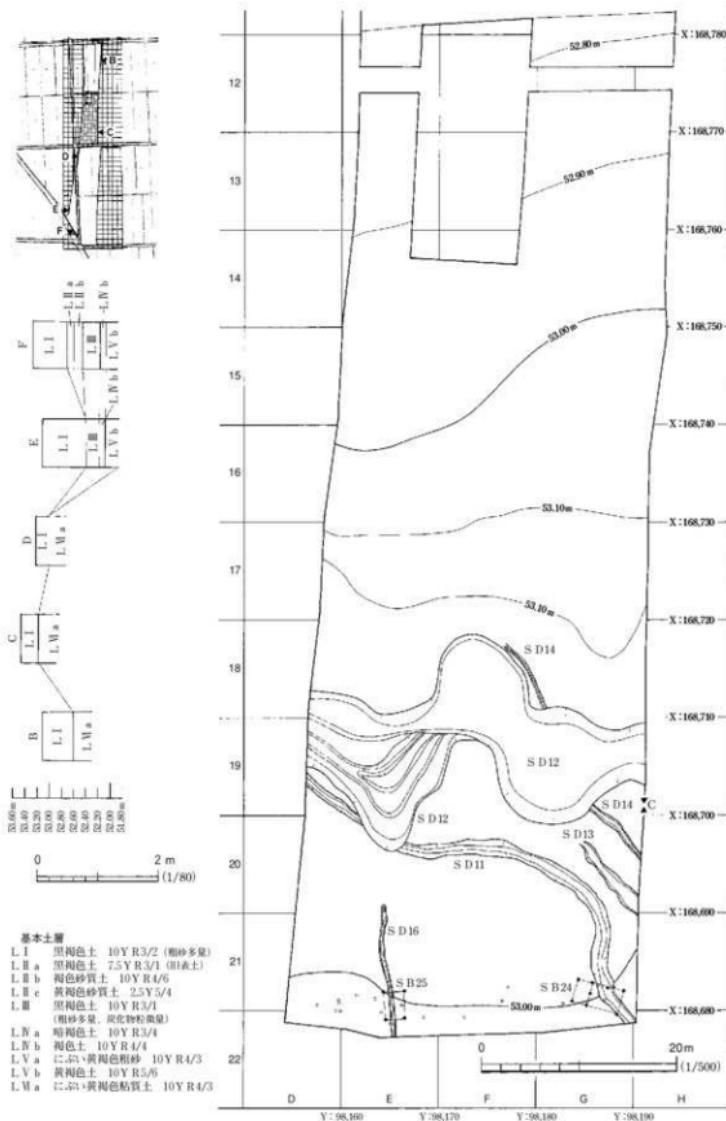


図6 遺構配置図(2)・基本土層図(2)

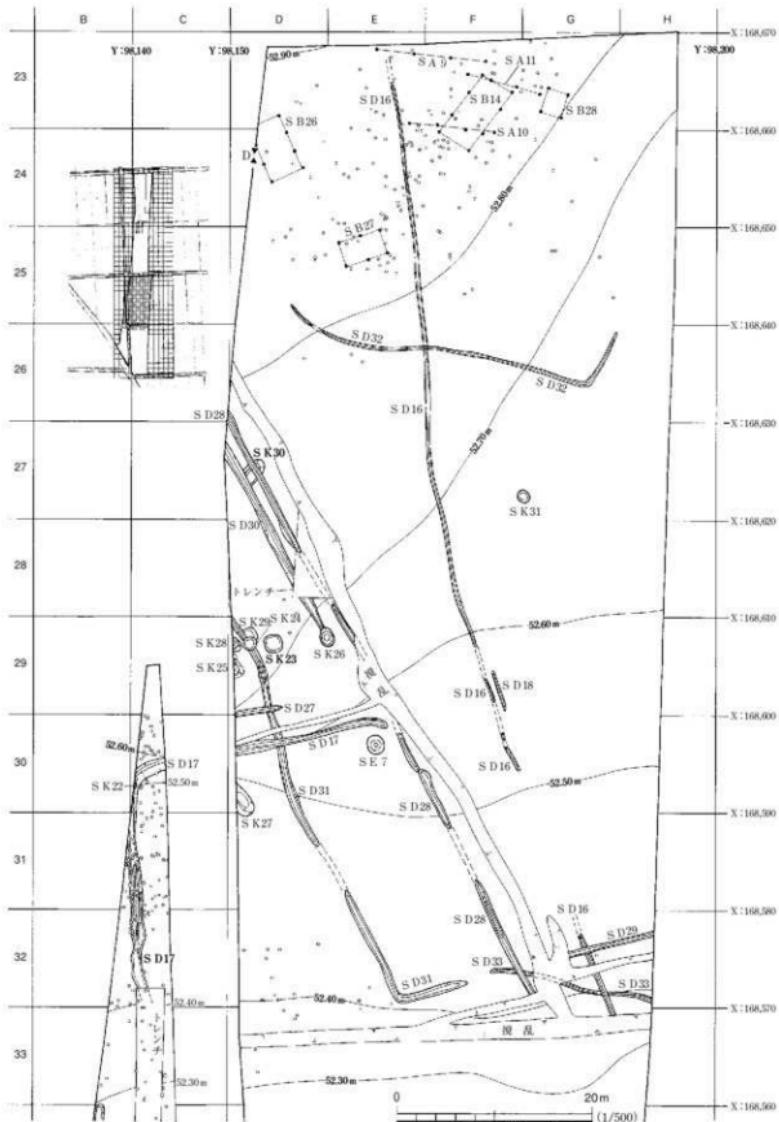


図7 遺構配置図(3)

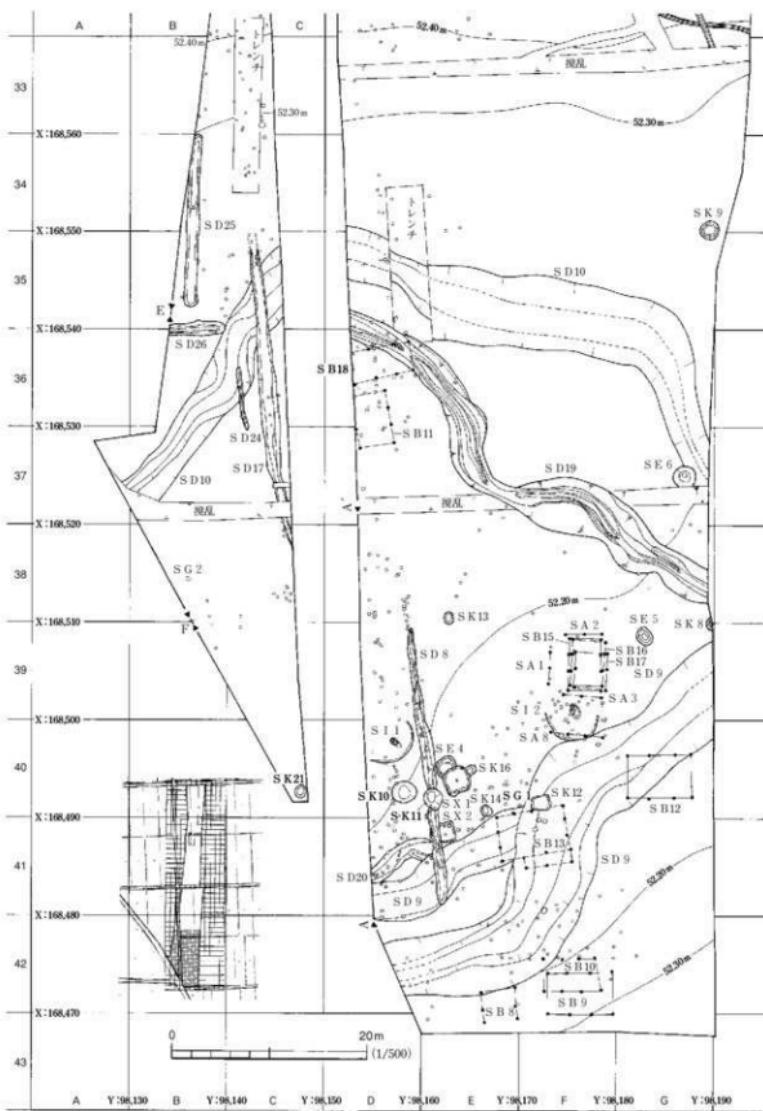


図8 遺構配置図(4)

- L IV b : 褐色土である。今回の調査区ではL II b の分布する南側にのみ認められたが、水田改修前は調査区のほぼ全域に堆積していたと推定される。層厚は約10cm程度で、層中から遺物の出土は確認されていない。
- L V a : にぶい黄褐色粗砂で、1次調査においてL Vとした層である。河川氾濫に起因する堆積土と考えられ、層厚は15cm前後を測る。調査区北側（G・H 2～6グリッド付近）に認められ、整地・削平等が著しい調査区北側における遺構検出面となっている。層中から遺物の出土は確認されていない。
- L V b : 黄褐色土である。L II b と分布域が類似している。遺物の出土は確認されていない。
- L VII a : にぶい黄褐色粘質土で、本遺跡の基底層である。調査区北側では大規模な水田造成により上位層が欠失しているため、本層上面が遺構検出面となっている。これより下層は無遺物層である。

## 第2節 積穴住居跡

2次調査で検出された積穴住居跡は2軒である。調査区南側に分布し、縄文時代中期末葉頃の複式炉を有する。住居跡に近接する旧河川（S D 9）からは当該期の遺物が出土しており、河川沿いに営まれた小集落と考えられる。

### 1号住居跡 S I 1

#### 遺構（図9・10、写真3～5）

本住居跡は、調査区南側のD40グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は、標高52.2m程の平坦な地形である。検出面はL III上面であり、検出時に複式炉の石組部の躰の一部が露出していた。他遺構との重複関係はない。遺構の北側は、削平を受けて壊されている。

遺構内堆積土は、色調および混入物から2層に分層できた。 $\ell$  1は基本土層のL IIIに類似した黒褐色土で、L II b である褐色砂質土を粒状に少量含むことから自然流入土と考えられる。 $\ell$  2は、焼土と思われる赤褐色土粒を含むことから人為堆積土と判断した。

遺構の平面形は、北側が削平され、西半が調査区外へ延びているため全体形は不明であるが、およそ直径5.4m程の円形を呈していたと思われる。床面はほぼ平坦であるが、踏み締まりは認められなかった。周壁の状況は、検出面が床面直上で残存しないため不明である。

本住居内の内部施設として、小穴2基と柱跡が確認された。小穴は住居内南側で2基検出した。平面形は、直径25cm程の円形を呈し、深さはP 1で35cm、P 2で40cmを測る。これらの小穴については規模や位置から柱穴と考えているが、これらに対応する小穴は他に確認されていない。

炉<sup>3</sup>は、土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉である。炉は床面中央から南東壁にかけて、西から土器埋設部・石組部・前庭部の順に配されている。全長145cm、最大幅65cmを測る。炉の主

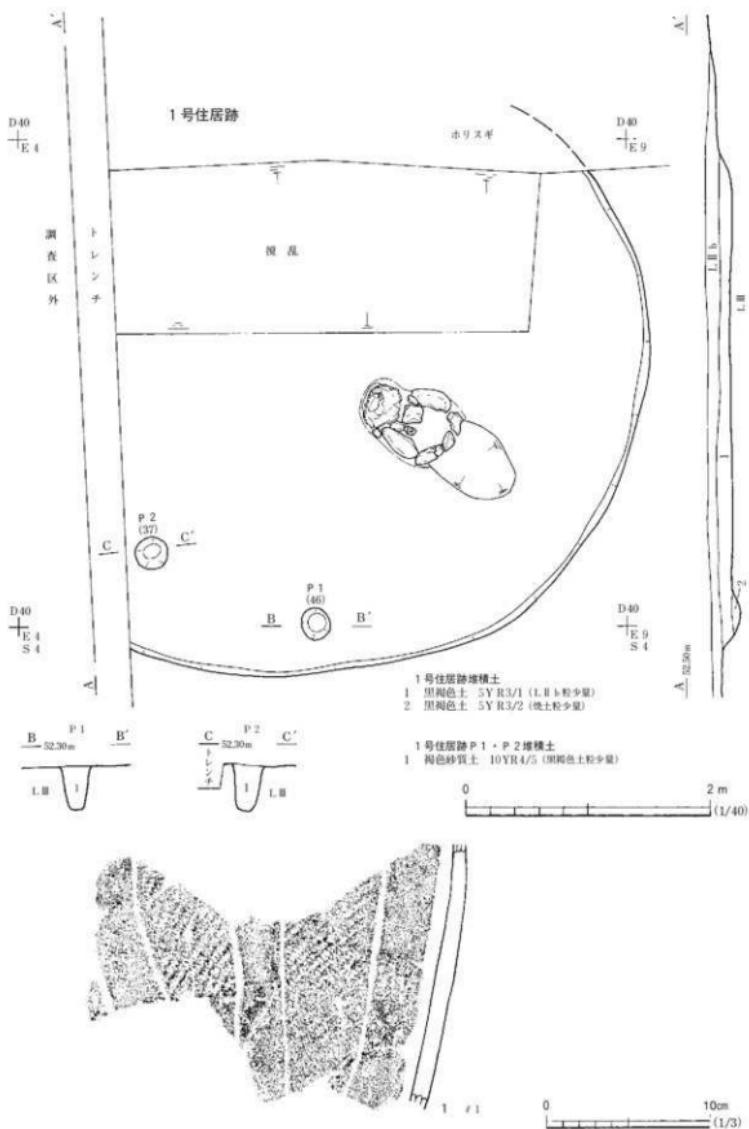


図9 1号住居跡と出土遺物(1)

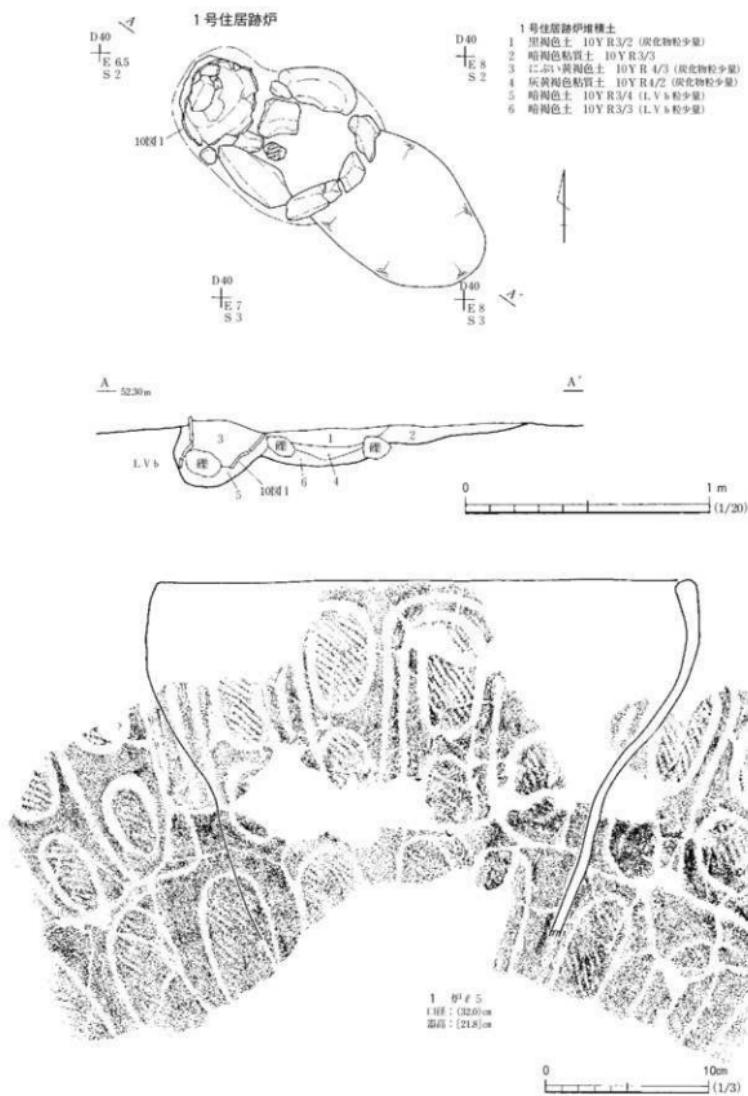


図10 1号住居跡炉と出土遺物(2)

軸線はN55°Wである。堆積土は6層に分層した。 $\ell$  1～4は住居廃絶時の人為堆積土、 $\ell$  5・6は掘形堆積土である。土器埋設部は、やや大きめの掘形内に底部を欠失した深鉢形土器を斜位に埋設している。石組部は、掘形の壁に沿って偏平な礫や亜角礫を立て並べて外傾する側壁を造っており、両側縁には特に大型の偏平な礫を立て並べている。風化して砂状になったものも見受けられた。底面に礫は敷かれていらない。前庭部は、測壁が緩やかに立ち上がる皿形状を呈している。

#### 遺 物 (図9・10, 写真45)

本住居跡からは、繩文土器片41点が出土した。これらの遺物の多くは、堆積土から散在的に出土している。9図1は深鉢形土器の胴部破片である。沈線区画文が描かれ、区画文内には繩文が施され、区画外は無文としている。10図1は複式炉の炉体土器である。胴下部を欠損する深鉢で、胴部中央で大きく括れ、口縁部に向かい大きく広がる器形である。上下2段に縦長の楕円形を配したモチーフを周間に連続させ、上段の楕円形内にはさらに小楕円形状のモチーフを配している。区画文内には繩文が施している。

#### ま と め

本住居跡は、複式炉を有する壓穴住居跡である。平面形は円形を呈する。住居内施設として複式炉の他に、小穴を検出した。本住居跡の所属時期については、炉埋設土器や出土遺物などから、繩文時代中期末葉の所産と考えている。

(福村)

#### 2号住居跡 S I 2

##### 遺 構 (図11・12, 写真6～8)

本遺構は調査区南部、F39・40グリッドに位置し、L II a上面で検出された。S B15～17, S A3・8, S D 9, G Pと重複し、S D 9を除くいずれの遺構より古い。S D 9は本遺構の南側を一部壊しているが、出土遺物の大半が本遺構と同時期のものであることから、同時に存在していたものと考えられる。

堆積土は暗褐色土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。本遺構の北側は調査時の不手際により壊してしまったが、遺存部から平面形は南北方向に長い不整楕円形と推定される。現状の壁上端での規模は、確認できた南半部の周壁と主柱穴の位置から南北約6m、東西約5.4mと推定される。床面は多少の凹凸が認められるもののほぼ平坦で、北側ではL II b中、南側ではL III上面に形成されている。周壁の立ち上がりは比較的緩やかで、遺存壁高は10～20cmを測る。

複式炉は床面の南側、P 1とP 2のほぼ中間に構築されている。遺存状態は良好で、土器埋設部、石組部、前庭部より構成される。炉長軸線はN19°Wを示し、全長173cm、最大幅102cmを測る。土器埋設部の平面形は不整楕円形を呈し、炉体土器の周間に長さ12～24cmの角礫を並べ縁石としている。規模は南北方向の長さ41cm、最大幅55cmを測る。石組部の平面形は隅丸長方形を呈し、規模は南北方向の長さ47cm、最大幅83cmを測る。底面や側壁には礫が扁平な面を上にして並べられ、土器埋設部と前庭部に接する部分には特に大型の礫が用いられている。前庭部の平面形は隅丸楕円形を

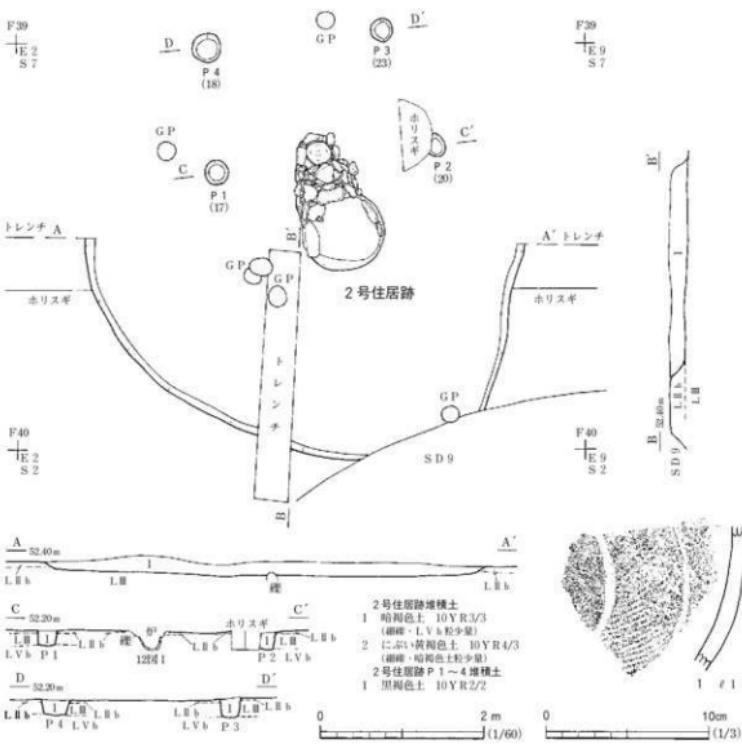


図11 2号住居跡と出土遺物(1)

呈し、側壁の東・西壁際には長さ50cm程の礫が設置されている。規模は南北方向の長さ85cm、最大幅102cmを測り、底面は南から北にかけて若干傾斜する。側壁は、東壁が急に立ち上がる他は、比較的緩やかな角度で立ち上がる。複式炉に用いられた礫は表面に強い火熱を受けて脆くなつたものや赤色変化したものが多く、炉体土器周囲の土も強く焼土化している。堆積土は3層に分けられ、ℓ 1・2は自然堆積、ℓ 3は掘形堆積土と考えられる。

主柱穴はP1~4の4基である。P3・4は床面北側、P1・2は複式炉を挟んだ東西に位置する。各主柱穴間の距離は、P1~2間が2.7m、P2~3・P4~1間が1.5m、P3~4間が2.2mで、全体的に不整長方形の配置となっている。平面形は不整円形を呈し、規模は直径26~34cm、床面からの深さ17~23cmを測る。堆積土は黒褐色土1層で、人为堆積か自然堆積かは判断できなかつた。

## 第2節 墓穴住居跡

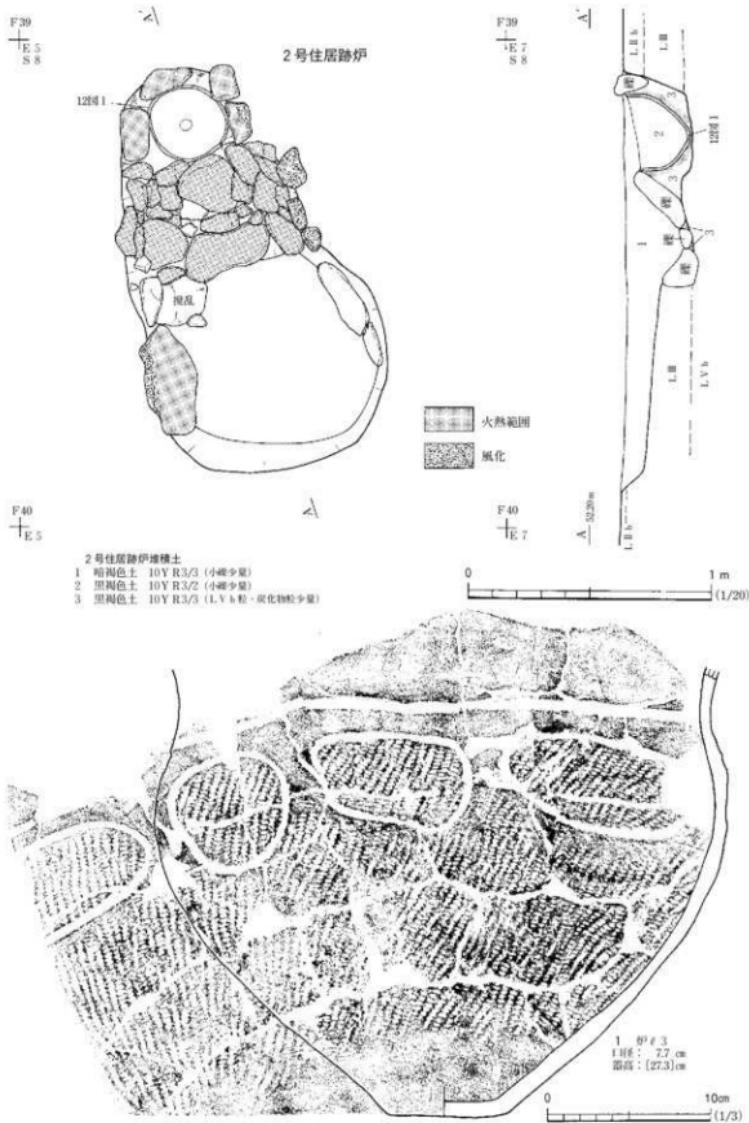


図12 2号居住跡炉と出土遺物(2)

#### 遺 物 (図11・12, 写真45)

遺物は $\ell$ 1・ $\ell$ 3から縄文土器38点が出土している。11図1は沈線区画による縄文帯により文様が描かれている。12図1は炉体土器である。頭部で括れる深鉢で、体部上半に円形と楕円形の沈線文が施されている。

#### ま と め

本遺構は、南北方向に長い楕円形を呈すると推定される竪穴住居跡である。規模は長軸推定6mで、4基の主柱穴が複式炉を挟んでほぼ対称の位置にある。時期は出土遺物と複式炉の炉体土器から、縄文時代中期末葉に位置づけられる。

(坂 田)

### 第3節 掘立柱建物跡

今回の2次調査では、21棟の掘立柱建物跡が検出された。これらの建物跡は、調査区北東側(G・H2~5グリッド付近)と中央(D~G22~25グリッド付近)、南側(D36, D~G39~42グリッド付近)に分かれて分布している。重複するものや造り替えも一部認められるが、密度は全体的に低い。建物跡の周囲には区画・排水溝と考えられる溝跡が存在し、大半はこれらと平行する。検出された建物跡は側柱建物跡で、桁行3間、梁行1間のものが多く認められる。出土遺物が乏しく、時期の特定は困難であるが、遺構の重複関係や柱間距離、関連遺構の時期から中世~近世頃と推測される。

報告にあたっては、溝跡や土坑など建物跡に付随する施設も存在すると考えられるが、ここでは建物跡のみの事実報告とする。規模と柱間距離は柱痕の中心を結んだ数値で示し、柱痕が確認されなかったものについては掘形底面の中心から計測している。遺構番号は1次調査からの継続で、調査区外へ延びる8・18・19号建物跡については概略のみを報告する。

#### 8号建物跡 S B 8 (図13, 写真9)

本遺構は調査区南側、E・F42グリッドに位置し、LIV b上面で検出された。本遺構と重複する遺構はない。

本遺構は南側が調査区外に延びるため全容は不明であるが、南北に長い建物跡と推定される。柱列の方向は東側がN3°W、西側がN10°Wを示す。現状の壁上端での規模は南北3.2m、東西3.7mである。各柱間距離は掘形の中心で、P2~3・P6~1間が1.88~1.96m、P3~4・P5~6間が1.24~1.32mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は直径23~30cm、検出面からの深さ7~25cmを測る。

掘形内堆積土はP1~5が黒色土1層、P6が黒褐色土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。

本遺構は南北が長い建物跡と推定されるが、南側が調査区外に延びるため全容は不明である。出土遺物がなく時期は特定できないが、柱間距離から近世頃の可能性が高い。

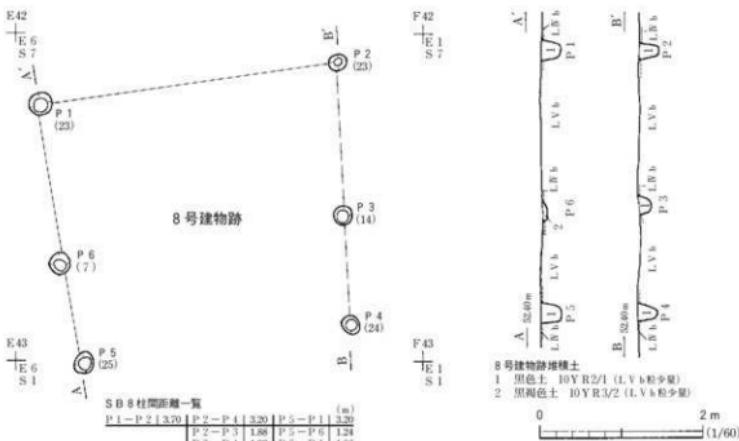


図13 8号建物跡

## 9号建物跡 SB 9 (図14, 写真10)

本遺構は調査区南側, F42・43グリッドに位置し, L V b 上面で検出された。S B10・S D9と重複し, S D9より新しい。S B10とは平面的に重複するが, 直接重複する部分が無いため新旧関係は不明である。

本遺構は東西3間, 南北1間の東西が長い建物跡で, 長軸方向はN89°Eである。現状の壁上端での規模は, 東西6.50~6.58m, 南北4.2mである。各柱間距離は掘形の中心で, 南・北側柱列が1.94~2.46mである。掘形の平面形は不整円形を呈し, 規模は直径22~31cm, 検出面からの深さ28~51cmを測る。

掘形内堆積土はP1・3・4・7が黒色土1層, P5・6・8が黒褐色土1層で, 自然堆積か人為堆積かは判断できなかった。P2は2層に分けられ, 壁際からの流れ込みが認められることからいずれも自然堆積と考えられる。遺物はP5から縄文土器3点が出土したが, 細片のため図示していない。

本遺構は3間×1間の東西が長い建物跡で, 規模は東西6.5~6.6m, 南北4.2mである。時期は出土遺物が少なく判然としないが, 柱間距離から中世~近世頃の可能性が高い。

## 10号建物跡 SB 10 (図14, 写真10)

本遺構は調査区南側, F42グリッドに位置し, P1はS D9堆積土上面, P2~8はL V b 上面で検出された。S B9と平面的に重複するが, 直接重複する部分が無いため新旧関係は不明である。

本遺構は東西3間, 南北1間の東西が長い建物跡で, 長軸方向はN87°Eである。現状の壁上端

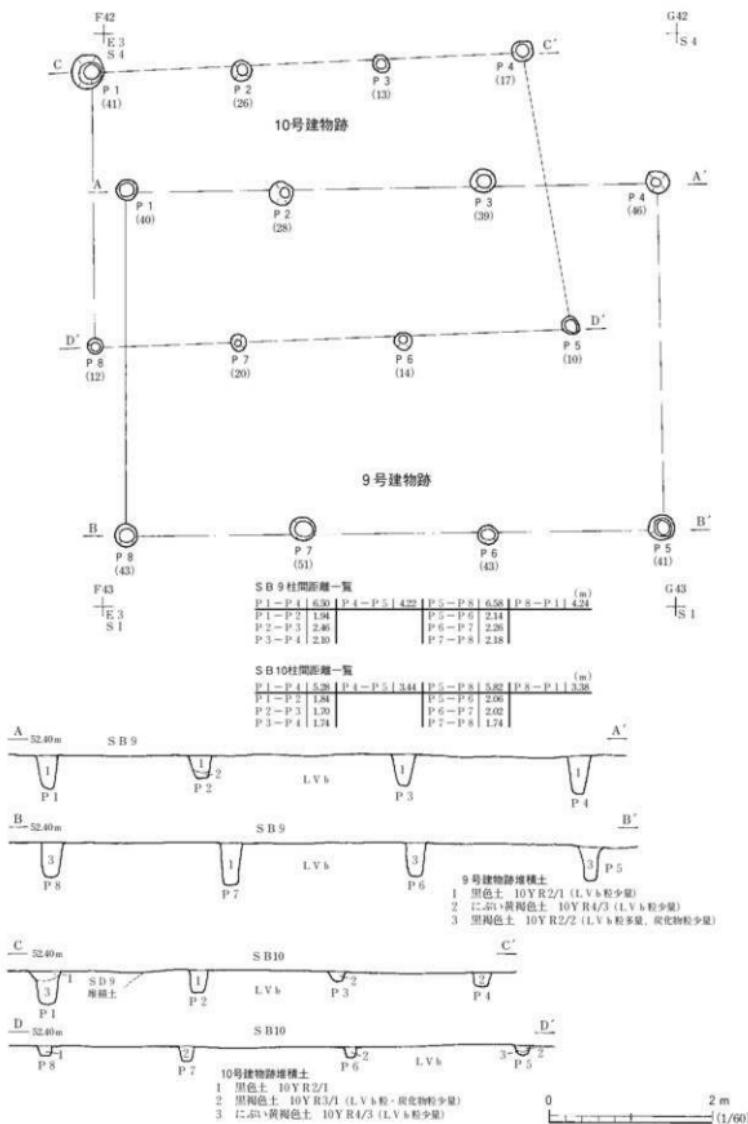


図14 9・10号建物跡

での規模は、東西5.28～5.82m、南北3.38～3.44mである。各柱間距離は掘形の中心で、南・北側柱列が1.70～2.06mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は直径20～42cm、検出面からの深さ10～41cmを測る。

掘形内堆積土はP 2・8が黒色土1層、P 3・4・6・7が黒褐色土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。P 1・5は2層に分けられ、いずれも壁際からの流れ込みが認められることから自然堆積と考えられる。

本遺構は、3間×1間の東西が長い建物跡で、規模は東西5.3～5.8m、南北3.4mである。出土遺物がなく時期は特定できないが、柱間距離から近世頃の可能性が高い。

#### 11号建物跡 S B11 (図15、写真11・46)

本遺構は調査区南側、D36・37グリッドに位置する。検出面はP 5がL V b上面、それ以外はL III上面で検出された。G Pと平面的には重複するが、直接重複する部分が無いため新旧関係は不明である。

本遺構は南北3間、東西1間の南北が長い建物跡である。長軸方向はN11°Wで、西側柱列の北部は調査区外にある。現状の壁上端での規模は南北5.58m、東西3.42mである。各柱間距離は掘形の中心で、東・西側柱列が1.78～2.06mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は直径29～33cm、検出面からの深さ26～77cmを測る。掘形内堆積土はいずれも黒褐色土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。

遺物はP 1から陶器1点が出土した。15図1は在地の常滑系もしくは瓷器系の甕または壺と考えられ、時期は14～16世紀に比定される。

本遺構は3間×1間の南北が長い建物跡で、規模は南北5.6m、東西3.4mである。時期は出土遺物が少なく判然としないが、柱間距離から近世頃の可能性が高い。

#### 12号建物跡 S B12 (図16、写真12)

本遺構は調査区南側、G40グリッドに位置する。検出面はP 1～4・8がS D 9堆積土上面、P 5～7がL V b上面である。S D 9と重複し、本遺構が新しい。

本遺構は東西3間、南北1間の東西が長い建物跡で、長軸方向はN88°Eである。現状の壁上端での規模は東西6.44～6.54m、南北4.24～4.28mである。各柱間距離は掘形の中心で、南・北側柱列が1.58～2.6mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は直径24～46cm、検出面からの深さ20～31cmを測る。

掘形内堆積土はいずれも黒褐色土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。遺物はP 1から繩文土器1点が出土したが、細片のため図示していない。

本遺構は3間×1間の東西が長い建物跡で、規模は東西6.5m、南北4.2～4.3mである。時期は出土遺物が少なく判然としないが、柱間距離から中世～近世頃の可能性が高い。

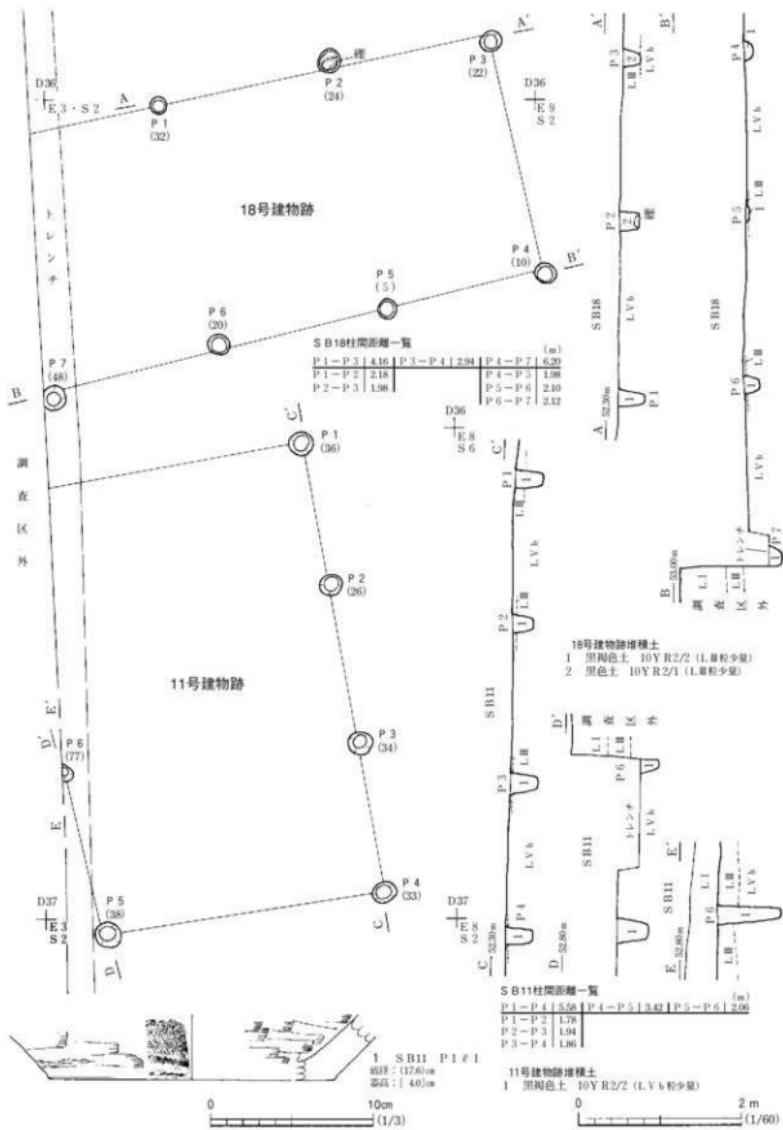


図15 11・18号建物跡と出土遺物

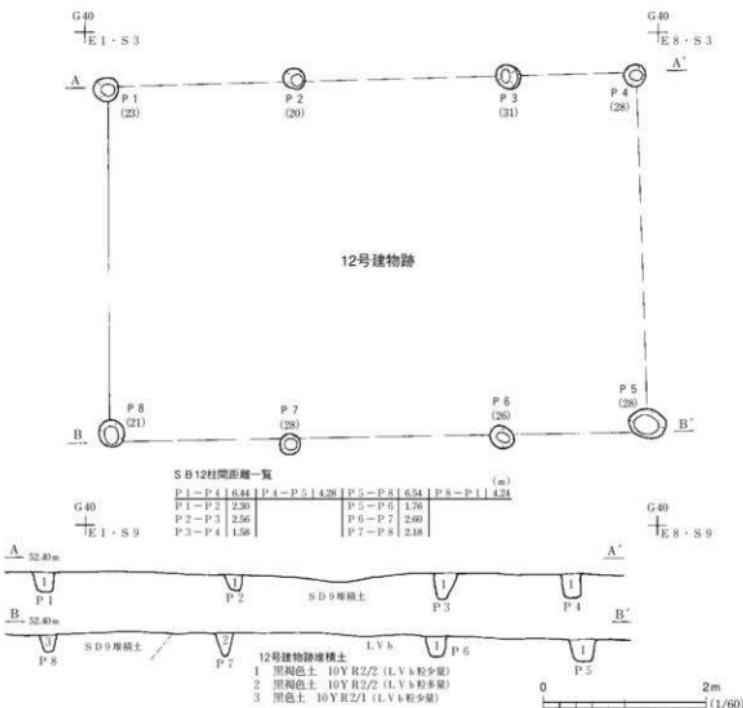


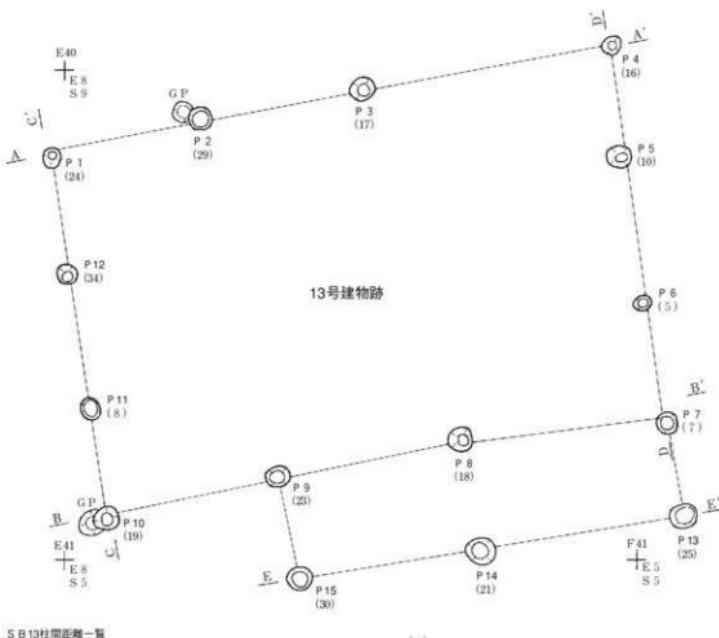
図16 12号建物跡

13号建物跡 S B13 (図17, 写真13)

本遺構は調査区南側、E・F40・41グリッドに位置し、検出面はSD 9堆積土上面である。SK 12、SD 9、GPと重複し、SD 9より新しい。SK 12、GPとは平面的には重複するが、直接重複する部分が無いため新旧関係は不明である。

本遺構は東西3間、南北3間の東西が長い建物跡で、南東側に東西2間、南北1間の付帯施設を伴う。長軸方位はN80°Eである。現状の壁上端での規模は東西7m、南北4.5~4.68m、付帯施設は東西4.76m、南北1.16~1.26mである。各柱間距離は掘形の中心で、南・北側柱列が1.88~3.08m、東・西側柱列が1.38~1.78mである。掘形の平面形は円形を呈し、規模は直径23~31cm、検出面からの深さ5~30cmを測る。

掘形内堆積土はP 1~5・7~10・12~15が黒色土1層、P 6・11が黒褐色土1層で、自然堆積か人為堆積かは判断できなかった。



S日13柱同距規一算

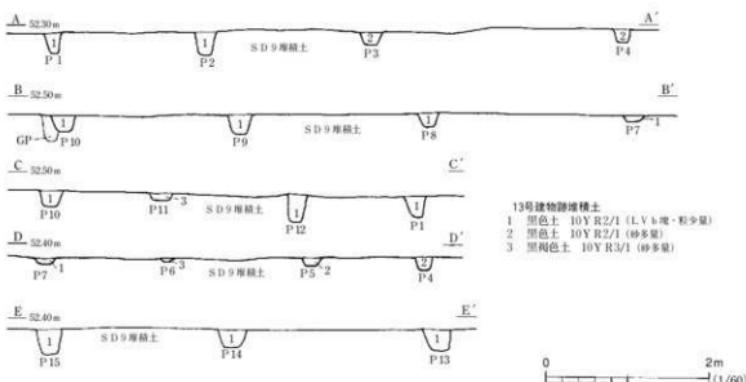


図17 13号建物跡

本遺構は3間×3間の東西が長い建物跡で、南東側に東西2間、南北1間の付帯施設を伴う。規模は東西7m、南北4.5~4.7mで、付帯施設は東西4.8m、南北1.2~1.3mである。出土遺物がなく時期は特定できないが、柱間距離から中世~近世頃の可能性が高い。

14号建物跡 S B14 (図18, 写真14)

本遺構は調査区中央、F23・24グリッドに位置し、検出面はL VI b上面である。S A10・11、G Pと平面的には重複するが、直接重複する部分が無いため新旧関係は不明である。

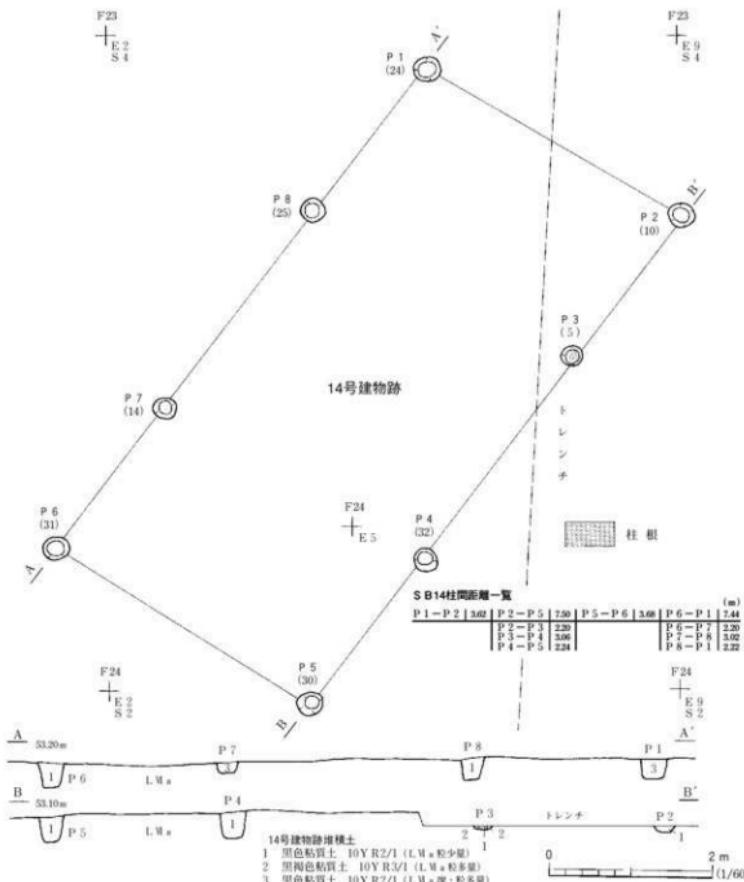


図18 14号建物跡

本遺構は南北3間、東西1間の南北が長い建物跡で、長軸方向はN38°Eである。現状の壁上端での規模は南北7.44～7.5m、東西3.62～3.68mである。各柱間距離は掘形の中心で、東・西側柱列が2.2～3.06mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は直径26～33cm、検出面からの深さ5～31cmを測る。

掘形内堆積土はP1・2・4～8が黒色粘質土1層で、自然堆積か人為堆積かは判断できなかった。P3には径23cmの柱痕が認められる。

本遺構は3間×1間の南北が長い建物跡で、規模は南北7.4～7.5m、東西3.6～3.7mである。出土遺物がなく時期は特定できないが、柱間距離から中世～近世頃の可能性が高い。

#### 15号建物跡 S B15 (図19、写真15)

本遺構は調査区中央、F39グリッドに位置し、検出面はLII b上面である。S B16・17、GPと平面的には重複するが、直接重複する部分が無いため新旧関係は不明である。

本遺構は南北3間、東西1間の南北が長い建物跡で、長軸方向はN0°である。現状の壁上端での規模は南北5.18～5.3m、東西3.26～3.4mである。各柱間距離は掘形の中心で、東・西側柱列が1.52～1.98mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は直径22～26cm、検出面からの深さ11～43cmを測る。

掘形内堆積土はP1～3・5～8が黒褐色土1層、P4が黒色土1層で、自然堆積か人為堆積かは判断できなかった。遺物はP7から縄文土器4点が出土したが、細片のため図示していない。

本遺構は3間×1間の南北が長い建物跡で、規模は南北5.2～5.3m、東西3.3～3.4mである。時期は出土遺物が少なく判然としないが、柱間距離から近世頃の可能性が高い。

#### 16号建物跡 S B16 (図19、写真15)

本遺構は調査区中央、F39グリッドに位置し、検出面はLII b上面である。S B15・17、GPと重複し、GPより新しい。それ以外の遺構とは平面的には重複するが、直接重複する部分が無いため新旧関係は不明である。

本遺構は南北3間、東西1間の南北が長い建物跡で、長軸方向はN1°Eである。現状の壁上端での規模は南北4.5～4.68m、東西3.28～3.46mである。各柱間距離は掘形の中心で、東・西側柱列が1.32～1.68mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は直径18～30cm、検出面からの深さ9～26cmを測る。掘形内堆積土は黒褐色土1層で、自然堆積か人為堆積かは判断できなかった。

本遺構は3間×1間の南北が長い建物跡で、規模は南北4.5～4.7m、東西3.3～3.5mである。出土遺物がなく時期は特定できないが、柱間距離から近世頃の可能性が高い。

#### 17号建物跡 S B17 (図19、写真15)

本遺構は調査区中央、F39グリッドに位置し、検出面はLII b上面である。S B15・16、GPと

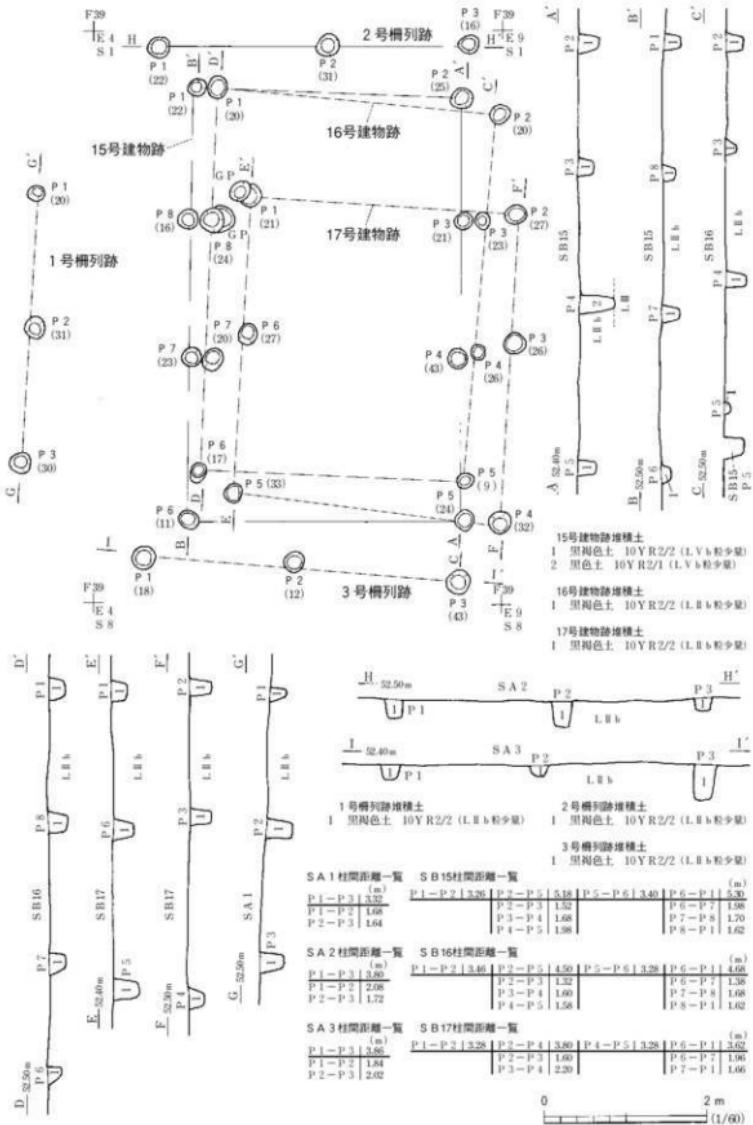


図19 15~17号建物跡、1~3号柵列跡

重複し、GPより古い。それ以外とは平面的に重複するが、直接重複する部分が無いため新旧関係は不明である。

本遺構は南北2間、東西1間の南北が長い建物跡で、長軸方向はN 3°Eである。現状の壁上端での規模は南北3.62～3.8m、東西3.28mである。各柱間距離は掘形の中心で、東・西柱列が1.6～2.2mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は径24～28cm、検出面からの深さ21～33cmを測る。掘形内堆積土は黒褐色土1層で、自然堆積か人為堆積かは判断できなかった。

本遺構は3間×1間の南北が長い建物跡で、規模は南北3.6～3.8m、東西3.3mである。出土遺物がなく時期は特定できないが、柱間距離から近世頃の可能性が高い。

#### 18号建物跡 SB18 (図15, 写真11)

本遺構は調査区南側、D36グリッドに位置し、検出面はL III上面である。SD19、GPと重複し、SD19より新しい。GPとは平面的に重複するが、直接重複する部分が無いため新旧関係は不明である。

本遺構は東西が長い建物跡であるが、西側が調査区外に延びるため全容は不明である。長軸方向はN 78°Eで、現状の壁上端での規模は、東西6.2m、南北2.94mである。各柱間距離は掘形の中心で、東・西側柱列が1.98～2.18mである。掘形の平面形は不整円形を呈する。規模は径20～30cm、検出面からの深さ5～48cmを測り、P 2には長さ20cmの根石が認められる。

掘形内堆積土はP 1・4～7が黒褐色土1層、P 2・3が黒色土1層で、自然堆積か人為堆積かは判断できなかった。

本遺構は東西が長い建物跡であるが、西側が調査区外のため全容は不明である。出土遺物がなく時期は特定できないが、柱間距離から中世～近世頃の可能性が高い。

#### 19号建物跡 SB19 (図20, 写真16)

本遺構は調査区北側、H 2・3グリッドに位置し、検出面はL V a上面である。GP15基と重複し、その内の2基より新しい。それ以外のGPとは平面的に重複するが、直接重複する部分がないため新旧関係は不明である。

本遺構は東西が長い建物跡であるが、東側が調査区外に延びるため全容は不明である。長軸方向はN 87°Wで、現状の壁上端での規模は東西6.14m、南北4.76mである。各柱間距離は掘形の中心で、東・西側柱列が1.66～2.28mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は径20～45cm、検出面からの深さ8～22cmを測る。P 1には根石が認められ、P 7には径4cmの柱根が遺存している。

掘形内堆積土はP 1～4が黒色土1層、P 5が黒褐色砂質土1層、P 7が黒褐色土1層で、自然堆積か人為堆積かは判断できなかった。P 6は3層に分けられ、ℓ 2は自然堆積と考えられる。ℓ 3・4は堆積状況から、いずれかが柱痕の可能性が高い。

本遺構は東西が長い建物跡であるが、東側が調査区外のため全容は不明である。SB20・23、S

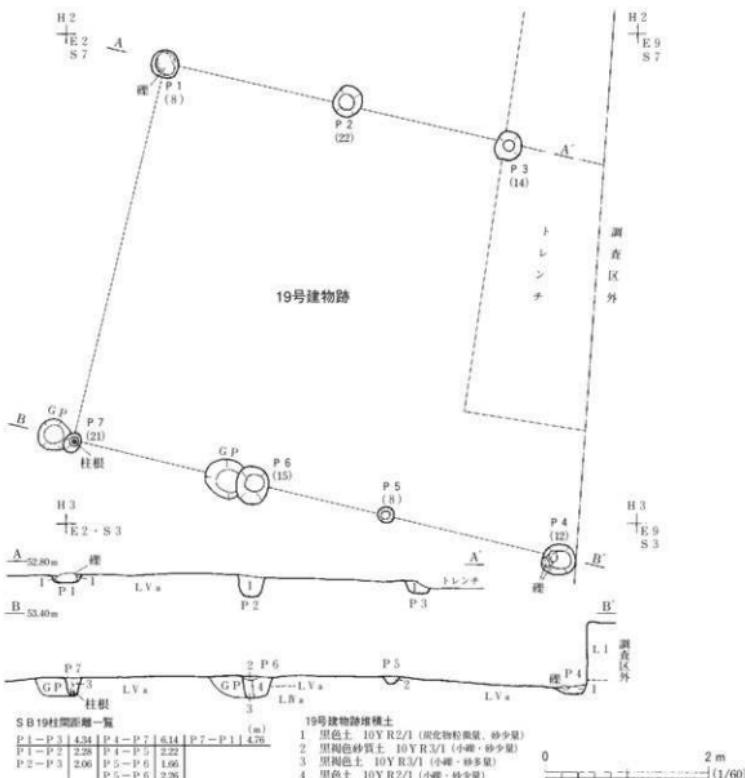


図20 19号建物跡

D 2 と軸線がほぼ一致することから、これらに関連する建物跡と考えられる。出土遺物がなく時期は特定できないが、SD 2 の時期と柱間距離から中世～近世頃と推測される。

#### 20号建物跡 SB 20 (図21, 写真17)

本遺構は調査区北側、H 5 グリッドに位置する。L V a 上面で検出され、S B22・23、G P と重複する。S B22・23とは平面的に重複するが、直接重複する部分が無いため新旧関係は不明である。

本遺構は1間×1間の建物跡で、北側柱列の方向はN85°Wを示す。現状の壁上端での規模は、掘形の中心で一辺1.98～2.06 mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は直径36～40 cm、検出面からの深さ15～22 cmを測る。

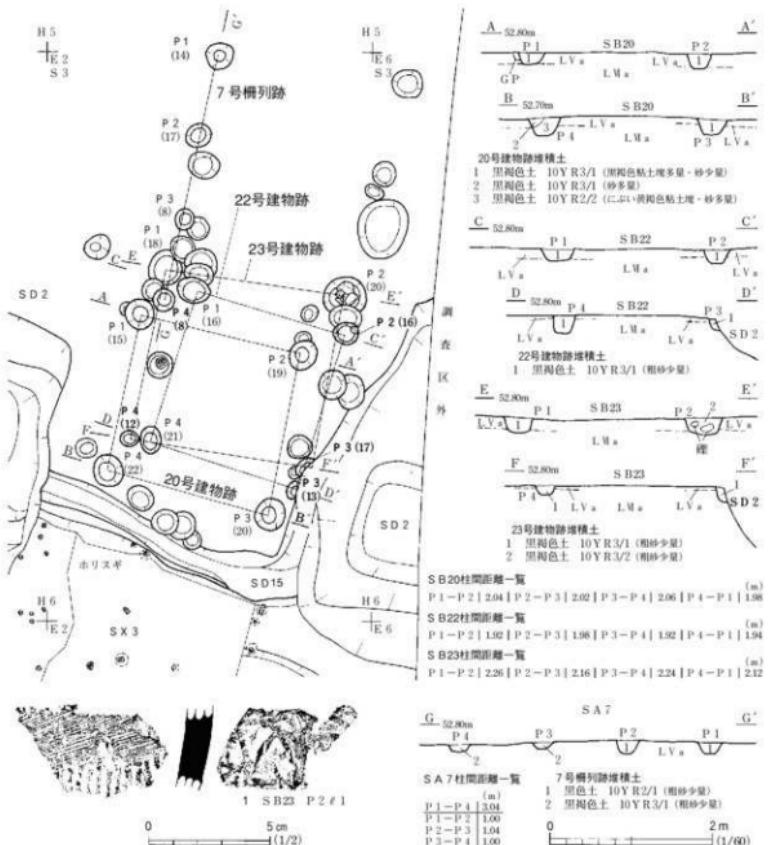


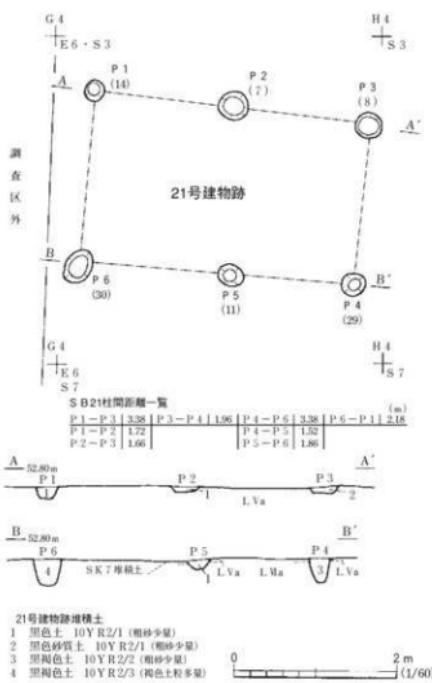
図21 20・22・23号建物跡、7号柵列跡と出土遺物

掘形内堆積土は、P 1～3 ℓ 1とP 4 ℓ 3が黒褐色粘土塊やにぶい黄褐色粘土塊を多量含むことから人為堆積、P 4 ℓ 2は自然堆積と考えられる。

本遺構は1間×1間の建物跡で、規模は一辺2～2.1mである。区画溝の入口部に位置することから四脚門と考えられる。出土遺物がなく時期は特定できないが、関連するS X 3、S D 2の時期と柱間距離から中世～近世頃と推測される。

#### 21号建物跡 S B21 (図22)

本遺構は調査区北側、G・H 4グリッドに位置し、検出面はP 1～5がL V a上面、P 6はSK



22号建物跡 SB22 (図21, 写真17)

本遺構は調査区北側、H 5 グリッドに位置し、検出面は L V a 上面である。SB20・23、SD2、GP6基と重複し、SB23、GP2基より新しい。SB20とGP4基とは平面的に重複するが、直接重複する部分が無いため新旧関係は不明である。また、区画溝であるSD2はP3を一部壊しているが、本遺構が区画溝の入口部に位置することから、これと同時期と考えられる。

本遺構は1間×1間の建物跡で、北側柱列の方向はN73°Wを示す。現状の壁上端での規模は、掘形の中心で一辺1.92~1.98mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は直径30~40cm、検出面からの深さ16~21cmを測る。掘形内堆積土は黒褐色土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。

本遺構は1間×1間の建物跡で、規模は一辺1.9~2.0mである。区画溝の出入口部に位置することから四脚門と考えられる。出土遺物がなく時期は特定できないが、関連するSX3、SD2の時期と柱間距離から中世~近世頃と推測される。

7堆積土上面である。SK7、GPと重複し、SK7より新しい。GPとは平面的に重複するが、直接重複する部分が無いため新旧関係は不明である。

本遺構は東西2間、南北1間の東西が長い建物跡で、長軸方向はN87°Wである。現状の壁上端での規模は東西3.38m、南北1.96~2.18mである。各柱間距離は掘形の中心で、南・北側柱列が1.52~1.86mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は直径27~44cm、検出面からの深さ7~30cmを測る。

掘形内堆積土は、P1・2・5が黒色土1層、P3が黒色砂質土1層、P4・6が黒褐色土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。

本遺構は2間×1間の東西が長い建物跡で、規模は東西3.4m、南北2.0~2.2mである。本遺構からの出土遺物はなく時期は不明であるが、遺構の重複関係から16~17世紀以降と推定される。

## 23号建物跡 S B23 (図21, 写真17・46)

本遺構は調査区北側、H 5 グリッドに位置する。L V a 上面で検出され、S B20・22、S A7、S D2、G P 9 基と重複する。本遺構は、G P 1 基より新しく、S B22、S A7、G P 3 基より古い。S B20 と G P 6 基とは平面的に重複するが、直接重複する部分が無いため新旧関係は不明である。

また、区画溝である S D 2 は P 3 を一部壊しているが、本遺構が区画溝の入口部に位置することから、これと同時期と考えられる。

本遺構は 1 間 × 1 間の建物跡で、北側柱列の方向は N82°W を示す。現状の壁上端での規模は、掘形の中心で一辺 2.12~2.26 m である。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は直径 23~52 cm、検出面からの深さ 12~20 cm を測る。

掘形内堆積土はいずれも黒褐色土 1 層で、人為堆積か自然堆積か判断できなかった。また、P 2 には拳大から掌大の礫が含まれている。

遺物は P 2 から繩文土器 1 点、須恵器 1 点が出土した。21図 1 は須恵器の甕もしくは壺の体部片で、外面に叩き目、内面に当て具の痕跡が認められる。

本遺構は 1 間 × 1 間の建物跡で、規模は一辺 2.1~2.3 m である。区画溝である S D 2 の出入口部に位置することから四脚門と考えられる。時期は出土遺物が少なく判然としないが、関連する S X 3、S D 2 の時期と柱間距離から中世~近世頃と推測される。

(坂田)

## 24号建物跡 S B24 (図23, 写真18)

本遺構は、調査区中央付近の G 21・22 グリッドに位置する建物跡である。周辺は標高 52.9 m 程の平坦な地形になる。建物跡を構成する柱穴は規則的に配列され、8 個の柱穴跡を本建物跡として認定した。

遺構検出面は遺跡の基底面である L VI a 上面である。本遺構の P 3・5 と S D 11 が重複し、本遺構の方が新しい。また、東側梁の内側に平行して P 8 が認められ、推定される柱間寸法から本建物跡に伴うものと判断した。東柱等の機能を考えられる。

本建物跡は南北 2~3 間、東西 1 間の側柱建物跡で、平面形は長方形を呈する。主軸方向は、南北側柱列を基本軸とした場合 N76°W である。四隅の柱穴に囲まれた範囲の面積は 12.7 m<sup>2</sup> 程である。各柱穴の平面形は円形を基調とする。規模は検出面で直径 30~38 cm、検出面からの深さは 24~34 cm を測り、柱穴底面の標高は 52.6 m 前後に揃う。

掘形内堆積土は黒色または黒褐色土で、L VI a 粒を含み堅く締まっている。また、本建物跡から遺物は出土していない。

本遺構は桁行 2~3 間、梁行 1 間の東西棟を呈する側柱建物跡である。柱の抜き取り痕跡や根石等は認められなかった。本遺構の機能時期については出土遺物がなく、明確な時期比定は判断し得ないが、南側の S D 32 に区画された建物跡群と関連性が高いと考えられる。

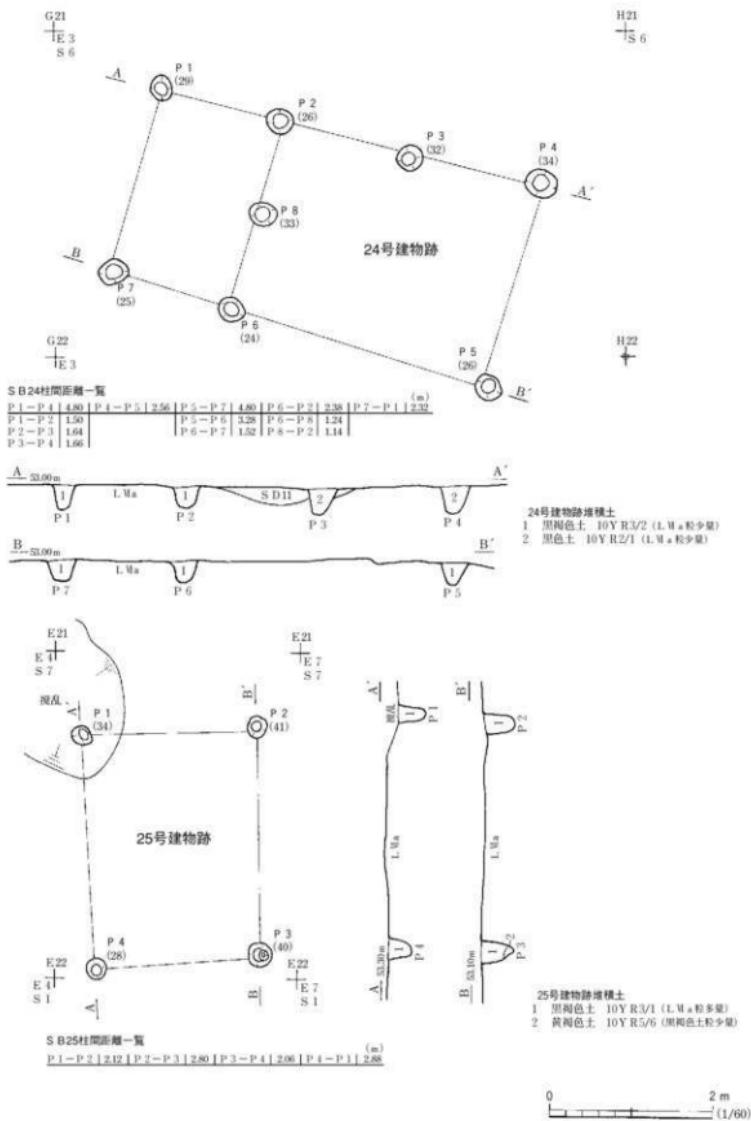


図23 24・25号建物跡

## 25号建物跡 S B25 (図23, 写真19)

本遺構は、調査区中央付近のE21・22グリッドに位置する建物跡である。周辺は標高53.0m程の平坦な地形になる。建物跡を構成する柱穴は規則的に配列され、4個の柱穴跡を本建物跡として認定した。

遺構検出面は、遺跡の基底面であるL VI a上面であるが、L VI a自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。重複する遺構はない。

本建物跡は、南北1間、東西1間の小規模な建物跡である。平面形は長方形形状を呈する。主軸方向は、東西側柱列を基本軸とした場合N 4°Wである。四隅の柱穴に囲まれた範囲の面積は5.8m<sup>2</sup>程である。各柱穴の平面形は円形を基調とする。規模は検出面で直径26~32cm、検出面からの深さは28~40cm程を測る。

掘形内堆積土は黒褐色及び黄褐色土の混土で、堅く締まっている。また、本建物跡から遺物は出

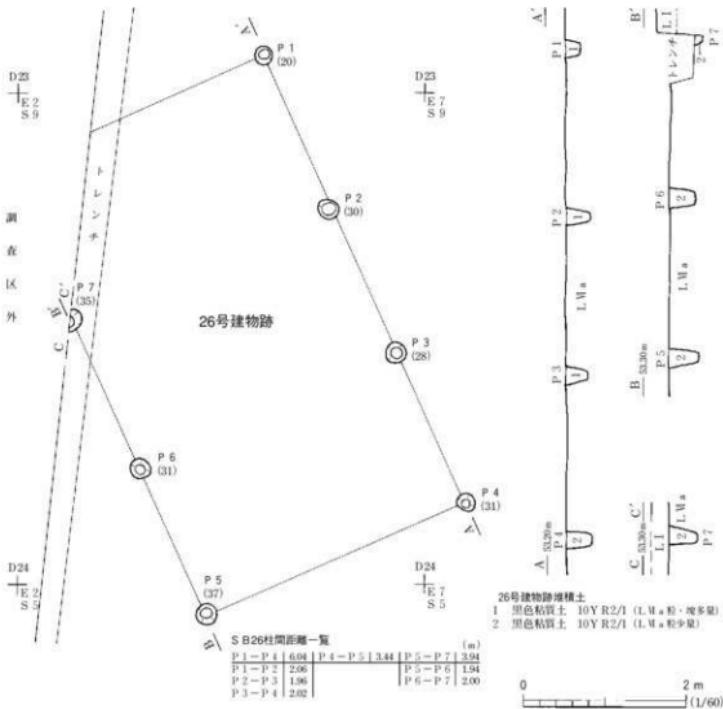


図24 26号建物跡

土していない。

本遺構は桁行2間、梁行1間の東西棟を有する側柱建物跡である。柱の抜き取り痕跡や根石等は認められなかった。本遺構の機能時期については出土遺物がなく、明確な時期比定は判断し得ないが、南側のS D32に区画された建物跡群と関連性が高いと考えられる。(稻村)

## 26号建物跡 S B26

(図24、写真20)

本遺構は調査区中央、D23・24グリッドに位置し、検出面はL VI a上面である。平面的にはG Pと重複するが、直接重複する部分がないため新旧関係は不明である。

本遺構は南北3間、東西1間の南北が長い建物跡で、北西端は調査区外にある。長軸方向はN 24°Wで、現状の壁上端での規模は南北6.04m、東西3.44mである。各柱間距離は掘形の中心で、東・西側柱が1.94～2.06mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は径22～26cm、検出面からの深さ20～37cmを測る。掘形内堆積土はいずれも黒色粘質土1層で、人為堆积か自然堆积かは判断できなかった。

本遺構は3間×1間の南北が

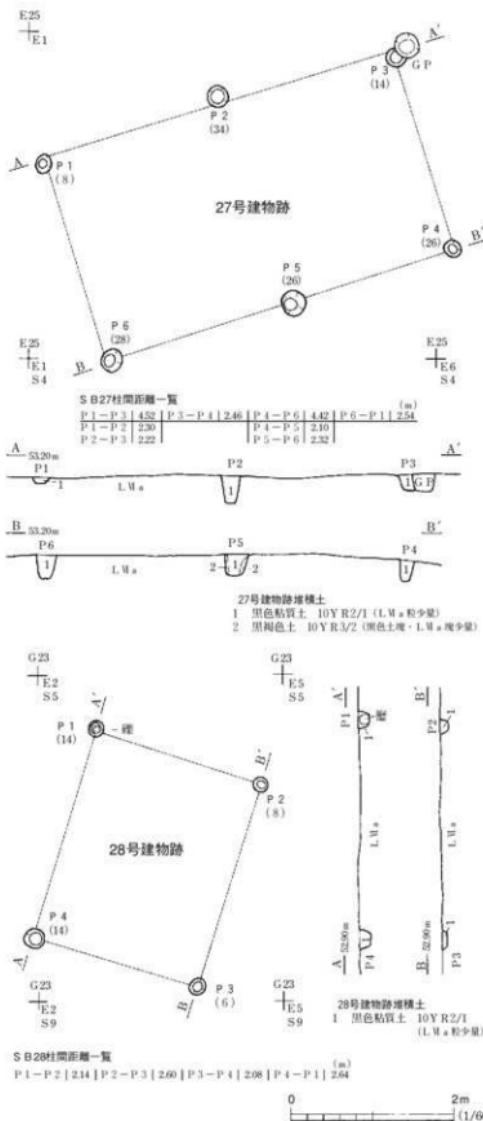


図25 27・28号建物跡

### 第3章 遺構と遺物

長い建物跡で、規模は南北6.0m、東西3.4mである。時期は出土遺物がなく特定できないが、柱間距離から近世頃の可能性が高い。

#### 27号建物跡 S B27 (図25, 写真21)

本遺構は調査区中央、E25グリッドに位置し、検出面はL VI a上面である。G P 4基と重複し、その内の1基より古い。それ以外のG Pとは平面的に重複するが、直接重複する部分が無いため新旧関係は不明である。

本遺構は東西2間、南北1間の東西が長い建物跡で、長軸方向はN72°Eである。現状の壁上端での規模は東西4.42~4.52m、南北2.46~2.54mである。各柱間距離は掘形の中心で、南・北側柱列が2.1~2.32mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は径20~32cm、検出面からの深さは8~34cmを測る。

掘形内堆積土はP 1~4・6が黒色土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。P 5には径14cmの柱痕が認められる。

本遺構は2間×1間の東西が長い建物跡で、規模は東西4.4~4.5m、南北2.5mである。出土遺物がなく時期は特定できないが、柱間距離から中世~近世頃の可能性が高い。

#### 28号建物跡 S B28 (図25, 写真22)

本遺構は調査区中央、G23グリッドに位置し、検出面はL VI a上面である。本遺構と重複する遺構はない。

本遺構は1間×1間の南北が長い建物跡で、長軸方向はN17°Eである。現状の壁上端での規模は掘形の中心で、東・西側柱列が2.6m、南・北側柱列が2.1mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は直径20~26cm、検出面からの深さ6~14cmを測る。

掘形内堆積土は黒色粘質土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。P 1には根石が認められる。

本遺構は1間×1間の南北が長い建物跡で、規模は東西2.1m、南北2.6mである。出土遺物がなく時期は特定できないが、柱間距離から中世~近世頃の可能性が高い。

(坂 田)

## 第4節 特 殊 遺 構

今回の2次調査で検出された特殊遺構は4基である。調査区南側に位置する1・2号特殊遺構は所謂「竪穴状遺構」であるが、用途が不明なため、便宜的に「特殊遺構」として扱うこととした。

調査区北側で確認された3・4号特殊遺構は、堀で囲まれた館跡の通路跡である「土橋状遺構」と考えられる。この土橋状遺構は、突出部・土橋部・杭列跡等の部分で構成され、複雑な構造を擁するものも認められることから、便宜的に「特殊遺構」として扱った。

## 1号特殊遺構 SX1

## 遺構 (図26、写真23・24)

本遺構は、調査区南側のE40グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は、標高52.2m程の平坦な地形である。検出面はL I直下のL II b上面であるが、L II b自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。北側でS E 4、東側でS K 16と重複するが、ともに本遺構の方が新しい。

本遺構は、検出面から床面にかけて炭化材や焼土塊が多量に確認できたことから、火災を受けた遺構と判断した。その炭化材の分布状況は図26に示した。炭化材は遺構の北半部で比較的多く確認できた。柱状のものや板状のものが認められるが、上屋構造の詳細な部位までは復元できない。また、これら炭化材の出土状況は、床面より浮いた状態であるものが多い。焼土塊はその炭化材の下部で確認でき、特に南東隅付近において顯著に認められた。

遺構内堆積土は、色調および混入物から5層に分層できた。 $\ell$  1は炭化物や焼土を多く含み、締まりが強く、火災の後に入為的に一気に廃棄された様相を呈する。 $\ell$  2・3は壁際からの流入が認められるため自然堆積と考えられる。また、 $\ell$  5は固く踏み締められていることから、貼床構築土と判断した。

遺構の平面形は、ややふくらみを持つものの、基本的に方形を呈する。検出面での規模は、北壁2.3m、南壁2.2m、東壁2.5m、西壁2.3mを測る。周壁は一部オーバーハングしている部分もあるが、床面からほぼ垂直に立ち上がる。南西隅付近では段状になり、中段が固く踏み締められている。また、平面形が若干南側へ突出していることから、階段状の通路部分と思われる。壁高は、検出面から床面までの最深部で55cmを測る。床面はほぼ平坦である。また、南西隅付近を除いたほぼ全域に貼床を施し、全体的に固く締まっている。

床面からは、小穴10基を検出した。P 10は床面中央部に位置することから主柱穴、P 1～9はその位置から壁柱穴と考えられ、遺構内隅および各辺中央に規則的に配置され、総柱建物状になる。平面はほぼ円形状を呈し、規模は径20～30cm、床面からの深さは13～36cmを測る。掘形内堆積土は、黒褐色土を多量に含む黄褐色または褐色の粘質土を基調とし、土質に締まりがある。また、P 1～4・9には径12～16cmの柱痕が認められた。この他、P 11は位置が不規則であるが、検出面からの深さが22cmで、すぐ西側に出入口部が存在することから、通路施設に付属するものと考えられる。他に、炉跡や周溝等の施設は認められなかった。

## まとめ

本遺構は、所謂「竪穴状遺構」であるが、用途が不明なため「特殊遺構」とした。炭化物・焼土塊の堆積状況から、焼失遺構の可能性が高い。性格としては、火災が認められず、同様の遺構におけるこれまでの調査例から、貯蔵庫あるいは作業場としての可能性を考えておきたい。所属時期は、出土遺物がなく特定することは難しいが、焼失時の炭化物を、放射性炭素年代測定で分析したところ

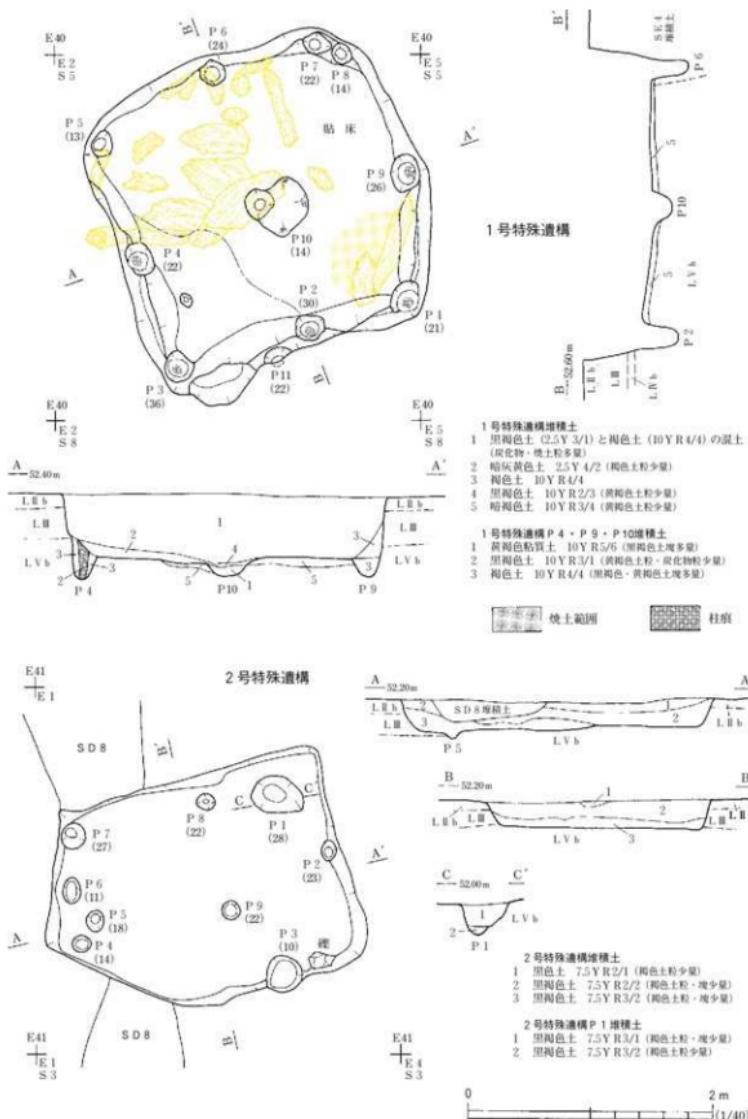


図26 1・2号特殊遺構

る、全て13世紀中頃の年代を得られた。したがって、少なくとも中世中頃を巡ることないと推定される。

## 2号特殊遺構 SX2

### 遺 構 (図26、写真25・26)

本遺構は、調査区南側のE41グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は、標高52.1m程の平坦な地形である。検出面はLⅠ直下のLⅡb上面であるが、LⅡb自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。遺構西半部分でSD8と重複関係にあるが、検出状況から本遺構の方が古い。

遺構内堆積土は、色調および混入物から3層に分層できた。 $\ell$ 1～3はいずれも褐色土粒を含み、下層にいくほど褐色土塊が多く混入する。その様相から人為的堆積土と判断した。

検出面での平面形は、平面的に西辺がやや張り出す不整形な形状を呈し、南西隅は整っていないが、長方形基調と推測される。規模は、長軸の東西辺が2.6m、短軸の南北辺が1.9mである。周壁は、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は、検出面から床面までの最深部で28cmを測る。床面は、基盤層であるLVbを掘り込んだままの平坦な直床で、比較的堅く締まっている。

床面からは、小穴を9基検出した。P1は開口部長軸44cm、短軸34cm、床面からの深さ28cmを測る。その様相から貯蔵穴と推測される。P2～9は、壁際に多い傾向が認められ、その位置から壁柱穴と考えられるが、規模が小さく浅いなどやや貧弱な印象がある。また、明瞭な規則性が認められないため、遺構の上部構造は復元できない。平面はほぼ円形状を呈し、規模は径16～30cm、床面からの深さは10～27cmを測る。他に、炉跡や周溝等の施設は認められなかった。

### ま と め

本遺構は、所謂「竪穴状遺構」であるが、用途が不明なため「特殊遺構」とした。周溝や炉跡などは認められず、上屋の構造さえ明らかではないが、性格としては、同様の遺構におけるこれまでの調査例から、貯蔵庫あるいは作業場としての可能性を考えておきたい。所属時期は、出土遺物がなく特定することは難しいが、近接する1号特殊遺構との類似性から、少なくとも中世中頃を巡ることはない。

## 3号特殊遺構 SX3

### 遺 構 (図27、写真27・28)

本遺構は、調査区北側のH5・6グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は、標高52.6m程の平坦な地形である。検出面は、LⅠ直下のLVa上面およびSD2堆積土上面であるが、周囲は削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。

本遺構は、構築時にSD2を掘り残している。北から突出部・土橋状遺構に分かれ、土橋状遺構内には柵状の杭列跡が認められる。この突出部・土橋状遺構・杭列跡を総称して「3号特殊遺構」

とし、各個別に報告する。また、本遺構の南側には S D 3 に付属する土橋状遺構（S X 4）があり、本遺構と重複関係にある。検出状況から、本遺構の方が新しい。

**突出部** 突出部は、H 5 グリッドに位置する。平面形は隅丸方形を基調とし、上面幅で東西 3.1～3.3 m、南北 2.0～3.4 m 程を測り、土橋状遺構の上面とは約 20～45 cm の比高差がある。突出部の範囲内から、3 棟の門跡と溝跡 1 条、単独の小穴数基を確認したが、門跡と突出部の位置関係などから、大きく新旧 3 時期に変遷していると考えられる。

新しい段階の突出部が今回確認したもので、これには突出部内の南側に位置する S B 20（門跡）が伴っていると判断した。この段階の突出部には、土橋状遺構と突出部との比高差がないように整地され、S D 2 が分離される形となることから、両間を結ぶ排水溝、もしくは水量調整用の溝（S D 15）が付属したと考えられる。

古い時期の様子は、改築以前の土橋状遺構内にある柵状の杭列の軸線上にある S B 22・23（門跡）から想定される。これらの建物跡は、突出部の中では少し東に偏った場所に位置する。このため、新段階の改築時に突出部の東側を 1.2 m ほど狭めている可能性が高く、古い時期の突出部の東西幅は 4.5 m 前後と考えられる。

**土橋状遺構** S D 2 内の H 5・6 グリッドから確認された。S D 2 の掘り残し部分と掘形部分からなり、基底面である L VI a を掘り残すことによって、区画内部と外部の通路空間としている。通路面は 2 面確認された。古い時期の通路は L VI a 上面で確認されたもので、柵状の杭列が確認できた。杭列は少なくとも東西側縁の 2 列状に認められ、北側の突出部に位置する S B 22・23 の南北軸線にほぼ沿っている。このことから土橋部分には、橋脚状の木杭を付設した通路幅 1.4～1.6 m の簡易的な板橋を通していったと推測される。

新しい時期の通路は L VI a 面の 40 cm 程上にあり、板橋状通路から土橋通路への改築がみられる。この土橋の範囲は、南北約 3.0 m、東西約 2.2～2.4 m 程の長方形状を呈する。さらにその上に土を積み、整地している。また、土橋状遺構周辺は S D 2 の中でも遺物が集中している箇所であり、特に突出部の南北周辺からは、区画内部施設の廃絶時に、S D 2 への大量の礫や部材等の廃棄行為が認められる。

掘形内の堆積土は 6 層に分けられ、下層の ℓ 4～6 は古い時期の流水層であり、上層に厚く堆積する ℓ 1～3 は固く締まった人為的構築土である。

**柱列跡** 土橋状遺構の東西両縁邊から柵状の杭列を確認した。確認された杭の総数は 16 本で、直径 16～20 cm の掘形を持つものも認められる。杭の直径は 10 cm 前後のものが殆どで、削材も 4 点（杭 2・6・8・12）認められる。打ち込みの深さは、最も深いもので 65 cm を測る。

杭の目的は、S D 2 からの侵入を防ぐ施設か通路や突出部の土留めと考えられたが、北側の突出部に位置する S B 22・23 の南北軸線にほぼ沿っている状態で確認されたことから、通路施設と推測され、橋脚状の木杭であると判断した。橋脚状の木杭を付設した通路幅 1.4～1.6 m 程の簡易的な板橋であったと思われる。また、同時に防備のための施設であった可能性が高いものと思われる。全

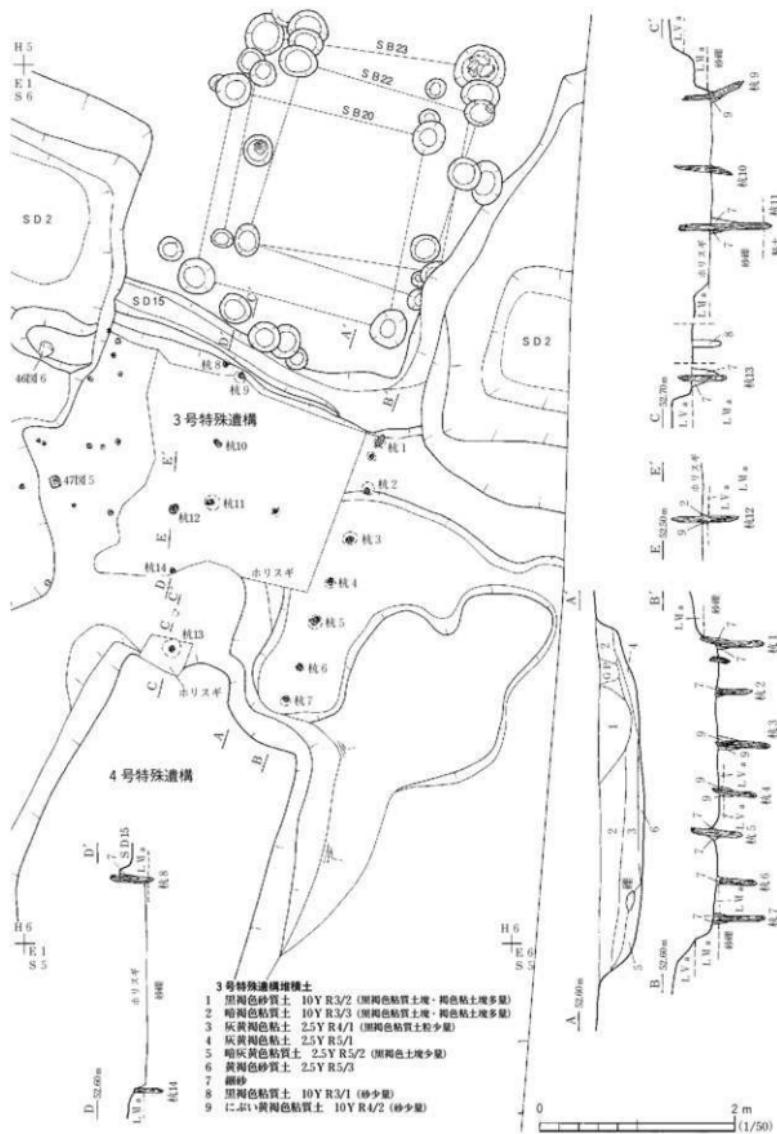


図27 3・4号特殊構造

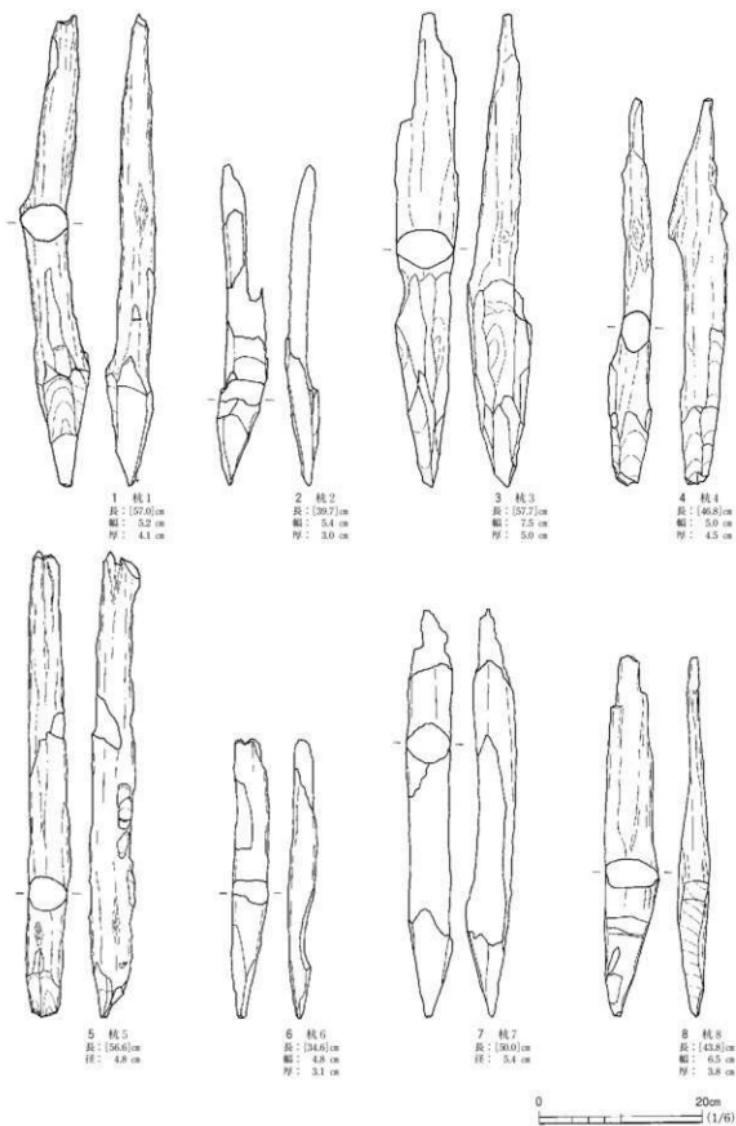


図28 3号特殊遺構出土遺物(1)

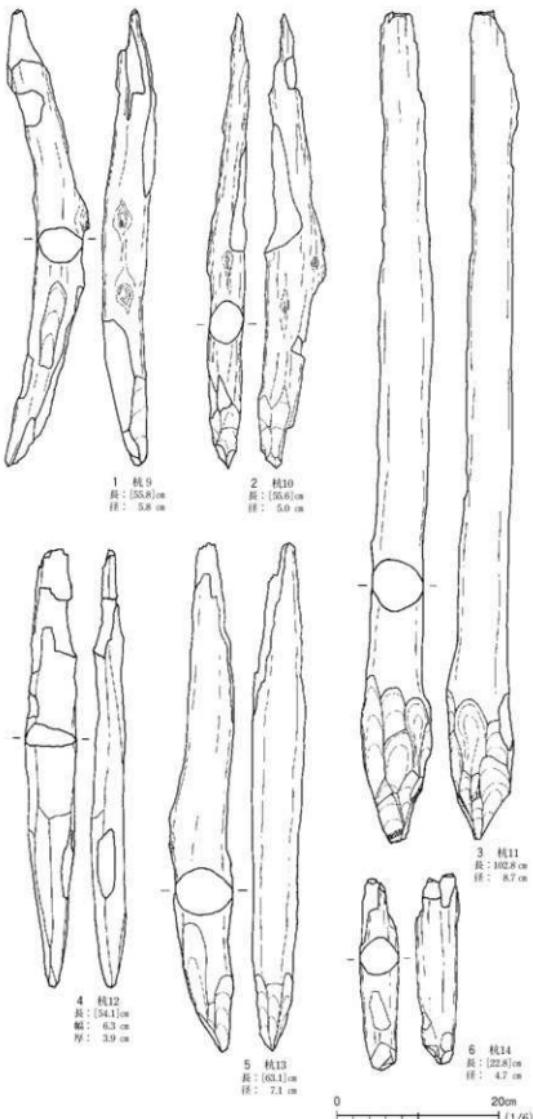


図29 3号特殊遺構出土遺物(2)

体的に杭間の距離は不規則で、西側柱列では軸に沿わないことから、いくつかの変遷が推測されるが、杭柱内での重複ではなく詳細は不明である。

#### 遺 物

(図28・29、写真50)

本遺構からは橋脚に使用したと考えられる木杭14点が出土し、図28・29に示した。樹種は全てクリである(付章4参照)。いずれも先端をナタ状の工具により、粗く面取りを施してある。柱径は4.7~8.7cmを測るが、5.0cm前後のものが多い。断面は、大きく円形状のもの(杭1・3・4・5・7・9・10・11・13・14)と、方形状のもの(杭2・6・8・12)が見受けられる。工具痕は、各々2~5方向から粗く打ち込まれているのが認められる。出土した柱材は、表面の風化が顕著で比較的の遺存状態が悪いものが多いが、橋脚機能時の面が遺存しているものも見受けられる。若干の収縮は勘案しなければならないが、全体的に橋脚の規模に比してやや脆弱な感がある。

### ま　と　め

本遺構は、囲郭堀である S D 2 内に認められる。突出部・土橋状遺構・杭列跡から構成され、変遷・性格等において複雑な構造を持つことから、一括して「特殊遺構」とした。区画内部施設へ入る唯一の通路であり、橋脚を用いた板橋状施設から、埋めて整地された土橋状に改築されている。

S D 3 に伴う土橋状遺構（S X 4）と主軸方向・幅等がほぼ類似することから、より防御的に改築する形で S D 2 と共に本遺構が構築されたものであり、周辺の遺構とともに、計画的な配置・作業のもとで築かれたと考えている。

所属年代については、遺構に共伴する時期を特定できる遺物の出土がないため、橋脚として機能した木杭の一部を、放射性炭素年代測定で分析したところ、16世紀中～後頃を中心とした年代が得られた。また、S D 2 からの出土遺物の特徴も合わせて、本遺構の所属時期は中世末から近世初期ころの所産と考えている。

### 4号特殊遺構 S X 4

#### 遺　　構（図27、写真27・28）

本遺構は、3号溝跡に付属する土橋状遺構であるが、便宜的に「4号特殊遺構」とした。調査区北側のH 6 グリッドに位置し、遺構が確認された周辺は、標高52.5m程の平坦な地形である。検出面は、L I 直下の L VII a 上面および S D 3 堆積土上面であるが、周囲は削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。遺構北側で S X 3 と重複しており、検出状況から本遺構の方が古く、遺構北辺は削平されている。

平面形は隅丸方形状を呈し、上面幅で東西2.0～2.5m、南北3.3～3.4m程を測り、S D 3 の底面とは約25～35cmの比高差がある。本遺構は3号特殊遺構と同様に、基底面である L VII a を掘り残すことで区画内部と外部との通路空間としている。通路面は整地面やピット等の検出はないことから改変された痕跡ではなく、その変遷等は不明である。

### ま　と　め

本遺構は、囲郭堀である S D 3 に付属する土橋状遺構であり、S D 2 構築以前の区画内部施設へ入る唯一の通路である。本遺構の北側周辺は、S D 2 等の重複により削平されたが、S X 2 の突出部と同様の形態で、柵列や門跡等の付属施設が存在した可能性は高い。周辺の遺構とともに、計画的な配置・作業のもとで構築されたと考えている。所属年代については、遺構に共伴する遺物の出土がないため特定することは難しいが、概ね中世中頃と考えている。

(編　村)

## 第5節 土　　坑

今回の2次調査で検出された土坑は24基で、1次調査分の7基を加えると計32基となる。これらの土坑群は散在して認められ、重複するものは殆どなかったが、今回の調査区で検出できた土坑群

は、溝跡や建物跡等と隣接して存在するものが多く、屋敷跡や館跡の施設を構成する一連の遺構群と考えられる。詳細な時期・性格等については、出土遺物が僅かなため不明なものが多いが、大半は近世頃に帰属するものと判断される。なお、今回の調査で使用した遺構番号は、1次調査からの継続である。

## 7号土坑 SK 7 (図30, 写真29)

本遺構は、調査区北西側付近のG 4 グリッドに位置する。遺構の西半部を1次調査、東半部を2次調査で実施した。1次調査部分に関しては、すでに『常磐自動車道遺跡調査報告39』において報告しているが、1次調査と2次調査の成果をまとめて報告する。

遺構が確認された周辺は、標高52.5m程の平坦な地形である。S B21と重複するが、検出状況か

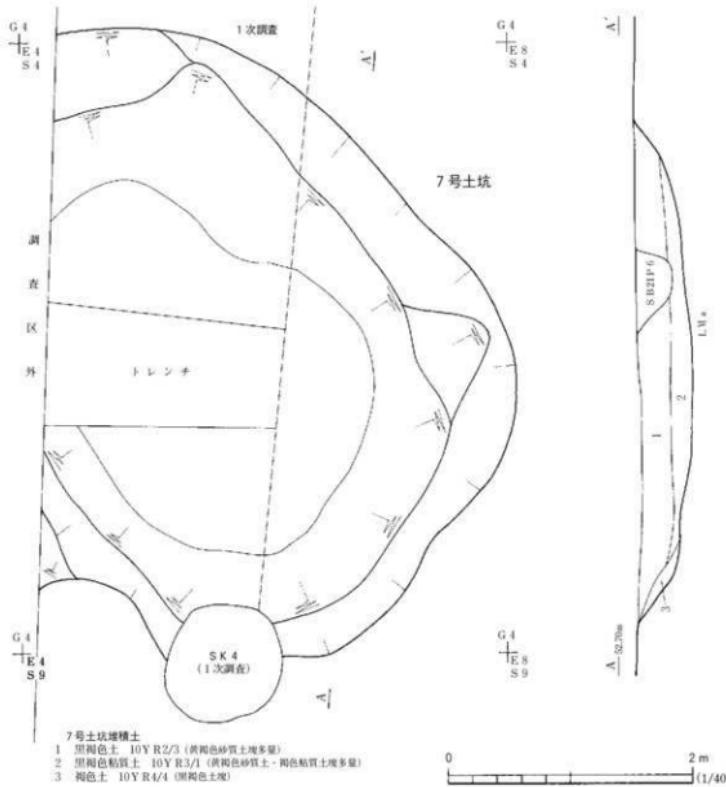


図30 7号土坑

ら本遺構の方が古い。また、1次調査部分でS E2、SK 4と重複するが、いずれよりも本遺構の方が古いとされる。検出面は、L I直下のL V a上面であるが、L V a自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。

遺構内堆積土は、色調および混入物から3層に分層できた。 $\ell$  1・2は、L VI aに由来する黄褐色土塊を含む黒褐色土で人為的埋土と判断される。 $\ell$  3は壁際からの流入が認められるため、自然堆積と考えられる。

1次調査部分と合わせた本遺構の平面形は、橢円形状を呈し、規模は開口部長軸5.2m、短軸4.5m、底面長軸3.5mを測る。周壁は、下位は比較的緩角度で立ち上がり、開口部付近でやや急に開く。底面は、L VI aまで掘り込んで構築されており、ほぼ平坦である。検出面から最深部までの深さは50cmである。

今回の調査で遺物は出土しなかったが、1次調査時には14～16世紀に比定される陶器片が1点出土している。また、遺構の性格として、S E 3に付属する施設の可能性が高く、S E 3の廃棄に伴い、人為的に埋め戻されたと推測される。

本遺構の所属時期は、1次調査時には18世紀以前と考えられたが、今回の調査により、SD 2・3等との関連性を窺うことができ、さらに館跡内の付属施設の可能性が高いことから、16～17世紀代と考えられる。

(福村)

#### 8号土坑 SK 8 (図31、写真29)

本遺構は調査区南東側、G 38・39グリッドに位置し、L II a上面で検出された。本遺構と重複する遺構はない。

本遺構の東側は調査区外にあり、西側はトレンチにより一部壊してしまった。遺存部から推定される平面形は、円形もしくは隅丸方形である。現状の壁上端での規模は南北286cm、東西58cm、検出面からの深さ68cmを測る。底面はほぼ平坦で、L IV b上面に形成されている。周壁の立ち上がりは比較的緩やかで、段状に立ち上がる。堆積土は黒色土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。

本遺構からの出土遺物はなく、時期・性格は不明である。

(坂田)

#### 9号土坑 SK 9 (図31、写真29)

本遺構は、調査区南側やや東寄りのG・H 34・35グリッドに位置する。周囲は、標高52.2m程の平坦な地形に位置する。検出面はL I直下のL VII a上面であるが、L VII a自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。重複する遺構はない。

遺構内堆積土は、色調および混入物から2層に分層できた。 $\ell$  1はL V b塊を多量に含む灰黃褐色土で人為的埋土と判断される。 $\ell$  2は底面にのみ認められ、敷いている状況から人為的構築土と考えられる。

## 第5節 土 坑

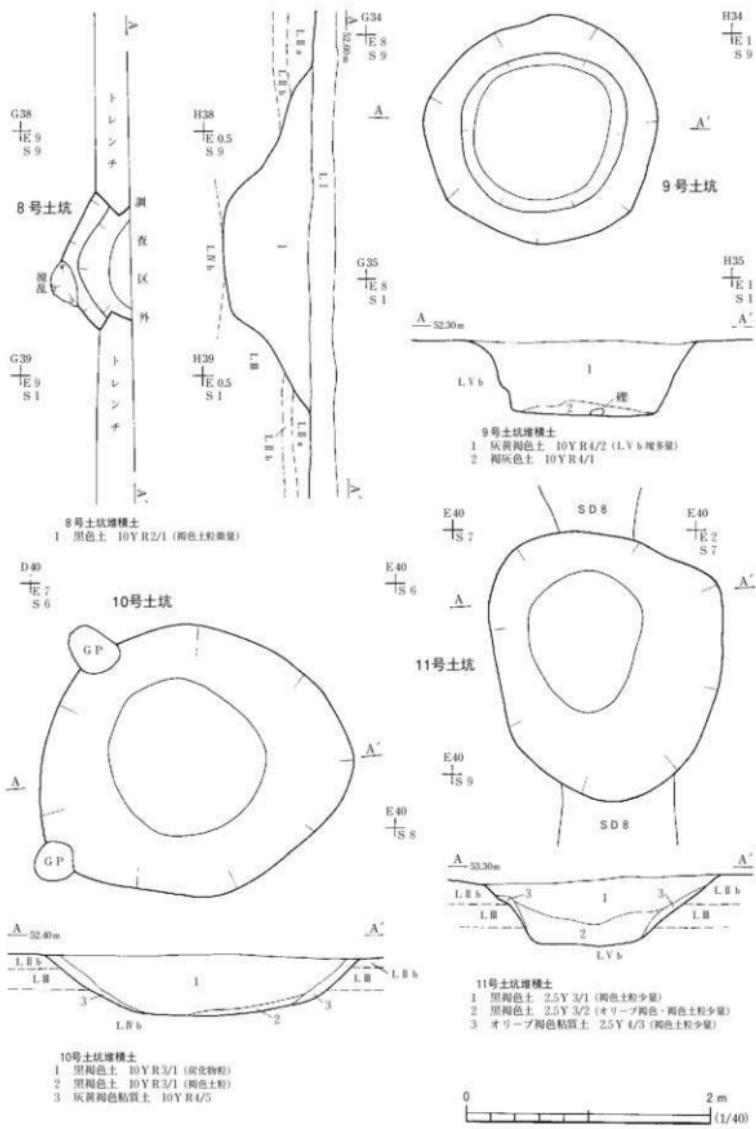


図31 8~11号土坑

遺構の平面形は円形を呈し、規模は開口部長径1.9m、底面径1.1mを測る。周壁は、開口部付近がやや開くが、下位は垂直気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、検出面から最深部までの深さは64cmである。

本遺構からは出土遺物がなく、他遺構との重複も認められないため、明確な所属時期は不明である。性格としては、底面全体に粘土を敷いて水が抜けないような工夫を施していることから、「貯水坑」等が考えられる。

#### 10号土坑 SK10 (図31・36、写真29・47)

本遺構は、調査区南側やや西寄りのD40グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は、標高52.2m程の平坦な地形である。検出面は、L I 直下のL II b 上面であるが、L II b 自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。GPと重複するが、検出状況から本遺構の方が古い。また、近接してSK11やSD8等が存在する。

遺構内堆積土は、色調および混入物から3層に分層できた。 $\ell$  1は炭化物粒を含む黒褐色土で、人為堆積の様相を呈する。 $\ell$  2・3は壁際からの流入が認められるため、自然堆積と考えられる。

遺構の平面形は梢円形を呈し、規模は開口部長軸2.62m、短軸1.26m、底面長軸1.32mを測る。周壁は、底面からやや緩やかな立ち上がりとなる。底面は、中央付近がやや窪むがほぼ平坦で、検出面から最深部までの深さは54cmを測る。

遺物は、陶器片が1点出土している。 $\ell$  1下部からの出土で、36図1は在地の常滑系もしくは窯器系の甕または壺の体部片と推測される。時期は13～14世紀頃に比定される。

本遺構の明確な所属時期は不明である。しかし、隣接する遺構群との関連性が窺えることから、中世から近世初期にかけての年代観と考えている。また、性格的には「ゴミ穴」等の可能性が高いと考えている。

#### 11号土坑 SK11 (図31、写真29)

本遺構は、調査区南側やや西寄りのE40グリッドに位置する。周囲は標高52.2m程の平坦な地形に位置する。検出面は、L I 直下のL II b 上面であるが、L II b 自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。SD8と重複しており、検出状況から本遺構の方が新しい。また、近接してSK10やSX1等が存在する。

遺構内堆積土は3層に分層できた。 $\ell$  1・2は、L VII a 塊を含む黒褐色土で人為的埋土と判断され、 $\ell$  3は壁際からの流入が認められるため自然堆積と考えられる。

遺構の平面形は梢円形を呈し、規模は開口部長軸2.28m、短軸2.1m、底面長軸1.2mを測る。周壁は、西邊および北邊の一部は底面から急に立ち上がるが、他はやや緩やかな立ち上がりとなる。底面は、ほぼ平坦で、検出面から最深部までの深さは56cmを測る。

本遺構からは出土遺物がなく、明確な所属時期は不明である。しかし、他遺構との重複関係では

最も新しく、隣接する遺構群との関連性が窺えることから、近世初期頃の年代観と考えている。また、性格的には「ゴミ穴」等の可能性が高いと考えている。

#### 12号土坑 SK12 (図32、写真30)

本遺構は、調査区南側付近のF40グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は、標高52.3m程の平坦な地形である。検出面は、L I直下のSD9堆積土上面であるが、周囲は削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。SD9と重複し、本遺構の方が新しい。また、SB13とは平面的に重複するが、直接重複する部分がなく新旧関係は不明である。

遺構内堆積土は、色調および混入物から5層に分層できた。 $\ell$ 1～4は、SD9の堆積土を含む黒褐色系土で人為的理土と考えられる。 $\ell$ 5は砂を含むオリーブ褐色土で、自然堆積の様相を呈している。

遺構の平面形は隅丸の長方形を呈し、規模は開口部長辺1.9m、短軸1.45m、底面長軸1.55mを測る。周壁は、床面から急な立ち上がりとなる。底面はほぼ平坦であり、検出面から最深部までの深さは48cmを測る。また、床面の東辺中央付近には、長軸30m、深さ5cm程の楕円形状の窪みが認められ、本遺構の機能時に柱を建てた施設等があった可能性が考えられる。

本遺構からは出土遺物がなく、明確な性格や所属時期は不明である。しかし、隣接するSB13等の遺構群との関連性が窺えることから、近世初期頃の年代観と考えている。

#### 13号土坑 SK13 (図32・36、写真30・47・48)

本遺構は、調査区南側付近のE38グリッドに位置する。周囲は標高51.9m程の平坦な地形に位置する。検出面はL I直下のLVb上面であるが、LVb自体は削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。重複する遺構はない。

遺構内堆積土は単一層で、締まりが強く、人為的に一気に埋め戻された様相を呈する。遺構の平面形は、隅丸の長方形を呈し、規模は開口部長辺1.14m、短軸0.78m、底面長軸0.86mを測る。周壁は、床面から急な立ち上がりとなる。底面はほぼ平坦であり、検出面から最深部までの深さは42cmを測る。

底面には、大腿骨と思われる人骨の一部と木製品の小破片が出土したが、細片で摩滅が著しいため図示できたものはない。堆積土内からは古銭、かわらけ、煙管が出土しており、36図2～8に示した。2はロクロ成形による底部回転糸切り・無調整の「かわらけ」である。3は煙管で、雁首の一部分のみ残存している。4～8は、「寛永通宝」である。4～7は文字と孔の背面の四角い縁が太いことから、寛永13年(1636)～万治2年(1659)までに鋳造された、いわゆる古寛永に分類されるものである。8は「寶」字の末尾画がハの字状であり、背面には「文」字があることから、寛文8年(1668)～天和3年(1683)までの間に鋳造された、俗に文銭といわれる新寛永に属するものとみられる。

以上の成果から、本遺構は近世墓と考えられる。時期は出土遺物の特徴から、18世紀代の年代が考えられる。

14号土坑 SK14 (図32, 写真30)

本遺構は、調査区南側のE40グリッドに位置する。遺構が構築された周辺は、標高52.2m程の平坦な地形を呈し、比較的遺構の密度が多い区域である。重複する遺構はないが、SK13、SD8・9、SX1・2等と近接している。検出面は、LⅠ直下のLⅡb上面であるが、LⅡb自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。遺構内堆積土は単一層で、人為堆積の様相を呈する。

遺構の平面形は楕円形を呈し、規模は開口部長軸1.24m、短軸0.96m、底面長軸0.8mを測る。周壁は、南辺付近は底面からやや緩やかな立ち上がりとなるが、他は急に立ち上がる。底面は、やや凹凸はあるがほぼ平坦であり、検出面から最深部までの深さは20cmを測る。

本遺構からの出土遺物はなく、他遺構との重複も認められないため、明確な所属時期・性格等は不明である。しかし、LⅡb上面での検出であることから、近接する遺構群との関連性が考えられる。よって、中世から近世初期にかけての年代観と考えている。

15号土坑 SK15 (図32, 写真30)

本遺構は、調査区北側や東寄りのH7グリッドに位置する。遺構が構築された周辺は、標高52.5m程の平坦な地形である。重複する遺構はないが、SK20、SD22等と近接している。検出面は、LⅠ直下のLⅥa上面であるが、LⅥa自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。

遺構内堆積土は単一層で、自然堆積の様相を呈する。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部長軸0.9m、短軸0.58m、底面長軸0.56mを測る。周壁は、底面からやや緩やかな立ち上がりとなる。底面は、ほぼ平坦である。検出面から最深部までの深さは12cmを測る。

本遺構からの出土遺物はなく、他遺構との重複も認められないため、明確な所属時期・性格等は不明である。また、近接するSK20と形態・土層の堆積状況等が類似しており、ほぼ同時期の所産と考えられる。

16号土坑 SK16 (図32, 写真30)

本遺構は、調査区南側付近のE40グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は、標高52.3m程の平坦な地形である。検出面はLⅠ直下のLⅡb上面であるが、LⅡb自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。SX1と重複しており、検出状況から本遺構の方が古いと判断した。

遺構内堆積土は単一層で、自然堆積の様相を呈する。平面形は楕円形を呈するが、遺構の西半部

## 第5節 土 坑

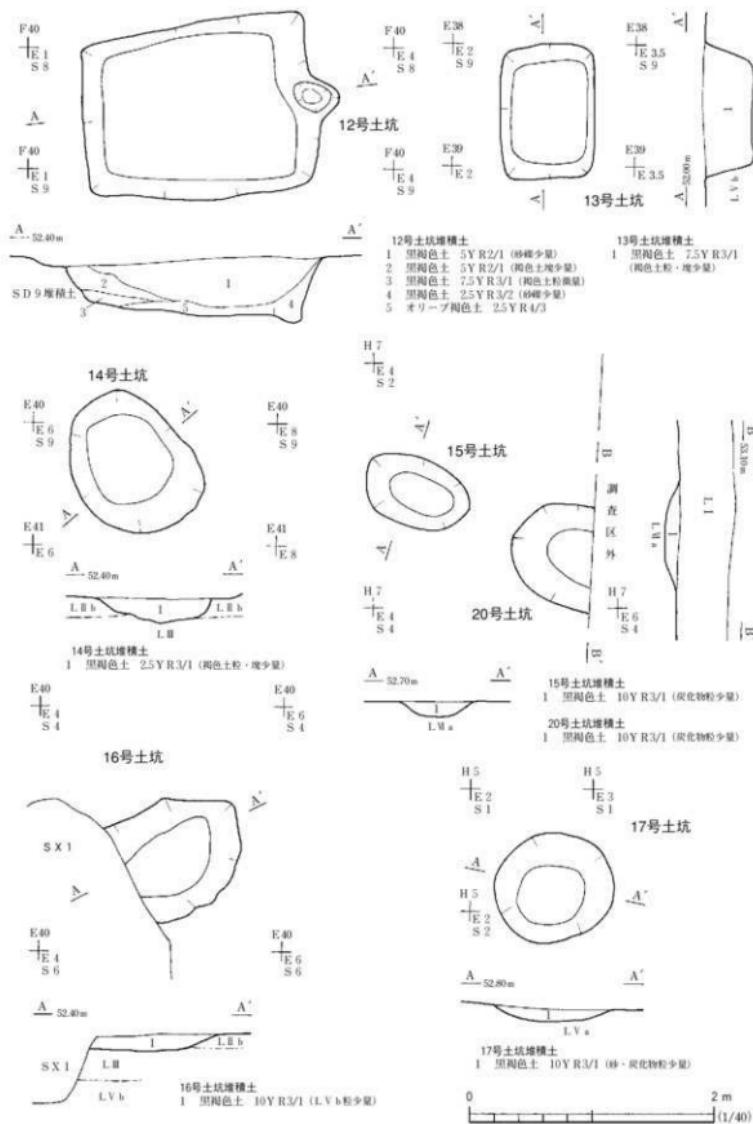


図32 12~17・20号土坑

はSX1に削平されるため遺存しない。遺存する規模は、開口部長軸1.04m、短軸0.96m、底面長軸0.8mを測る。周壁は、底面から緩やかな立ち上がりとなる。底面は、やや凹凸はあるがほぼ平坦であり、検出面から最深部までの深さは14cmを測る。

本遺構からは出土遺物がなく、明確な所属時期・性格等は不明である。しかし、SX1よりは古く、LIIb上面での検出であることから、中世前半頃の年代観と考えている。  
(福村)

#### 17号土坑 SK17 (図32、写真30)

本遺構は調査区北側、H5グリッドに位置し、LVa上面で検出された。SK18と重複し、本遺構が新しい。

堆積土は黒褐色土1層で、自然堆積か人為堆積かは判断できなかった。平面形は不整円形を呈する。現状の壁上端での規模は、直径96cm、検出面からの深さ10cmを測る。底面はほぼ平坦で、周壁の立ち上がりは緩やかである。

本遺構からの出土遺物はなく、時期・性格は不明であるが、重複するSK18の時期から17世紀以降と推測される。

#### 18号土坑 SK18 (図33・36、写真31・48)

本遺構は調査区北側、H5グリッドに位置し、LVa上面で検出された。SA5、SK17・19、GPと重複し、SK17より古く、それ以外より新しい。

堆積土は3層に分けられる。ℓ1は灰黄褐色粘土塊を多量含むことから人為堆積、ℓ3は壁際からの流れ込みが認められることから自然堆積と考えられる。ℓ2は中央が盛り上がるよう堆積していることから人為堆積の可能性が高い。

平面形は不整梢円形を呈する。現状の壁上端での規模は長軸288cm、短軸242cm、検出面からの深さ62cmを測る。底面はほぼ平坦で、底面は粗砂層上面に形成されている。周壁の立ち上がりは、西壁が比較的急である他は緩やかに立ち上がる。

遺物はℓ1から縄文土器3点、瓦質土器2点、陶磁器1点、羽口片3点、鉄滓18点、ℓ3から陶磁器1点が出土した。ℓ1から出土した鉄滓は化学分析によると精練滓であるが(付章5参照)、周壁や底面に被熱痕跡が認められないことから、ℓ1と共に投棄されたものと考えられる。36図9は古伊万里の碗の破片で、17世紀に比定される。36図10は天目茶碗片で、16世紀中頃に比定される。

本遺構は、出土遺物から17世紀頃のものと推測される。性格は不明である。

#### 19号土坑 SK19 (図33、写真31)

本遺構は調査区北側、H5グリッドに位置し、LVa上面で検出された。SK18と重複し、本遺構が古い。

堆積土は黒褐色土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。本遺構の北側はSK18に

## 第5節 土 坑

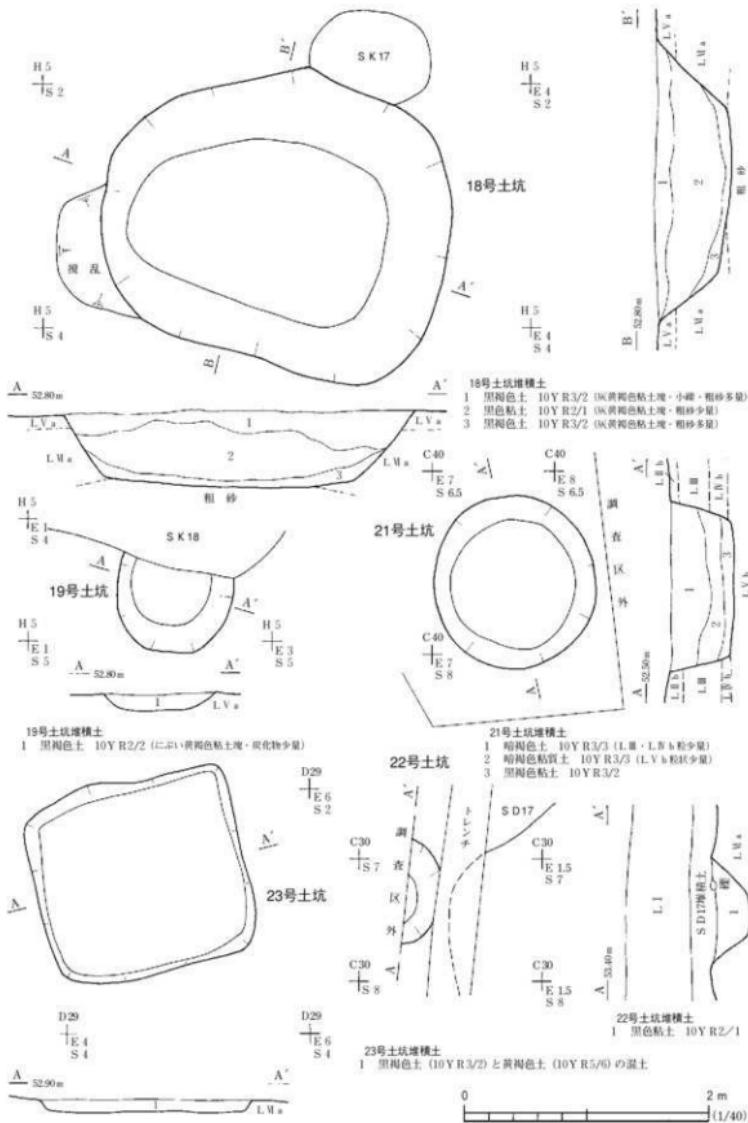


図33 18・19・21~23号土坑

### 第3章 遺構と遺物

より壊されているが、遺存部から推定される平面形は不整円形である。現状の壁上端での規模は、直径96cm、検出面からの深さ12cmを測る。底面はほぼ平坦で、周壁の立ち上がりは比較的緩やかである。

本遺構からの出土遺物はなく、時期・性格は不明であるが、遺構の重複関係から17世紀以前と推測される。

(坂 田)

#### 20号土坑 SK20 (図32、写真31)

本遺構は、調査区北側やや東寄りのH7グリッドに位置する。周辺は、標高52.5m程の平坦な地形に位置する。重複する遺構はないが、SK15、SD22等と近接している。検出面は、L I直下のL VIa上面であるが、L VIa自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。遺構内堆積土は単一層で、自然堆積の様相を呈する。

遺構の平面形は円形を呈するが、東半は調査区外へ延びるため不明である。検出した規模は、開口部径0.84m、底面径0.46mを測る。周壁は、底面から緩やかな立ち上がりとなる。底面はほぼ平坦であり、検出面から最深部までの深さは14cmを測る。

本遺構からの出土遺物はなく、他遺構との重複も認められないため、明確な所属時期・性格等は不明である。また、近接するSK15と形態・土層の堆積状況等が類似しており、ほぼ同時期の所産と考えられる。

(福 村)

#### 21号土坑 SK21 (図33、写真31)

本遺構は調査区南西側、C40グリッドに位置し、L II b上面で検出された。本遺構と重複する遺構はない。

堆積土は3層に分けられる。いずれも壁際からの流れ込みが認められることから、自然堆積と考えられる。平面形は不整円形を呈する。現状の壁上端での規模は、直径142cm、検出面からの深さ52cmを測る。底面はほぼ平坦で、L V b上面に形成されている。周壁の立ち上がりは比較的急である。本遺構の性格は、規模・形態より貯蔵穴と推測される。時期は出土遺物がなく不明である。

#### 22号土坑 SK22 (図33、写真31)

本遺構は調査区南西側、C30グリッドに位置し、SD17底面から検出された。SD17、GPと重複し、SD17より古く、GPより新しい。

堆積土は黒色粘土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。西半部は調査区外にあり、東側はトレチにより一部壊してしまったが、遺存部から推定される平面形は円形である。現状の壁上端での規模は径86cm、検出面からの深さ28cmを測る。底面は平坦で、周壁の立ち上がりは急である。本遺構の出土遺物はなく、時期・性格は不明であるが、遺構の重複関係から、中世～近世頃の可能性が高い。

(坂 田)

## 23号土坑 SK23 (図33, 写真31)

本遺構は、調査区中央付近のD29グリッドに位置する。遺構が構築された周辺は、標高52.75m程の平坦な地形を呈する。重複する遺構はないが、SK24・29、SD31等と近接している。検出面はLⅠ直下のLⅥa上面であるが、LⅥa自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。

遺構内堆積土は単一層で、締まりが強く、人為的に一気に埋め戻された様相を呈する。平面形は隅丸の長方形を呈し、規模は開口部長辺1.74m、短軸1.60m、底面長軸1.60mを測る。周壁は、床面から急な立ち上がりとなる。底面は、やや凹凸はあるがほぼ平坦であり、検出面から最深部までの深さは12cmを測る。

本遺構からは出土遺物がなく、他遺構との重複も認められないため、明確な所属時期・性格等は不明である。しかし、近接する遺構群との関連性が考えられる。よって、中世から近世初期にかけての年代観と考えている。

## 24号土坑 SK24 (図34, 写真31)

本遺構は、調査区中央付近やや西寄りのD29グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は、標高52.8m程の平坦な地形である。検出面はLⅠ直下のLⅥa上面であるが、LⅥa自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。SK29およびSD31と重複しており、検出状況から共に本遺構の方が新しい。

遺構内堆積土は、色調および混入物から2層に分層できた。共に自然堆積と考えられる。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部長軸1.42m、短軸1.26m、底面長軸1.06mを測る。周壁は、底面から緩やかな立ち上がりとなる。底面は、やや凹凸はあるがほぼ平坦であり、検出面から最深部までの深さは22cmを測る。

本遺構からは出土遺物がなく、明確な所属時期・性格等は不明である。しかし、近接する遺構群との関連や他遺構との重複関係から、近世初期頃の年代観と考えている。

## 25号土坑 SK25 (図34・36, 写真32・48)

本遺構は、調査区中央付近やや西寄りのC・D29グリッドに位置する。遺構が構築された周辺は、標高52.8m程の平坦な地形である。重複する遺構はないが、SK28等と近接している。検出面はLⅠ直下のLⅥa上面であるが、LⅥa自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。

遺構内堆積土は、色調および混入物から4層に分層できた。上層の $\ell$ 1～3は黒褐色系土で、LⅥa粒・炭化物を含むことから人為的堆積土、 $\ell$ 4は底面にのみ認められ、敷いている状況から人為的構築土と考えられる。

平面形は、西半部が調査区外へ延びるため不明であるが、検出部分の状況から橢円形を呈すると思われる。また、北側は搅乱に切られるため遺存しない。遺存する規模は、開口部長軸2.1m、短軸1.1mを測る。調査区境に落ち込みが続くため、底面は確認できない。周壁は、緩やかな立ち上がりとなる。検出面から最深部までの深さは35cmを測る。

本遺構からは、土製品が1点出土している。36図11は土鍤である。 $\ell$  1での出土であることから、他からの流れ込みによるものと推測される。

本遺構は、他遺構との重複も認められないため、明確な所属時期・性格等は不明である。しかし、近接する遺構群との関連から、中世から近世初期頃の年代観と考えている。

#### 26号土坑 SK26 (図34、写真32)

本遺構は、調査区中央付近や西寄りのD・E29グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は、標高52.7m程の平坦な地形である。検出面はL I直下のL VII a上面であるが、L VII a自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。SD30と重複関係にあり、検出状況から、本遺構の方が新しい。

遺構内堆積土は、色調および混入物から3層に分層できた。上層の $\ell$  1・2は小礫・L VII a粒を含む黒褐色系の人為的堆積土である。 $\ell$  3は底面にのみ認められ、敷いている状況から人為的構築土と考えられる。

平面形は橢円形を呈し、規模は開口部長軸2.04m、短軸1.1m、底面径0.76m程を測る。周壁は、開口部付近がやや開くが、下位は急角度に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、検出面から最深部までの深さは45cmを測る。

本遺構からは出土遺物がなく、明確な所属時期は不明である。しかし、近接する遺構群との関連から、中世から近世初期頃の年代観と考えている。性格としては、底面全体に粘土を敷いて水が抜けないような工夫を施していることから、「貯水坑」等が考えられる。

#### 27号土坑 SK27 (図34、写真32)

本遺構は、調査区中央付近や西寄りのD30・31グリッドに位置する。遺構が構築された周辺は、標高52.65m程の平坦な地形である。重複する遺構はない。検出面はL I直下のL VII a上面であるが、L VII a自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。

遺構内堆積土は、色調および混入物から2層に分層できた。上層の $\ell$  1は黒褐色土と黄褐色土の混土で、炭化物粒が含まれている。基本的には、いずれも人為的堆積土と判断され、本土坑の機能時期に下層の $\ell$  2が埋没し、その後上層部の開口部分を人為的に埋め戻した( $\ell$  1)ものと考えられる。

遺構の平面形は、西半部は調査区外へ延びるため不明であるが、検出部分から橢円形を呈すると思われる。検出した規模は、開口部長軸2.45m、短軸1.9m、底面長軸1.65mを測る。周壁は、底面

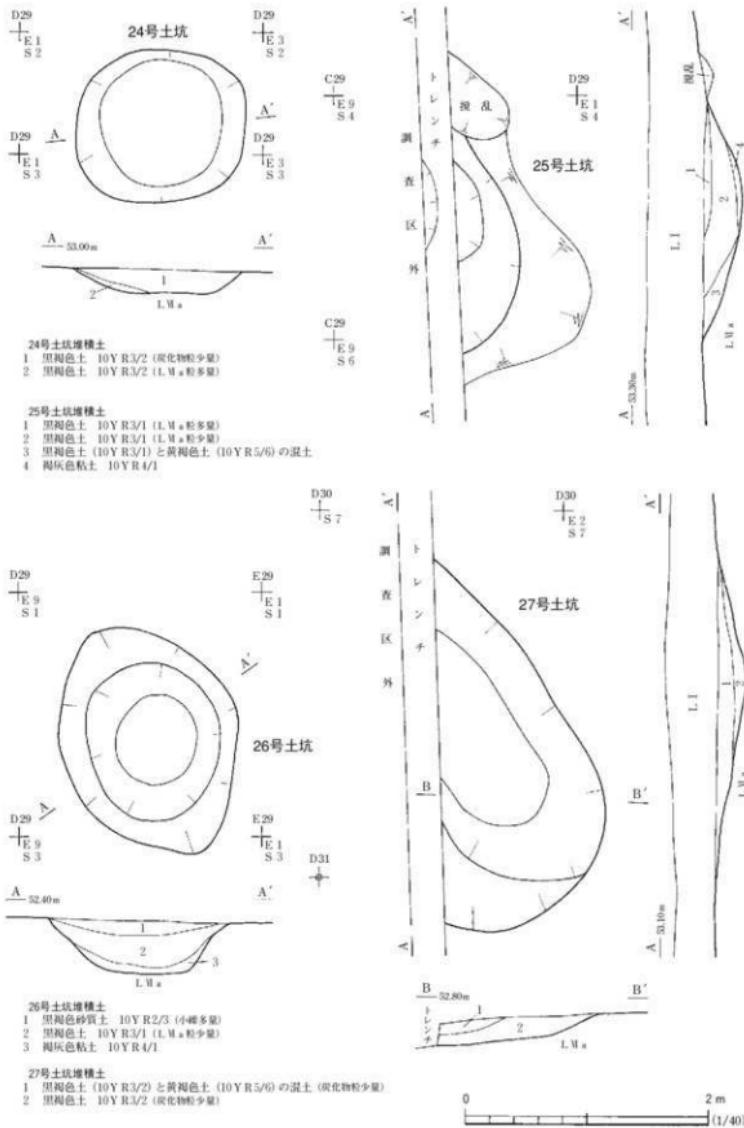


図34 24~27号土坑

から緩やかな立ち上がりとなり、底面はやや凹凸はあるがほぼ平坦である。検出面から最深部までの深さは22cmを測る。

本遺構からは、製鉄関連に伴う炉壁が1点出土している。小片であるため図示できなかったが、 $\ell$  1での出土であることから、他からの流れ込みによるものと思われる。

本遺構は、他遺構との重複も認められないため、明確な所属時期・性格等は不明である。しかし、近接する遺構群との関連から、中世から近世初期頃の年代観と考えている。

#### 28号土坑 SK28 (図35, 写真32)

本遺構は、調査区中央付近や西寄りのC・D29グリッドに位置する。遺構が構築された周辺は、標高52.8m程の平坦な地形である。重複する遺構はないが、SK25等と近接している。検出面はL I直下のL VI a上面であるが、L VI a自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。

遺構内堆積土は、色調および混入物から2層に分層できた。 $\ell$  1は炭化物を含む黒褐色土で、人为的埋土と判断した。 $\ell$  2はL VI a塊を含む黒褐色土で、壁際からの流入が認められるため自然堆積と考えられる。

遺構の平面形は、西半部は調査区外へ延びるため不明であるが、検出部分から梢円形を呈すると推定される。検出した規模は、開口部長軸1.4m、短軸0.75m、底面長軸0.54mを測る。周壁は、底面から緩やかな立ち上がりとなる。検出面から最深部までの深さは20cmを測る。

本遺構と重複する遺構や伴出する遺物がないため、明確な所属時期・性格等は不明である。しかし、近接する遺構群との関連から、中世から近世初期頃の年代観と考えている。

#### 29号土坑 SK29 (図35, 写真32)

本遺構は、調査区中央付近や西寄りのD29グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は、標高52.8m程の平坦な地形である。検出面はL I直下のL VI a上面であるが、L VI a自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。SK24、SD31と重複関係にあり、検出状況からSK24より古いが、SD31よりは新しい。

遺構内堆積土は、色調および混入物から2層に分層できた。いずれも黒褐色土で、 $\ell$  2にはL VI a塊が多く含まれている。基本的には人为的堆積土と判断した。

遺構の平面形は円形を呈するが、南側はSK24に削平されている。規模は開口部径1.65m、底面径1.2mを測る。周壁は、底面から緩やかな立ち上がりとなる。底面はやや凹凸はあるがほぼ平坦であり、検出面から最深部までの深さは20cmを測る。

本遺構からは出土遺物がなく、明確な所属時期・性格等は不明である。しかし、近接する遺構群との関連や他遺構との重複関係から、中世から近世初期頃の年代観と考えている。

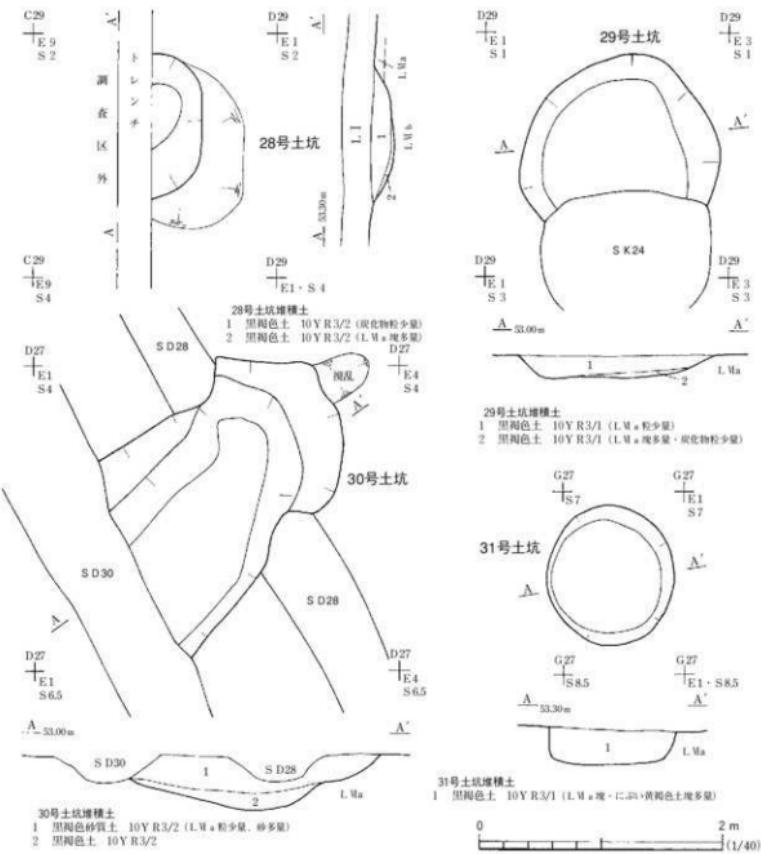


図35 28~31号土坑

## 30号土坑 SK30 (図35, 写真32)

本遺構は、調査区中央付近やや西寄りのD27グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は、標高52.8m程の平坦な地形である。検出面はL.I直下のL.VI a上面であるが、L.VI a自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。S.D28・30と重複しており、検出状況から、ともに本遺構の方が古い。遺構内堆積土は、色調および混入物から2層に分層できた。いずれも壁際からの流れ込みが認められることから、自然堆積と考えられる。

遺構の平面形は楕円形を呈するが、西半部はS.D30に、東側の一部はS.D28および搅乱により削

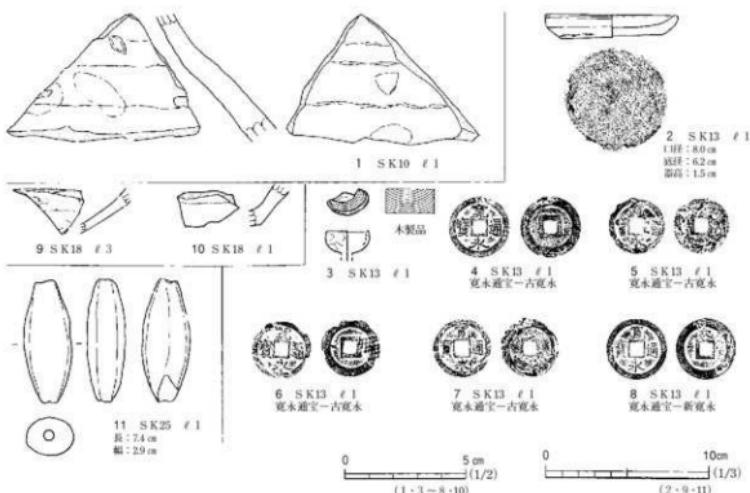


図36 土坑出土遺物

平を受けている。遺存する規模は、開口部長軸2.05m、底面径1.65mを測る。周壁は、底面から緩やかな立ち上がりとなる。底面はやや凹凸はあるがほぼ平坦であり、検出面から最深部までの深さは44cmを測る。

本遺構からは出土遺物がなく、明確な所属時期・性格等は不明である。しかし、近接する遺構群との関連や他遺構との重複関係から、中世の年代観と考えている。  
(福 村)

### 31号土坑 SK31(図35、写真32)

本遺構は調査区中央、G27グリッドに位置し、LVIa上面で検出された。本遺構と重複する遺構はない。

堆積土は黒褐色土1層で、LVIa塊とにびい黄褐色土塊を多量含むことから人為堆積と考えられる。平面形は不整円形を呈する。現状の壁上端での規模は、直径114cm、検出面からの深さは30cmを測る。底面は平坦で、周壁はほぼ直立する。

本遺構からの出土遺物はなく、時期・性格は不明である。

(坂 田)

## 第6節 井 戸 跡

今回の2次調査で検出された井戸跡は4基で、1次調査分を加えると計7基となる。2次調査区で検出された井戸跡は、溝跡や建物跡等と隣接して存在するものが多く、屋敷跡や館跡の施設を構

成する一連の遺構群と考えられる。詳細な時期・性格等については、出土遺物が僅かなため不明なものが多いが、大半は中世～近世頃に帰属するものと判断される。なお、今回の調査で使用した遺構番号は、1次調査からの継続である。

#### 1号井戸跡 S E 1 (図37、写真33・49)

本遺構は調査北側、G 3 グリッドに位置し、L VI b 上面で検出された。重複する遺構はない。1次調査で西半部の、2次調査で東半部の調査を行ったが、併せてここで報告する。

本遺構は掘形と井戸枠で構成される。掘形平面形は不整円形を呈し、現状の壁上端での規模は、直径147cm、検出面からの深さ110cmを測る。底面はほぼ平坦で、L VII中に形成されている。周壁の立ち上がりは比較的急で、段状に立ち上がる。井戸枠は四隅に径9～11cmの杭を配し、その間に径2～3cmの竹をたて並べたもので、掘形底面の中央に設置されている。平面形は不整四角形を呈し、西辺の方向はN 6°Eを示す。規模は現状の上端で61～78cm、下端で50～60cmを測る。竹は東辺で19本並べられ、横桟で倒れないように押さえられていたと推定される。横桟は北辺に一部遺存し、底面から62cm上に位置する。

堆積土は4層に分けられる。 $\ell$  1・2は壁際からの流れ込みが認められることから自然堆積と考えられる。 $\ell$  3は人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。 $\ell$  4は井戸枠外側の埋土と考えられ、長さ10～40cm程の礫が多数含まれる。

遺物は $\ell$  1から縄文土器2点が出土したが、細片のため図示していない。37図1～5は井戸枠に使用された杭(1・3)と竹(4・5)で、いずれも上部は腐食している。杭は太い丸太材が用いられ、先端がナタ状の工具により2方向(1・2)、もしくは3方向(3)から加工されている。また、1・2について樹種同定したところ、共にコナラ節であることがわかった(付章4参照)。

本遺構は丸太杭と竹を横桟で組む井戸枠構造で、掘形埋土には多数の礫が含まれる。時期は出土遺物が少なく判然としないが、南側に隣接するS E 2が同じ構造であることから、同時期の18世紀頃の可能性が高い。

#### 4号井戸跡 S E 4 (図38、写真33)

本遺構は調査区南西側、F40グリッドに位置し、L III上面で検出された。S X 1と重複し、本遺構が古い。

本遺構の南東側はS X 1により一部壊されるが、遺存部から推定される平面形は不整円形である。現状の壁上端での規模は、直径226cm、検出面からの深さ140cmを測る。周壁の立ち上がりは急で、東・西壁は崩落により一部オーバーハングして立ち上がる。底面はほぼ平坦で、砂礫層中に形成されている。底面南西部には梢円形を呈する小穴が掘り込まれ、規模は長軸66cm、短軸42cm、底面からの深さ29cmを測る。小穴底面は湧水点であり、調査時には絶えず湧水があった。

堆積土は8層に分けられる。 $\ell$  1・7は人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。 $\ell$  2は層上

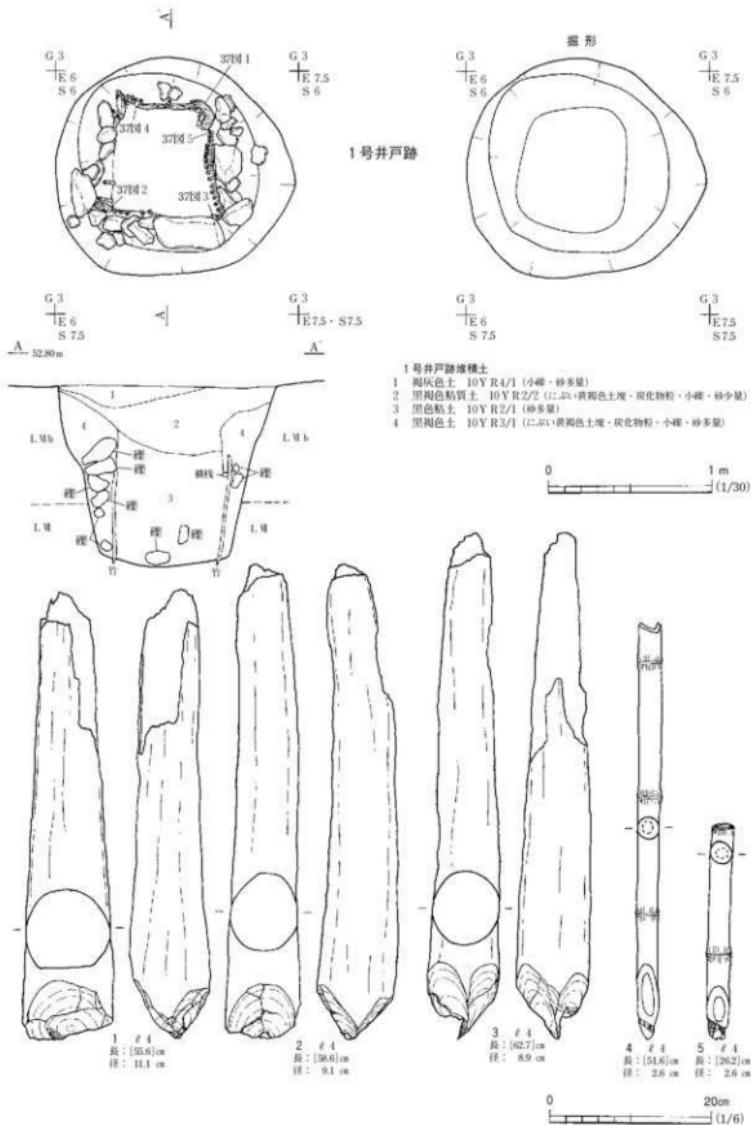


図37 1号井戸跡と出土遺物

面が一定しないことから人為堆積と考えられる。 $\ell$  3～6・8はLⅢ・Vb塊や黒褐色粘土塊を多量含むが、これは周壁の崩落に起因する堆積物と考えられることから、 $\ell$  3～8はいずれも自然堆積と判断した。遺物は $\ell$  1から縄文土器1点が出土したが、細片のため図示していない。

本遺構は不整円形を呈する素掘りの井戸跡である。出土遺物が少なく時期は判然としないが、重複するSX1の時期から、13世紀以前の可能性が高い。(坂田)

#### 5号井戸跡 S E 5 (図38、写真33)

本井戸跡は調査区南側やや東寄りのG39グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は、標高52.2m程の平坦な地形である。検出面はLⅠ直下のLⅡb上面であるが、LⅡb自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。重複する遺構はない。

遺構内堆積土は、色調および混入物から3層に分層できた。基本的には、上層( $\ell$  1～2)が自然堆積土、下層( $\ell$  3)が人為的堆積土と判断され、本井戸の機能時期に $\ell$  3を人為的に埋め戻し、その後自然に埋没したものと考えられる。

遺構の平面形は楕円形を呈し、規模は開口部長軸1.95m、短軸1.5m、底面長軸0.9mを測る。周壁は開口部付近がやや開くが下位は垂直気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、検出面から最深部までの深さは95cmである。

本遺構からは出土遺物がなく、他遺構との重複も認められないため、明確な所属時期は不明である。しかし、隣接する遺構群との関連性が窺えることから、中世から近世初期にかけての年代観を考えている。

#### 6号井戸跡 S E 6 (図38、写真33)

本井戸跡は調査区南側のG37グリッドに位置する。周囲は標高52.1m程の平坦な地形に位置する。検出面はLⅠ直下のLⅡb上面であるが、LⅡb自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。重複する遺構はない。

遺構内堆積土は、色調および混入物から7層に分層できた。基本的には、上層( $\ell$  1)が人為的埋土、下層( $\ell$  2～7)が人為的堆積土と判断される。本遺構の機能時期に $\ell$  2～7が自然堆積し、その後開口部分を人為的に埋め戻した( $\ell$  1)ものと考えられる。

本遺構は、南側が旧用水路に削平されているが、平面形は楕円形を呈する。遺存する規模は開口部長軸2.4m、短軸2.2m、底面径0.65mを測る。周壁は開口部付近がやや開くが、下位は垂直気味に立ち上がる。底面は、やや凹凸があるもののほぼ平坦で、検出面から最深部までの深さは140cmである。

本遺構からは出土遺物がなく、他遺構との重複も認められないため、明確な所属時期は不明である。しかし、隣接する遺構群との関連性が窺えることから、中世から近世初期にかけての年代観を考えている。

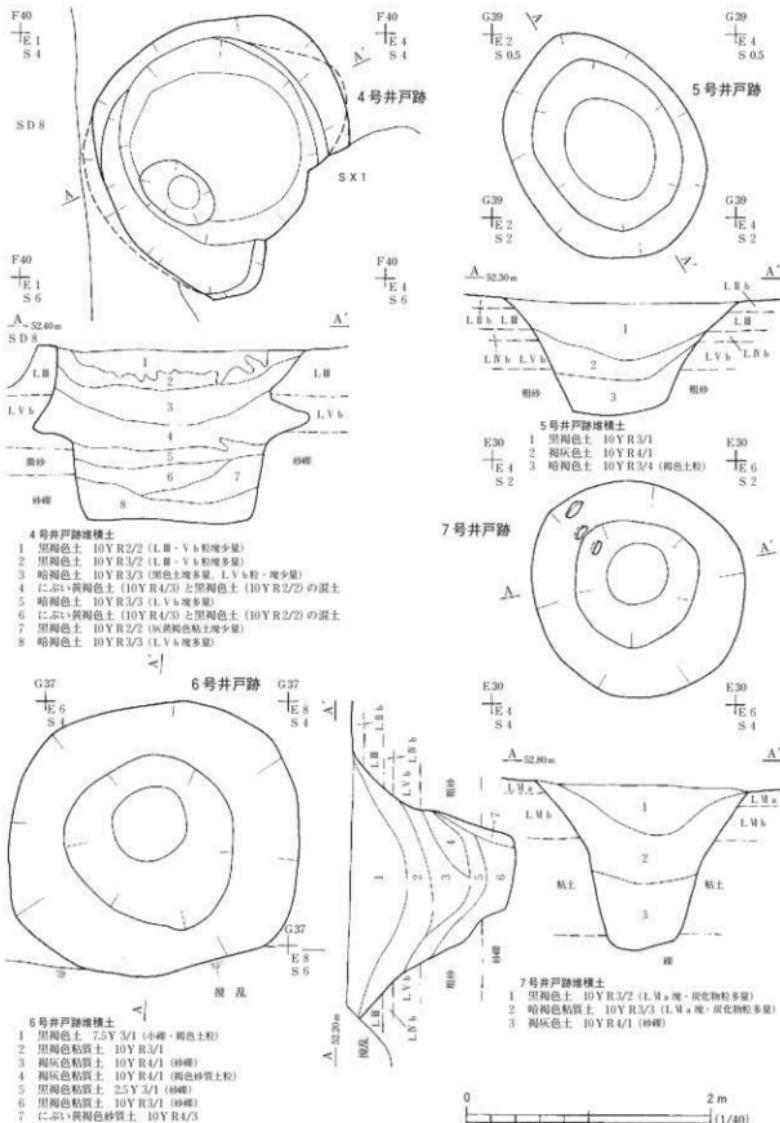


図38 4～7号井戸跡

## 7号井戸跡 S E 7 (図38, 写真33)

本井戸跡は調査区中央付近やや西寄りのE30グリッドに位置する。周囲は標高52.5m程の平坦な地形に位置する。検出面は、L I直下のL VI a上面であるが、L VI a自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。重複する遺構はない。

遺構内堆積土は、色調および混入物から3層に分層できた。 $\ell$  1・2はL VI a塊・炭化物粒を多く含み、人為堆積の様相を示す。 $\ell$  3は均質な褐色系の粘土である。本土坑の機能時期に下層の $\ell$  3が埋没し、その後上層部の開口部分を人為的に埋め戻した( $\ell$  1・2)ものと考えられる。

遺構の平面形は楕円形を呈し、規模は開口部長軸1.9m、短軸1.7m、底面径0.55m程を測る。周壁は開口部付近がやや開くが、下位は垂直気味に立ち上がる。底面はやや凹凸があるが平坦で、検出面から最深部までの深さは140cmである。また、北西側の壁には昇降用の3段の足場が認められ、本遺構の掘り込み時に設けられたものと考えられる。

本遺構からは出土遺物がなく、他遺構との重複も認められないため、明確な所属時期は不明である。しかし、隣接する遺構群との関連性を窺えることから、中世から近世初期にかけての年代観と考えている。

(福 村)

## 第7節 溝 跡

今回の2次調査で検出された溝跡は、1次調査区から連続する溝跡も含めると計33条である。これらの溝跡は、著しく削平されたものや調査区外へ延びるもののが大半を占め、全体の形状や規模を明確に把握できたものは少ない。自然流路跡と考えられるものを除くと、人工的な区画溝もしくは排水溝と考えられるものは30条ある。検出された溝跡の多くは出土遺物が乏しく、年代の特定が困難であるが、1次調査区から連続する2・3号溝跡は通路施設を伴う圍郭堀であることが確認され、堀内部に中世～近世初期にかけての館跡が存在したと考えられる。

報告にあたっては、隣接するものや関連性を窺えるものはまとめて掲載し、平面図と土層断面図の縮尺率は便宜的に変えている。遺構番号は1次調査からの継続である。

## 1号溝跡 S D 1 (図39～42, 写真34・35・51・52)

本遺構は、1次調査区から連続する溝跡で、調査区北側のE 2～4, F 2～5, G・H 5・6グリッドに位置する。遺構が構築された周辺は、標高52.6m程の平坦な地形である。遺構の西半部については1次調査で、東半部については2次調査で調査を実施した。1次調査部分に関しては、すでに『常磐自動車道遺跡調査報告39』で報告しているが、1次調査と2次調査の成果を併せてここに報告する。

検出面は、L I直下のL VI a上面であるが、L VI a自体が削平を受けているため、本来の掘り込

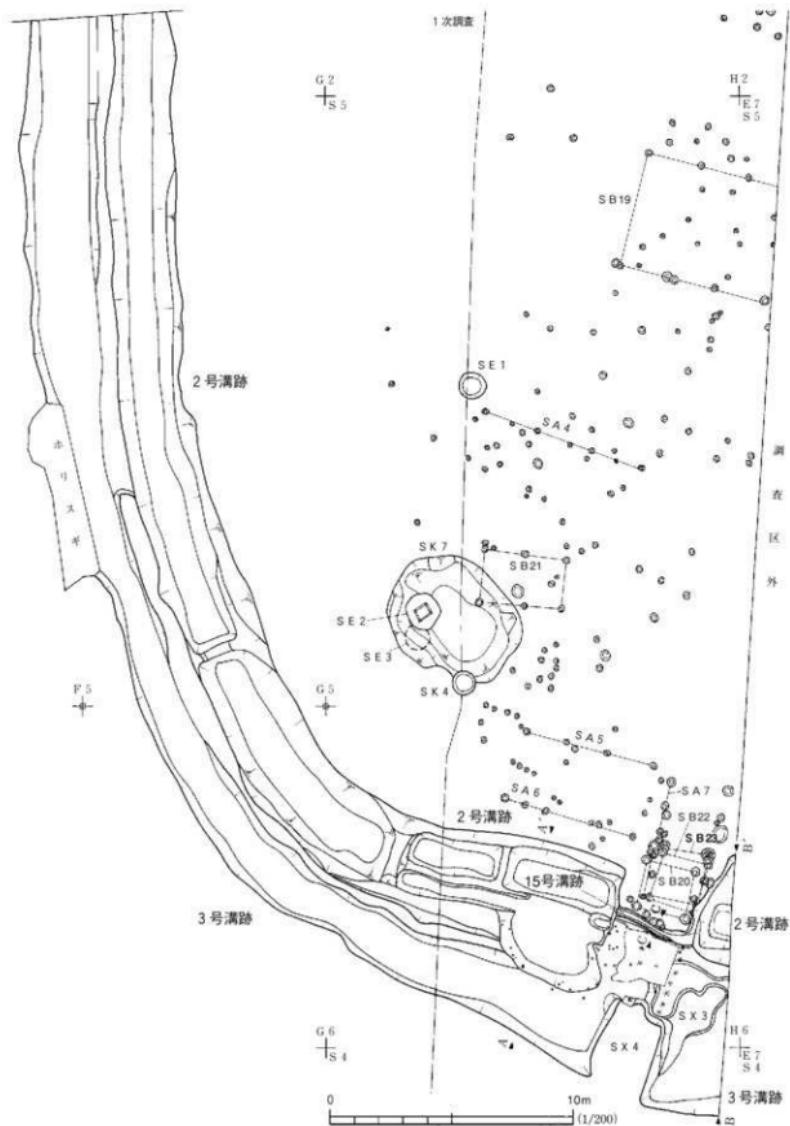


図39 1～3・15号溝跡(1)

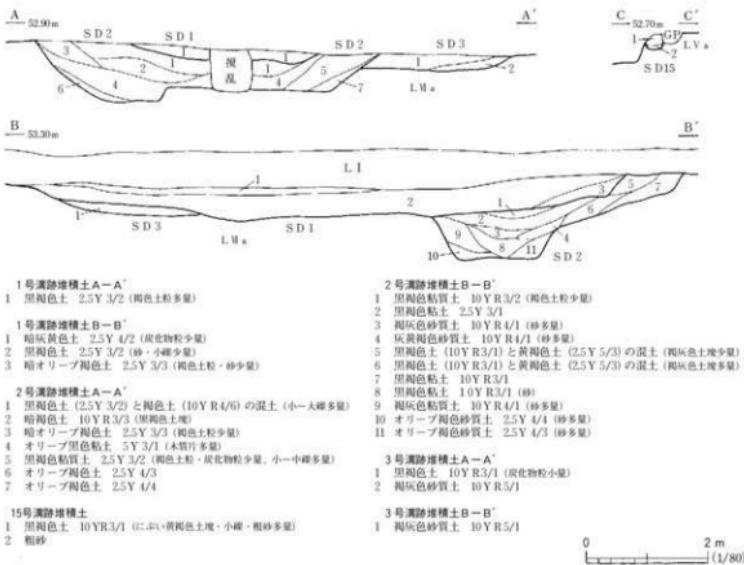


図40 1～3・15号溝跡(2)

み面はやや上位であったと考えられる。また、本遺構はSD2・3とともに掘り下げてしまったため、調査区境東壁と土層観察のために残した1カ所の柱で確認したのみである。SD2・3と重複関係にあるが、検出状況から本遺構の方が新しい。

遺構内堆積土は、大きく3層に分層される。いずれもレンズ状に堆積することから、自然堆積土と判断した。本溝跡は、北側調査区外および東側調査区外まで延伸するため、全体の規模等は不明である。また、H5・6グリッド付近で約2.5m途切れ、東と西に分かれる。調査区内で検出できた推定全長は、西側が50.5m、東側が2.5mを測り、南に向かうにつれて緩やかに東側に向かって湾曲する。規模は、1次調査区では幅5.3～7.4m、深さ22～45cmを測るが、2次調査区B-B'ラインで溝幅3.1m、深さ20cmを測り、東側調査区境(A-A')で、溝幅9.8m、深さ45cmを測る。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い皿状を呈する。溝跡底面および周辺からはピット等は検出されなかった。

遺物は、須恵器・陶磁器・瓦質土器・鐵滓類など計28点が出土した。この内、比較的遺存状態が良い須恵器1点、陶磁器14点、瓦質土器4点について、図41・42に掲載した。遺物の殆どをE1からの出土としているが、調査時に本溝跡と下層のSD2との明確な境界を抽出できなかった反省があり、遺物が混入している点は留意しなければならない。

41図1は、須恵器の甕または壺の胴部片であり、アテ具痕をナデ消している。同図2は古伊万里

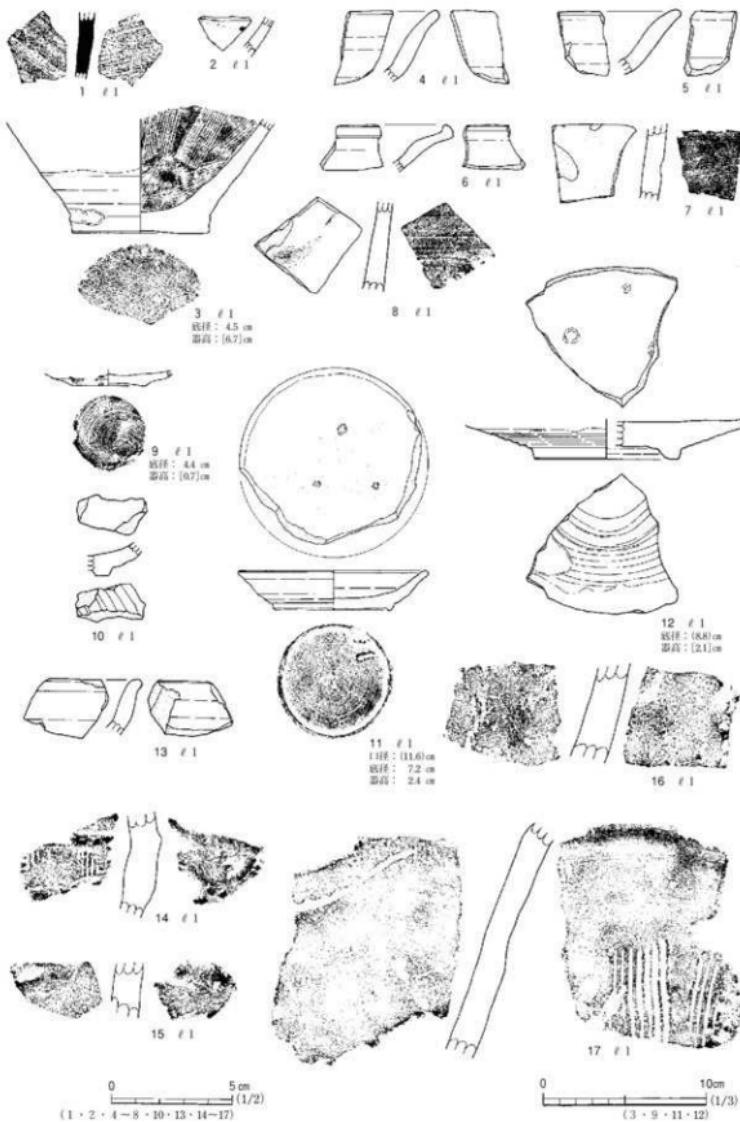


図41 1号溝跡出土遺物(1)

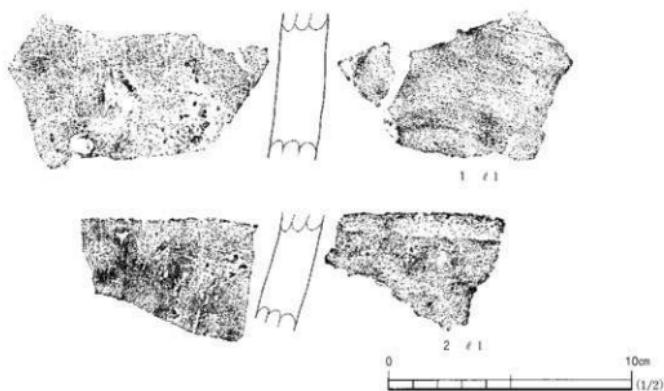


図42 1号溝跡出土遺物(2)

の椀の破片であり、時期は17世紀代と推測される。同図3は陶器製擂鉢である。比較的細かい鉢目が、体部上半まで入るものと思われる。概ね17世紀代と推測される。同図4・5はともに、古瀬戸洗皿の口縁部資料である。詳細に時期区分するのは困難であるが、瀬戸様式編年でいう中期様式から後期様式の前半段階であり、14世紀から15世紀前葉の所産と考えられる。同図6は瀬戸大窯期の折縁皿の口縁部資料である。大窯4期頃と想定され、16世紀末葉から17世紀初頭にかけての年代が与えられる。同図7は古瀬戸の祖母懐茶壺片、同図8は茶壺の胴部片ある。ともに小片であるが、外面には鉄釉が認められる。後期様式段階のものと推測され、14世紀後葉から15世紀前葉の所産と考えられる。同図9は古瀬戸・小皿の底部資料である。外面には鉄釉が認められ、内面は肌理細かく滑らかであることから、硯として転用された可能性がある。後期様式Ⅱ期～Ⅲ期であり、15世紀前葉から中頃にかけての所産と考えられる。同図10・11は、瀬戸美濃産の鉄絵皿である。瀬戸様式編年でいう連房式窯段階の志野丸皿である。10は小片のため不明であるが、11は登窯Ⅰ段階の中頃に位置付けられ、17世紀中頃の年代が与えられる。同図12は、大胆と考えられる底部付近の資料である。産地は不明であるが、外面の一部と内面には釉薬が施してあり、近世陶磁器の可能性がある。同図13～15・17は瓦質土器である。その特徴から、全て在地（東北）産のものと考えられる。全て小破片であるため、詳細な時期区分は困難である。13は小型壺の口縁部資料であり、概ね15世紀から16世紀にかけてのものと思われる。14・15は色調から同一個体と思われる。風炉または火鉢の胴部資料であり、15の外面には雷文が施される。時期は15世紀代と考えられる。17は擂鉢である。口縁部分が一部欠損しているが、遺存状況から口縁部が強く外に張り出す形態であると思われ、内面には太い鉢目が体部上半まで直線に入る。その特徴から、15世紀代のものと考えられる。

同図16および42図1・2は、瓷器系の甕または壺の胴部片である。ともに器厚があり、内外面と

もに赤褐色系の色調を呈し、酸火塗焼成によるものと思われる。外面には粗い鉢削痕、内面には粗い横ナデ痕が観察できる。産地は特定できないが在地（東北）産の可能性が高く、13世紀から14世紀代の所産と推測される。

本溝跡は、全体の規模・形状等は不明であるが、緩やかに湾曲しながら北側および東側に向かう溝跡と考えられる。囲郭堀である下層の S D 2 は、堆積土が人為埋土の様相がみられ、埋まりきらずに凹字状に窪んだ範囲で本溝跡が機能していたと考えられる。明治22年頃に作成された地籍図には、形状から本溝跡と想定される水路の存在が確認できる。堆積土中の陶磁器類は、その特徴などから下層の S D 2 から抽出されたものや、内側に位置する施設からの流れ込みと推測される。所属時期はおおよそ近世以降の所産と考えている。

## 2号溝跡 S D 2 (図39・40・43~47、写真34・35・53~56)

本遺構は、1次調査区から連続する溝跡である。調査区北側 F 2 ~ 5, G ・ H 5 ・ 6 グリッドに位置し、周辺は標高52.6m程の平坦な地形である。遺構の西半部を1次調査、東半部を2次調査で実施した。1次調査部分に関しては、すでに『常磐自動車道遺跡調査報告39』で報告しているが、1次調査と2次調査の成果をまとめて報告する。検出面は L I 直下の L VI a 上面であるが、L VI a 自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。S D 1 ・ 3 と重複関係にあるが、検出状況から前者よりは古く、後者よりは新しい。

遺構内堆積土は、東側部（A-A'）と西側部（B-B'）でそれぞれ分層し、合わせて18層に分層した。基本的に、上層では黒褐色と褐色・黄褐色土の混土が多く、人為的埋土と判断される。下層では比較的粘性が強く、自然堆積の様相を示し、砂粒等を主体とする流水層が少ないとから、池に近いような帶水の状態であることを推測させる。また、クルミ等の堅実殻も④から相当量出土している。

また、南側に張り出す H 5 グリッド付近では、多量の礫や木材を中心とした、投棄行為による堆積層が認められ、その様相を図43に示した。角礫や円礫を含む15~50cmほどの礫や、木杭を含む木材等の一括廃棄と考えられることから、区画内部からの廃棄行為に起因する可能性が高いと考えられる。

溝幅は、確認面の上端で2.4~5.6mを測り、南側に張り出す G ・ H 5 ・ 6 グリッド付近が最も広い。溝全体の平面形は、南に向かうにつれて緩やかに東側に湾曲し、溝の外端同士を結んだ距離は、全長53.5mを測る。溝底は、北半部分がほぼ平坦で、断面形は逆台形状を呈するが、南半部分は、堀障子で仕切られた形態をとっており、最も南側に位置する部分では、堀障子の他に小溝や膨らみをもつ平坦面があり、複雑な構造になっている。堀障子の構築方法を観察すると、遺構検出面から0.7mの深さまで箱築研状に掘り下げ、溝の両切岸部と溝底の部分に平坦面を残し、平坦面に挟まれた両側にそれぞれ独立した長方形状を呈する土坑状の掘り込みを連続させている。このため、土坑状の掘り込み同士を仕切る障壁頂部は、ほぼ一定の高さとなっている。

第7節 溝 路

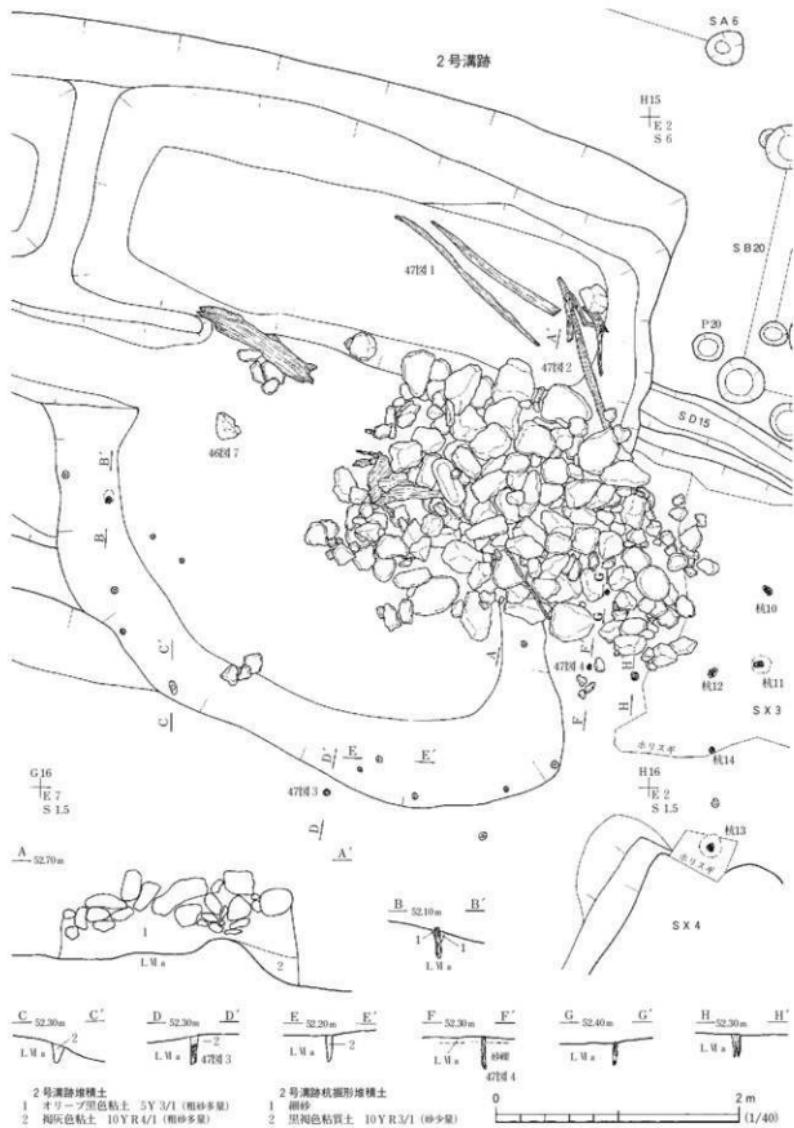


図43 2号溝跡

また、南側に張り出すH5・6グリッド付近で確認された通路地帯の溝底（SX3）は、SD3の土橋部分（SX4）に連続するような形で一段高く掘り残されている。この土橋状の高まりは、構築当初から通路機能を持っていたことを示している。

溝跡の確認面から、底面までの深さは0.6～1.1mを測り、北へ向かうにつれて徐々に浅くなる。底面幅は0.7～1.8mの規模があり、溝底から区画内部に向かう切岸は45～50°の角度で立ち上がる。

掘り残された障壁は、上面幅30～38cm、底面幅60～80cmの規模があり、障壁の高さは土坑状の窪みの深さと同じくなるため、25～30cm程のものが多い。

また、溝跡内からは小穴を多数検出した。木杭を含む直径10～15cmほどの小穴が、南側の張り出し部分を巡るように検出されているが、性格・用途については不明である。

遺物は、土師器・陶磁器・瓦質土器・石製品・木製品・鉄滓類など計55点が出土した。この内、比較的遺存状態が良い土師器1点、陶磁器12点、瓦質土器6点、羽口片1点、石製品類7点、木製品4点について図44～47に掲載した。44図1は土師器の杯である。外面にロクロ成形、内面にはヘラミガキの後黒色処理が施してあり、9世紀代に比定できる。同図2・3は古伊万里の楕の破片であり、時期は17世紀代と推測される。3は断面に漆の付着がみられ、漆接して溶着した後再利用していたと推測される。同図4は、かわらけである。ロクロ成形であるが、底部調整が摩滅のため判然としない。

同図5～10は瓦質土器である。その特徴から、全て在地（東北）産のものと考えられる。5・7は、擂鉢の底部資料である。ともに摩滅が著しいが、外面には横位の箈削痕が認められ、また5の内面には、比較的太い卸目が確認できる。ともに概ね15世紀から16世紀代の所産と考えられる。6は風炉または火鉢の口縁部資料であり、14世紀後葉から15世紀前葉の年代が与えられる。8は風炉または火鉢の底部付近であり、内面には数条の沈線が円形に巡る形状と推測され、その特徴は15世紀代に多いものである。9は小型壺の胴部付近である。緩やかに屈曲することから肩部付近と推測され、外表面は焼成良好で光沢が認められる。概ね15世紀から16世紀前葉の所産と考えられる。10は小型壺の口縁部資料であり、15～16世紀にかけてのものと考えられる。

同図11は常滑産の壺の胴部資料と考えられる。外面には成形時の押印文が認められ、内面にも調整痕が観察できる。同図12は古瀬戸・平楕である。詳細に時期区分するのは困難であるが、瀬戸様式編年でいう中期様式から後期様式前半期のものと考えられ、14世紀後葉から15世紀前葉にかけての年代が与えられる。同図13・14は、瀬戸美濃産の鉄絵皿である。連房式窓段階の志野丸皿であり、14は小片のため不明であるが、13は登窓1段階の中頃に位置付けられ、17世紀中頃の所産と考えられる。

44図15および45図1～4は、壺器系の壺または壺の胴部片である。ともに器厚があり、内外面ともに赤褐色系の色調を呈し、酸火塗焼成によるものと考えられる。外面には粗い箈削痕が観察できる。また内面に煤が付着するもの（45図1・3・4）も見受けられる。これらの陶器片は、産地は特定できないが在地（東北）産である可能性が高く、13世紀から14世紀代の年代が考えられる。同

第7節 溝 路

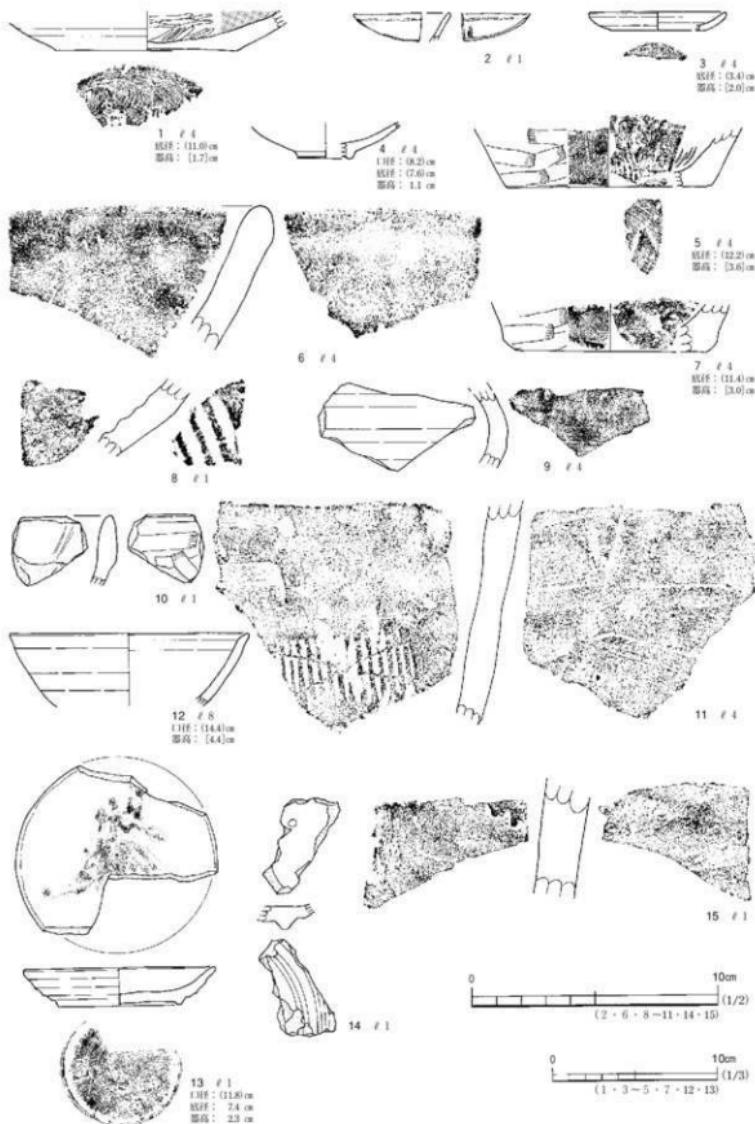


図44 2号溝跡出土遺物(1)

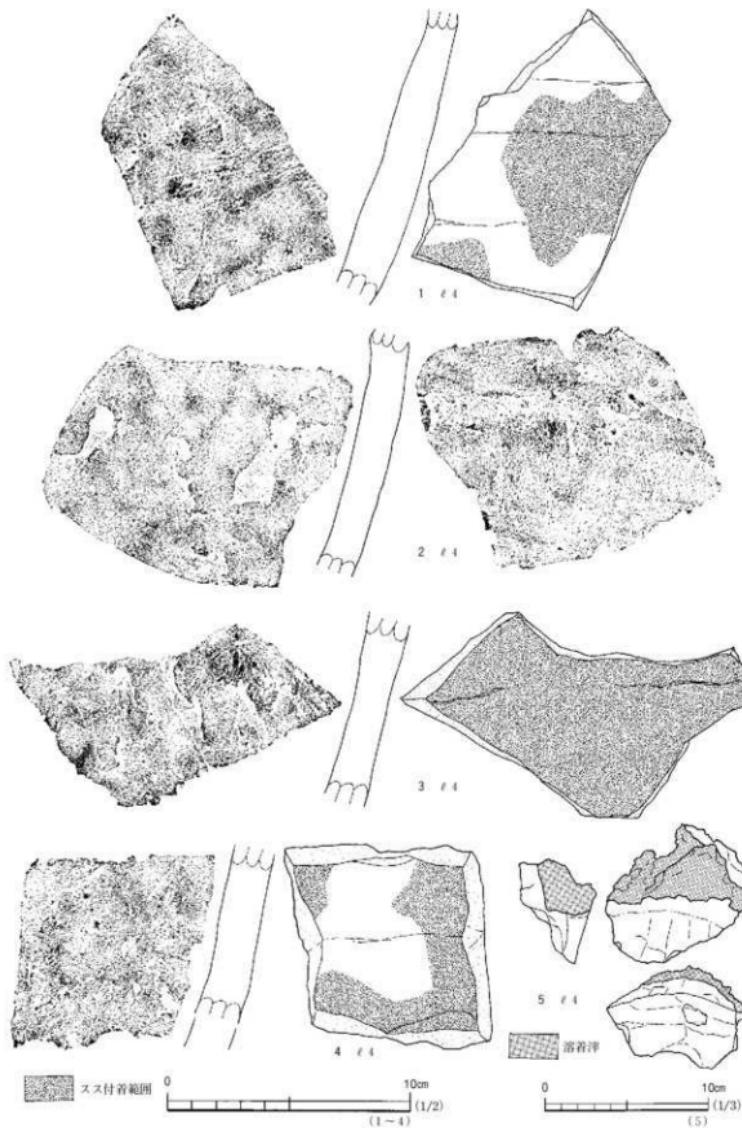


図45 2号溝跡出土遺物(2)

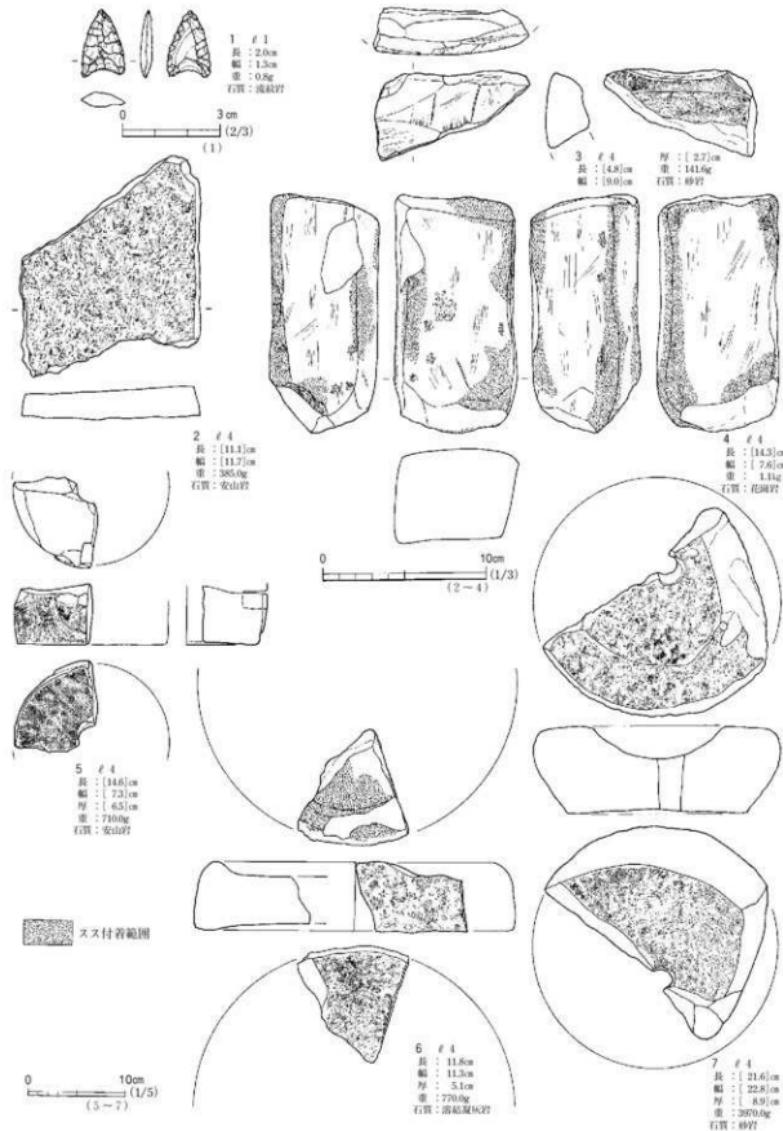


図46 2号溝跡出土遺物(3)

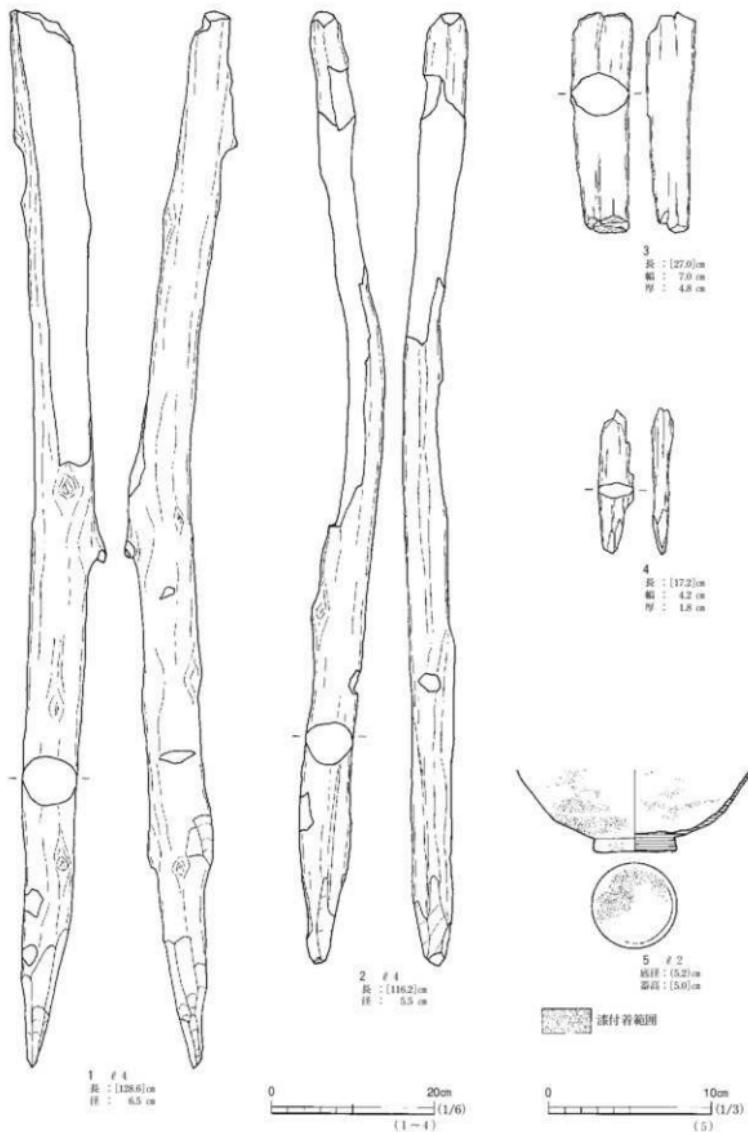


図47 2号溝跡出土遺物(4)

図5は溶着済が付着している羽口の破片資料である。

46図1は四基式石礎である。同図2は、上下端とともに欠損し遺存しないが、偏平な割石を方形状に整形していることから温石の可能性がある。同図3・4は砾石である。3は、茶臼の下臼の受け部付近が欠損した後に砾石に転用されたものと思われ、表面は肌理細かく滑らかである。4は、片端部の一部が欠損しているが、ほぼ完形に近い。表面は四面とともに端部よりも中央付近が大きく研ぎ減りして窪んでおり、かなり使い込んだものであろう。各両縁には煤が付着している。

同図5～7は石臼である。5は茶臼と推測され、上部は欠損するが挽き手孔と供給孔の存在から上臼であると考えられる。6は粉挽き用の石臼である。くぼみは平坦であり、上縁にかけて黒い煤が付着している。7も粉挽き用の石臼であり、外面部は粗く彫痕が認められる。供給孔の存在から上臼であると考えられる。

47図1・2は、礫とともに廃棄された状態で出土し、その形状から杭と考えられる。樹種は、ともにクリであり、表面の風化が顕著である。いずれも先端をナタ状の工具により、粗く面取りを施してある。柱径は6cm前後の円錐形を呈する。工具痕は、ともに5方向から粗く打ち込まれている。3・4は、溝跡内のピットから出土した杭であり、樹種は共にクリである（付章4参照）。先端が雑に面取りされている状態で、遺存状況は悪い。5は漆器の椀である。

また、時期は特定できないが、堀堆積土中からは鉄滓等が相当量出土している。中には原料となる砂鉄塊や楕円形滓も出土している。このことから、区画内において鍛冶関連の生産作業を行っている可能性が高い。

本溝跡は、緩やかに湾曲しながら北側および東側に向かい、内部施設を囲むする堀跡であると判断した。内側に存在する建物跡などの遺構群とは有機的な関連性を窺われ、本溝跡は館を内外に区画している。また、重複関係から判断して、並列するSD3の造り替えにより、溝底面に「堀障子」を伴い、防御機能も併せ持つ、より堅固な防御施設に改築されたと考えられる。全体の規模・形状等は不明であるが、土橋状に一段高く掘り残された、南側の通路部分を軸として東西対称に放物線状に湾曲する形態と考えられる。また、堆積土の様相から、館跡の廃絶時には、堀への部材等の人为的な廃棄行為が認められる。所属時期は、出土遺物の特徴からおおよそ16世紀～17世紀中頃と考えている。

### 3号溝跡 SD3（図39・40・49、写真34・35・56）

本遺構は、1次調査区から連続する溝跡である。調査区北側のE2～4、F2～5、G5・6、H6グリッドに位置し、遺構が構築された周辺は、標高52.6m程の平坦な地形である。遺構の西半部については1次調査で、東半部については2次調査で調査を実施した。1次調査部分に関しては、すでに『常磐自動車道遺跡調査報告39』で報告しているが、1次調査と2次調査の成果をまとめて報告する。検出面はLⅠ直下のLⅥa上面であるが、LⅥa自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。SD1・2と重複関係にあるが、検出状況からいず

れも本遺構の方が古い。

遺構内堆積土は、東側部（A-A'）と西側部（B-B'）でそれぞれ分層し、合わせて3層に分層した。壁際からの流入が認められることから、いずれも自然堆積と考えられる。

本溝跡は、北側調査区外および東側調査区外まで延伸するため、全体の規模等は不明である。また、H 6 グリッド付近で約2.5m途切れ、土橋状（S X 4）に掘り残されている。この土橋状の高まりは、この部分が構築当初から通路機能を持っていたことを示している。調査区内で検出できた推定全長は、東側が50.5m、西側が2.5mを測り、南に向かうにつれて緩やかに東側に湾曲する。規模は、1次調査区では幅2.3~2.6m、深さ25~60cmを測るが、2次調査区では、SD 1・2に削平されているが、遺存幅2.2~2.5m、深さ15~25cmを測る。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い皿状を呈する。溝跡底面および周辺からはピット等は検出されなかった。

遺物は、検出面から陶磁器の破片1点が出土している。49図1は、古伊万里の椀の破片であり、時期は17世紀代と推測される。検出面からの出土であり、遺構に共伴するかは不明である。

本溝跡は、緩やかに湾曲しながら北側および東側に向かい、内部施設を囲むする堀跡であると判断した。本溝跡は館を内外に区画し、内側に存在する建物跡などの遺構群とは有機的な関連性が窺われる。また、重複関係から判断して、並列するより堅固なSD 2の構築により、本遺構が廃絶されたものと考えられる。全体の規模・形状等は不明であるが、土橋状に掘り残された、南側の通路部分を軸として東西対称に放物線状に湾曲する形態と考えられる。所属時期は、1次調査の成果も勘案して、おおよそ15世紀頃と考えている。

#### 4号溝跡 SD 4 (図48・49、写真36・56)

本遺構は、1次調査区から連続する溝跡である。調査区北側のE・F7、F・G・H 8グリッドに位置し、遺構が構築された周辺は標高52.4m程の平坦な地形である。遺構の西半部については1次調査で、東半部については2次調査で調査を実施した。1次調査部分に関しては、すでに『常磐自動車道遺跡調査報告39』において報告しているが、1次調査と2次調査の成果をまとめて報告する。検出面はL I直下のL VI a上面であるが、L VI a自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。H 8グリッド付近でSD 21と重複関係にあるが、検出状況から本遺構の方が古い。

遺構内堆積土は大きく2層に分層される。 $\ell$  1は、砂質土を含む黒褐色土で、 $\ell$  2は壁際からの流入が認められる。ともに自然堆積と考えられる。

E 7グリッド付近で途切れ、北西と南東に分かれる。調査区内で検出できた規模は、北西側が6.2m、南東側が16.9mを測り、G 8グリッド付近で北東方向に向かって湾曲する。溝幅は、1次調査と2次調査の区境で差異がみられるが、今回検出した部分（B-B'）の開口部約0.45m、底面幅0.2mを測り、G 8グリッド付近ほど開口部幅が広い。周壁は35°~40°前後の角度で緩やかに立ち上がる。東西での標高差は殆どなく、検出面からの深さは5~30cmを測り、一定しない。溝跡底面

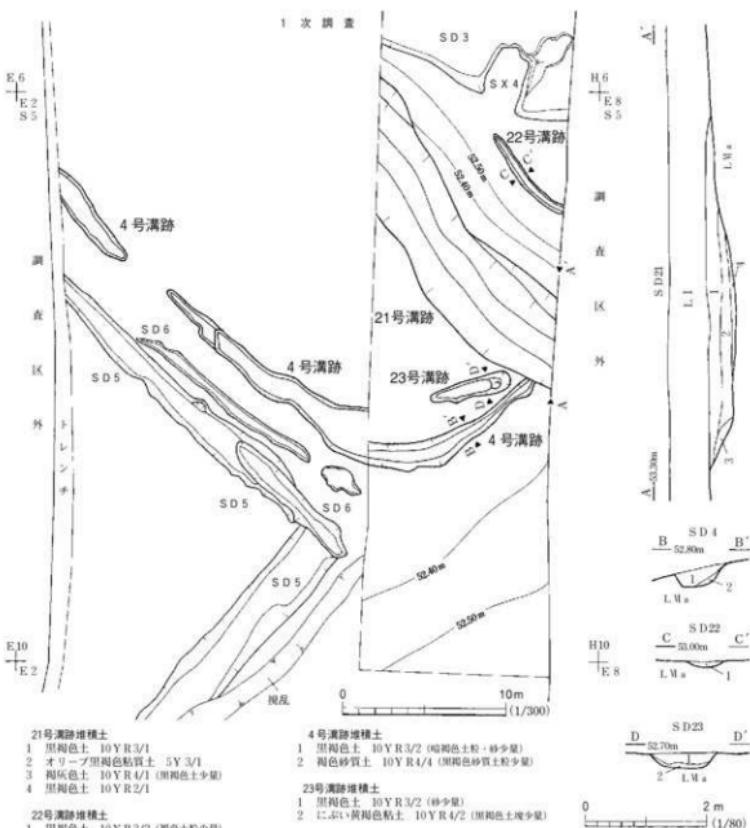


図48 4・21～23号溝路

および周辺からは、ピット等は検出されなかった。

遺物は、堆積土中から陶磁器1点、石製品1点が出土した。49図2は、瀬戸美濃の椀皿の破片である。時期は17世紀代と推測される。同図3は、砥石である。粘板岩製の薄い剥片を素材とし、長方形形状に形を整えてから使用している。使用面は表面が若干凹状を呈している。

本溝路は全体の規模・形状等は不明であるが、緩やかに湾曲する。性格的には東西底面の高低差が殆どなく幅も一定しないことから、排水・区画溝的な機能とは考え難い。所属時期については、1次調査時では中世以前と考えられたが、今回出土した遺物の特徴から、中世～近世頃の所産と考えている。

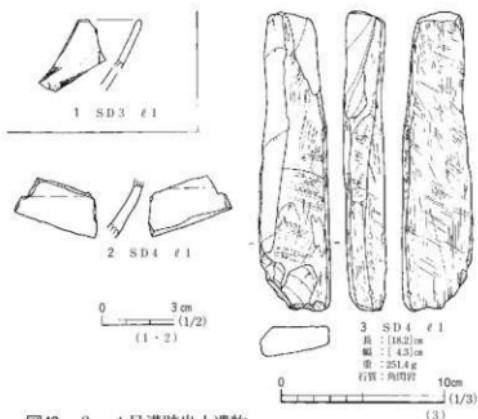


図49 3・4号溝跡出土遺物

## 8号溝跡 SD 8

(図50、写真36)

本遺構は、調査区南側やや西寄りのD39・40、E39～42グリッドに位置する。遺構が確認された遺構が構築された周辺は、標高52.2～52.1m程の平坦な地形である。

検出面はL I直下のL II b上面であるが、L II b自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。E41グリッド付近でSD 9・20、

S X2、E40グリッド付近でSK11と重複関係にあり、検出状況からSD 9・20、S X2よりは新しく、SK11より古い。

遺構内堆積土は、大きく3層に分層される。下層のℓ 2・3は、壁際からの流入が認められ、自然堆積と判断される。上層に厚く堆積する褐色土のℓ 1は、人為堆積の様相を示す。

検出した規模は、南北約28.5m、溝幅0.45～1.2mを測り、ほぼ直線的に延びる。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い皿状を呈する。底面標高および検出面からの深さは、北側ほどやや深くなる。南北端での高底差は10cm前後である。溝跡底面および周辺からはピット等は検出されなかった。

遺物は、堆積土中から鉄滓が1点出土しているが、時期は不明である。

本溝跡は、全長29m程の南北方向に直線的に延びる溝跡である。周辺には、土坑や小穴などの、中世から近世を主体とした多数の遺構が存在する。所属時期・性格については、本遺構と明確に伴出する遺物がなく判断し得ないが、排水・区画溝的な機能が推察され、中世から近世にかけての所産の可能性が高い。

(福村)

## 9号溝跡 SD 9 (図50～55、写真36・57～59)

本遺構は調査区南西側、D41・42、E・F40～42、G39・40グリッドに位置し、L II b上面で検出された。S I2、SB10・12・13、SK12、SA8、SD 8・20、GPと重複し、SD20より新しく、S I2を除く他の遺構より古い。また、本遺構はS I2を一部壊しているが、出土遺物からS I2と同時期に存在していたものと考えられる。

本遺構は、北東～南西方向に蛇行して走る溝跡で、E・F41グリッド付近で二股に分かれれる。確認された長さは46.6mで、東・西側はいずれも調査区外に延びる。現状の壁上端での規模は、幅5.8～9.5m、検出面からの深さ1.2～1.8mを測る。底面は多少の凹凸があるもののほぼ平坦で、北東か

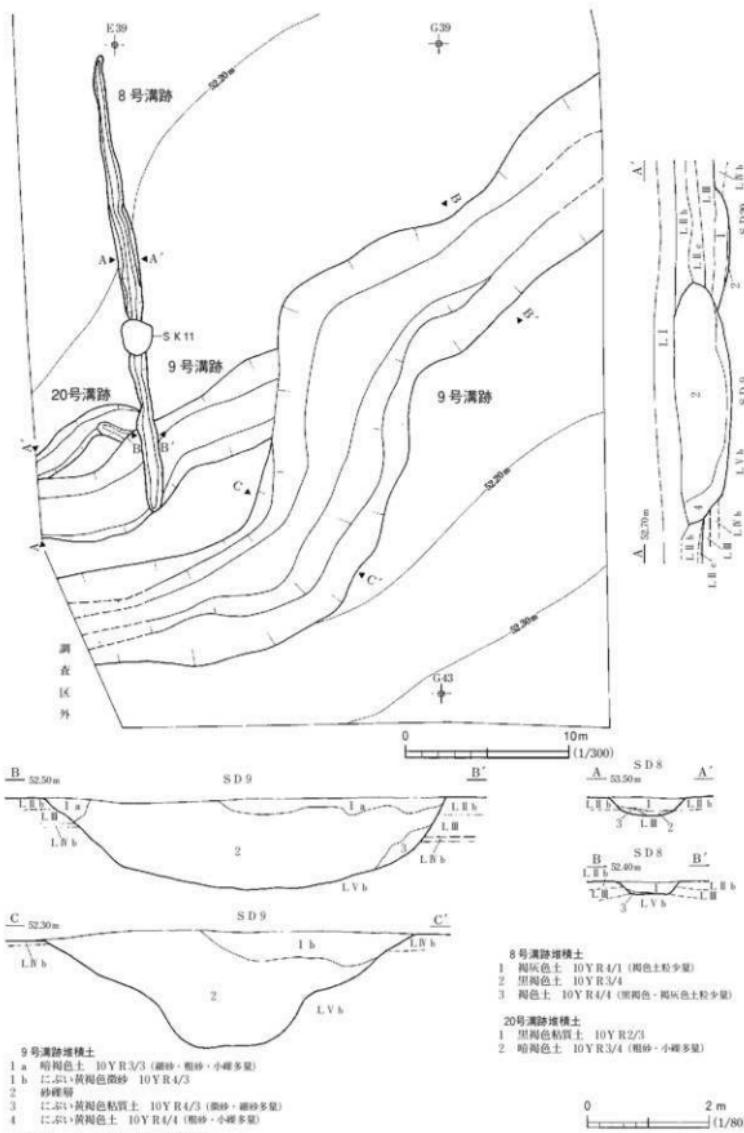


図50 8・9・20号溝路

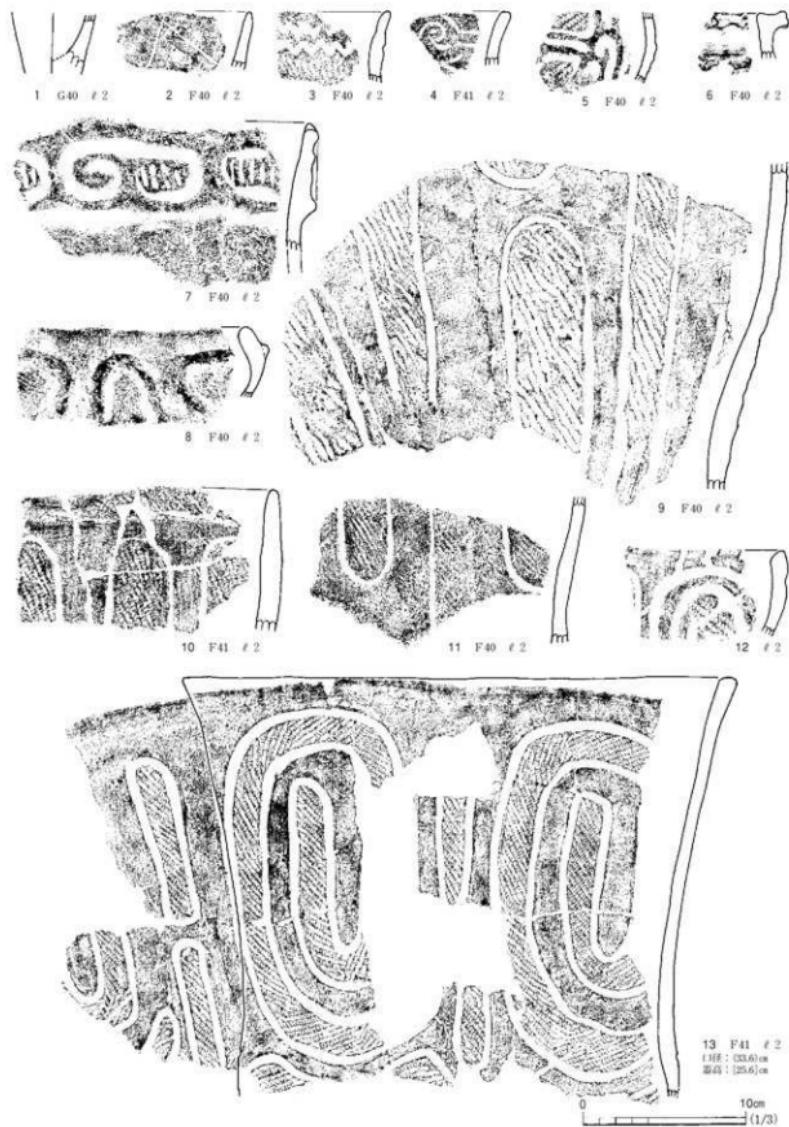


図51 9号溝跡出土遺物(1)

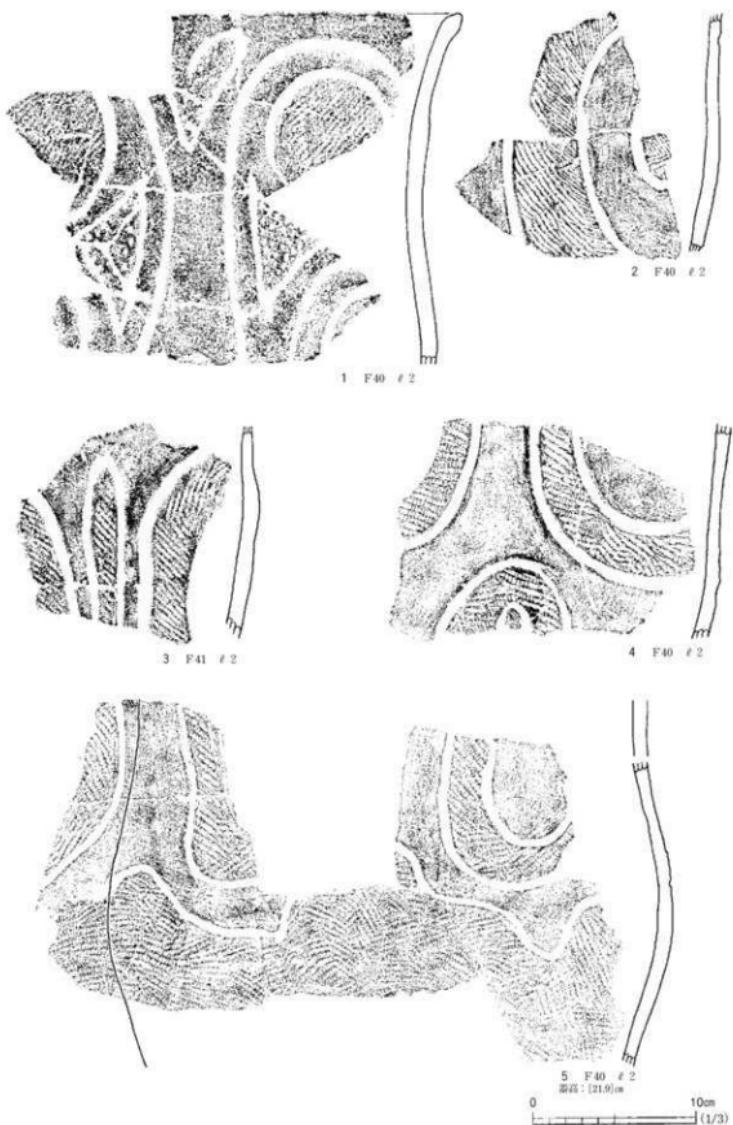


圖52 9號溝跡出土遺物(2)

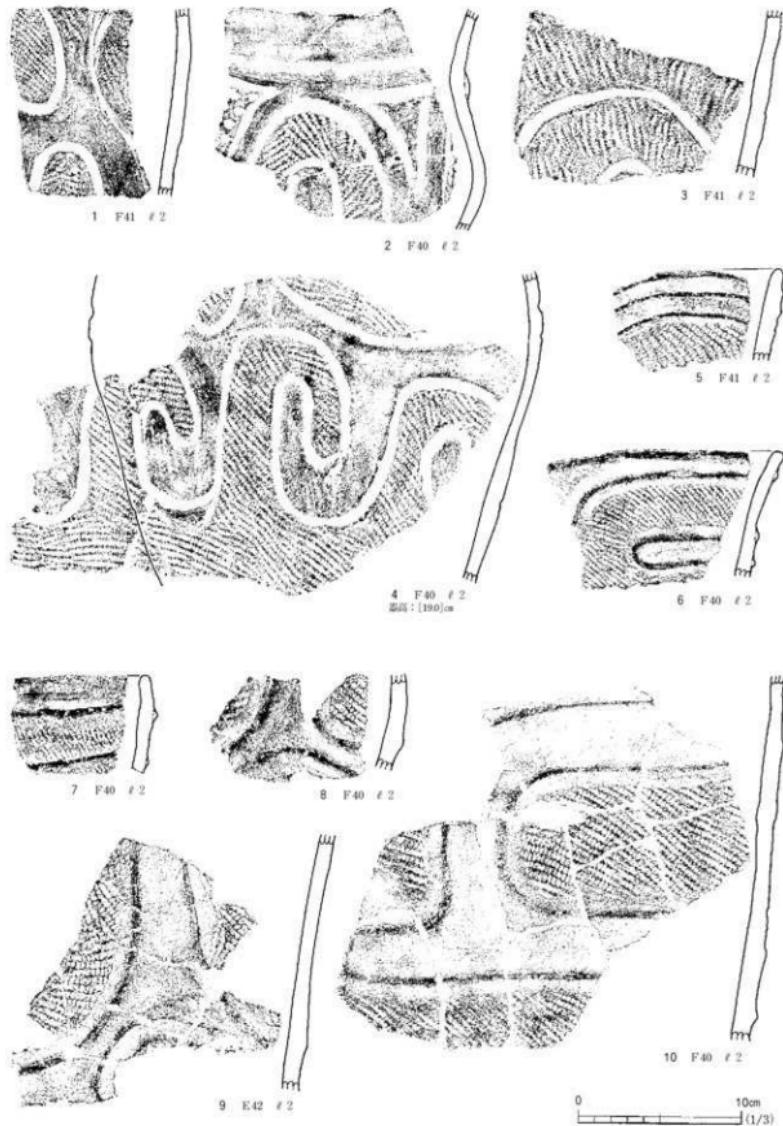


図53 9号溝跡出土遺物(3)

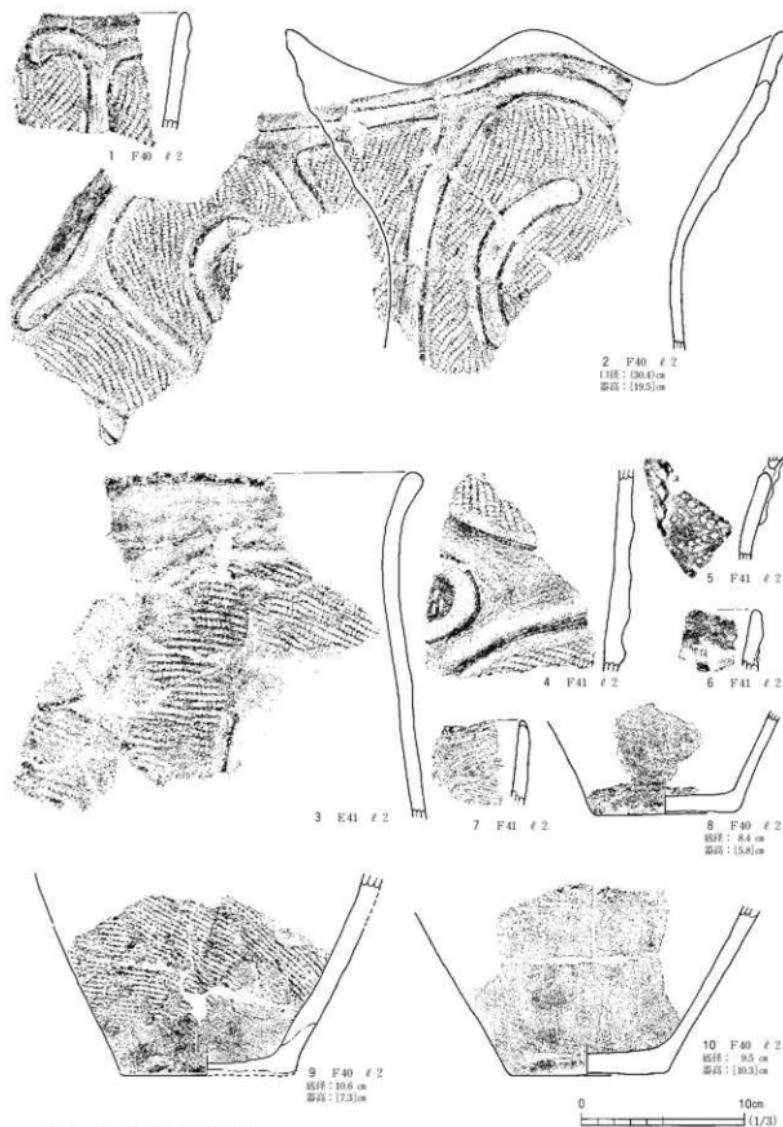


図54 9号溝跡出土遺物(4)

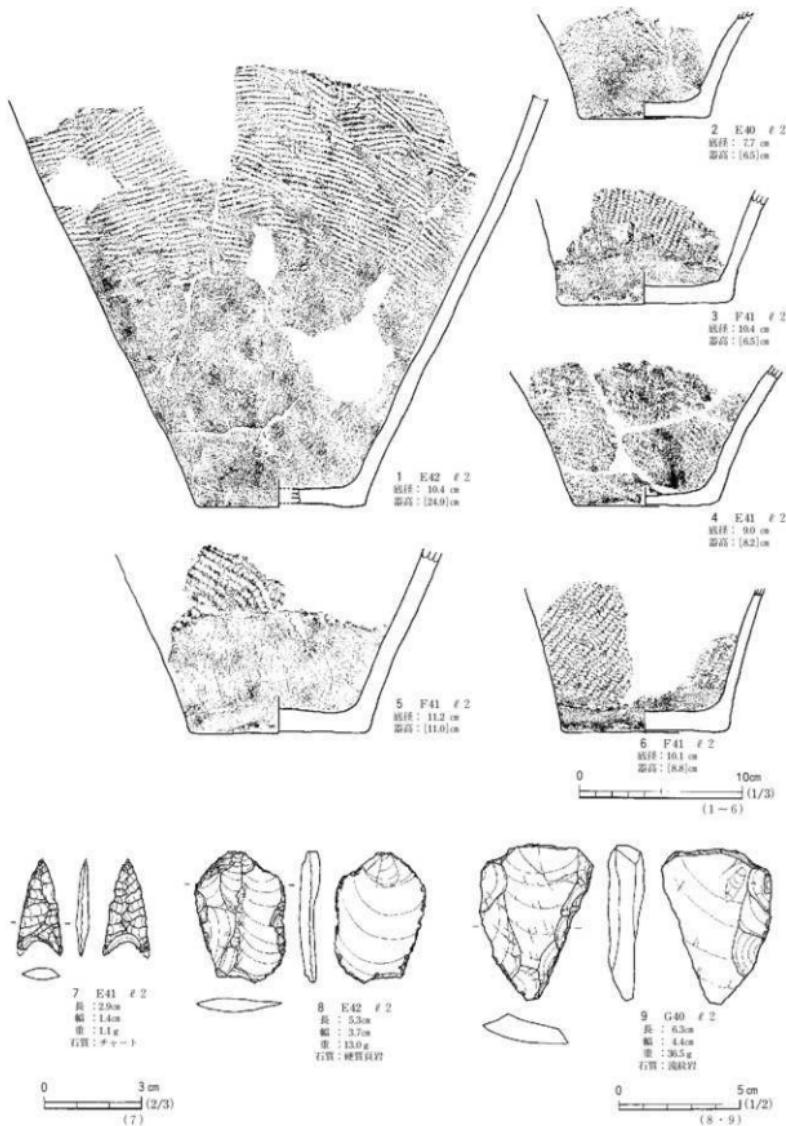


図55 9号溝跡出土遺物(5)

ら南西にかけて緩やかに傾斜する。堆積土は大きく4層に分けられる。いずれも壁際からの流れ込みが認められることから、自然堆積と考えられる。

遺物は $\ell$ 2から縄文土器903点、石器5点が出土した。時期の判別できる縄文土器では中期末葉の土器が最も多く、この他に早期～後期の土器も各少量ながら出土している。F40・41グリッドからの出土量が非常に多く、全体の約7割を占めている。

51図1は尖底土器の底部片である。同図2は口縁部に山形状の沈線文が描かれている。同図3は口縁部に連続山形文が、同図4は蕨手状の沈線文が施されている。同図5は稜線による区画文が施され、稜線間には蕨手文が描かれている。同図6は口縁部上端が強く外反する器形で、口唇部には押圧が加えられている。同図7は波状口縁を呈し、口縁部に橢円形状の区画文が稜線により施されている。区画文内には刺突文が充填され、体部には懸垂状の文様が施されている。同図8は稜線による区画文が施されている。同図9～11は懸垂状の沈線文が施され、文様間が磨り消されている。同図12は沈線による区画文が施されている。同図13は渦巻状の文様が横に連続し、文様間は丁寧に磨り消されている。

52図1は懸垂状の沈線文内に円文と三角形文が描かれ、文様内には縄文や刺突文が充填されている。52図2～5、53図1・2・4は沈線区画による縄文帶で主文様が描かれている。53図3は縄文地に沈線文で文様が施されている。53図5～10、54図1～4は稜線区画による無文帶により主文様が施されている。53図8・10と54図1・2は、それぞれ同一個体である。54図5は連続刺突文と縦位の隆帯が施され、隆帯には刺突が加えられている。同図6は波状口縁の波長部に垂下する隆帯が貼付され、隆帯には刻みが施されている。同図7は波状口縁を呈し、L縄文が施されている。54図8～10、55図1～6は底部資料である。55図7はチャート製の凹基石錐で、基部が一部欠損している。同図8・9は削器で、8は硬質頁岩製、9は流紋岩製である。いずれも縦長刃片を素材とし、周縁に二次加工が施されている。

本遺構は形態より自然流路と考えられる。時期は、砂礫層である $\ell$ 2から縄文時代中期末葉の土器が多い量出土したことから、この頃に溝の大部分が自然埋没したものと推定される。(坂田)

#### 10号溝跡 SD10(図56・57、写真36)

本遺構は、調査区南側のA・B・G37、B・C・E・F36、C～F35、D34グリッドに位置し、周辺は標高52.4～52.1m程の平坦な地形である。検出面は、基本的に基盤層であるLVb上面であるが、溝の南側落ち込み付近から南側にかけては、本溝跡とSD9によって形成された、河川の流入土であるLIIbが認められる。C35、B・C36付近でSD17・24・26と、G37グリッドでSE6と重複関係にあるが、検出状況からともに本遺構の方が古い。

遺構内堆積土は大きく9層に分層される。基本的に、砂層と粘土層が交互にレンズ状に堆積することから、流れ込みによる自然堆積と判断される。

本溝跡はクランク状に検出されており、調査区内で検出できた規模は、北側東西で約44m、東側

南北で約13m、西側南北で約30mを測る。溝幅は、東側（A-A'）で約3.2m、中央付近（B-B'）で約6.8m、西側調査区境（B37グリッド）付近で約3.8mを測る。底面標高は西側が若干低く、東側から西へ向かって緩やかに傾斜している。検出面からの深さは、西側調査区境が65cm、中央付近が110cm、東側が70cm前後を測り、高低差は30cm程度である。底面は部分的に片側が窪んでいたり凹凸が認められ、全体的に蛇行が目立つことから、溝幅内での数度の流水経路の変化が窺える。

溝跡底面および周辺からはピット等は検出されなかった。

遺物は、縄文土器片など計30点が出土した。すべて小片で摩滅が激しいため図示できなかったが、縄文時代中期から晩期にかけての破片が見受けられる。

本溝跡は、全体の規模・形状等は不明であるが、西側へ向かって蛇行しながら延びる旧河川跡である。堆積土中に縄文時代晩期の土器を含むことから、該期には河川として機能していたと考えられる。しかし、これ以降の遺物の出土は認められず、中世になると、上面には溝跡や井戸跡の構築が見受けられることから、すでに埋没していたと考えられる。

（福 村）

#### 11号溝跡 S D11 (図58・59、写真37)

本遺構は調査区中央、D19、E19・20、F20、G20～22、H22グリッドに位置し、L VI a上面で検出された。S B24、S D12、G Pと重複し、本遺構が古い。

本遺構は東西に蛇行して走る溝跡で、東・西側は調査区外に延びる。確認された長さは46.2mで、現状の壁上端での規模は幅30～92cm、検出面からの深さ11～30cmを測る。底面は多少の凹凸が認められるもののほぼ平坦で、西から東に向って緩やかに傾斜する。堆積土は粗砂1層で、自然堆積と考えられる。

遺物はℓ 1から縄文土器73点が出土したが、大半は器面の摩滅が著しい。59図1は蕨手文と刺突文が施されている。同図2は縄文地に倒卵形状の文様が描かれている。

本遺構は形態より自然流路と考えられる。時期は出土遺物から、縄文時代中期末葉～後期前葉頃と推定される。

#### 12号溝跡 S D12 (図58・59、写真37・38・60)

本遺構は調査区北側、D18・19グリッド、E～G18～20、H19グリッドに位置し、L VI a上面で検出された。S D11・14と重複し、本遺構が新しい。

本遺構は東西に蛇行して走る溝跡である。確認された長さは34.6mで、東・西側は調査区外に延びる。現状の壁上端での規模は、幅5.1～13.8m、検出面からの深さ14～51cmを測る。底面には凹凸が認められ、東から西に向って緩やかに傾斜する。堆積土は9層に分けられる。いずれも壁際からの流れ込みが認められることから、自然堆積と考えられる。

遺物はℓ 1・3・4から縄文土器682点、石器3点が出土したが、縄文土器の大半は器面の摩滅が著しい。59図3は口縁部に山形突起をもち、突起直下の隆带上と口縁部内面に盲孔が加えられて

いる。同図4は注口土器で、印刻が加えられている。同図5は台部片である。同図6は口縁部に突起をもち、口縁部には楕円形状の隆帯が貼付されている。同図7は頸部の平行沈線文間に刺突が加えられ、体部下半には刷毛目が施されている。同図8・10は底部資料である。同図9はL R原体の撚糸文が施文されている。

本遺構は形態より自然流路と考えられる。時期は出土遺物の遺存状態が悪く判然としないが、縄文時代後期頃と推定される。

#### 13号溝跡 SD13 (図58, 写真39)

本遺構は調査区中央、G20, H20・21グリッドに位置し、LV a上面で検出された。本遺構と重複する遺構はない。

本遺構は北西—南東方向に蛇行して走る溝跡である。確認された長さは8.8mで、南東側は調査区外に延びる。現状の壁上端での規模は、幅36~150cm、検出面からの深さ2~15cmを測る。

堆積土は2層に分けられ、共に自然堆積と考えられる。遺物はℓ1から縄文土器4点が出土したが、いずれも器面の摩滅が著しく図示していない。

本遺構は形態より自然流路と考えられる。時期は出土遺物が少なく判然としないが、縄文時代頃と推測される。

#### 14号溝跡 SD14 (図58, 写真39)

本遺構は調査区北側、F18, G18~20, H20グリッドに位置し、LV a上面で検出された。SD12と重複し、本遺構が古い。

本遺構は北西—南東方向に蛇行して走る溝跡で、SD12により一部壊されている。確認された長さは26.2mで、南東側は調査区外に延びる。現状の壁上端での規模は、幅18~94cm、検出面からの深さ3~12cmを測る。底面はほぼ平坦である。

堆積土は黒褐色土1層で、自然堆積と考えられる。遺物はℓ1から縄文土器2点が出土したが、細片のため図示していない。

本遺構は形態より自然流路と考えられる。時期は出土遺物が少なく判然としないが、縄文時代頃と推測される。

(坂 田)

#### 15号溝跡 SD15 (図39・40, 写真39)

本遺構は、調査区北側やや東寄りのH5グリッドに位置し、遺構が構築された周辺は標高52.5m程の平坦な地形である。検出面はLI直下のLV a上面であるが、LV a自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。GPと重複し、本遺構が古い。

遺構内堆積土は、大きく2層に分層される。上層に厚く堆積する黒褐色土のℓ1は、にぶい黄褐色土塊・粗砂等を多く含むことから人為的埋土と判断した。下層のℓ2は、砂粒等を主体とする流

水層である。

検出した規模は、東西約3.5m、溝幅0.35~0.45mを測り、ほぼ直線的に延びる。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は鍋底状を呈する。底面はほぼ平坦で、東西での底面標高差は殆どなく、検出面からの深さは15~20cmを測る。

溝跡底面および周辺から小穴等は検出されなかった。

本溝跡は、S X 3 が板橋施設から土橋施設に改変した際に、分離された S D 2 の水量を調整する目的のため構築されたと判断した。

S D 2 が帶水状態にあったことや、本溝跡が浅いことから、降水量が多い時などに、水量を調整する排水溝になっていたと考えられる。また、通路部分を横断する構造から、上部を覆うための敷板などが想定されるが、痕跡等は認められなかった。

本遺構からの出土遺物はなく、明確な所属時期は不明であるが、関連する遺構の時期から、おおよそ近世初頭頃と考えている。(植村)

#### 16号溝跡 S D16

(図56~58、写真39~40)

本遺構は調査区中央、E20



図56 10・16~19・24~33号溝跡(1)

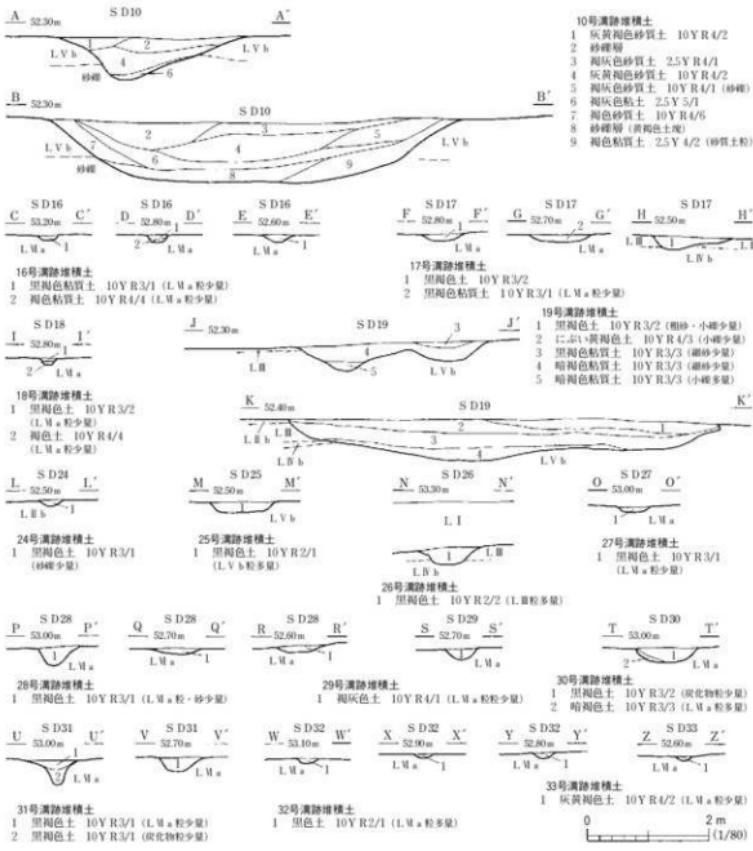


図57 10・16~19・24~33号溝跡(2)

~26, F25~30, G32~33グリッドに位置し, L Va 上面で検出された。S B25, S D29・32・33, G Pと重複し, S D33より新しく, S D29・32, G Pより古い。S B25とは平面的に重複するが, 直接重複する部分が無いため新旧関係は不明である。

本遺構は南北に走る溝跡で, F28グリッド付近で南東側に緩やかに曲がる。確認された長さは124.8mで, 南側は調査区外に延びる。長軸方位はF28グリッド以北がN 7°W, F28グリッド以南がN 20°Wである。また, C23, F29・30, G30~32グリッドにかけて溝が途切れるが, 削平によるものかは不明である。現状の壁上端での規模は, 幅22~48cm, 検出面からの深さ3~36cmを測る。底面はほぼ平坦で, 北から南へかけて緩やかに傾斜する。断面形はU字形を呈し, 周壁の立ち上がり

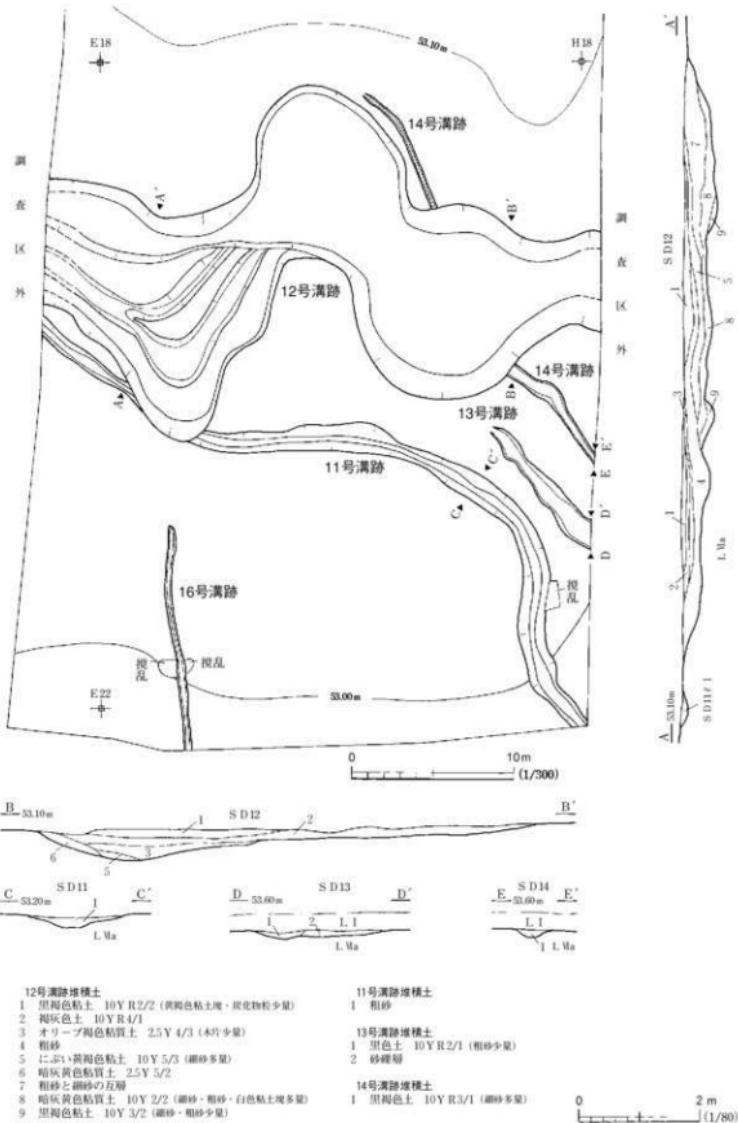


図58 11~14・16号溝跡

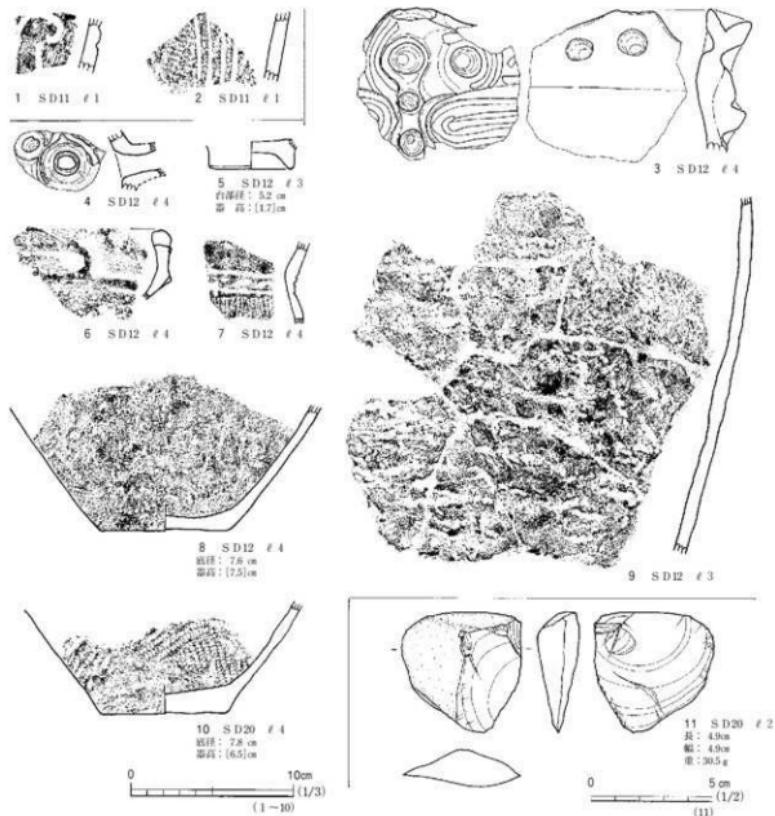


図59 11・12・20号溝跡出土遺物

りは比較的緩やかである。

堆積土は2層に分けられ、いずれも壁際からの流れ込みが認められることから自然堆積と考えられる。本遺構は南北に走る溝跡で、形態より区画溝と考えられる。出土遺物がなく時期は特定できないが、中世～近世頃の可能性が高い。

#### 17号溝跡 S D17 (図56・57, 写真40)

本遺構は調査区南西側、B30・31、C30～32・35～38、D・E30グリッドに位置する。検出面は、C35～38グリッドではLVb上面、それ以外ではLVa上面である。SD10・31、GPと重複し、本遺構が新しい。

本遺構の北西部は調査区外で、C32グリッド付近はトレンチにより一部壊してしまった。推定される平面形はL字形で、B30グリッド付近で屈曲し、東・南方向に向けて走る。長軸方位は南北辺がN 5°W、東西辺がN 79°Eである。確認された長さは南北76.8m、東西26.3mで、南側は調査区外に延びる。C33～35グリッドにかけて溝が途切れるが、削平によるものかは不明である。また、C31・32グリッドにかけて二股に分かれるが、堆積土に相違が認められないことから同じ溝跡と判断した。現状の壁上端での規模は、幅40～178cm、検出面からの深さ2～22cmを測る。底面はほぼ平坦で、南北辺では北から南にかけて緩やかに傾斜する。断面形は逆台形を呈し、周壁の立ち上がりはC30グリッド付近の南壁が緩やかな他は、比較的急である。また、段状に立ち上がる部分も一部認められる。

堆積土はC35～38グリッドにかけては黒褐色土1層、それ以外では黒褐色粘質土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。

本遺構はL字形を呈すると推定される溝跡で、形態より区画溝と考えられる。出土遺物がなく時期は特定できないが、中世～近世頃の可能性が高い。

#### 18号溝跡 S D18 (図56・57)

本遺構は調査区南側、F29グリッドに位置し、LⅥ a上面で検出された。本遺構と重複する遺構はない。

本遺構は南北に走る溝跡で、長軸方位はN 16°Wである。現状の壁上端での規模は、全長4m、幅16～25cm、検出面からの深さ2～10cmを測る。底面はほぼ平坦で、断面形はU字形を呈する。堆積土は2層に分けられ、いずれも壁際からの流れ込みが認められることから自然堆積と考えられる。

本遺構はS D16と平行することから区画溝と推測される。出土遺物がなく時期は特定できないが、中世～近世頃の可能性が高い。

#### 19号溝跡 S D19 (図56・57、写真41)

本遺構は調査区南側、D35・36、E36・37、F・G37・38グリッドに位置する。検出面は、F・G37・38グリッド付近ではLⅡ b上面、それ以外ではLⅢ上面である。S B18、GPと重複し、本遺構が古い。

本遺構は北西～南東方向に蛇行して走る溝跡である。確認された長さは47.9mで、北西・南東側は調査区外に延びる。現状の壁上端での規模は、幅2.5～5.6m、検出面からの深さ12～57cmを測る。底面は多少の凹凸が認められるものの、ほぼ平坦である。

堆積土は5層に分けられ、いずれも壁際からの流れ込みが認められることから自然堆積と考えられる。遺物はℓ1から縄文土器3点が出土したが、細片のため図示していない。

本遺構は形態より自然流路と考えられる。時期は出土遺物が少なく判然としないが、縄文時代頃と推測される。

## 20号溝跡 SD20 (図50・59, 写真42・60)

本遺構は調査区南側, D・E41グリッドに位置し, LIV b 上面で検出された。SD8・9, GPと重複し, 本遺構が古い。

本遺構は東西に蛇行して走る溝跡で, 東側はSD9により壊されている。確認された長さは6.9mで, 西側は調査区外に延びる。現状の壁上端での規模は, 幅154~222cm, 検出面からの深さ3~26cmを測る。底面はほぼ平坦で, 東側2.7mは底面からさらに15cm程深くなっている。

堆積土は2層に分けられ, いずれも壁際からの流れ込みが認められることから自然堆積と考えられる。

遺物はℓ1から石器1点が出土した。59図11は黄玉石製の剥片で, 側縁の一部に使用痕跡と考えられる微細な剥離が認められる。

本遺構は形態より自然流路と考えられる。時期は遺物が乏しく判然としないが, 重複するSD9の時期から繩文時代中期末葉以前と推定される。

(坂田)

## 21号溝跡 SD21 (図48, 写真42)

本遺構は, 調査区北側のG6・7, H7・8グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は, 標高52.4m程の平坦な地形である。1次調査区から連続する溝跡と思われるが, 1次調査では堆積土がLIIと極めて類似することから, 表土掘削時に誤って除去しているため, 1次調査区での本遺構の形状は不明である。検出面は, LI直下のLVa上面であるが, LVa自体が削平を受けているため, 本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。H8グリッド付近でSD4と重複するが, 検出状況から本遺構の方が新しい。

遺構内堆積土は, 大きく4層に分層される。基本的に, 砂層と粘土層が交互にレンズ状に堆積し, 底面には黒色の粘土層が認められることから, 流水による自然堆積と判断される。

本溝跡は, 東側調査区外まで延伸するため全体の規模等は不明であるが, 調査区内で検出できた規模は, 全長約16mを測り, 緩やかに蛇行する。溝幅は, 東側(A-A')で約5.8m, 中央(G7)付近で約4.2m, 西側調査区境で約7.8mを測る。

底面標高は東側が若干低く, 北西側から南東へ向かって緩やかに傾斜している。検出面からの深さは, 西側調査区境が約50cm, 中央付近が約43cm, 東側調査区境が約43cmを測る。底面は, 中央が若干窪んでいるもののほぼ平坦であり, 全体的に水が渟いている。

遺物は, 検出面から中世陶器の破片1点が出土した。小片であるため図示できなかったが, 在地(東北)産の瓷器系の甕または壺の体部片と推測される。

本溝跡は, 全体の規模・形状等は不明であるが, 南東側へ向かって蛇行しながら延びる沢地と考えられる。堆積土中の中世陶器の存在から, 中世頃には, 当地区周辺は湿地帯の様相が窺える。しかし, これ以降の遺物の出土は認められず, 徐々に埋没していたと考えられる。

## 22号溝跡 S D22 (図48, 写真42)

本遺構は、調査区北側のH 6・7グリッドに位置し、遺構が確認された周辺は、標高52.6m程の平坦な地形である。検出面はL I直下のL VI a上面であるが、L VI a自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。本遺構の東側は調査区外へ延伸するため、遺構全体の正確な規模・形状等は不明である。重複する遺構はないが、近接してS K15・20が存在する。

遺構内堆積土は、褐色土粒を少量含む黒褐色土の單一層で、自然堆積の様相を呈する。調査区内で検出できた規模は、全長約6.4mを測り、東側に向かって緩やかに湾曲する。溝幅50~60cmを測る。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い皿状を呈する。底面標高は東側が若干低く、北西側から南東へ向かって緩やかに傾斜している。検出面からの深さは、約5~10cmを測る。溝跡底面および周辺からはピット等は検出されなかった。

本溝跡は、全体の規模・形状等は不明であるが、湾曲しながら東方向に延びる溝跡と考えられる。本遺構からは出土遺物はなく、明確な所属時期および性格等は不明である。

## 23号溝跡 S D23 (図48, 写真42)

本遺構は、調査区北側のG・H 8グリッドに位置し、周辺は標高52.5m程の平坦な地形である。検出面はL I直下のL VI a上面であるが、L VI a自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。重複する遺構はないが、S D 4・21と近接する。

遺構内堆積土は、大きく2層に分層される。基本的に、砂質土と粘土がレンズ状に堆積することから、流れ込みによる自然堆積土と判断される。

検出した規模は全長約5.0m、溝幅0.7~1.3mを測る。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い皿状を呈する。底面は部分的に中央付近が窪んでいるが、南北での標高差は殆どなく、検出面からの深さは20~25cmを測る。溝跡底面および周辺からはピット等は検出されなかった。

本遺構からは出土遺物はなく、明確な所属時期および性格等は不明である。

## 24号溝跡 S D24 (図56・57, 写真43)

本遺構は、調査区南側やや西寄りのC 36・37グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は、標高52.3m程の平坦な地形である。検出面は、北半部がL I直下のS D10の堆積土上面、南半部はL I直下のL II b上面であるが、S D10およびL II b自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。C36グリッド付近でS D10と重複関係にあり、検出状況から本遺構の方が新しい。

遺構内堆積土は、砂礫を含む黒褐色土の單一層で、自然堆積の様相を呈する。検出できた規模は南北約6.18m、溝幅0.28~0.4mを測り、南北にほぼ直線的に延びる。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は中央がやや窪む形となる。底面は部分的に中央付近が窪んでいるが、南北での標高差は

殆どなく、検出面からの深さは7~12cm程を測る。溝跡底面および周辺からは小穴等は検出されなかった。

本遺構からは出土遺物はなく、明確な所属時期および性格等は不明である。

(福 村)

#### 25号溝跡 S D25 (図56・57, 写真43)

本遺構は調査区南西側、B34・35グリッドに位置し、L V b 上面で検出された。本遺構と重複する遺構はない。

本遺構は北西端が調査区外にあるが、南北に走る溝跡と推定される。長軸方位はN 2° Eである。現状の壁上端での規模は、全長17.6m、幅96~140cm、検出面からの深さ4~27cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、北端から南側へ7.6mの地点までは一段深くなっている。断面形は逆台形を呈する。周壁の立ち上がりは比較的緩やかで、北壁は段状に立ち上がる。堆積土は黒色土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。遺物はℓ 1から鉄滓1点が出土した。

本遺構は形態より区画溝と考えられる。時期は出土遺物が少なく判然としないが、中世~近世頃の可能性が高い。

#### 26号溝跡 S D26 (図56・57, 写真43)

本遺構は調査区南西側、B35・36グリッドに位置し、L III上面で検出された。S D10と重複し、本遺構が新しい。

本遺構は東西に走る溝跡で、長軸方位はN 88° Eである。確認された長さは5.7mで、西側は調査区外へ延びる。現状の壁上端での規模は、幅100~144cm、検出面からの深さ10~21cmを測る。底面はほぼ平坦で、西から東にかけて若干傾斜する。断面形は逆台形を呈し、周壁は北壁の西側を除いて段状に立ち上がる。堆積土は黒褐色土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。遺物はℓ 1から鉄滓1点が出土した。

本遺構は形態より区画溝と推測される。時期は出土遺物が少なく判然としないが、中世~近世頃の可能性が高い。

(坂 田)

#### 27号溝跡 S D27 (図56・57, 写真43)

本遺構は、調査区中央やや西寄りのD29・30グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は、標高52.7m程の平坦な地形である。検出面は、L I直下のL VI a 上面であるが、L VI a 自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。調査区外西側へ延伸するため、遺構全体の正確な規模・形状等は不明である。S D31と重複関係にあり、検出状況から本遺構の方が新しい。また、近接してSK25、SD17が存在する。

遺構内堆積土は、L VI a粒を少量含む黒褐色土の單一層で、自然堆積の様相を呈する。調査区内で検出できた規模は、東西約5.2m、溝幅45~60cmを測り、東西にほぼ直線的に延びる。周壁は緩

やかに立ち上がり、断面形は浅い皿状を呈する。底面標高はほぼ一定であり、東西での標高差は殆どなく、検出面からの深さは8~12cmを測る。溝跡底面および周辺からは、小穴等は検出されなかった。

本溝跡は、全体の規模・形状等は不明であるが、東西方向に直線的に延びる溝跡と考えられる。出土遺物はなく、明確な所属時期および性格等は不明である。

#### 28号溝跡 S D28 (図56・57・60, 写真43・61)

本遺構は、調査区中央付近のD27・28, E28~30, F30~32, G32グリッドに位置し、周辺は標高52.7~52.4m程の平坦な地形である。検出面は、L I直下のL VI a上面であるが、L VI a自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。

本遺構の北西側は調査区外へ延伸するため、遺構全体の正確な規模・形状等は不明である。また、D28, E29・30, F31グリッド付近の3地点で、溝跡が大きく途切れているが、後世の削平によるものと思われる。D27グリッドでS K30, F32グリッドでS D33と重複関係にあり、検出状況からいずれも本遺構の方が新しい。遺構内堆積土は、L VI a粒を少量含む黒褐色土の單一層で、自然堆積の様相を呈する。

調査区内で検出できた規模は、長さ推定67.0mで、主軸方位はN30°Wである。溝幅は北側(P-P')の開口部約0.68m、底面幅0.2m、中央付近(Q-Q')の開口部約0.8m、底面幅0.4m、南側(R-R')の開口部約0.8m、底面幅0.36mを測る。周壁は35°~40°前後の角度で緩やかに立ち上がる。断面形は、北側は鍋底状であるが、南側に向かうにつれて浅い皿状を呈する。底面標高は南側が若干低く、北側から南へ向かって緩やかに傾斜している。検出面からの深さは、北側が30cm、中央付近が約8cm、南側が10cm前後を測り、高低差は35cmである。溝跡底面および周囲から小穴等は検出されなかった。

遺物は、陶磁器片5点が堆積土中から出土した。60図1~5は、すべて在地(東北)産の常滑系の甕または壺の胴部片である。時期は、13世紀~14世紀代に比定されるものと推測される。

本溝跡は、全体の規模・形状等は不明であるが、北西から南東方向に直線的に延びる溝跡と考えられる。主軸方向を同じくするS D30と接することから、互いに関連する可能性も考えられる。本遺構を境として、西側には中世から近世を主体とした土坑や井戸跡、小穴などの多数の遺構が存在するに対し、東側では全く遺構が認められることから、性格としては、区画溝的な機能が推察される。所属時期については、中世の所産と考えている。

#### 29号溝跡 S D29 (図56・57・60, 写真43・62)

本遺構は、調査区中央付近や東寄りのG・H32グリッドに位置し、周辺は標高52.5m程の平坦な地形である。検出面は、L I直下のL VI a上面であるが、L VI a自体が削平を受けているため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。本遺構は、調査区外東側へ延伸し、西端側は

後世の搅乱により削平されたため、遺構全体の正確な規模・形状等は不明である。S D16と重複関係にあり、検出状況から本遺構の方が新しい。遺構内堆積土は、L VI a粒を少量含む褐灰色土の單一層で、自然堆積の様相を呈する。

検出できた規模は、東西約8.6m、溝幅0.45～0.6mを測り、ほぼ直線的に延びる。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い皿状を呈する。底面標高は、部分的に中央付近が窪んでいるが、東西での標高差は殆どなく、検出面からの深さは12～20cm程を測る。溝跡底面および周辺からは小穴等は検出されなかった。

遺物は、堆積土中から1点出土した。60図6は、常滑焼の甕または壺の破片である。

本溝跡は全体の規模・形状等は不明であるが、東西方向に直線的に延びる溝跡と考えられる。出土遺物の特徴から、中世の遺構と推測したが、他遺構との重複関係から勘案して、おおよそ中世から近世にかけての所産と考えたい。

### 30号溝跡 S D30 (図56・57、写真44)

本遺構は、調査区中央付近や西寄りのD27～29グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は、標高52.7m程の平坦な地形である。検出面は、L I直下のL VI a上面であるが、L VI a自体が削平を受けていたため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。調査区外西側へ延伸するため、遺構全体の正確な規模・形状等は不明である。また、D28グリッドで溝跡が大きく途切れているが、後世の削平によるものである。D29グリッドでS K26と、D27グリッドでS K30と重複関係にあり、検出状況からS K26よりは古く、S K30よりは新しい。また、S D28とほぼ主軸方向を同じくして近接する。

遺構内堆積土は、色調および混入物から大きく2層に分層される。下層のℓ 2は、壁際からの流れ込みが認められ、自然堆積と判断される。上層に厚く堆積するℓ 1は黒褐色土で、同じく自然堆積の様相を示している。

調査区内で検出できた規模は、全長推定21.3mで、溝幅は北側の調査区際で開口部約0.78m、底面幅0.4m、中央付近(T-T')の開口部約1.0m、底面幅0.6m、南側(D29付近)の開口部約0.42m、底面幅0.20mを測る。周壁は緩やかに立ち上がる。断面形は、北側が鍋底状であるが、南側に向かうにつれて浅い皿状を呈する。底面標高は南側が若干低く、北側から南へ向かって緩やかに傾斜している。検出面からの深さは、北側が15cm、中央付近が約22cm、南側が7cm前後を測り、高低差は10cmである。溝跡底面および周囲から小穴等は検出されなかった。

本溝跡は全体の規模・形状等は不明であるが、北西側から南東方向に直線的に延びる溝跡と考えられる。主軸方向を同じくするS D28と近接することから、互いに関連する可能性も考えられる。

遺構の所属時期・性格については、本遺構と明確に伴出する遺物がなく判断し得ないが、排水・区画溝的な機能が推察され、中世頃の所産の可能性が高い。

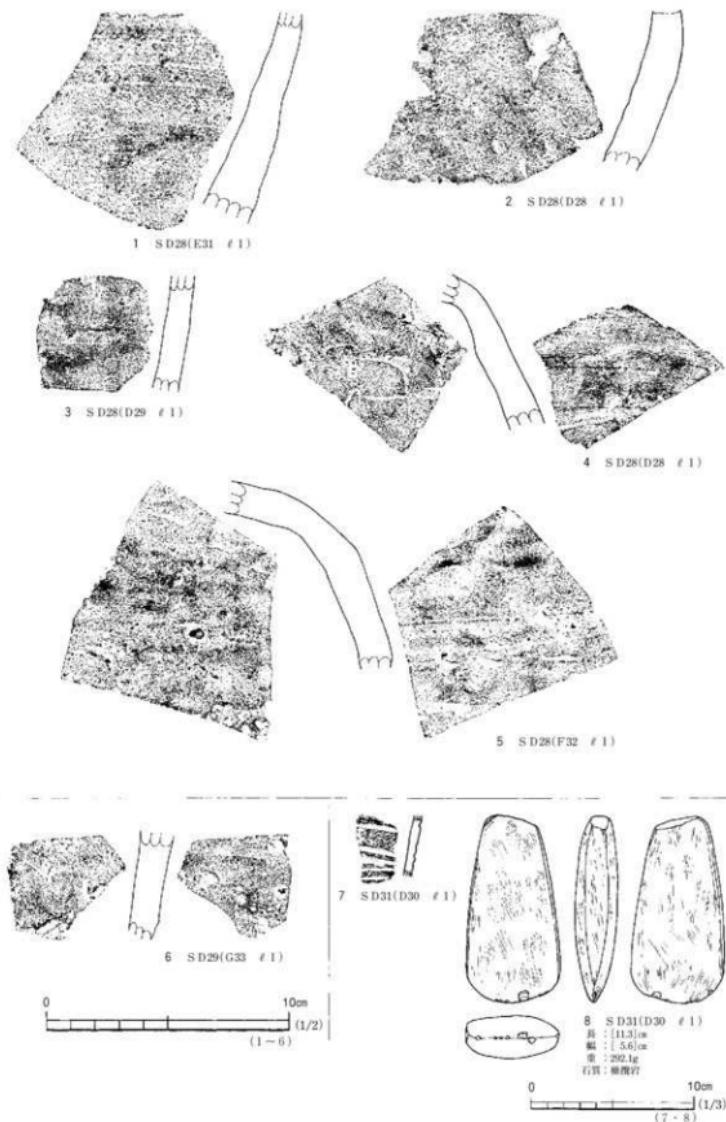


図60 28・29・31号溝跡出土遺物

## 31号溝跡 S D31 (図56・57・60, 写真44・62)

本遺構は、調査区中央付近のD29~31, E31・32, F32グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は、標高52.7m程の平坦な地形である。検出面は、L I直下のL VI a上面であるが、L VI a自身が削平を受けていたため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。

調査区西側へ延伸するため、遺構全体の正確な規模・形状等は不明である。また、D31グリッド付近で溝跡が大きく途切れているが、後世の削平によるものである。D29グリッドでS K24・29, S D27と、D30グリッドでS D17と重複関係にあり、検出状況から全て本遺構の方が古い。遺構内堆積土は、色調および混入物から大きく2層に分層され、共に黒褐色上で自然堆積の様相を呈する。

調査区内で検出できた規模は、南北推定約44.5m、東西7.5mを測り、L字状の平面形を呈する。

溝幅は北側(U-U')の開口部約0.8m、底面幅0.15m、南側(V-V')の開口部約0.72m、底面幅0.22mを測る。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は、北側は鍋底状であるが、南側に向かうにつれて浅い皿状を呈する。底面標高は南側が若干低く、北側から南へ向かって緩やかに傾斜している。検出面からの深さは、北側が40cm、南側が15cm前後を測り、高低差は20cm程度である。溝跡底面および周囲から小穴等は検出されなかった。

遺物は、堆積土中から縄文土器1点、石器1点が出土した。60図7は、鉢形土器の胴部付近の破片資料である。時期は縄文晩期中葉と推測される。同図8は、磨製石斧の完形品である。器体には敲打による加工調整痕が認められ、両刃は比較的丁寧に研磨されている。

本溝跡は全体の規模・形状等は不明であるが、緩やかに蛇行しながら東側でL字状に屈曲する。

遺構の所属時期・性格については、本遺構と明確に伴出する遺物がなく判断し得ないが、排水・区画溝的な機能が推察され、中世頃の所産の可能性が高い。

(植 村)

## 32号溝跡 S D32 (図56・57、写真44)

本遺構は調査区中央、D25・26、E～G26グリッドに位置し、L VI a上面で検出された。S D16と重複し、本遺構が新しい。

本遺構は、L字形を呈する溝跡である。G26グリッド付近で屈曲し、北東・北西方向に向けて走る。長軸方位は東西辺がN82°W、南北辺がN27°Eで、東西辺の西側は緩やかに湾曲する。D26グリッドで溝が途切れるが、削平によるものかは不明である。

現状の壁上端での規模は、全長38.1m、幅20~54cm、検出面からの深さ2~12cmを測る。底面はほぼ平坦で、東西辺は西から東にかけて緩やかに傾斜する。断面形は逆台形を呈し、周壁の立ち上がりは比較的急である。堆積土は黒色土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。

本遺構はL字形を呈する溝跡で、区画溝と考えられる。出土遺物がなく時期は特定できないが、中世～近世頃の可能性が高い。

(坂 田)

## 33号溝跡 S D33 (図56・57, 写真44)

本遺構は、調査区中央付近やや東寄りのF-H32グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は、標高52.4m程の平坦な地形である。検出面は、L I直下のL VI a上面であるが、L VI a自体が削平を受けていたため、本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。調査区外東側へ延伸するため、遺構全体の正確な規模・形状等は不明である。G32グリッドでS D16・28と重複関係にあり、検出状況から全て本遺構の方が古い。遺構内堆積土は灰黄褐色土の單一層で、自然堆積の様相を呈する。

調査区内で検出できた規模は、東西推定16.2m、溝幅0.18～0.25mを測り、緩やかに蛇行する。

周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は、浅い皿状を呈する。底面は部分的に中央付近が窪んでいるが、東西での標高差は殆どなく、検出面からの深さは7～14cmを測る。溝跡底面および周辺からは小穴等は検出されなかった。

本遺構からは出土遺物はなく、明確な所属時期および性格等は不明である。

(稲 村)

## 第8節 柵 列 跡

今回の2次調査では、11列の柵列跡が検出された。柵列跡の多くは掘立柱建物跡の周囲に分布しており、これらに関連すると考えられる。出土遺物がないため時期の特定はできないが、重複関係や柱間距離・関連遺構の時期からおおよそ中世～近世と推測される。規模と柱間距離は柱痕を結んだ数値で示し、柱痕・柱根が確認されなかったものについては、掘形底面の中心から計測している。

## 1号柵列跡 S A 1 (図19)

本遺構は調査区南側、F39グリッドに位置し、L II b上面で検出された。本遺構と重複する遺構はない。

本遺構は南北2間の柵列跡で、長軸方向はN 3° Eである。現状の壁上端での規模は全長3.32m、各柱間距離は掘形の中心で1.64～1.68mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は直径22～26cm、検出面からの深さ20～31cmを測る。掘形内堆積土は黒褐色土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。

本遺構は南北2間の柵列跡で、規模は全長3.3mである。S B15～17と近接し、長軸方向が一致することから、これらに関連するものと考えられる。出土遺物がなく時期は特定できないが、柱間距離から近世頃の可能性が高い。

## 2号柵列跡 S A 2 (図19)

本遺構は調査区南側、F39グリッドに位置し、L II b上面で検出された。本遺構と重複する遺構

はない。

本遺構は東西2間の櫛列跡で、長軸方向はN90°Eである。現状の壁上端での規模は全長3.8m、各柱間距離は掘形の中心で1.72~2.08mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は径24~30cm、検出面からの深さ16~31cmを測る。掘形内堆積土は黒褐色土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。

本遺構は東西2間の櫛列跡で、規模は全長3.8mである。SB15~17と近接し、長軸方向が直交することから、これらに関連するものと考えられる。出土遺物がなく時期は特定できないが、柱間距離から近世頃の可能性が高い。

### 3号櫛列跡 SA3(図19)

本遺構は調査区南側、F39グリッドに位置し、LIIb上面で検出された。SI2と重複し、本遺構が新しい。

本遺構は東西2間の櫛列跡で、長軸方向はN86°Wである。現状の壁上端での規模は全長3.86m、各柱間距離は掘形の中心で1.84~2.02mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は直径26~30cm、検出面からの深さ12~43cmを測る。掘形内堆積土は黒褐色土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。

本遺構は東西2間の櫛列跡で、規模は全長3.9mである。SB15~17と近接し、長軸方向が直交することから、これらに関連するものと考えられる。出土遺物がなく時期は特定できないが、柱間距離から近世頃の可能性が高い。

### 4号櫛列跡 SA4(図61)

本遺構は調査区北側、G・H3・4グリッドに位置し、LVa上面で検出された。GPと平面的に重複するが、直接重複する部分が無いため新旧関係は不明である。

本遺構は東西3間の櫛列跡で、長軸方向はN70°Wである。現状の壁上端での規模は全長6.84m、各柱間距離は掘形の中心で2.16~2.46mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は直径26~34cm、検出面からの深さ5~13cmを測る。掘形内堆積土はP1・4が黒褐色土1層、P2・3が黒色土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。

本遺構は東西3間の櫛列跡で、規模は全長6.8mである。堀跡であるSD2・3とほぼ平行することから、これらに関連するものと考えられる。出土遺物がなく時期は特定できないが、SD2・3の時期と柱間距離から中世~近世頃の可能性が高い。

### 5号櫛列跡 SA5(図61)

本遺構は調査区北側、G・H5グリッドに位置し、LVa上面で検出された。SK18、GPと重複し、前者より古い。GPとは平面的に重複するものの、直接重複する部分が無いため新旧関係は

不明である。

本遺構は東西3間の柵列跡で、長軸方向はN75°Wである。現状の壁上端での規模は全長5.32m、各柱間距離は掘形の中心で1.66~1.84mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は径29~32cm、検出面からの深さ9~22cmを測る。掘形内堆積土はいずれも黒褐色砂質土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。

本遺構は東西3間の柵列跡で、規模は全長5.3mである。堀跡であるSD2・3とほぼ平行することから、これらに関連するものと考えられる。時期は重複するSK18の時期から、17世紀以前と推測される。

#### 6号柵列跡 SA6 (図61)

本遺構は調査区北側、G・H5グリッドに位置し、LVa上面で検出された。GPと平面的に重複するが、直接重複する部分が無いため新旧関係は不明である。

本遺構は東西3間の柵列跡で、長軸方向はN73°Wである。現状の壁上端での規模は全長5.5m、各柱間距離は掘形の中心で1.74~1.9mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は直径30~36cm、検出面からの深さ12~19cmを測る。P1には径10cmの柱根が遺存する。掘形内堆積土はいずれも黒褐色土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。

本遺構は東西3間の柵列跡で、規模は全長5.5mである。堀跡であるSD2・3とほぼ平行することから、これらに関連するものと考えられる。出土遺物がなく時期は特定できないが、SD2・3の時期と柱間距離から中世~近世頃の可能性が高い。

#### 7号柵列跡 SA7 (図21)

本遺構は調査区北側、H5グリッドに位置し、LVa上面で検出された。SB23、GP3基と重複し、SB23、GP2基より新しい。GP1基とは平面的に重複するが、直接重複する部分が無いため新旧関係は不明である。

本遺構は南北4間の柵列跡で、長軸方向はN12°Eである。現状の壁上端での規模は全長3.04m、各柱間距離は掘形の中心で1.0~1.04mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は直径26~33cm、検出面からの深さ8~17cmを測る。掘形内堆積土はP1・2が黑色土1層、P3・4が黒褐色土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。

本遺構は南北4間の柵列跡で、規模は全長3mである。堀跡であるSD2の入口部に位置し、長軸方向が直交することから、これに関連するものと考えられる。出土遺物がなく時期は特定できないが、SD2の時期と柱間距離から近世頃と推測される。

#### 8号柵列跡 SA8 (図61)

本遺構は調査区北側、F40グリッドに位置し、LIIb上面で検出された。SI2、SD9、GPと

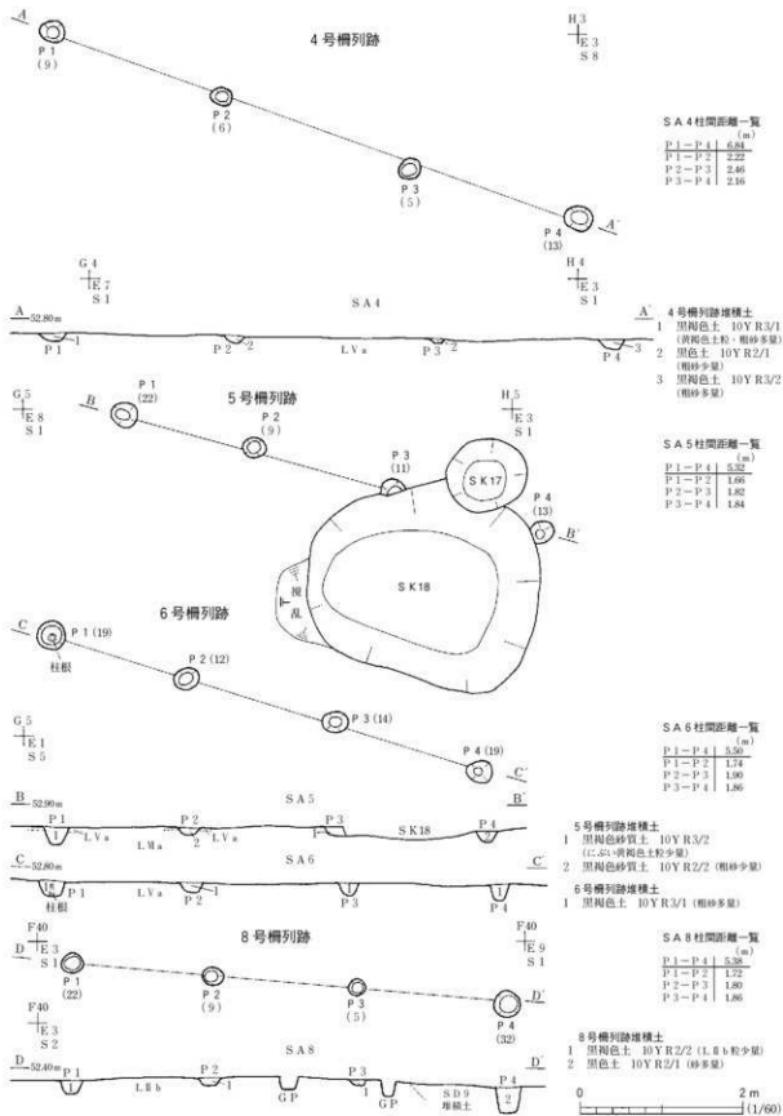


図61 4～6・8号檻列路

重複し、S I 2, S D 9 より新しい。GPとは平面的に重複するものの、直接重複する部分が無いため新旧関係は不明である。

本遺構は東西3間の柵列跡で、長軸方向はN85°Wである。現状の壁上端での規模は全長5.38m、各柱間距離は掘形の中心で1.72~1.86mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は径20~32cm、検出面からの深さ5~32cmを測る。掘形内堆積土はP 1~3が黒褐色土1層、P 4が黒色土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。

本遺構は東西3間の柵列跡で、規模は全長5.4mである。SB15~17, SA1~3と隣接し、長軸方向が一致もしくは直交することから、これらに関連するものと考えられる。時期は出土遺物がなく特定できないが、柱間距離から近世頃の可能性が高い。

#### 9号柵列跡 SA 9 (図62)

本遺構は調査区北側、E・F23グリッドに位置し、LV a上面で検出された。重複する遺構はない。本遺構は東西3間の柵列跡で、長軸方向はN84°Wである。現状の壁上端での規模は全長11.24m、各柱間距離は掘形の中心で3.72~3.8mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は径19~23cm、検出面からの深さ10~18cmを測る。掘形内堆積土はP 1~3が黒色粘質土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。P 4には直径11cmの柱痕が認められる。

本遺構は東西3間の柵列跡で、規模は全長11.2mである。出土遺物がなく時期は特定できないが、中世~近世頃の可能性が高い。

#### 10号柵列跡 SA 10 (図62)

本遺構は調査区北側、E・F23, F24グリッドに位置し、LV a上面で検出された。SB14, GPと平面的に重複するが、直接重複する部分が無いため新旧関係は不明である。

本遺構は東西3間の柵列跡で、長軸方向はN83°Wである。現状の壁上端での規模は全長8.76m、各柱間距離は掘形の中心で2.84~3.02mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は径20~26cm、検出面からの深さ11~15cmを測る。掘形内堆積土はいずれも黒色土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。

本遺構は東西3間の柵列跡で、規模は全長8.8mである。出土遺物がなく時期は特定できないが、中世~近世頃の可能性が高い。

#### 11号柵列跡 SA 11 (図62)

本遺構は調査区北側、F・G23グリッドに位置し、LV a上面で検出された。SB14と平面的に重複するが、直接重複する部分が無いため新旧関係は不明である。

本遺構は東西3間の柵列跡で、長軸方向はN75°Wである。現状の壁上端での規模は全長7.5m、各柱間距離は掘形の中心で2.36~2.68mである。掘形の平面形は不整円形を呈し、規模は径22~34

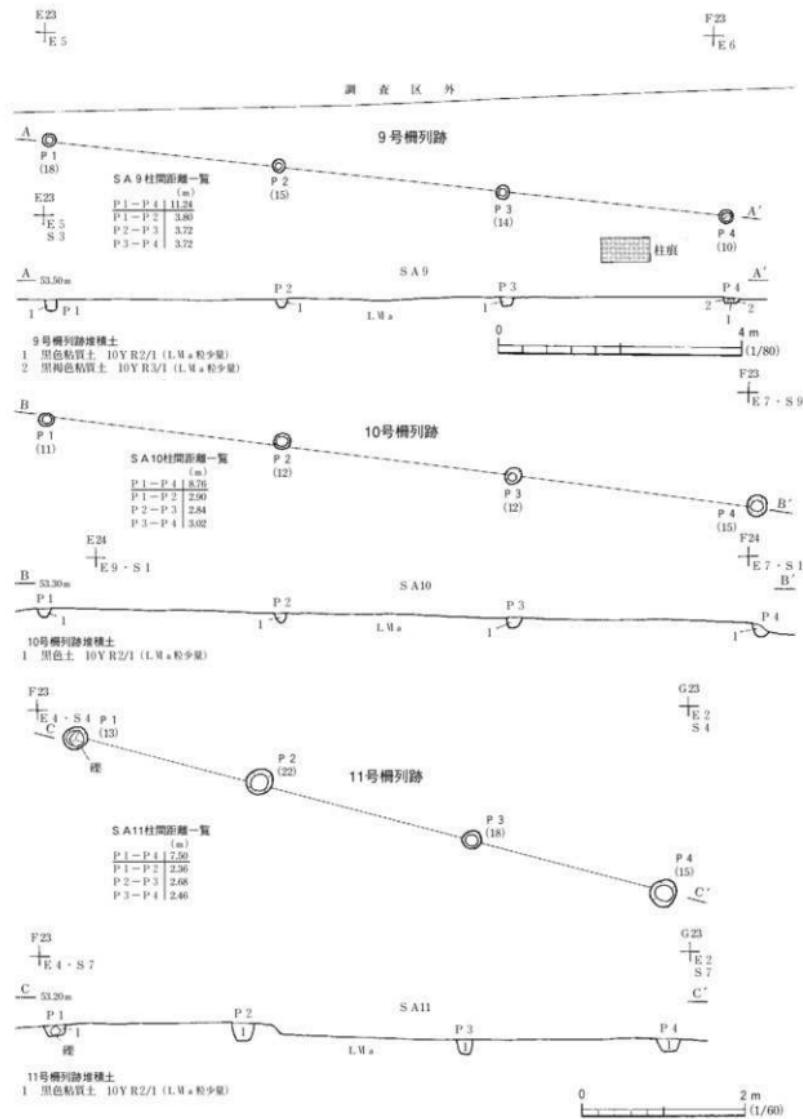


図62 9~11号柵列跡

cm、検出面からの深さ13~22cmを測る。掘形内堆積土はいずれも黒色粘質土1層で、人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。P 1には長さ20cmの根石が認められる。

本遺構は東西3間の柵列跡で、規模は全長7.5mである。出土遺物がなく時期は特定できないが、中世~近世頃の可能性が高い。  
(坂 田)

## 第9節 焼土遺構

今回の2次調査で検出された焼土遺構は2基である。いずれも調査区南側に位置し、L III上面で検出された。時期は出土遺物がなく特定できないが、SG 1と近接するSI 1の検出面が同じであることから、縄文時代中期頃の可能性が高い。

### 1号焼土遺構 SG 1 (図63)

本遺構は調査区南側、F39グリッドに位置し、L III上面で検出された。重複する遺構はない。平面形は不整円形を呈する。規模は直径25cmを測り、検出面から3cmが焼土化している。

周囲に関連するピット等が検出されていないことから、屋外炉と考えられる。出土遺物がなく時期は特定できないが、遺構検出面から縄文時代中期頃の可能性が高い。  
(坂 田)

### 2号焼土遺構 SG 2 (図63)

本遺構は、調査区南側西寄りのB38グリッドに位置する。周囲は標高52.4m程の平坦な地形に位置する。遺構はL III上面で検出した。他の遺構との重複関係は認められない。

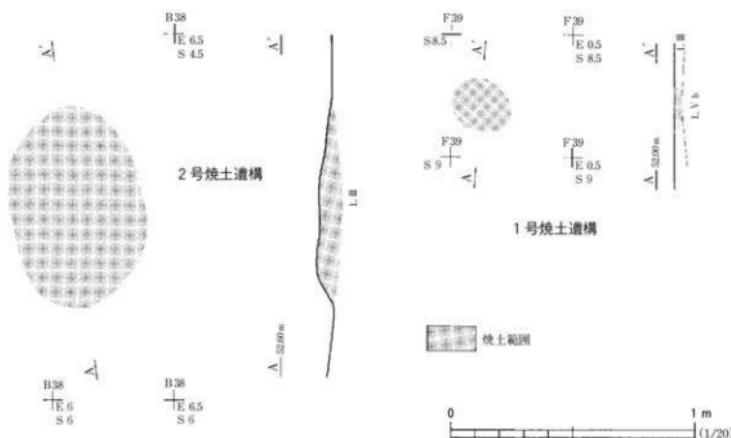


図63 1~2号焼土遺構

焼土面の平面形は、長径0.8m、短径0.56mの楕円形を呈し、焼土面の中央に向かい緩やかに高まる。また、焼土面は検出面から4~8cmの厚さで焼土化している。遺物は出土しなかった。

本遺構の所属時期については、出土遺物がないため正確な時期を特定することはできないが、検出層位などから判断して、縄文時代中期頃の所産と考えている。(稻 村)

## 第10節 その他の遺構と遺構外出土遺物

### 小穴群 G P (付図)

本遺跡では、895基の小穴が確認された。これらの小穴の検出面は、調査区南側(B・C38・39、D36・37、D~F39~41グリッド付近)ではL II a・II b・III上面であるが、それ以外では後世の削平が著しく、LV a・VI aで検出されている。分布状況をみると、調査区北側のSD 1~3により区画された内側(G・H 2~5グリッド付近)、調査区中央(D~G22~25グリッド付近)、調査区南西側(B・C30~35、D32グリッド付近)、調査区南側(D~F39~41グリッド付近)に比較的集中している。調査区北・南側と調査区中央のものについては、いずれも掘立柱建物跡や柵列跡の周囲に分布することから、これらに関連するものと推測される。また調査範囲が狭く、掘立柱建物跡や柵列跡が確認されなかった調査区南西側のものについても、おそらくこれらの遺構に関わるものと考えられる。

平面形は円形もしくは楕円形を基調とする。現状の壁上端での規模は、径12~74cm、検出面からの深さ3~79cmを測る。また、根石や径10cm前後の柱根・柱痕が認められるものも少數確認されている。堆積土は黒褐・黒色土1層のものが大半を占める。

時期は出土遺物がほとんどなく特定できないが、掘立柱建物跡や柵列跡に関連すると考えられることから、中世~近世頃の可能性が高い。(坂 田)

### 遺構外出土遺物 (図64・65、写真63・64)

今回の調査では、遺構外から総数377点の遺物が出土した。内訳は縄文土器が356点と最も多く、他は陶磁器類5点、石器7点、石製品5点、古銭1点、鉄滓3点が出土している。これらの遺物の内、比較的の遺存状態の良いものを図64・65に図示した。遺物は相対的にみると、調査区南側からは縄文土器が、調査区中央付近からは陶磁器類が多く出土する傾向が認められる。これは時代別の遺構の分布を見ても分かるように、調査区南側には縄文時代中期の住居跡等の遺構、調査区中央付近では中世から近世にかけての遺構の分布が窺え、遺構外出土遺物と同様な傾向を示している。以下、順次遺物の特徴について概説する。

**縄文土器** 64図1~8が該当する。1~3は、縄文時代中期中葉に比定される資料である。1・2は、胴部片と考えられ、沈線と粘土紐による施文が認められる。3は肥厚する口縁部の上端に押捺が加えられ、口唇部には窪状の沈線が巡る。4~6は縄文時代中期後葉~末葉に比定される

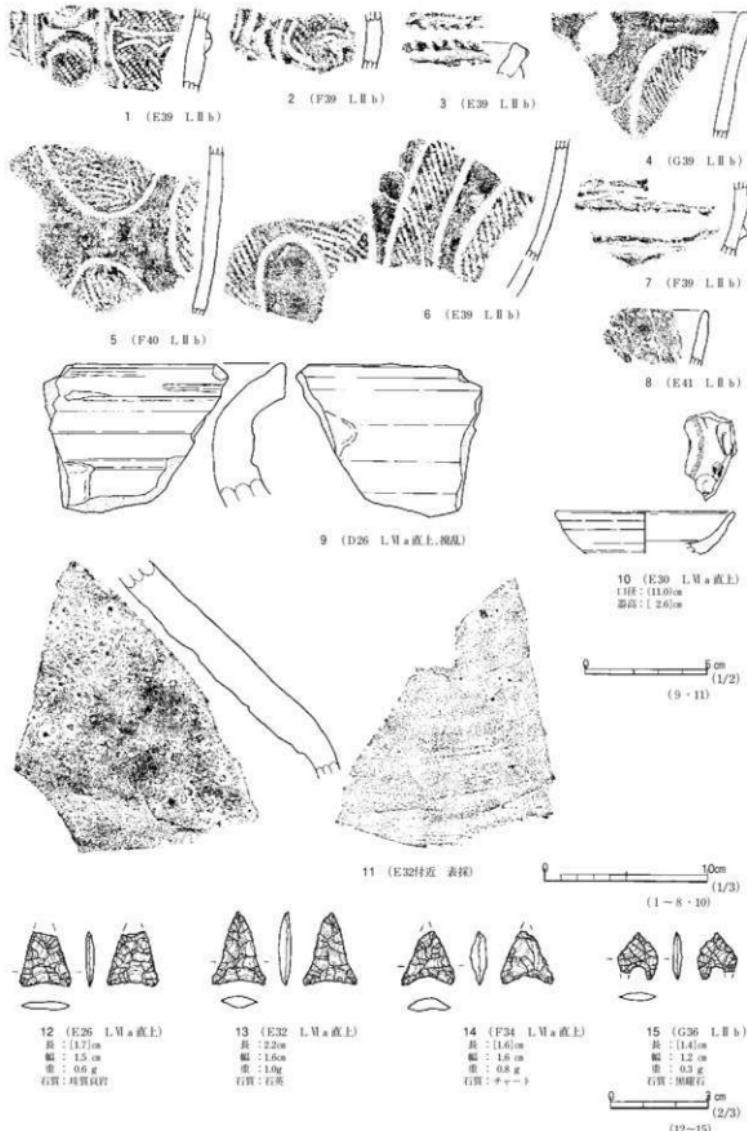


図64 遺構外出土遺物(1)

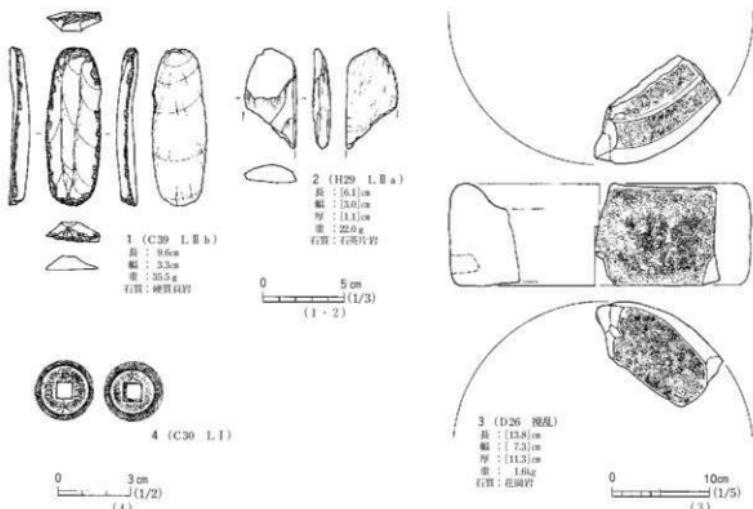


図65 遺構外出土遺物(2)

資料である。いずれも深鉢形土器と考えられ、沈線区画の縄文帯によって文様が描出されるが、具体的な图形は不明である。7・8は縄文時代後期に比定されると考えられる資料である。7は深鉢形土器の口縁付近の資料で、2条の突帯が平行に巡る。8は直立する口縁部の外面に刻みが巡る。

**陶磁器類** 64図9~11が該当する。9は壺器系の甕もしくは壺の口頭部資料である。産地は特定できないが、在地（東北）産の可能性が高く、13世紀代の所産と推測される。10は瀬戸美濃産の鉄絵皿である。連房式段階の志野丸皿で、瀬戸様式編年でいう登窯Ⅰ期の前半期に位置づけられ、17世紀前半の年代が与えられる。11は常滑系の甕もしくは壺の胴部片で、在地（東北）産の可能性が高い。外面全体に焼成時に付着した自然釉が認められる。時期は13~14世紀代のものと推測される。

**石器** 64図12~15、65図1~3が該当する。64図12~15は石鎌で、全て凹基式石鎌と考えられる。13は鎌身が長く、両面は精密な並行刃離で調整されている。65図1は搔削器である。背面の両側縁および打面縁にも調整剝離が認められ、微小な剥離痕は使用によるものであろうか、若干摩滅している。石質は硬質貝岩である。同図2は砥石である。欠損が著しく、表面はほとんど割れているが、残存する表面と両側面は滑らかである。器表面には被熱を受けた痕跡が認められる。石質は石英片岩である。同図3は粉挽き用の石臼である。側面に挽き手孔痕が残存していることから、上臼と考えられる。石質は花崗岩である。

**古銭** 65図4が該当する。所謂「寛永通宝」で、「寶」字の末尾画がハの字状を呈し、背面に「文」字があることから、寛文8年（1668）~天和3年（1683）までの間に鋳造された、俗に文銭といわれる新寛永に属するものとみられる。

(福村)

## 第4章 まとめ

### 1. 掘立柱建物跡・柵列跡の構成

本遺跡からは、1・2次調査で掘立柱建物跡28軒、柵列跡11列が検出されている。これらの遺構の時期は、出土遺物がほとんどなく特定できないが、遺構の重複関係からSB6・7が14～16世紀以降、SB21が16～17世紀以降、SB5が16世紀以前と推定される。また、桁行の柱間距離の平均値はSB5～7・9・12～14・19・27が7尺以上、SB1・15・18・26が6.7～6.9尺、SB2・4・10・11・17が6.2～6.4尺、SB8・16・21・24が6尺未満であるが、松嶋氏によると7尺以上の建物跡は15世紀後葉～16世紀前半、6.2～6.9尺の建物跡は16世紀末葉～17世紀中頃、6尺前後の建物跡は17世紀後葉～18世紀前半に位置づけられている（福島県考古学会中近世部会 2000）。

建物跡と柵列跡は、調査区北東側（G・H2～5グリッド付近）と北西側（E・F8・9、H10グリッド付近）、中央（D～G22～25グリッド付近）、南側（D36、D～G39～42グリッド付近）に分かれ分布する。いずれの分布域においても重複するものが一部認められるが、密度は低い。

調査区北東側にはSB19・20～23、SA4～7が分布する。SD1～3により区画された内側に位置し、いずれも長軸方向が堀跡（SD2・3）と平行、もしくは直交する。調査区北西側にはSB1～7が分布する。SB1・2・6・7は東西棟、SB4は南北棟で、SB1～3とSB6・7はほぼ同位置で建て替えが行われた状況を呈する。SB1・2・4・6・7の長軸方位はN50～58°Wで、区画溝であるSD5とほぼ平行している。建物構成はSB1・2が2間×1間、SB4・6・7が3間×1間で、桁行が7mを超えるSB6・7は本遺跡において大型の類に入る。

調査区中央にはSB14・24～28、SA9～11が分布する。分布域の南側にはSD32が存在し、中央部にはSD16が南北に走る。溝跡はいずれも区画溝と考えられ、SB24・28、SA9～11はSD32とほぼ平行する。SB25はSD16と長軸方向が一致するが、平面的に重複している。建物構成はSB25・28が1間×1間、SB27が2間×1間、SB14・24・27が3間×1間で、SB24には間仕切りが認められる。SB14は桁行が7mを超える建物跡で、調査区北西側のSB6・7と長軸方位が直交している。また、SB28とSA11は長軸方向が直交し、隣接する位置にあることから何らかの関連をもつ可能性が高い。

調査区南側にはSB8～13・15～18、SA1～3・8が分布し、SB15～17はほぼ同じ位置に重複して確認されている。区画溝と考えられるSD8・17が分布域の西側に存在し、いずれの建物跡も溝跡とほぼ平行する。SB8・11・15～17は南北棟、SB9・10・12・13・18が東西棟で、長軸方位が一致もしくは直交するものは、SB8～10・12・15～17とSB11・13・18である。SB17は2間×1間、SB9～12・15・16は3間×1間の建物跡であるが、SB13は3間×3間の身舎南東

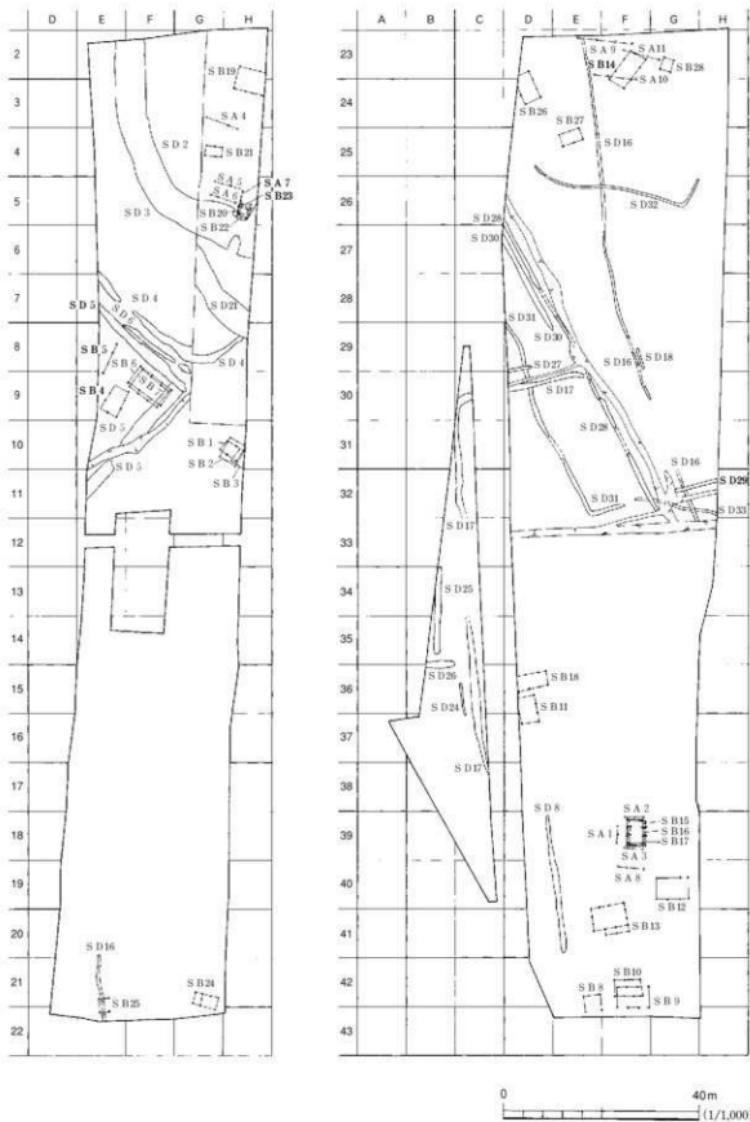


図66 中世・近世の遺構配置図

側に東西2間、南北1間の付帯施設を伴っており、本遺跡では他に類例が見られない建物構成である。SB9・12は南北にやや離れて位置するが、長軸方向・建物構成・規模がほぼ一致することから同時期の可能性が高い。また、柵列跡4列はSB15-17に隣接し、長軸方向もこれらの建物跡と一致もしくは直交することから、これらの建物跡に関連すると考えられる。

(坂 田)

## 2. 館跡の復元

### 館の形状と規模

【占地】 今回検出された館跡は、阿武隈山地から東に張り出す丘陵地帯を背にして、諏戸川北岸の段丘面上の微高地上に位置する。この地の標高は52.5m前後を測り、安政4年(1857)に成立した『奥相志』立野村の項によると「地勢平坦、南方松林続き、西方は連山、北方は小山、邑人邑の南北に連りて住む。中央は広田。東に往還の道路あり」とある。周囲は平坦であり、北方の丘陵地帯を除いては、三方視界を遮るものは少ない。現在、北に字根岸・南に字原の集落があり、字沢東地内には人家は少なく、東照宮が位置する。北は、丘陵地帯を挟んで南相馬市小高区と接している。

【形状と規模】 堀跡(SD2・3)は、西辺と南辺の一部が確認された。確認した全長は約54mを測り、南に向かうにつれて緩やかに東側に湾曲する特異な形状である。また、西辺の北側と南辺の東側は調査区外へ延び、その全体規模は確認しえなかった。そのため、明治期の地籍図との対照を行い、ある程度ではあるが当時の地割と合致することを確認した。

これを示したものが図7である。これを見ると、沢東周辺には杉下・南田・館ノ内・館東等の旧地割りが存在し、現行政区での沢東の範囲とは異なっていることが分かる。今回の調査区は南北に長大であることから、旧沢東地内では止まらず、北側の杉下・南田・館ノ内・館東の地内まで調査区が延伸していることが想定される。また、沢東の北部に位置する旧館東地内には、堀跡(SD2・3)と形状が類似した水路が見受けられる。これは、位置的に堀跡と合致するものと思われるところから、近代期には用水路として利用されていたことが分かり、SD1に属するものと思われる。

また、地籍図によると堀跡は、放物線状を呈した形状であると理解できる。南側に張り出した頂点の部分に土橋状の通路施設(SX3・4)を付設していたと想定される。頂点にあたる通路施設の南北線を軸にして、東西対称に展開する規模は、SD2で全長約95m、SD3で全長約100mを測る。北側調査区境での両側堀との幅は、SD2で約60m、SD3で約66mを測り、北に向かうほど広がると思われる。調査区内で展開した内郭の推定面積は約2,000m<sup>2</sup>である。

今回確認した堀跡と内郭施設は、ほんの一部に過ぎず、北側と東側に堀跡の延長および主要施設の展開が見られると思われる。また、地籍図にみられる用水路の流路状況から、本館跡は副郭式構造の可能性も考えられる。しかし、試掘調査において北側に展開する堀跡の延長および内郭施設を確認することができなかつた(『福島県内遺跡分布調査報告12』)。現地表面が一段低く造成しているため、既に削平されたと思われる。

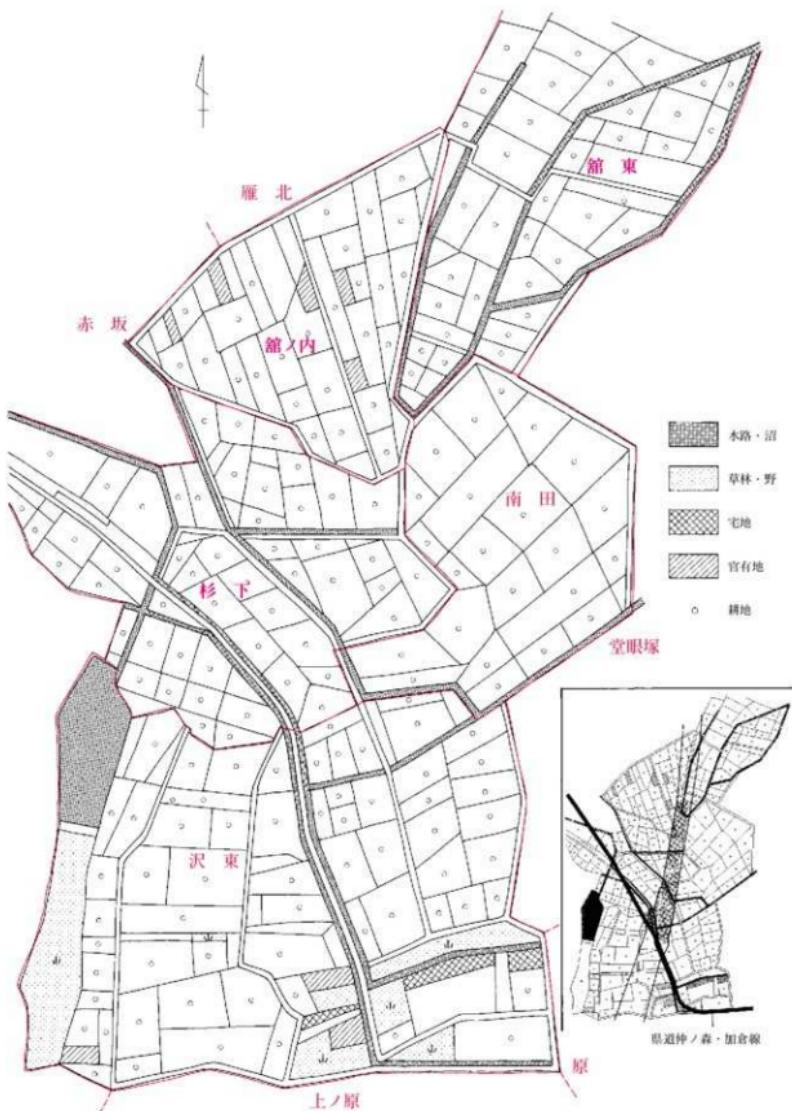


図67 沢東周辺の地籍図（明治22年：地籍図）

### 遺構群の変遷と性格

これまでの調査成果から、位置的に重複するものに、堀跡である S D 2・3、門跡とした S B 20・22・23、内郭施設の S E 2・3、S K 7、S B19・21等があり、該期は少なくとも 4 小期に分かれるものと判断できる。従って、ここではこれらの遺構群を基に変遷を推定してみる。

先述したとおり、門跡である S B 20・22・23は、同一地点に於ける新旧関係が認められる。また、それに伴う囲郭する堀の S D 3 から S D 2への造り替えが認められ、この理解にたって、変遷状況を勘案すると、



という変遷が推定される。この変遷を基に I～IV 期に整理することができた。

しかし、上記以外の建物跡 (S B19) や内郭施設 (S E 1, S A 4) については、変遷を捉えることができない。以上の点を踏まえ、遺構群を連続する 4 小期として理解した場合、図68の変遷となる。但し、変遷を捉えられないピット群の散布状況を見る限り、堀跡外への建物群の広がりは認められない。また、調査区外の北側および東側へ展開する可能性は充分に考慮される。

〔I期〕 S D 3・S X 4 が認められるが、内郭施設は判然としない。S X 4 北辺は、S D 2 に削平されたが、II～IV 期と通路部分を共有する点を考慮すると、S X 3 の突出部と同構造で、柵列や門跡等の付属施設が存在した可能性が考えられる。

〔II期〕 新たに防衛性の強い S D 2 への改築が認められ、S X 3 には木杭を付設した簡易な板橋施設が架けられていたと思われる。この杭列の軸線上に沿う S B23が該期の遺構と認識する。また、S A 5 の構築も該期の可能性がある。内郭施設では、S E 3 とそれに付属する S K 7 が新たに構築されたと思われる。

〔III期〕 S X 3 内の通路構造は基本的に変わらないが、木杭列の同軸線上で、建て替えが認められた S B22が該期の遺構と認識する。また、重複関係から S A 5 が廃絶され、S K18が新たに構築されたと思われる。他に S K 7 が廃絶された後の S E 2・S B21の構築も該期の可能性がある。

〔IV期〕 S X 3 が、木杭を付設した板橋通路から、盛土した後整地された土橋通路への改築が認められ、それに伴い排水溝である S D15が新たに構築されたと思われる。さらに重複関係から S B 20についても該期の遺構と認識する。また、それに伴い S A 7 と軸線を直行させて S A 6 も該期の遺構とした。内郭施設では、明確に構築された遺構の存在は認められず、III期の遺構が該期まで存続する可能性がある。

以上、本館跡は連続した 4 小期が認められるが、変遷も捉えられない遺構も存在し、さらに前後に繋がる可能性も充分に考えられる。館跡としての存続期間は、囲郭する堀の改築、通路施設に伴う建物跡の 3 度の建て替え、通路施設の改築等を考慮すると、比較的長期間に渡って存続していたと考えられる。

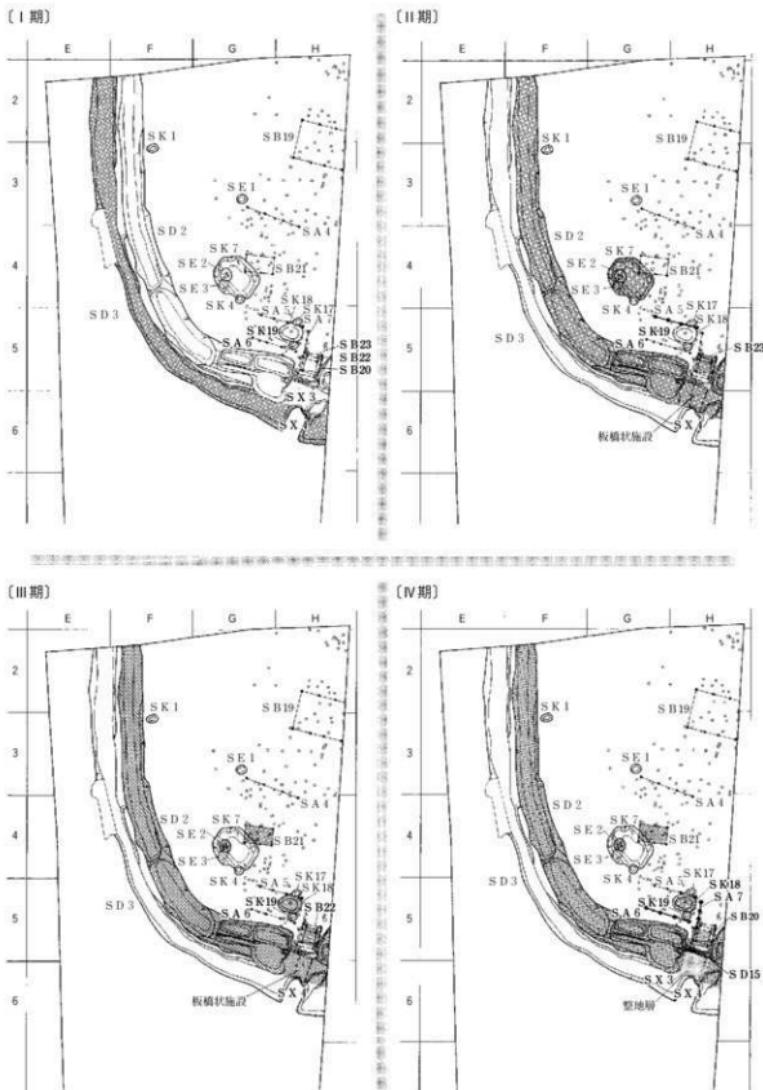


図68 館跡の変遷

## 年代的検討

発掘調査によって得られた、年代的指標は以下の通りである。

- ① 堀跡（S D 1～3）から出土した陶磁器片 → 館跡の存続期間
- ② 堀跡（S D 2）廃棄層から出土した陶磁器片 → 館跡の廃絶時期
- ③ 土橋状遺構（S X 3）内の木杭で行った、放射性炭素年代測定 → II期館跡の成立期

調査区周辺は、後世の大規模な水田整備等による削平が著しく、館跡の内部遺構からの遺物の出土は希少である。よって、他遺構に比べて比較的良好に遺存する囲郭堀（S D 2・3）から出土した遺物を主体として、館跡の存続年代を検討せざるを得ない。なお、近世以降の水路跡と推測されるS D 1は、調査時においてS D 2との明確な溝境を確認できず、出土遺物の殆どがS D 2から抽出されたものであり、S D 2から出土した遺物と共に併用するため、同一資料として検証することとする。

①については、館跡の存続期間を推定することが可能である。年代測定が可能な遺物として、瀬戸産陶器、瓦質土器、瓷器系陶器が挙げられる。以下に各々の特徴を概説する。

古瀬戸段階に属するものは、洗皿・平楕・祖母懐茶壺・茶壺・小皿が認められる。全て小破片であるため、詳細な時期区分は困難であるが、おおよそ瀬戸様式編年でいう中期様式後半期から後期様式にかけてのものが多く、14世紀後葉から15世紀前葉にかけての年代が与えられる。

瀬戸大窯段階では、折縁皿の小破片が1点出土しているのみである。その特徴から大窯4期頃と想定され、16世紀末葉から17世紀初頭のものと考えられる。

連房式登窯段階になると、前段階と比べて若干の出土量が見受けられる。特筆されるものでは、瀬戸美濃産の鉄絵皿（志野丸皿）である。特徴から登窯I段階の中頃に位置付けられ、17世紀中頃の年代が与えられるものである。これ以降の時期を示す遺物の出土が認められないことから、これは館跡の廃絶時期を示す重要な指標になると思われる。

瓦質土器については、小型壺・風炉・火鉢・擂鉢が認められ、色調・胎土等の特徴から、全て在地（東北）産のものと考えられる。これまでの瓦質土器の研究によると、畿内では14世紀代に風炉・火鉢・擂鉢・从具等の中・大型の瓦質製品が出現し、14世紀後半から全国的な展開をみせ、その後、在地産の瓦質製品が発達する。出土資料の大半は小破片であることから、詳細な時代判別は困難であるが、概ね15世紀から16世紀代の年代が与えられる。41図17で示した瓦質擂鉢の形態は、「中世奥羽の土器・陶磁器」での「瓦質土器・擂鉢」の分類でいうⅠ類に属し、15世紀からの出現が認められる。そうすると本遺跡出土の瓦質土器は、少なくとも15世紀代には出現・展開し、16世紀まで存続している可能性がある。

また、S D 1・2からは、赤褐色系の色調を呈する瓷器系陶器の甕または壺の胴部片が相当数認められる。これらは、産地は特定できないが在地（東北）産の可能性が高く、これまでの東北産中世陶器の研究からおおよそ13世紀から14世紀代に比定できる。しかし、これらの製作時期を以てⅠ期の成立時期とするのは困難であり、共伴する遺物の抽出も困難であることから、伝世品として持ち込まれた可能性が高い。

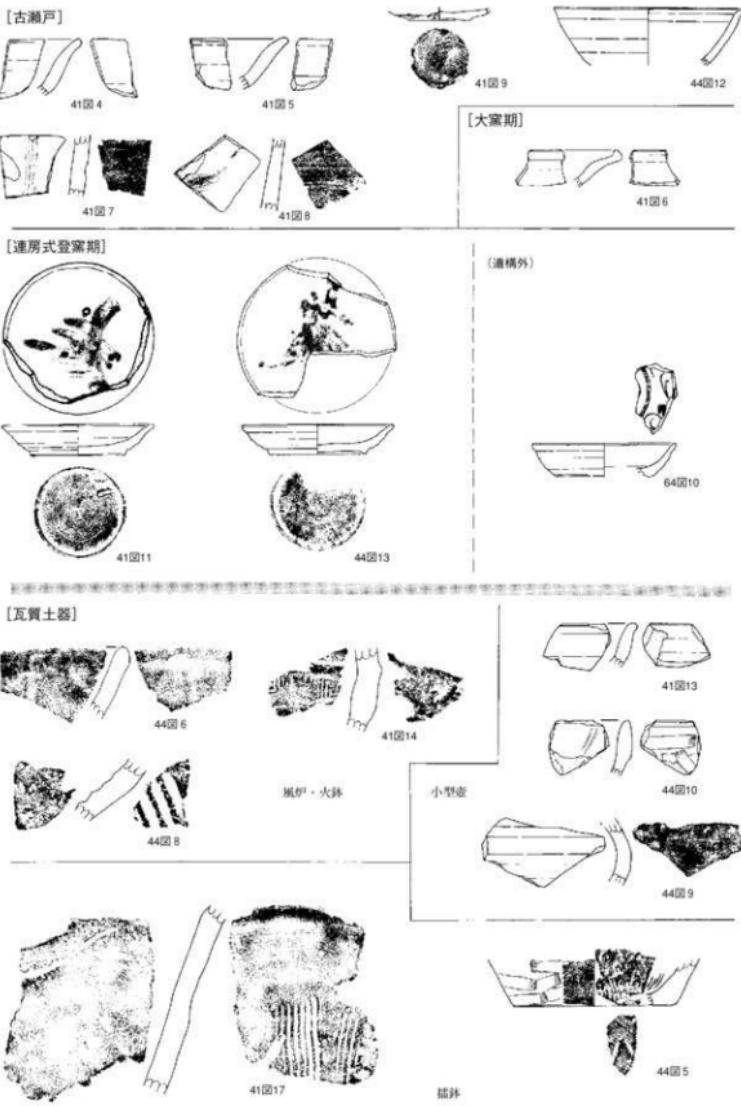


図69 館跡の出土遺物

以上の認識から、Ⅰ期の構築時期については不明な点が多い。しかし、これらの遺物の特徴を合わせると、少なくとも15世紀代には成立していたものと判断される。16世紀は出土遺物が少なくなるものの、概ね17世紀中葉まで継続しているように見受けられる。

②については、2号溝跡内において多量の礫や木材を中心とした、人為的な投棄行為による堆積層が認められ、本館跡の廃絶、Ⅳ期の終了時期を示すものと判断できる。この廃棄層の中には、同時に投棄されたと思われる陶磁器類が含まれることから、廃絶時期を示す重要な指標となる。これによると、人為的な廃棄層から出土した遺物の中には、瀬戸・美濃産の近世陶器がみられ、その特徴から17世紀中葉の年代が与えられる。その他に、時期が下る近世陶器の存在は見られないことから、Ⅳ期の廃絶時期は、17世紀中葉であると考えられる。

③については、付章3でも示してあるように、SX3の橋脚と想定される木杭について、放射性炭素年代測定によって構築時期を試みたところ、およそ16世紀中頃を中心とした年代を得られた。これは、SX3の構築時期のみではなく、SD3からSD2への改修時期、すなわちⅡ期館跡の構築・開始時期を示すものと思われる。自然科学分析の結果を一概に信用するのは支障があるかもしれないが、判断要素の一端となるものとして捉えておきたい。

以上、①～③で得られる年代観は、それぞれ矛盾せず、本館跡は15世紀～17世紀中頃、室町時代中期～近世初期頃の幅で捉えられる。250年程度の存続期間が予想され、17世紀中頃には廃絶されたと考えたい。

#### 文献に見る館跡の出自

『奥相志』立野村の項によると、立野村には合わせて4箇所の館跡が存在したとの記載がみえる。記載事項を記し、若干の検討を加えながら各々の館跡を概観してみる。

①「古館跡」鷹懸無苦内館という。往古金沢氏の居趾なり。金沢氏当邑を食む。而して地蔵堂を建つ。その上棟文に曰く。

大治二丁未年三月廿四日 平朝臣金沢石見守光之 同相模守

大治より二百年を経し元享三年相馬重胤公総州より行方郡に移る。金沢氏それより相馬氏に属し世々軍忠を尽し、後行方郡高平の墨に移る。今に古跡あり。…（以下略）。」

この館跡は、沢東B遺跡の北東側の、南東方向に延びる舌状丘陵地に位置する「立野古館跡」に比定されており、「中丸」の地名が現存する。沢東B所在の館跡の、北東側400m程の位置にあり、眼下に館跡を見下ろせる位置にある。金沢石見守の後裔金沢将監が、元享年間（1321～1324）に相馬重胤公に伴い行方郡高平邑に移住したと「奥相志」高平村の項にも認められ、その後の館の利用を示す文献はみられない。他の館跡と比して、存続する時期が、14世紀前葉まで遡ることは、「古館」の所以であろうか。本館跡との存続時期が若干異なり、直接的な関連は薄いと思われる。

②「小館」江中子に在り。伝え云う、古昔江中子豊前守の居趾なりと。今畠となる。その中に土堤（高さ五尺）有り。椿の木あり。之館主の護神鎮座の跡なり。」

「江中子」地名は現存しないが、明治22年の地籍図によれば、現小字名の字一本杉・仲の町地内

にその所在を求めることができる。本館跡の南東方向に位置し、比較的近距離に位置するように推測される。護神鎮座の跡と推測される椿の木や、土壘の痕跡が認められたらしいが、すでに削平・整地されており、現況での確認はほぼ不可能であり、存続時期等の詳細は不明である。

③「宮田に在り。宮田氏の居趾なり。文禄中宮田尾張の采地二貫四十七文。是れ当邑の住人四条仁右エ門の祖なりと。」

この「宮田」の地は、現行政区においても現存し、沢東B遺跡から西方400m程の闊ノ倉溜池から南へ注ぐ沢地と、その両側段丘上に位置する。『奥相秘鑑』の「顯胤・盛胤両代三都館並出騎之事」にも宮田館の存在が認められ、少なくとも16世紀初頭には成立し、文禄年間（1573～1595）には存続していたと推測されるが、その後の宮田館の存続は不明である。沢東B所在の館跡と存続時期が重なるが、館の規模等については不明な点が多い。宮田氏は後に四条氏と称し、小字「原」地区に移住しており、文久二年（1862）には采地十石の給人郷士であると記してある。なお、「福島県遺跡地図 浜通り地方」、「福島県の中世城館跡」では、隣接する現「仲ノ森」地内に「立野館跡・館東」を記載しているが、この「仲ノ森」地内に、旧「館東」は存在せず、また、旧「宮田」の地を勘案すると、この館跡である可能性が高い。

④「旧第一館東に在り。これ立野氏の居趾なり。古昔立野氏世々此に居り。岡田安房守の三男、立野家を継ぐ。立野土佐守永房と号し当邑を食む。…（以下略）。」

豊房次子立野伊勢旨房（後に道閔と号す。）義子立野市郎右エ門胤重（実は江井氏）利胤公に仕え、義胤公（利胤の子）の伝となる。後老臣として四百石、その子市郎右エ門胤安加田あり、采地五百石となる。寛文八年罪あり剣に伏し家滅す。…（以下略）。」

図67に示したように、明治22年の地籍図によると、沢東周辺には現小字名には存在しない「杉下」「南田」「館ノ内」「館東」等の地名が散見でき、「館東」は現「薬師後」地内に存在することが確認できた。また、前述したように館東地内には、南に張り出した放物線状の用水溝が認められ、本館跡の堀跡の形状とほぼ合致すると思われる。また、ここにみえる岡田安房守は、相馬岡田家当主・岡田義胤を指し、15世紀末から16世紀前半期の惣領家相馬氏御一門の武将である。『相馬岡田系譜』によると、岡田安房守の三男が権現堂刑部盛房（人物不明）に婿入りし「立野」と称するがあり、この立野氏の出自が立野土佐守永房から始まる可能性が高い。その年代は、勘案すると16世紀中頃が妥当であると思われる。

また、「寛文八年（1668）罪あり剣に伏し家滅す」は、立野氏の断絶=館の廃絶も推測され、沢東B所在の館跡の廃絶時期にほぼ合致する。この内容をみる限り、立野氏の居趾は、沢東B所在の本館跡の位置・年代とほぼ一致する。

また補足ではあるが、館東の西隣には「館ノ内」地名が見受けられる。1次調査時には、14世紀から15世紀頃に比定される矩形の区画溝の一部と建物跡等の内部施設が検出されており、関連性が指摘される。若しくは、今回確認した館跡が「館ノ内」地内で主要な構造を示す可能性も考えられるが、現段階では判然としない。

### 歴史的背景と館跡

本館跡の主体となる中世は、位置的に標葉氏の勢力下にあったものと考えられる。南北朝期には標葉氏は南朝に属し、「東奥標葉記」には「建武四年（1337）五月十日 立野原合戦」の記載もみられ、北朝・相馬氏を交えた抗争の舞台となっていたと思われる。しかし、その後の標葉氏の動向を示す史料は少ない。「相馬史料」は「暦応二年（1339）標葉も北朝に帰順す」と記し、以後、標葉氏は北朝方として活躍を示しているが、15世紀に至る標葉氏の動向を示す史料は絶無に近い。そして、戦国時代を迎えると、標葉氏は岩城氏・相馬氏ら奥州海道筋の豪族たちと抗争、同盟を繰り返しながら「標葉六騎七人衆」とよばれる一族を率いて大勢力を保っている。この標葉六騎七人衆（六騎：井戸川・山田・小丸・熊・下浦・上野氏、七人衆：宝原・郡山・樋渡・蘿宿・熊川・牛渡・上浦氏）を見る限り、本遺跡周辺に有力な氏族が居住した痕跡は確認できないことから、Ⅰ期の人物は現在の大字程度かそれ以下の所領を有した土豪クラスであった可能性が高い。

明応元（1492）年12月、権現堂城（浪江町西台）において標葉清隆・隆成父子は相馬盛胤によつて滅ぼされたことにより、標葉郡は相馬氏の勢力下となる。「奥相秘鑑」によると岡田安房守義胤が行方岡田村から権現堂城に移り住んだとあり、相馬方の一方の大将をつとめるようになる。こうした情勢のもと、相馬岡田氏から分かれた庶流家として「立野氏」が本地に赴き、Ⅱ期館跡の改築を行って本拠地とし、その後の立野氏によるⅢ期→Ⅳ期への変遷を展開していくと推察される。

藩政下での立野氏は、「相馬史料」で業績が目立ち、立野胤重（市郎右衛門）は、初代相馬藩主・相馬利胤の嫡子・虎之助（二代藩主・義胤）が誕生すると、その守役に選任され、寛永6年（1629）には、二代藩主・相馬義胤の徳川秀忠・家光への謁見に義胤の共として従っている。その後は老臣に昇進し、日光社参や參勤交代等で義胤の傍近くに仕えていることが窺える。また、慶安2年（1649）には立野胤房（八左衛門）が、相馬大坂加番に目付として加わっている。

17世紀前半期については、等々の立野氏の業績が見受けられる。しかし、寛文8年（1668）に相馬領内で起こる所謂「百姓騒動」による責任から、立野市右衛門の切腹、御家断絶の処置がとられ、本館跡の廃絶を迎えると考えられる。

(福 村)

### 3. ま と め

最後に本遺跡の成果についてまとめてみる。沢東B遺跡は、平成15年度に第1次発掘調査が実施されている（〔常磐自動車道遺跡調査報告39〕）。調査区全域は、基盤整備や場整備によって大きく改変された部分があり、遺構群への影響が多大である。その中で、確認された遺構・遺物の状況から本遺跡の変遷についてまとめてみる。

第1の二期である縄文時代には、本遺跡内には流路跡が幾重にも巡り、その流路沿いに集落が營まれていたと思われる。竪穴住居跡は複式<sup>3</sup>の存在から中期末葉の時期であり、9号溝跡を中心とする流路跡から該期の多量の土器類（縄文時代中期末葉を主体）が出土している。しかし、この集

落は短期間の内に終息し、それ以降の集落の形成はみられない。

その後、弥生～古代にかけての遺構・遺物の存在はほとんど認められず、本遺跡では空白期となる。13世紀代に至ると、建物跡や竪穴遺構等をはじめ、該期の遺構・遺物が認められるようになり、第2の画期が訪れる。やがて、14世紀代になると方形状に区画された屋敷が構築され、比較的上層の農層クラスが居住したと思われる。15世紀になると、その屋敷に隣接する形で、放射線状に堀が巡る特異な形状をした館が構築され、該期の遺物が飛躍的に認められるようになる。居住した人物は、現在の大字程度かそれ以下の所領を有した土豪クラスの小領主であったと推測される。

やがて、16世紀中頃になると、堀を改築する形でより防御性のあるものになり、相馬岡田氏系譜とされる立野氏が居住すると思われる。周辺にも、集落が散在し本遺跡の最盛期を迎える。約100年の居住後、17世紀中頃になると館は廃絶されたと思われる。

これ以後、遺構・遺物は希薄となり、生活空間としての機能は途絶え、周辺は田畠に帰する。館の痕跡は僅か小字名（館ノ内・館東）にのみ残っていたが、近現代に至って、現「葉師後」に包括され、その存在も不明になり現在に至る。現在、昭和40年代の基盤整備や場整備によって遺跡周辺は大きく改変され、沢東の字名が今に残る。

(福 村)

#### 引用・参考文献

- 飯村 均 1995 「各地の土器様相(東北)」「概説 中世の土器・陶磁器」 中世土器研究会  
飯村 均 1997 「中世食器の地域性 2—東北南部」「国立歴史民俗博物館研究報告」第71集  
飯村 均ほか 2003 「中世奥羽の土器・陶磁器」 東北中世考古学会  
大石直正・小林清二 1969 「第三編 中世」「福島県史 第一巻 通史編一」 福島県  
郡山市教育委員会 1988 「荒井猪田遺跡 第1次～第6次発掘調査報告一」  
郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団ほか 2001 「荒井猪田遺跡(2・3・4区)」  
郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団ほか 2006 「江戸時代のやきもの 一生産と流通」 記念講演会・シンポジウム資料集  
浪江町史編纂委員会編 1974 「浪江町史」 浪江町  
原町市教育委員会 2003 「古代・中世」「原町市史 第四巻 資料編II」 原町市  
福島県教育委員会・財團法人福島県文化振興事業団・日本道路公团 2002 「常磐自動車道遺跡調査報告27」  
福島県教育委員会・財團法人福島県文化振興事業団・日本道路公团 2005 「常磐自動車道遺跡調査報告39」  
福島県教育委員会 1988 「福島県の中世城館跡」  
1996 「福島県遺跡地図 浜通り地方」  
2003 「福島県内遺跡分布調査報告9」  
2006 「福島県内遺跡分布調査報告12」  
福島県考古学会中近世部会 2000 「東北南部における中近世集落の諸問題—掘立柱建物跡を中心として」  
双葉町史編纂委員会編 1995 「双葉町史 第一巻 通史編」 双葉町



## 付章 自然科学分析



# 付章1 沢東B遺跡出土赤彩土器顔料の成分分析

財福島県文化振興事業団：小林 啓

## 1 はじめに

沢東B遺跡からは、土器の内面及び外面に赤色顔料が付着する縄文土器が数点出土している。本年度における当事業団の発掘調査事業においても、南相馬市原町区の赤柴遺跡・同市小高区の大田切遺跡など複数の遺跡から赤色顔料が付着する土器が出土している。これまで福島県内において、赤色顔料の付着した土器について数件の分析事例が報告されている（1988 成瀬ほか）。しかし、これらの多くは赤彩土器・朱塗土器との記載に留まり顔料について具体的に示されることはない。

縄文時代に使用されていた赤色顔料はベンガラ（ $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ）と水銀朱（HgS）の2種類であり、各々その発色原因となる金属元素が異なっている。そこで、土器に付着した赤色顔料の種類を明らかにするため、X線分析顕微鏡（エネルギー分散型蛍光X線分析装置）による元素分析を行った。

## 2 試 料

縄文土器片2点（1・2図、いずれも縄文中期の所産）。文化財の分析は非破壊分析を原則とするため、試料を採取せずに土器そのものを分析試料とした。

## 3 方 法

試料の元素分析はX線分析顕微鏡を用いて、以下の条件により行った。

〔分析条件〕 X線分析顕微鏡（堀場製作所製XGT-2700）、X線管球：ロジウム（Rh）、検出器：半導体検出器、測定雰囲気：大気、管電圧：50kV、管電流：1.0mA、分析径：100 $\mu\text{m}$ 、測定時間：120秒

## 4 結 果

分析の結果、赤色顔料が付着する全ての土器から鉄（Fe）が顕著に検出された（図1・2）。前述の通り、縄文時代に使用された赤色顔料は、鉄を主成分とした「ベンガラ」（酸化第二鉄： $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ）と水銀と硫黄の化合物である「水銀朱」（硫化水銀：HgS）の2種類である。分析結果から、鉄（Fe）が顕著に検出され、分析箇所のいずれからも水銀（Hg）が検出されないことから、付着する赤色顔料は鉄由来の顔料「ベンガラ」である可能性が高い。

これまでの分析事例から、福島県浜通り地方において縄文後期には水銀朱、縄文晩期～弥生時代初頭にはベンガラが優勢に使用されるとの報告がある（2005 奥山）。今年度調査が行われた、大田切遺跡の顔料分析も同様の傾向を示す。未だ分析例が乏しい現状ではあるが、今回の分析結果はそれを補強するかたちとなる。ただし、鉄は土器本体の胎土からも検出されることから、今後、顕微鏡観察による赤色顔料の粒形確認やX線回折分析による結晶構造の解析を行うことが望まれる。

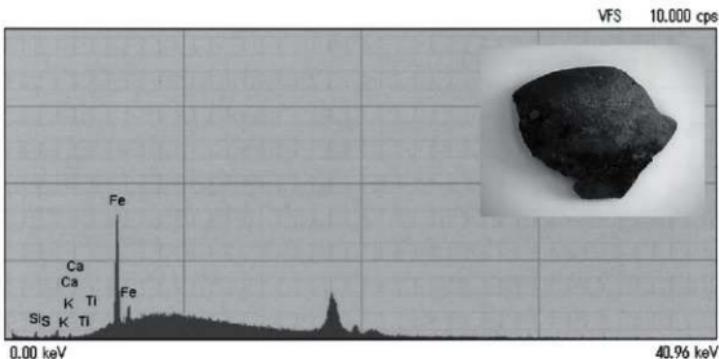


図1 赤彩土器1

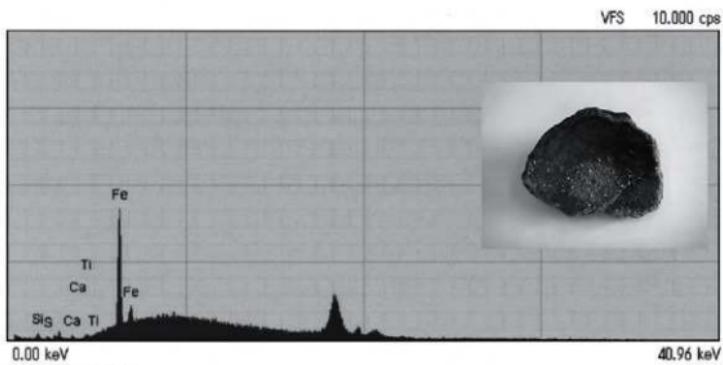


図2 赤彩土器2

#### 参考文献

- 1) 成瀬正和 1981 「三貫地遺跡出土の土器に塗彩された赤色顔料について」『三貫地遺跡』 三貫地遺跡発掘調査団
- 2) 成瀬正和 1988 「薄磯貝塚出土の赤色顔料関係遺物」「薄磯貝塚」 いわき市埋蔵文化財調査報告第19冊
- 3) 成瀬正和 1993 「赤彩土器・漆塗土器」「久世原館・番匠地遺跡」 いわき市埋蔵文化財調査報告第33冊
- 4) 松井敏也ほか 1998 「福島県原町市桜井古墳群上洪佐支群7号墳出土赤色顔料成分分析 報告書」「桜井古墳群上洪佐支群7号墳」 原町市埋蔵文化財報告書第27集
- 5) 奥山誠義 2005 「赤彩土器顔料の蛍光X線分析」「研究紀要2003」 福島県文化財センター白河館研究紀要
- 6) 奥山誠義 2005 「上平A遺跡出土石皿付着顔料の分析結果」「常磐自動車道遺跡調査報告41」 福島県文化財調査報告書第428集

## 付章2 沢東B遺跡出土漆器の成分分析

財福島県文化振興事業団：小林 啓

### 1はじめに

沢東B遺跡の発掘調査では、中世から近世（16～17世紀）にかけてと考えられる障子塀の溝跡（SD2）から木製の漆器が1点出土している。漆器や漆塗膜の自然科学的分析には、化学分析・構造調査・組成調査・構造調査など分析方法は多岐にわたる。本報告では、出土した漆器の発色要因を特定するため、当該設置のX線分析顕微鏡による漆塗膜の組成調査を行った。

### 2試料

漆器（漆塗膜）1点（47図5：16～17世紀の所産）。文化財の分析は非破壊を原則とするため、漆器からの積極的な試料採取を行わず、剥がれ落ちた漆塗膜を分析試料とした。

### 3方法

試料の元素分析はX線分析顕微鏡を用いて、以下の条件により行った。

【分析条件】 X線分析顕微鏡（堀場製作所製XGT-2700）、X線管球：ロジウム（Rh）、検出器：半導体検出器、測定雰囲気：大気、管電圧：50kV、管電流：1.0mA、分析径：100μm、測定時間：300秒

### 4結果

分析の結果、漆塗膜の赤色部からはケイ素（Si）・硫黄（S）・カルシウム（Ca）・鉄（Fe）の4元素が検出された（図1）。このうち、いずれの分析箇所においても鉄（Fe）が最も顕著に検出されている。中世において使用が確認されている赤色顔料には、朱（化学組成：HgS）・ベンガラ（化学組成：Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）・鉛丹（化学組成：Pb<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）が存在する。分析の結果、赤色部のいずれからも水銀（Hg）や鉛（Pb）が全く検出されず、鉄（Fe）のみが顕著であることから、漆塗膜の発色要因は鉄由来の赤色顔料「ベンガラ」である可能性が高い。ベンガラを使用した赤色漆は、弥生後期以降その詳細が明らかとなっていないが、中世以降（15世紀以降）には再びその使用が確認されるとの報告がある（2003 岡田文男）。これは本遺跡の時期とも概ね重なる。この他、分析により検出されたケイ素（Si）やカルシウム（Ca）などは、土壤成分に含まれる元素と判断される。

尚、前述の通り漆塗膜の分析は多岐にわたり、特に遺跡出土の漆器の場合には、塗膜構造の調査によって時期・用途など様々な事例が報告されている。本資料においても、顕微鏡観察の結果から赤色と黒色の多層構造であることは確認されたが詳細は不明である。今後、塗膜試料の薄片を作成して詳細な構造調査を行うことが望まれる。

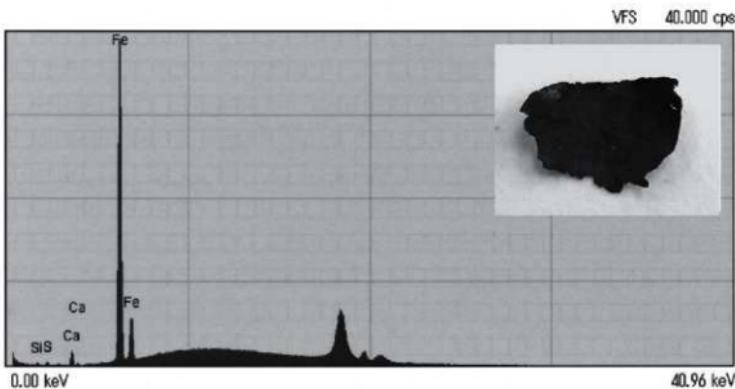


図1 漆器(47図5)

#### 参考文献

- 1) 四柳嘉章 1991 「外堀跡(2号堀跡)出土漆器の科学分析」「国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告」福島県文化財調査報告書第217集
- 2) 四柳嘉章 1992 「堀ノ内遺跡出土漆器及び曲物の科学分析」「東北横断自動車道遺跡調査報告17」福島県文化財調査報告書第284集
- 3) 四柳嘉章 1993 「福島県田村郡小野町鴨ヶ館跡出土漆器の塗膜分析」「東北横断自動車道遺跡調査報告21」福島県文化財調査報告書第292集
- 4) 四柳嘉章 1994 「西会津町羽黒山館跡出土漆器の塗膜分析」「東北横断自動車道遺跡調査報告26」福島県文化財調査報告書第306集
- 5) 岡田文男 1995 「土器表面の塗様物質についての観察」「三春ダム関連遺跡発掘調査報告書8」福島県文化財調査報告書第322集
- 6) 四柳嘉章 1997 「弓手原A遺跡出土の漆器について」「棚上川ダム遺跡発掘調査報告V」福島県文化財調査報告書第345集
- 7) 吉田生物研究所㈱ 2001 「福島県猪苗代町鍛冶屋遺跡出土の漆製品の塗膜構造」「常磐自動車道遺跡調査報告28」福島県文化財調査報告書第387集
- 8) パリノ・サーヴェイ㈱ 2003 「漆器分析」「会津麻賀北道路遺跡調査報告3」福島県文化財調査報告書第415集

## 付章3 沢東B遺跡出土の炭化物・木質遺物の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

小林紘一・丹生越子・伊藤 茂・山形秀樹・瀬谷 薫

Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・藤根 久

### 1はじめに

沢東B遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

### 2 試料と方法

測定試料の情報、調整データは表1のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-6615	遺構: 1号特殊遺構 部位: 1層 資料番号: FB. H18. 001	試料の種類: 炭化材 試料の性状: 最外以外樹皮に近い部分を採取 状況: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N・水酸化ナトリウム1N・塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6616	遺構: 1号特殊遺構 部位: 1層 資料番号: FB. H18. 002	試料の種類: 炭化材 試料の性状: 最外以外樹皮に近い部分を採取 状況: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N・水酸化ナトリウム1N・塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6617	遺構: SX 3 (橋脚跡) 取上: 枝3 資料番号: FB. H18. 003	試料の種類: 生材(枝) 試料の性状: 不明 状況: wet カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N・水酸化ナトリウム1N・塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6618	遺構: SX 3 (橋脚跡) 取上: 枝1 資料番号: FB. H18. 004	試料の種類: 生材(枝) 試料の性状: 不明 状況: wet カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N・水酸化ナトリウム1N・塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6619	遺構: SX 3 (橋脚跡) 取上: 枝13 資料番号: FB. H18. 005	試料の種類: 生材(枝) 試料の性状: 不明 状況: wet カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N・水酸化ナトリウム1N・塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6620	遺構: SX 3 (橋脚跡) 取上: 枝11 資料番号: FB. H18. 006	試料の種類: 生材(枝) 試料の性状: 不明 状況: wet カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N・水酸化ナトリウム1N・塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6621	遺構: SX 3 (橋脚跡) 取上: 枝14 資料番号: FB. H18. 007	試料の種類: 生材(枝) 試料の性状: 不明 状況: wet カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N・水酸化ナトリウム1N・塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6622	遺構: SX 3 (橋脚跡) 取上: 枝12 資料番号: FB. H18. 008	試料の種類: 生材(枝) 試料の性状: 不明 状況: wet カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N・水酸化ナトリウム1N・塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6623	遺構: 2号溝路(枝) 取上: N. 9 資料番号: FB. H18. 009	試料の種類: 生材(枝) 試料の性状: 最外以外樹皮に近い部分を採取 状況: wet カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N・水酸化ナトリウム1N・塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6624	遺構: 2号溝路(枝) 取上: N. 4 資料番号: FB. H18. 010	試料の種類: 生材(枝) 試料の性状: 不明 状況: wet カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N・水酸化ナトリウム1N・塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクトAMS・1.5SDH

## 3 結 果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行った<sup>14</sup>C年代、<sup>14</sup>C年代を曆年代に較正した年代範囲、曆年較正に用いた年代値を、図1に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代 (yrBP) の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

表2 放射性炭素年代測定及び曆年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	<sup>14</sup> C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C年代を曆年代に較正した年代範囲		曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )
			1 $\sigma$ 曆年代範囲	2 $\sigma$ 曆年代範囲	
PLD-6615	-25.93 $\pm$ 0.10	815 $\pm$ 20	1215AD(68.2%)1255AD	1180AD(95.4%)1255AD	816 $\pm$ 20
PLD-6616	-24.58 $\pm$ 0.12	760 $\pm$ 20	1250AD(68.2%)1280AD	1220AD(95.4%)1280AD	760 $\pm$ 21
PLD-6617	-24.71 $\pm$ 0.12	330 $\pm$ 20	1510AD(11.4%)1530AD 1540AD(56.8%)1640AD	1480AD(95.4%)1640AD	329 $\pm$ 20
PLD-6618	-24.78 $\pm$ 0.15	360 $\pm$ 20	1460AD(43.7%)1520AD 1590AD(24.5%)1620AD	1450AD(51.2%)1530AD 1550AD(44.2%)1640AD	359 $\pm$ 19
PLD-6619	-24.54 $\pm$ 0.13	330 $\pm$ 20	1490AD(15.8%)1530AD 1550AD(52.4%)1640AD	1480AD(95.4%)1640AD	332 $\pm$ 19
PLD-6620	-25.95 $\pm$ 0.12	395 $\pm$ 20	1445AD(68.2%)1485AD	1440AD(85.4%)1520AD 1600AD(10.0%)1620AD	395 $\pm$ 19
PLD-6621	-26.48 $\pm$ 0.13	340 $\pm$ 20	1490AD(21.3%)1530AD 1550AD(46.9%)1640AD	1470AD(95.4%)1640AD	338 $\pm$ 19
PLD-6622	-25.98 $\pm$ 0.12	390 $\pm$ 20	1450AD(66.8%)1490AD 1600AD(1.4%)1610AD	1440AD(82.6%)1520AD 1590AD(12.8%)1620AD	391 $\pm$ 19
PLD-6623	-27.87 $\pm$ 0.11	240 $\pm$ 20	1640AD(53.7%)1670AD 1780AD(14.5%)1800AD	1640AD(68.2%)1670AD 1780AD(27.2%)1800AD	241 $\pm$ 19
PLD-6624	-24.88 $\pm$ 0.11	165 $\pm$ 20	1670AD(10.2%)1690AD 1730AD(42.0%)1780AD 1790AD(6.0%)1810AD 1930AD(9.9%)1950AD	1660AD(17.2%)1700AD 1720AD(59.4%)1820AD 1910AD(18.9%)1960AD	166 $\pm$ 18

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

#### 暦年較正

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期5730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年範囲は95.4%信頼限界の暦年範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

## 4 考 察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それより確かな年代値の範囲が示された。

1号特殊遺構では、2試料を測定しているが、いずれも最外年輪と思われる部分を測定している。 $1\sigma$ 暦年範囲において1215-1255 cal AD (68.2%) および1250-1280 cal AD (68.2%) であり、13世紀代の年代範囲を示す。

橋脚試料では、 $1\sigma$ 暦年範囲において1540-1640 cal AD (56.8%)、1460-1520 cal AD (43.7%)、1550-1640 cal AD (52.4%)、1445-1485 cal AD (68.2%)、1550-1640 cal AD (46.9%)、1450-1490 cal AD (66.8%) であり、全体としては15世紀中頃から17世紀中頃の年代範囲を示す。最外年輪を測定しているとは言えないため、より新しい年代値を見ると16世紀中頃から17世紀中頃の年代が有力である。なお、この時代の年代値としては年代範囲が広いが、最外年輪を確認できるような木材について、ウイーグルマッチング測定を実施することにより、より年代範囲を限定できるものと考えられる。

2号溝跡の杭材では、 $1\sigma$ 暦年範囲において1640-1670 cal AD (53.7%)、1730-1780 cal AD (42.0%) であり、両者の年代値には開きがある。これら試料も最外年輪を測定しているとは言えないため、年代値の評価は困難である。

## 参考文献

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. *Radiocarbon*, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. *Radiocarbon*, 43, 355-363.
- 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の<sup>14</sup>C年代。3-20。
- Reimer PJ., MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmeli, JR Southon, M Stuiver, S Talano, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration. 0-26 cal kyr BP. *Radiocarbon*, 46, 1029-1058.

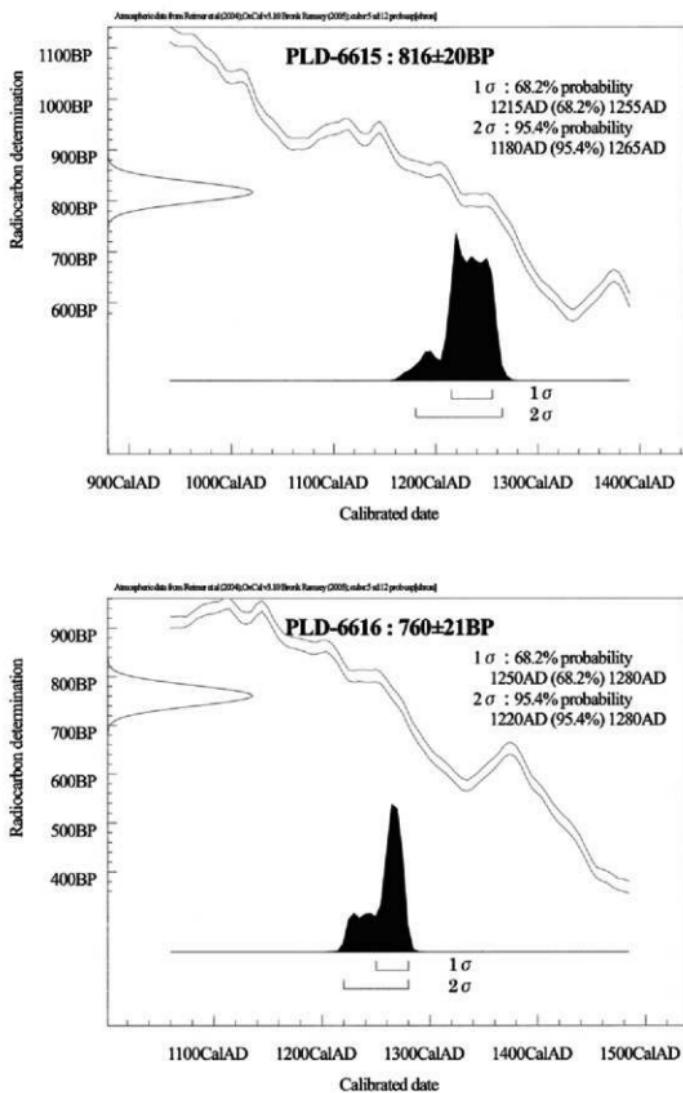


図1 暦年較正結果(1)

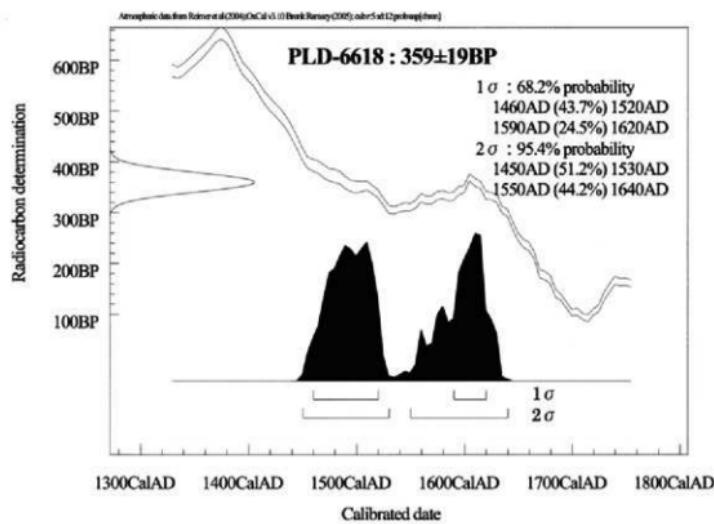
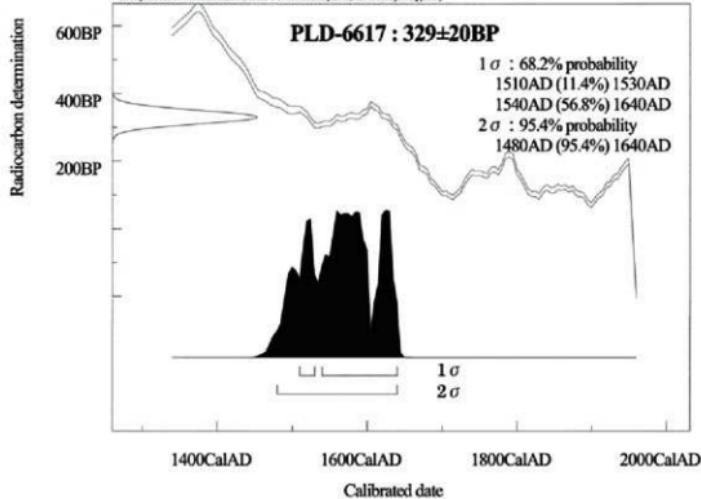


図2 历年較正結果(2)

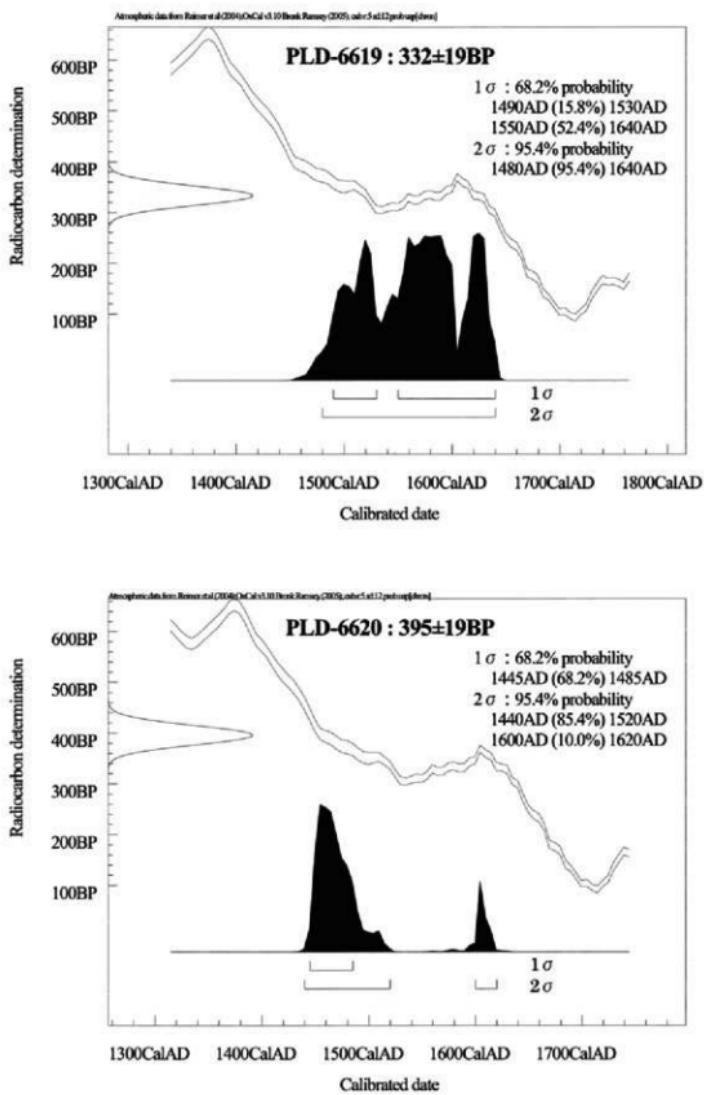


図3 暦年較正結果(3)

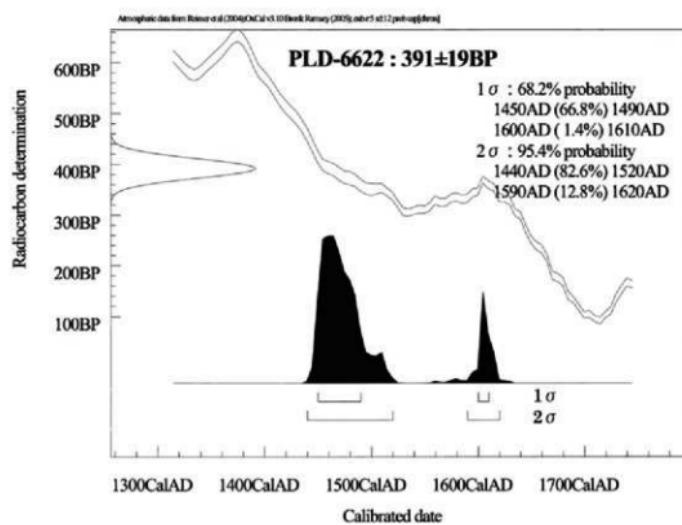
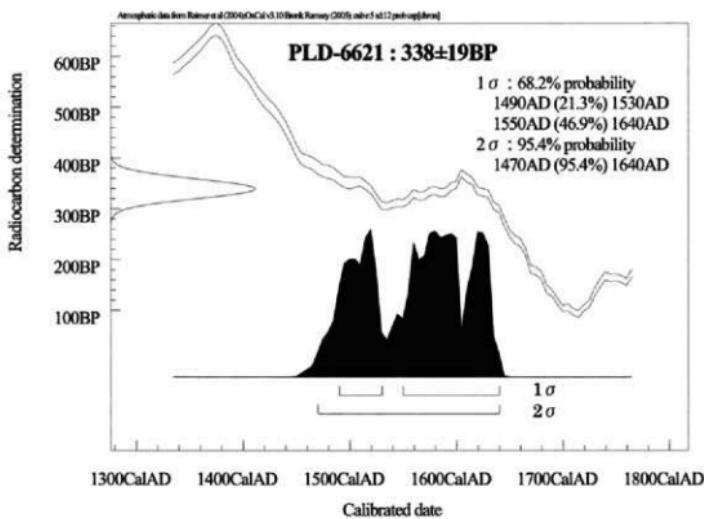


図4 暦年較正結果(4)

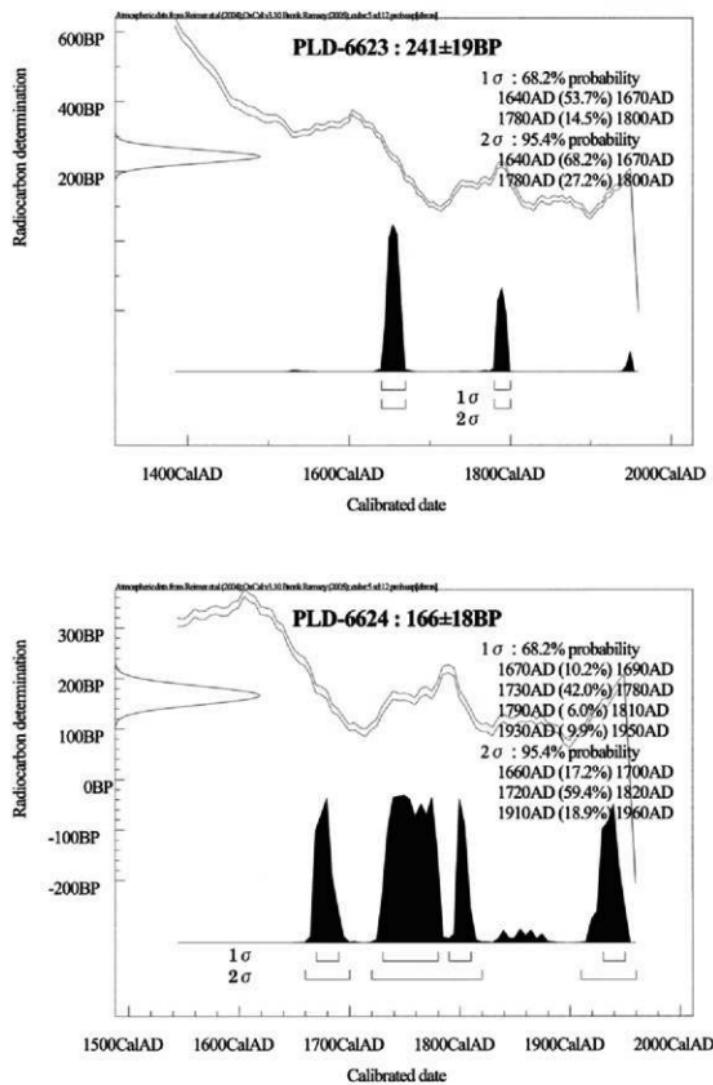


図5 暦年較正結果(5)

## 付章4 沢東B遺跡より出土した土木材の樹種

古代の森研究会：吉川 純子

### 1 試料と方法

沢東B遺跡は浪江町にある遺跡で、発掘区北側に溝で囲まれた施設が確認された。この溝跡から橋脚の材が検出され、施設内の井戸跡には井戸構築材が残っていた。当時の木材利用状況を解明する目的でこれら土木材10点の樹種同定を行った。遺物からは直接ステンレス剃刀にて木材の横断面、放射断面、接線断面の3方向の切片を取り、封入剤ガムクロラールでプレパラートを作成した。

作成したプレパラートは3週間ほど静置して余分な水分を蒸発させたのち、生物顕微鏡Nikon Eclipse 80iで透過光を用いて観察・同定を行った。

### 2 同定結果

沢東B遺跡から出土した土木材の樹種同定結果を表1にまとめた。3号特殊遺構の橋脚材はすべてクリであった。2号溝跡出土の杭2試料はクリであった。1号井戸跡出土の井戸構築材2試料はコナラ節であった。以下に同定された樹種の木材解剖学的記載を行う。

表1 沢東B遺跡出土土木材の樹種

資料番号	遺物	出土位置	出土層位	樹種	挿図番号	備考
FB.H18.001	木質遺物	3号特殊遺構	—	クリ	27図, 28図8	杭8
FB.H18.002	木質遺物	3号特殊遺構	—	クリ	27図, 29図5	杭13
FB.H18.003	木質遺物	3号特殊遺構	—	クリ	27図, 28図2	杭2
FB.H18.004	木質遺物	3号特殊遺構	—	クリ	27図	杭15
FB.H18.005	木質遺物	3号特殊遺構	—	クリ	27図, 28図1	杭1
FB.H18.006	木質遺物	3号特殊遺構	—	クリ	27図, 28図6	杭6
FB.H18.007	木質遺物	2号溝跡	ℓ 2	クリ	43図, 47図1	
FB.H18.008	木質遺物	2号溝跡	ℓ 2	クリ	43図, 47図2	
FB.H18.009	木質遺物	1号井戸跡	ℓ 4	コナラ節	37図1	
FB.H18.010	木質遺物	1号井戸跡	ℓ 4	コナラ節	37図2	

クリ (*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*)：年輪はじめに大きな道管が数個配列し、その後徐々に径を減じて火炎状に小さい道管が配列する環孔材。道管の穿孔は単一で、道管内に充填物質であるチロースがあることが多い。放射組織は同性で単列ないし2列である。

コナラ節 (*Quercus sect. Prinns*)：年輪はじめに大きな道管が数個配列し、その後急に径を減じて火炎状に小さくやや角張った道管が配列する環孔材。横断面にしばしば広放射組織がみられる。道管の穿孔は単一で放射組織は同性、単列のものと幅の広い広放射組織がある。

### 3 考 察

沢東B遺跡の10試料の土木材を同定した結果、8試料がクリ、2試料がコナラ節であった。橋脚と溝内の杭にはクリが使われており、東北地方では周辺から調達しやすいクリを土木材として普通に利用していたと考えられる。井戸構築材はコナラ節を使っており、コナラ節も土木材として適材である。クリ、コナラ節は水湿に強く耐久性があり、東北地方の16~17世紀では建築土木材としての利用頻度が高く(山田 1993)、周辺で調達しやすい適材を選択していたと考えられる。

#### 引用文献

山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史、植生史研究特別第1号」植生史研究会 1-244。

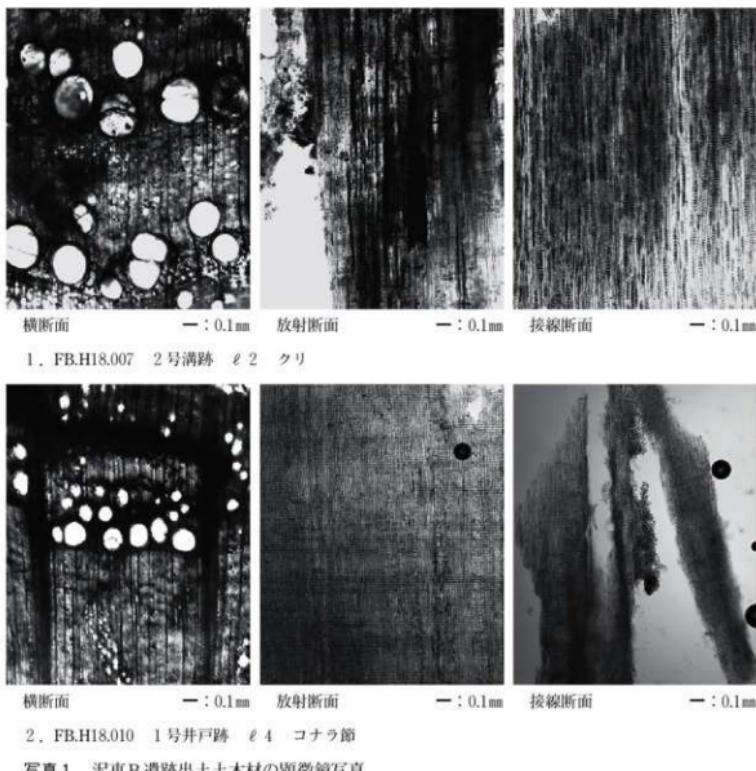


写真1 沢東B遺跡出土土木材の顕微鏡写真

## 付章 5 沢東B遺跡出土製鉄遺物の化学分析調査

JFEテクノリサーチ株式会社  
分析・評価事業部  
埋蔵文化財調査研究室

### 1 はじめに

福島県双葉郡浪江町に所在する沢東B遺跡から出土した鉄関連遺物について、学術的な記録と今後の調査のための一環として化学成分分析を含む自然科学的観点での調査を依頼された。調査の観点として、出土鉄滓の化学成分分析、外観観察、ミクロ組織観察、X線回折調査に基づき、資料の製造工程上の位置づけおよび始発原料などを中心に調査した。その結果について報告する。

### 2 調査項目および試験・観察方法

#### (1) 調査項目

調査資料の記号、出土遺構注記および調査項目を表2に示す。

#### (2) 調査方法

##### (i) 重量計測、外観観察および金属探知調査

資料重量の計量は電子天秤を使用して行い、少数点2位で四捨五入した。各種試験用試料を採取する前に、資料の外観をmm単位まであるスケールを同時に写し込みで撮影した。資料の出土位置や資料の種別等は提供された資料に準拠した。

着磁力調査については、直径30mmのリング状フェライト磁石を使用し、6mmを1単位として35cmの高さから吊した磁石が動き始める位置を着磁度として数値で示した。遺物内の残存金属の有無は金属探知機(MC: metal checker)を用いて調査した。金属検知にあたっては参考標準として直径と高さを等しくした金属鉄円柱(1.5mmφx1.5mmH, 2.0mmφx2.0mmH, 5mmφx5mmH, 10mmφx10mmH, 16mmφx16mmH, 20mmφx20mmH, 30mmφx30mmH)を使用し、これとの対比で金属鉄の大きさを判断した。

##### (ii) 化学成分分析

化学成分分析は鉄鋼に関するJIS分析法に準じて行っている。

- ・全鉄(T.Fe): 三塩化チタン還元-二クロム酸カリウム滴定法。
- ・金属鉄(M.Fe): 臭素メタノール分解-EDTA滴定法。
- ・酸化第一鉄(FeO): 二クロム酸カリウム滴定法。
- ・酸化第二鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>): 計算。
- ・化合水(C.W.): カールフィッシャー法。
- ・炭素(C), イオウ(S): 燃焼-赤外線吸収法。

- ・ライム (CaO), 酸化マグネシウム (MgO), 酸化マンガン (MnO), 酸化ナトリウム (Na<sub>2</sub>O), 硅素 (Si), マンガン (Mn), リン (P), 銅 (Cu), ニッケル (Ni), コバルト (Co), アルミニウム (Al), ヴァナジウム (V), チタン (Ti) : ICP発光分光分析法。
- ・シリカ (SiO<sub>2</sub>), アルミナ (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>), 酸化カルシウム (CaO), 酸化マグネシウム (MgO), 二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>), 酸化リン (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>), 酸化カリウム (K<sub>2</sub>O) : ガラスピード蛍光X線分析法 (但しCaO, MgO, MnOは含有量に応じてICP分析法またはガラスピード蛍光X線分析法を選択)。
- ・酸化ナトリウム (Na<sub>2</sub>O) : 原子吸光法。

なお、鉄滓中成分は、18成分（全鉄T.Fe, 金属鉄M.Fe, 酸化第一鉄FeO, 酸化第二鉄Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, シリカSiO<sub>2</sub>, アルミナAl<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, ライムCaO, マグネシアMgO, 酸化ナトリウムNa<sub>2</sub>O, 酸化カリウムK<sub>2</sub>O, 二酸化チタンTiO<sub>2</sub>, 酸化マンガンMnO, 酸化リンP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>, コバルトCo, 合成水C.W., 炭素C, ヴァナジウムV, 銅Cu）を化学分析している。分析は各元素について分析し、酸化物に換算して表示している。

羽口・胎土成分は、13成分（全鉄T.Fe, 酸化鉄FeO, シリカSiO<sub>2</sub>, アルミナAl<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, ライムCaO, マグネシアMgO, 合成水C.W., 燃熱減量Ig.Loss, 二酸化チタンTiO<sub>2</sub>, 酸化マンガンMnO, 酸化ナトリウムNa<sub>2</sub>O, 酸化カリウムK<sub>2</sub>O, 炭素C,）を化学分析している。なお、粘土については産地検討のためルビジュウムRbとストロンチウムSrについても分析した。

鉄製品中成分の化学分析は、13成分（炭素C, シリコンSi, マンガンMn, リンP, イオウS, 銅Cu, ニッケルNi, コバルトCo, アルミニウムAl, ヴァナジウムV, チタンTi, カルシウムCa, マグネシウムMg）を化学分析している。

#### (iii) 顕微鏡組織観察

資料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨（鏡面仕上げ）する。炉壁・羽口・粘土などの鉱物性資料については顕微鏡で観察しながら代表的な鉱物組織などを観察し、その特徴から材質、用途、熱履歴などを判断する。津関連資料も炉壁・羽口などと同様の観察を行うが特徴的鉱物組織から成分的な特徴に結びつけ製・精錬・鍛造工程の判別、使用原料などを検討する。金属鉄はナイタール（5%硝酸アルコール液）で腐食後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、顕微鏡組織および介在物（不純物、非金属鉱物）の存在状態等から製鉄・鍛冶工程の加工状況や材質を判断する。原則として100倍および400倍で撮影を行う。必要に応じて実体顕微鏡（5倍~20倍）による観察もする。

#### (iv) X線回折測定

試料を粉碎して板状に成形し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれに固有な反射（回折）された特性X線を検出（回折）できることを利用して、試料中の未知の化合物を同定することができる。多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が同定される。

### 3 調査結果および考察

分析調査結果を図表にまとめて154頁～162頁に示す。表2に調査資料と調査項目をまとめた。表3に資料の化学成分分析結果をそれぞれ示す。

全資料の外観写真を157頁・158頁に、鉄滓の顕微鏡ミクロ組織を159頁・160頁、X線回折結果を160頁～162頁に示す。鉱物組織の英文、化学式は一括して5参考に示した。各資料の調査結果をまとめ、最も確からしい推定結果を最後にまとめる。

以下、資料の番号順に述べる。

測定装置 理学電気株式会社製 ロータフレックス (RINT-1500型)

測定条件

①使用 X線	Co-K $\alpha$ (波長=1.79021 Å)
②K $\beta$ 線の除去	グラファイト単結晶モノクロメーター
③管電圧・管電流	48kV・200mA
④スキャニング・スピード	4.0° /min
⑤サンプリング・インターパル	0.020°
⑥D.S.スリット	1°
⑦R.S.スリット	0.15mm
⑧S.S.スリット	1°
⑨検出器	シンチレーション・カウンター

#### 資料1 (FB.H18・001) 鉄滓, 着磁度: 1, MC: なし

外観: 外観を写真1に示す。重量39.1g、長さ47.1mm、幅33.8mm、厚さ23.4mm。オーストラリアの地図のような形状の鉄滓で資料全面が茶褐色の鉄錆で覆われている。窪みには細粒の砂が固着している。左側の写真右側には明瞭な木炭痕が認められる。試料表面の凹凸はあまり激しくなく、小さな気泡が表面に見られるが資料全体としてはあまり発泡していないように見える。外見上は鍛冶系の滓のように見え、茶褐色の鉄錆の状況からは金属鉄が多く存在し、これが錆化したように思われる。着磁度は弱く1で、メタル反応はない。資料中央から切断し調査資料を採取する。

顕微鏡組織: 顕微鏡組織を写真3に示す。写真3では四角形や多角形の内部が抜けたような形状の乳白色のウルボスピニル (Ulvospinel: 2 FeO · TiO<sub>2</sub>) が多量に観察され、その背後にやや灰色が濃く褐色を帯びた棒状のファイヤライト (Fayalite: 2 FeO · SiO<sub>2</sub>) がみられる。また、資料の周囲や空隙の周りにはゲーサイト (Goethite:  $\alpha$ -FeOOH) などの錆化鉄が観察される。明瞭に観察される鉱物相はこの3種類で、ほかには白く輝く金属鉄の微粒子が観察されるのみである。

X線回折結果: 結果をX線回折チャート1 (資料1: FB.H18・001) に示す。ウルボスピニルが最強回折強度を示し、次いでファイヤライトの弱い回折線とマグнетサイト (Magnetite: Fe<sub>3</sub>O<sub>4</sub>) の弱

い回折線が観察される。ヘマタイト ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) の微弱な回折線も検出され、顕微鏡観察とおおよそ一致した結果である。

**化学成分：**化学成分分析結果を表3に示す。全鉄49.3%に対して金属鉄は0.22%である。 $\text{FeO}$ は45.8%， $\text{Fe}_2\text{O}_3$ は19.27%である。 $\text{SiO}_2$ は7.9%と低く， $\text{Al}_2\text{O}_3$ は2.14%である。結合水は0.89%で，ゲーサイトなどの鉄化鉄も少量含まれていると思われる。 $\text{TiO}_2$ は19.7%含まれており，始発原料は高 $\text{TiO}_2$ 砂鉄と考えられる。 $\text{CaO}$ は0.37%， $\text{MgO}$ は1.84%含まれている。造滓成分量 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$ ) は少なく12.54%である。 $\text{FeO}-\text{SiO}_2-\text{TiO}_2$ の3元系に換算するとそれぞれ70.2%，8.5%，21.3%となり，5参考に示した平衡状態図では，ウルボスピニル領域にあり，ウルボスピニル，ファイヤライトが主要鉱物となりマグネタイト（ウスタイト： $\text{FeO}$ との混晶の可能性もある）なども晶出すると想定され，顕微鏡組織，X線回折と基本的には一致している。

図1～3はこれまでの調査結果に基づき，鉄滓の化学成分の特徴から製鉄工程の位置づけを検討する図である。これらの図には本調査資料のデータ（●印）とともに近隣の浪江町・太刀洗遺跡，大熊町・上平遺跡から出土した鉄滓で高 $\text{TiO}_2$ 砂鉄を原料とする製錬滓と明瞭に判断されたデータ（■印）も一緒に示した。図1～3で見ると図1では $\text{TiO}_2$ が高く，T.Feも高い製錬滓グループの位置あり，図2では製錬滓と精錬鍛冶滓との境界付近にある。図3では精錬鍛冶滓よりも $\text{MnO}/\text{TiO}_2$ が高い側にずれた位置にある。本資料のみのデータで図1～3の位置づけを判断すると製錬滓のように思われる。しかし，太刀洗遺跡，上平遺跡のデータと比較すると，明らかに異なる位置にあり，精錬鍛冶滓と判断するほうが妥当のように思われる。

また，顕微鏡観察では明らかに良く溶融しており，金属鉄粒子も観察され，金属鉄が存在した痕跡の鉄化鉄も観察されており，これらを考慮すると，本資料はT.Feと $\text{TiO}_2$ の関係から還元初期の製錬滓とは考えにくい。すなわち，精錬鍛冶工程の初期に生成した滓の可能性が高いように思われる。

以上の結果から，本資料は高 $\text{TiO}_2$ 砂鉄を原料とする製鉄工程で生成した滓で精錬鍛冶工程の比較的初期に生成した可能性が高いように推察される。

## 資料2 (FB.H18・002) 鉄滓，着磁度：1，MC：なし

**外観：**外観を写真1に示す。重量123.7g，長さ60.2mm，幅49.0mm，厚さ36.1mm。四角形状で茶褐色を呈し一見すると煉瓦片のように見える鉄滓である。片面は酸化土砂に覆われ，反対面は水酸化鉄が滲み込んだ茶褐色を呈している。が壁粘土が酸化土砂化している。一部に白色の長石粒が見られるがその量は多くない。小さな気泡は認められるが比較的緻密で重量感がある。資料の1/3に着磁度1の弱い磁着が認められるがその他の部分にはない。メタル反応はない。縦方向に1/3に切削し調査資料を採取する。

**顕微鏡組織：**顕微鏡組織を写真3に示す。乳白色の蘭玉状のウスタイト ( $\text{Wustite} : \text{FeO}$ ) が多く観察され，その背後に沈むようにやや灰色の濃い棒状のファイヤライトが観察される。資料の周囲

にはゲーサイトなどの鉄化鉄が見られる。ウルボスピネルはウスタイト粒子の中に晶出しているようにも見えるが明確ではない。

**X線回折結果：**結果をX線回折チャート2（資料2：FB.H18・002）に示す。ウスタイトとファイヤライトが最強回折強度を示し、次いでウルボスピネルとマグネタイトの中程度の回折線が観察される。このほかにはゲーサイトと金属鉄の微弱な回折線も検出され、顕微鏡観察の主要鉱物は一致している。

**化学成分：**化学成分分析結果を表3に示す。全鉄55.0%に対して金属鉄は0.22%である。FeOは54.8%，Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>は17.4%である。SiO<sub>2</sub>は15.6%で、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>は3.40%である。結合水は1.15%で、ゲーサイトなどの鉄化鉄が存在しているとみられる。TiO<sub>2</sub>は2.58%である。CaOは1.49%，MgOは0.49%含まれている。造津成分量（SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+Na<sub>2</sub>O+K<sub>2</sub>O）は21.98%である。FeO-SiO<sub>2</sub>-TiO<sub>2</sub>の3元系に換算するとそれぞれ79.9%，17.3%，2.9%となり、5参考に示した平衡状態図では、FeOnの領域にあり、ウスタイトとファイヤライトが主要鉱物相として晶出すると見られ、顕微鏡観察と一致する。

鉄津の化学成分の特徴から製鉄工程の位置づけを検討する図1～3で見るといずれも精錬鍛冶津と判断される位置にある。

以上から、本資料は砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶津と推察される。

### 資料3（FB.H18・003） 鉄津、着磁度：1～2、MC：なし

**外観：**外観を写真2に示す。重量842.3g、長さ125.2mm、幅94.6mm、厚さ54.6mm。中央がやや窪み、反対側が緩やかに湾曲した大きな椀型津の一部と思われる資料である。資料全体は水酸化鉄の茶褐色に覆われている。上面は比較的滑らかであるのに対して下面は炉内の堆積状態を映し、小さな凹凸や5～15mm大の木炭痕が観察される。着磁度は場所により異なり1～2である。メタル反応はない。資料の左を斜めに1/5切断し、試料を採取する。

**顕微鏡組織：**顕微鏡組織を写真3に示す。褐色を帯びた灰色の多角形状のウルボスピネルが圧倒的に多く観察され、この間に乳白色のウスタイトが観察される。これらの背後に灰色のファイヤライトが観察される。写真には示されていないが試料の周囲や空隙にはゲーサイトなどの鉄化鉄が観察される。

**X線回折結果：**結果をX線回折チャート3（資料3：FB.H18・003）に示す。ウルボスピネルが最強度の回折を示し、ウスタイトとファイヤライトが中程度の回折線を示している。このほかにはマグネタイトの弱い回折線とゲーサイトの微弱な回折線がみられる。顕微鏡観察とほぼ一致した結果である。

**化学成分：**化学成分分析結果を表3に示す。全鉄55.1%に対して金属鉄は0.22%である。FeOは52.4%，Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>は20.2%である。SiO<sub>2</sub>は7.96%と比較的少なく、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>は2.55%である。結合水は1.43%で、ゲーサイトなどの鉄化鉄が存在しているとみられる。TiO<sub>2</sub>は12.6%である。CaOは

0.25%，MgOは0.74%含まれている。造済成分量( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$ )は少なくなく11.73%である。 $\text{FeO}-\text{SiO}_2-\text{TiO}_2$ の3元系に換算するとそれぞれ77.9%，8.5%，13.5%となり、5参考に示した平衡状態図では、 $\text{FeO}$ の境界に近いウルボスピネルの領域にあり、ウルボスピネル、ウスタイト、ファイアライトが主要鉱物相として晶出すると見られ、顕微鏡観察と一致する。

鉄滓の化学成分の特徴から製鉄工程の位置づけを検討する図1～3で見ると図1では $\text{TiO}_2$ の高い精錬鍛冶滓の範囲にあり、図2では鍛冶系の滓に近い位置にある。図3では精錬鍛冶滓と見てもよいと思われる位置にある。成分的には精錬鍛冶滓と判断される位置にある。

以上から、本資料は砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓と推察される。

#### 資料4 (FB.H18・004) 鉄滓、着磁度：1～2、MC：なし

**外観：**外観を写真2に示す。重量150.6g、長さ61.5mm、幅46.8mm、厚さ32.6mm。酸化土砂に厚く覆われた黒色の鍛冶系の滓である。大きく発泡している部分が1ヶ所あるが、滓全体では気泡は小さく緻密である。上面は窪んでいるが凹凸が激しく、融点直上の滓が滴下して凝固した感がある。着磁は部分的に異なり1～2である。メタル反応はない。資料の左上部を1/4に斜めに切断し調査資料を採取する。

**顕微鏡組織：**顕微鏡組織を写真3に示す。乳白色のウスタイトと灰色の板状ファイアライトが圧倒的である。ファイアライト粒子の中に薄い染み状にウルボスピネルらしき組織が見られる。写真にはないが資料の周囲にはわずかにゲーサイトなどの錆化鉄が観察される。

**X線回折結果：**結果をX線回折チャート4(資料4：FB.H18・004)に示す。ウスタイトとファイアライトの最強の回折線が見られ、ウルボスピネルとマグネタイトの弱い回折線が見られる。主要鉱物相は顕微鏡観察とほぼ一致している。

**化学成分：**化学成分分析結果を表3に示す。全鉄56.5%に対して金属鉄は0.28%である。 $\text{FeO}$ は62.2%， $\text{Fe}_2\text{O}_3$ は11.25%である。 $\text{SiO}_2$ は16.7%で $\text{Al}_2\text{O}_3$ は3.48%である。結合水は0.55%で少なく、ゲーサイトなどの錆化鉄はあまり含まれていないと思われる。 $\text{TiO}_2$ は1.96%含まれており始発原料は砂鉄と見られる。 $\text{CaO}$ は0.73%で、 $\text{MgO}$ は0.57%含まれている。造済成分量( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$ )は22.26%である。 $\text{FeO}-\text{SiO}_2-\text{TiO}_2$ の3元系に換算するとそれぞれ79.7%，18.1%，2.1%となり、5参考に示した平衡状態図では、 $\text{FeO}$ の領域にあり、ウスタイトとファイアライトが主要鉱物相として晶出すると見られ、顕微鏡観察と一致する。

鉄滓の化学成分の特徴から製鉄工程の位置づけを検討する図1～3で見るといずれも精錬鍛冶滓と判断される位置にある。

以上から、本資料は砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓と推察される。

#### 資料5 (FB.H18・005) 鉄滓、着磁度：1、MC：なし

**外観：**外観を写真2に示す。重量33.9g、長さ45.2mm、幅32.5mm、厚さ28.7mm。滓と土砂が渾然一

体となった感のある資料で、酸化土砂が深く浸入しているように見える。指で強く押すと壊れる程度の固結状態である。滓そのものは黒色で小さく発泡している。着磁度1の弱い着磁があるが、メタル反応はない。

**顕微鏡組織**：顕微鏡組織を写真4に示す。組織的には不均質な資料である。写真4の資料5の1の左は乳白色の蘭玉状ウスタイトが集中している部分であり、これより右側は樹枝状のマグネタイトが集中しており、これらの背後は板状のファイヤライトである。写真4の資料5の2では右側は樹枝状のマグネタイトが集中し、左側はほとんどファイヤライトのみの組織になっている。鍛冶系の滓と思われる顕微鏡組織である。

**X線回折結果**：結果をX線回折チャート5（資料5：FB.H18・005）に示す。ファイヤライトの中低度の回折線が見られるほかはウスタイト、ウルボスピニル、マグネタイトの弱い回折線が見られ、石英（Quartz： $\text{SiO}_4$ ）、ヘマタイト（Hematite： $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ）、アノーサイト（Anorthite： $\text{CaOAl}_2\text{O}_2\text{SiO}_4$ ）などの粘土や土砂成分の微弱な回折線が見られる。顕微鏡組織に見られる滓に土砂が付着しているものと見られる。

**化学成分**：化学成分分析結果を表3に示す。全鉄48.8%に対して金属鉄は0.28%である。 $\text{FeO}$ は48.1%， $\text{Fe}_2\text{O}_3$ は15.9%である。 $\text{SiO}_2$ は21.9%と多く、 $\text{Al}_2\text{O}_3$ は4.35%である。結合水は1.53%，ゲーサイトなどの錆化鉄が含まれていると思われる。 $\text{TiO}_2$ は2.82%含まれており始発原料は砂鉄と見られる。 $\text{CaO}$ は0.92%， $\text{MgO}$ は0.49%含まれている。造滓成分量（ $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$ ）は28.76%である。 $\text{FeO}_{\text{a}}\text{SiO}_2\text{-TiO}_2$ の3元系に換算するとそれぞれ72.1%，24.7%，3.2%となり、5参考に示した平衡状態図では、ファイヤライトの領域にあり、ファイヤライトが主要鉱物となり、ウスタイト、マグネタイト、ウルボスピニルなども晶出すると想定され、顕微鏡組織とほぼ一致している。

鉄滓の化学成分の特徴から製鉄工程の位置づけを検討する図1～3で見るといずれも精錬鍛冶滓グループと判断される位置にある。

以上から、本資料は砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓と推察される。

#### 4 まとめ

本分析調査を以下にまとめた。

沢東B遺跡の土坑から出土した資料1・2、土坑を取り廻む堀から出土した資料3～5の資料はいずれも精錬鍛冶滓と推察された。いずれの資料にも $\text{TiO}_2$ が約2%～20%含まれ、砂鉄を始発原料としたことは確実である。この中で資料1は通常の調査では製錬滓と分類されるほどの高い $\text{TiO}_2$ 濃度であった。高 $\text{TiO}_2$ 砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶が行われたいたのではないかと推察される。

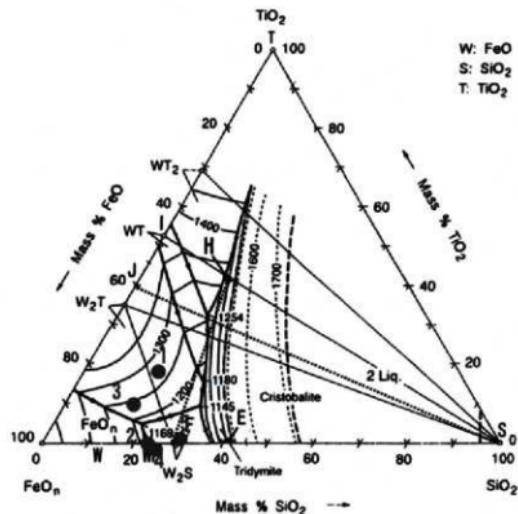
#### 5 参考

(1) 鉄滓の顕微鏡組織について：鉄滓を構成する化合物結晶には、一般的に表1のような鉱物

組織がある。酸化鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ,  $\text{Fe}_3\text{O}_4$ ,  $\text{FeO}$ )、二酸化ケイ素 (シリカ:  $\text{SiO}_2$ )、アルミナ ( $\text{Al}_2\text{O}_3$ ) および二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) を組み合せた化合物 (固溶体) が多く、これら鉱物結晶は含有量にも依存するが、X線回折により検出され確認できる。鉄滓中の低融点化合物がガラス相 (非晶質) を形成することがあり、X線回折では検出されない。

表1 鉄滓の顯微鏡鉱物組織とその観察状況

鉱物組織名 (和)	鉱物名 (英)	化学式	偏光顯微鏡観察状況
ヘマタイト	Hematite	$\alpha\text{-Fe}_2\text{O}_3$	赤褐色～赤紫色
マグнетサイト	Magnetite	$\text{Fe}_3\text{O}_4$	白青色、四角または多角盤状
ウスタイト	Wustite	$\text{FeO}$	灰白色、蘭玉状または樹枝状
ファイアライト	Fayalite	$2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$	薄い青灰色、短柱状の長い結晶
ウルボスピネル	Ulvöspinel	$2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$	白色、四角～角形板状結晶
イルメナイト	Ilmenite	$\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$	白色、針状・棒状の長い結晶
シュードブルッカイト	Pseudobrookite	$\text{FeO} \cdot 2\text{TiO}_2$	白色、針状の結晶
ハーシナイト	Hercynite	$\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$	ウスタイト中に析出、ごま粒状。
ゲーサイト	Goethite	$\alpha\text{-FeOOH}$	白～黄色、リング状が多い。
レピドクロサイト	Lepidocrocite	$\gamma\text{-FeOOH}$	
石英 (シリカ)	Silica	$\alpha\text{-SiO}_2$	白色～半透明
クリストバライト	Cristobalite	$\beta\text{-SiO}_2$	白色

(2)  $\text{FeO}_{n-x}\text{TiO}_2\text{-SiO}_2$  系平衡状態図

## 6 図表・写真

表2 調査資料と調査項目

資料 No.	遺跡 出土地点 層位	資料 種別	着 磁 度	M C 反 応	外 観 写 真	化 学 成 分	組 織 写 真	X 線 回 折
1	沢東B SK18 1層	精錬滓	○	○	○	○	○	○
2	沢東B SK18 1層	精錬滓	○	○	○	○	○	○
3	沢東B SD1 1層	精錬滓	○	○	○	○	○	○
4	沢東B SD2 1層	精錬滓	○	○	○	○	○	○
5	沢東B SD2 1層	精錬滓	○	○	○	○	○	○

表3 鉄滓の化学成分分析結果 (%)

資料No.	T.Fe	M.Fe	FeO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	MgO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	比率(%)	
											FeO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>
1	49.3	0.22	45.8	19.27	7.9	2.14	0.37	1.84	0.20	0.09	70.4	29.6
2	55.0	0.22	54.8	17.4	15.6	3.40	1.49	0.49	0.74	0.26	75.9	24.1
3	55.1	0.22	52.4	20.2	7.96	2.55	0.25	0.74	0.15	0.08	72.1	27.9
4	56.5	0.28	62.2	11.25	16.7	3.48	0.73	0.57	0.49	0.29	84.7	15.3
5	48.8	0.28	48.1	15.9	21.9	4.35	0.92	0.49	0.71	0.39	75.1	24.9

資料No.	TiO <sub>2</sub>	MnO	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	Co	C.W.	C	V	Cu	TiO <sub>2</sub> /T.Fe	MnO/TiO <sub>2</sub>	造滓成分 %
1	19.7	0.41	0.514	0.017	0.89	0.12	0.12	0.005	0.400	0.021	12.54
2	2.58	0.12	0.690	0.004	1.15	0.09	0.02	0.003	0.047	0.047	21.98
3	12.6	0.25	0.242	0.011	1.43	0.06	0.12	0.004	0.229	0.020	11.73
4	1.96	0.09	0.576	0.003	0.55	0.1	0.018	0.002	0.035	0.046	22.26
5	2.82	0.09	0.535	0.004	1.53	0.54	0.018	0.002	0.058	0.032	28.76

C.W.=化合水、造滓成分=SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+Na<sub>2</sub>O+K<sub>2</sub>O

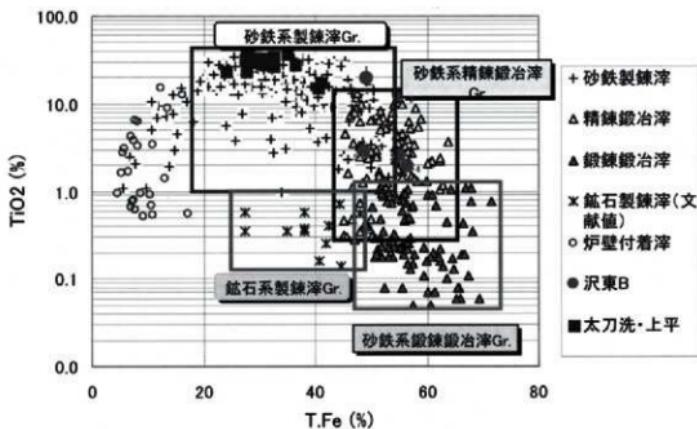


図1 出土鉄滓類の全鉄量と二酸化チタン量の分布図

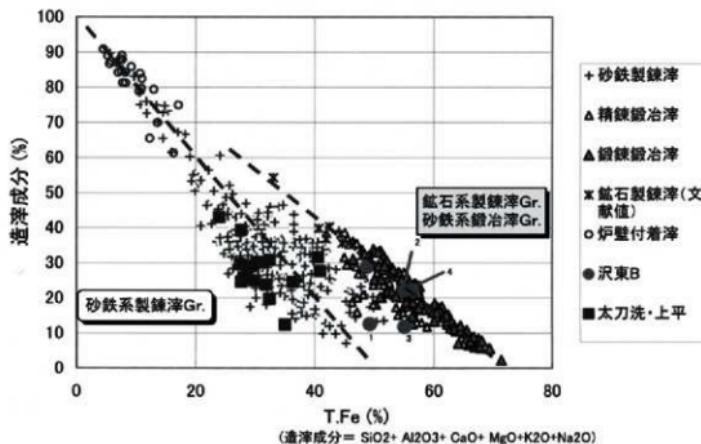


図2 製錬滓と鍛治滓の分類

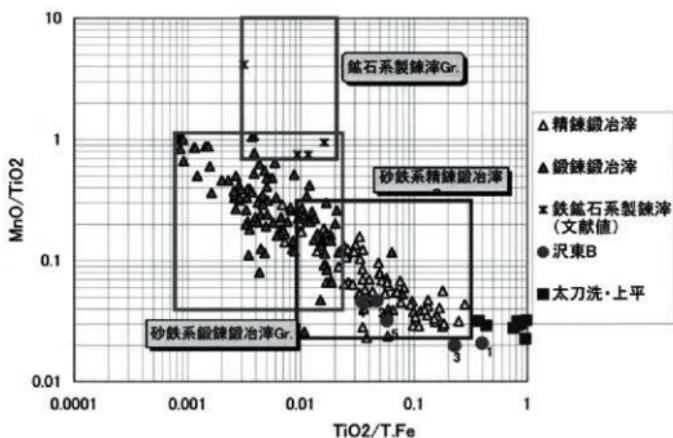
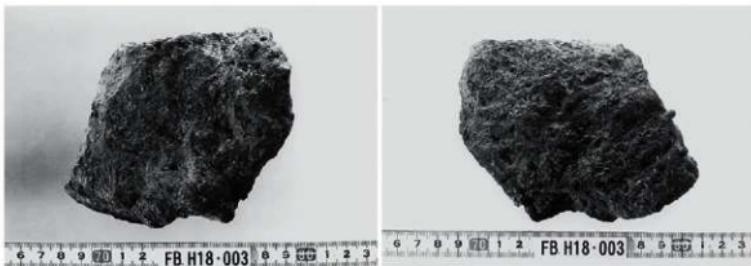


図3 砂鉄系鍛冶滓と鉱石系製錬滓の分類



写真1 外観写真1



資料3：F B.H18・003

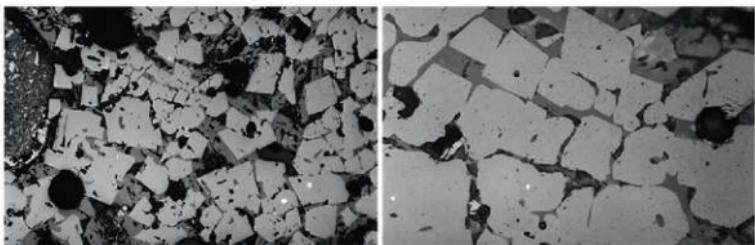


資料4：F B.H18・004



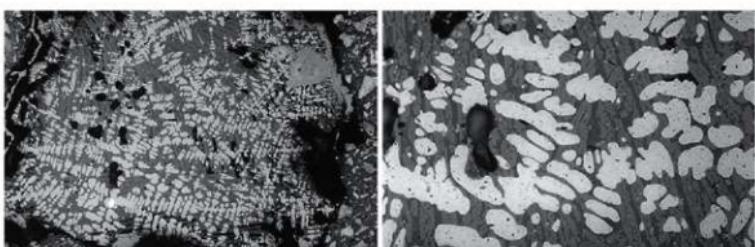
資料5：F B.H18・005

写真2 外観写真2



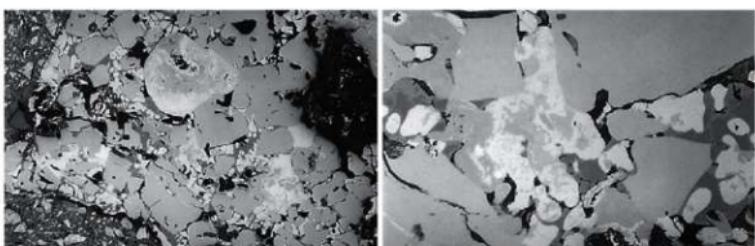
(資料1：F.B.H18・001) ×100

同×400



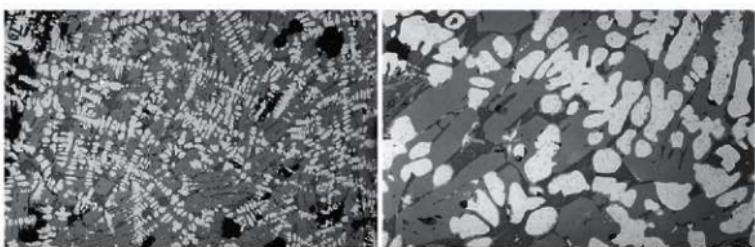
(資料2：F.B.H18・002) ×100

同×400



(資料3：F.B.H18・003) ×100

同×400



(資料4：F.B.H18・004) ×100

同×400

写真3　顕微鏡組織写真1

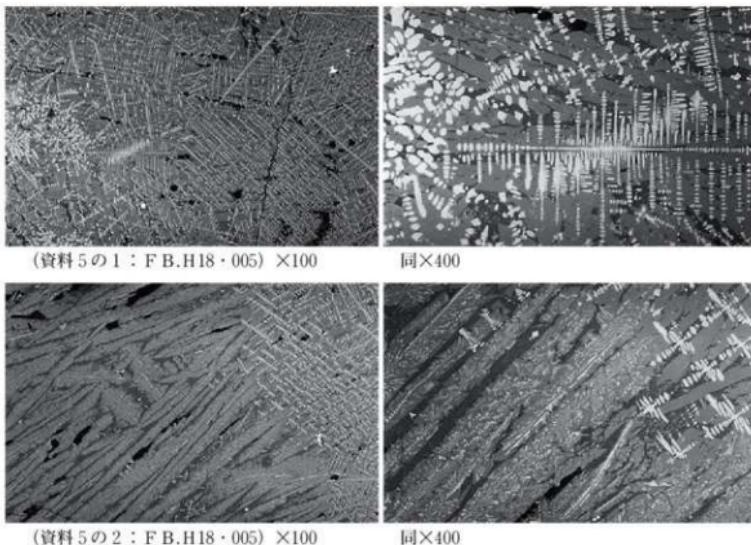
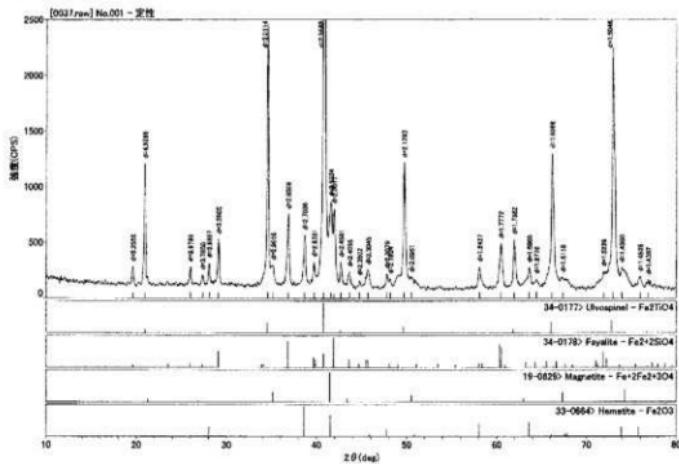
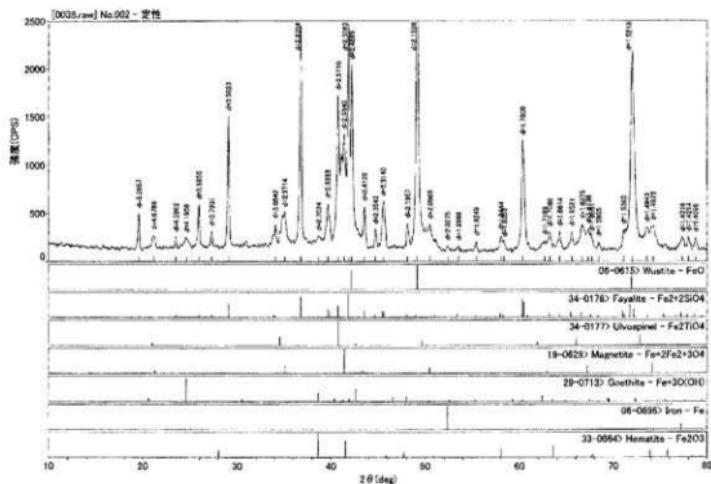


写真 4 顕微鏡組織写真 2

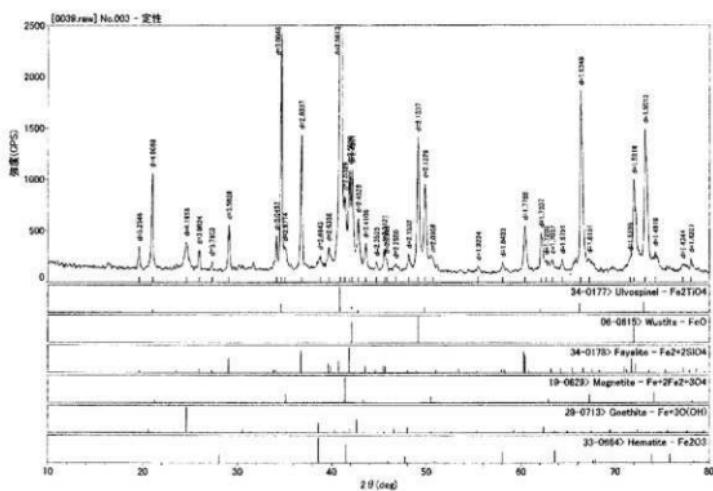
X線回折結果



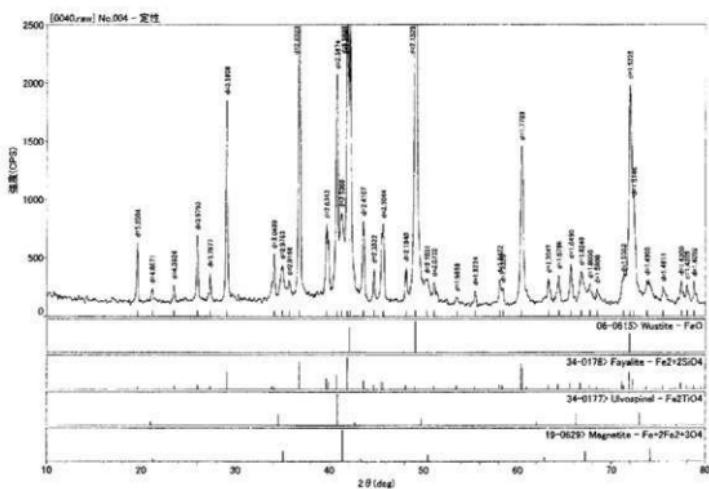
X線回折チャート 1 (資料 1 : FB.H18-001)



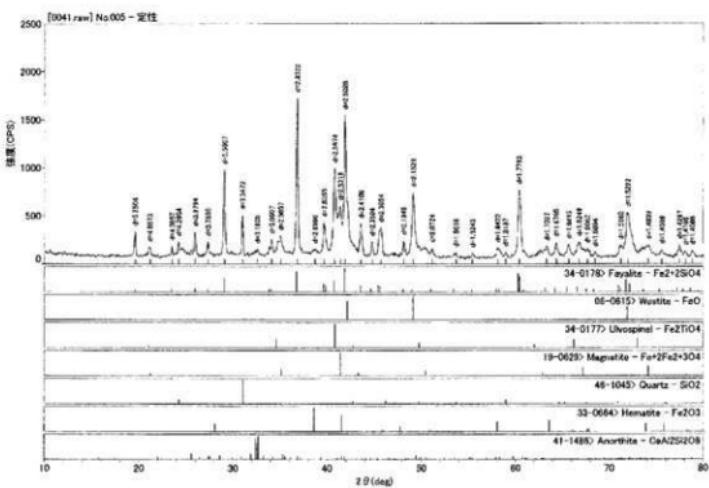
## X線回折チャート2 (資料2:FB.H18-002)



### X線回折チャート3 (資料3:FB.H18-003)



### X線回折チャート4 (資料4:FB.H18-004)



### X線回折チャート5 (資料5:FB.H18-005)

写 真 図 版





1 調査区南半部(真上から)



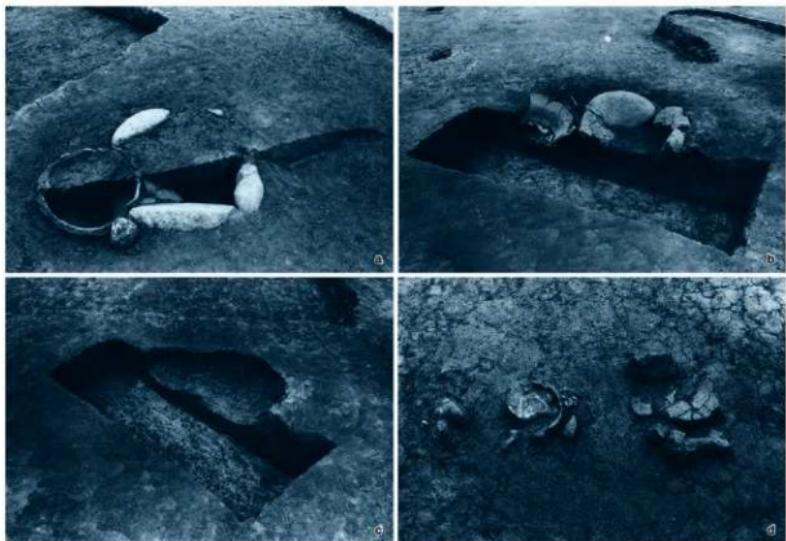
2 調査区北側(1～2次調査 合成写真：真上から)



3 1号住居跡(南東から)



4 1号住居内炉跡(南東から)



5 1号住居跡細部

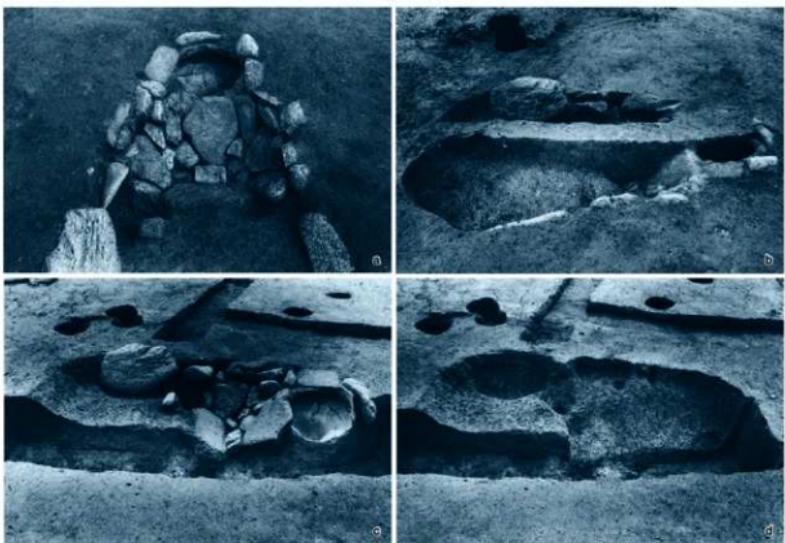
a 伊勢路堆積土(南から)  
b 伊勢路断ち割り(南東から)  
c 伊勢路掘形(南東から)  
d 遺物出土状況(東から)



6 2号住居跡(東から)



7 2号住居内炉跡(南西から)



8 2号住居跡細部

a か跡細部(南から)  
c か跡断ち割り(東から)

b か跡堆積土(東から)  
d か跡掘形(東から)



9 8号建物跡(東から)



10 9・10号建物跡(北から)



11 11・18号建物跡(北から)



12 12号建物跡(北から)



13 13号建物跡(北から)



14 14号建物跡(北西から)



15 15～17号建物跡(東から)



16 19号建物跡(南から)



17 20・22・23号建物跡(南から)



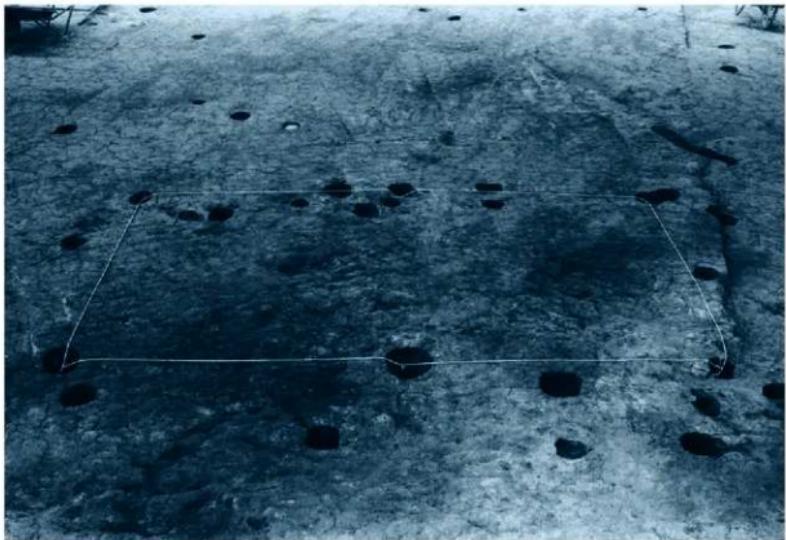
18 24号建物跡(南西から)



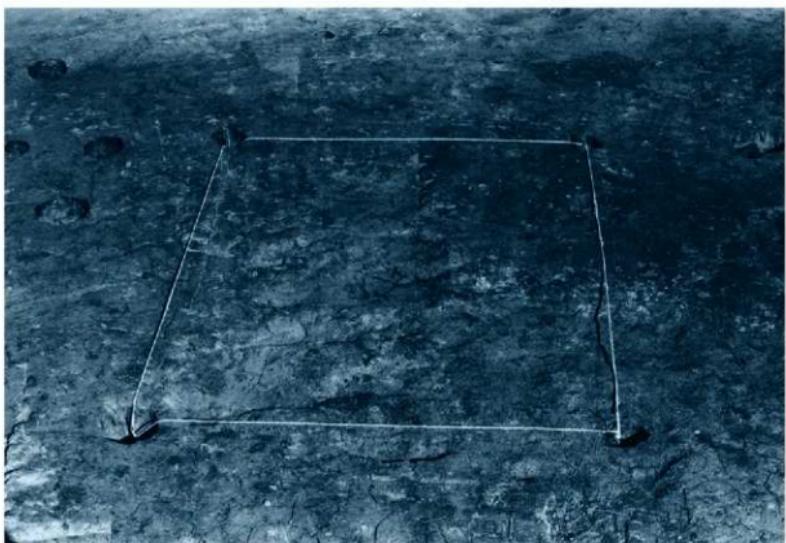
19 25号建物跡(南から)



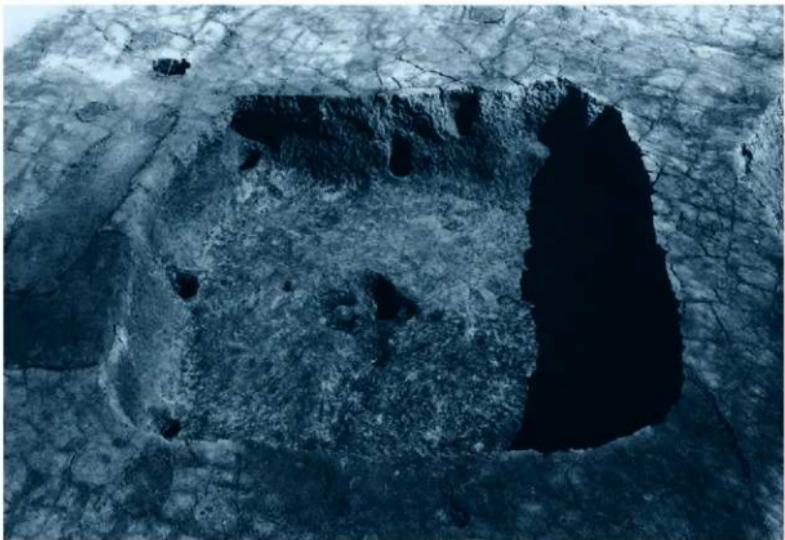
20 26号建物跡(北東から)



21 27号建物跡(南から)



22 28号建物跡(南から)



23 1号特殊遺構(北から)



24 1号特殊遺構細部

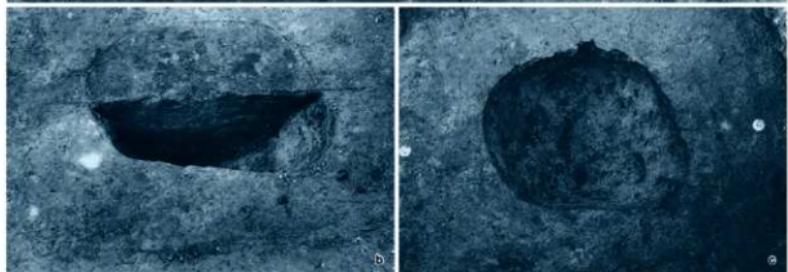
a 堆積土(南から)  
c 掘出状況(南から)

b 炭化物出土状況(北西から)

d 貼床断面(南東から)



25 2号特殊遺構(西から)

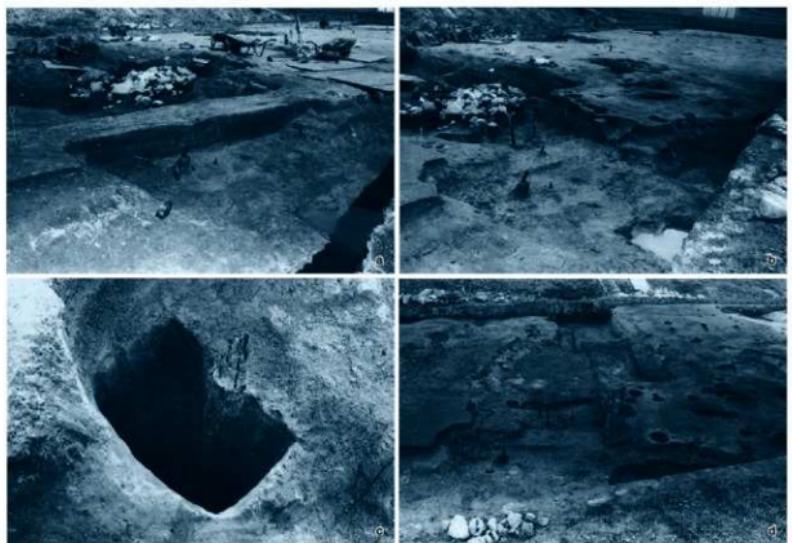


26 2号特殊遺構細部

a 堆積土(南から)  
b P 1 堆積土(南から) c P 1 完掘(南から)

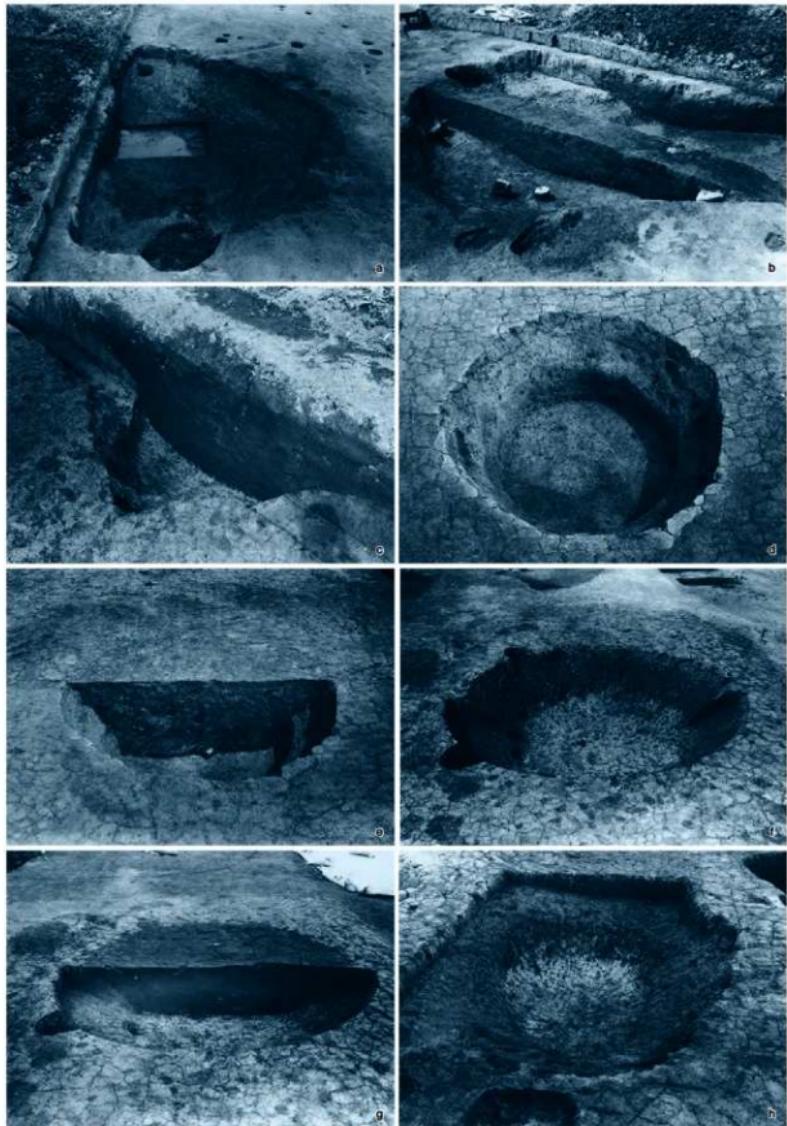


27 3・4号特殊遺構(南から)



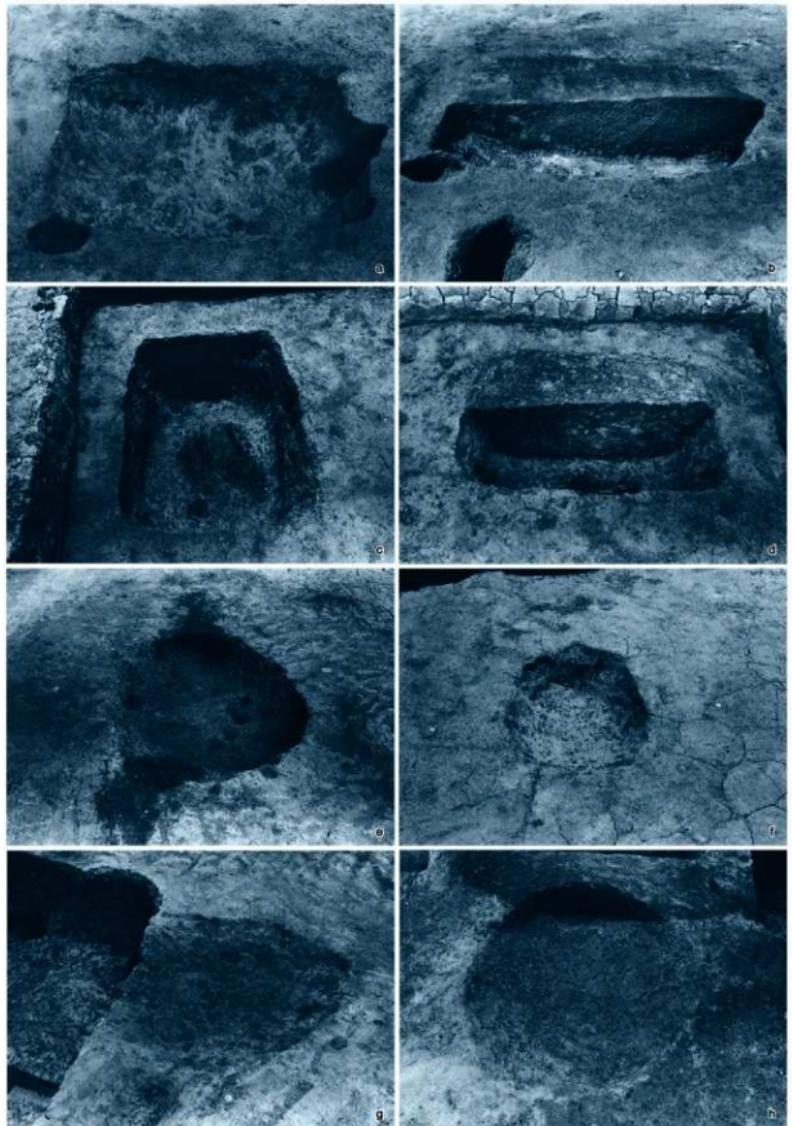
28 3・4号特殊遺構細部

a 堆積土(南東から)  
b 木札出土状況(南東から)  
c 桁16断ち削り(東から)  
d 遠景(東から)



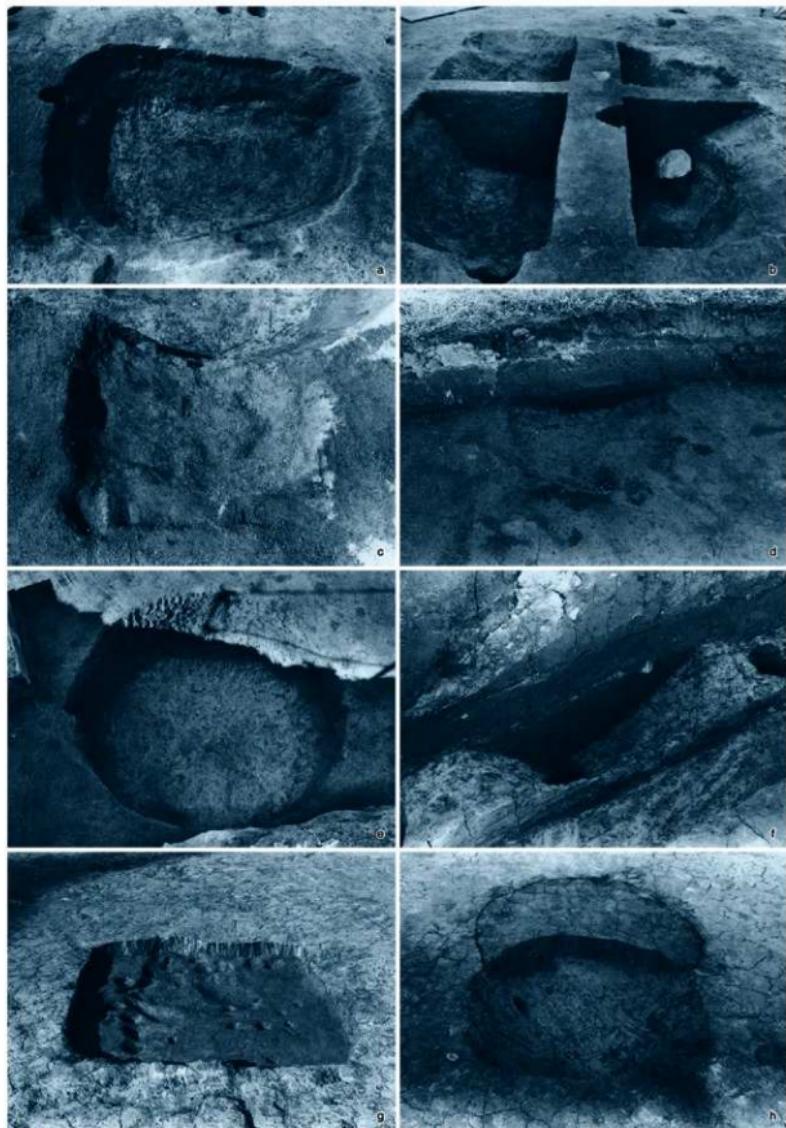
29 7～11号土坑

- |                 |                 |              |
|-----------------|-----------------|--------------|
| a 7号土坑(南から)     | b 7号土坑堆積土(北東から) | c 8号土坑(南西から) |
| d 9号土坑(南から)     | e 9号土坑堆積土(南から)  | f 10号土坑(南から) |
| g 10号土坑堆積土(南から) | h 11号土坑(南から)    |              |



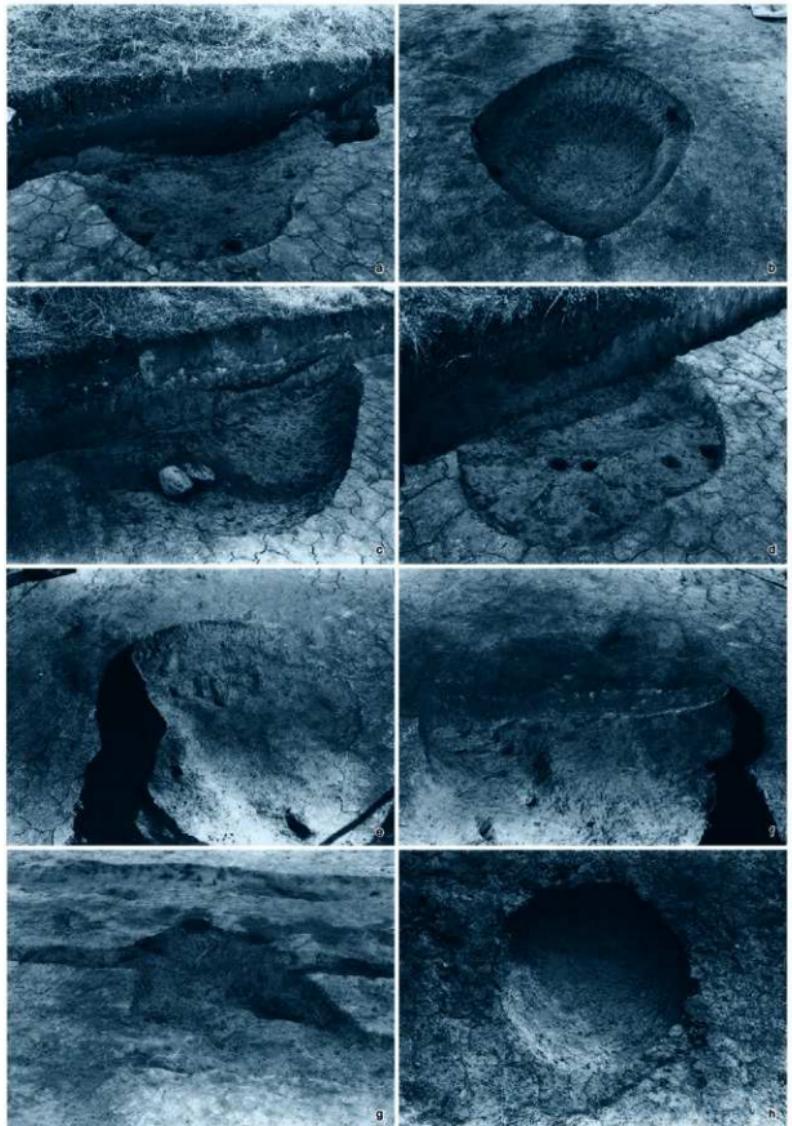
30 12~17号土坑

- |                 |                  |              |
|-----------------|------------------|--------------|
| a 12号土坑(南から)    | b 12号土坑堆積土(北東から) | c 13号土坑(北から) |
| d 13号土坑堆積土(西から) | e 14号土坑(南から)     | f 15号土坑(南から) |
| g 16号土坑(南から)    | h 17号土坑(北から)     |              |



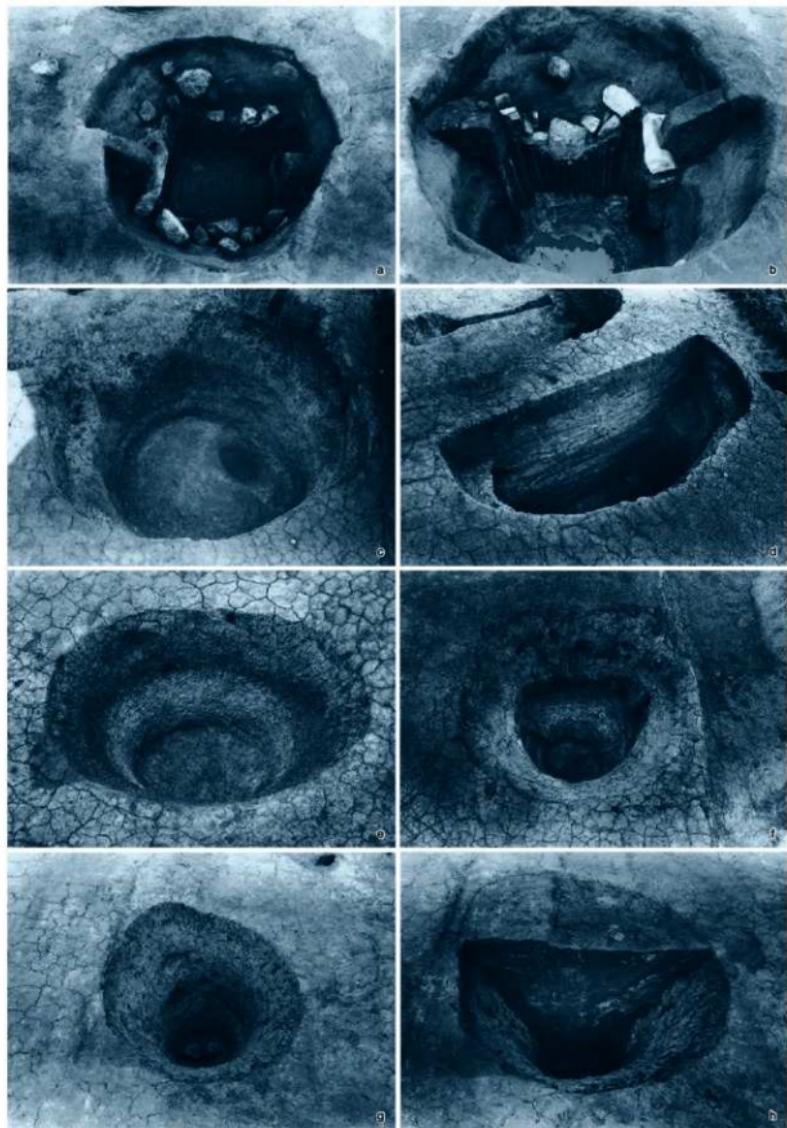
31 18~24号土坑

- |                  |                 |               |
|------------------|-----------------|---------------|
| a 18号土坑(北から)     | b 18号土坑堆積土(東から) | c 19号土坑(南から)  |
| d 20号土坑堆積土(北西から) | e 21号土坑(東から)    | f 22号土坑(南東から) |
| g 23号土坑(南から)     | h 24号土坑(南から)    |               |



32 25~31号土坑

a 25号土坑(南東から)	b 26号土坑(南から)	c 27号土坑(南東から)
d 28号土坑(南東から)	e 29号土坑(南から)	f 29号土坑堆積土(南から)
g 30号土坑(西から)	h 31号土坑(南から)	

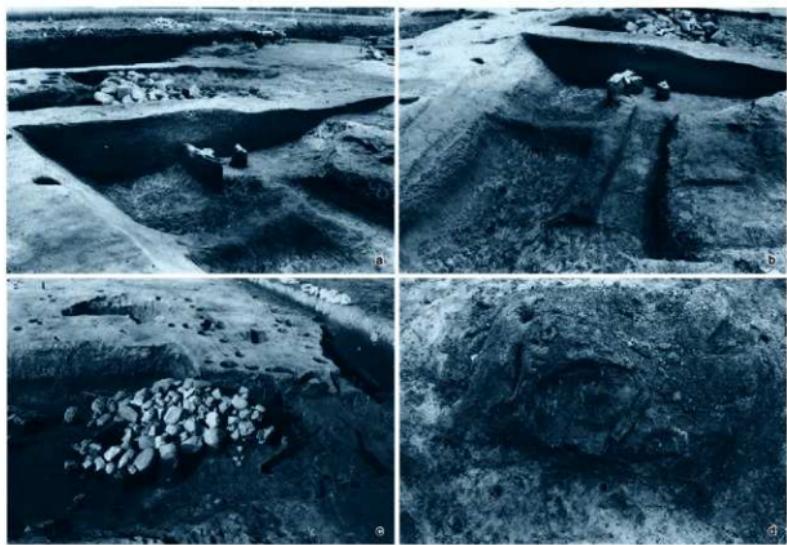


33 1・4～7号井戸跡

- |                 |                  |              |
|-----------------|------------------|--------------|
| a 1号井戸跡(東から)    | b 1号井戸跡断ち割り(西から) | c 4号井戸跡(北から) |
| d 4号井戸跡堆積土(北から) | e 5号井戸跡(西から)     | f 6号井戸跡(西から) |
| g 7号井戸跡(南から)    | h 7号井戸跡堆積土(南から)  |              |

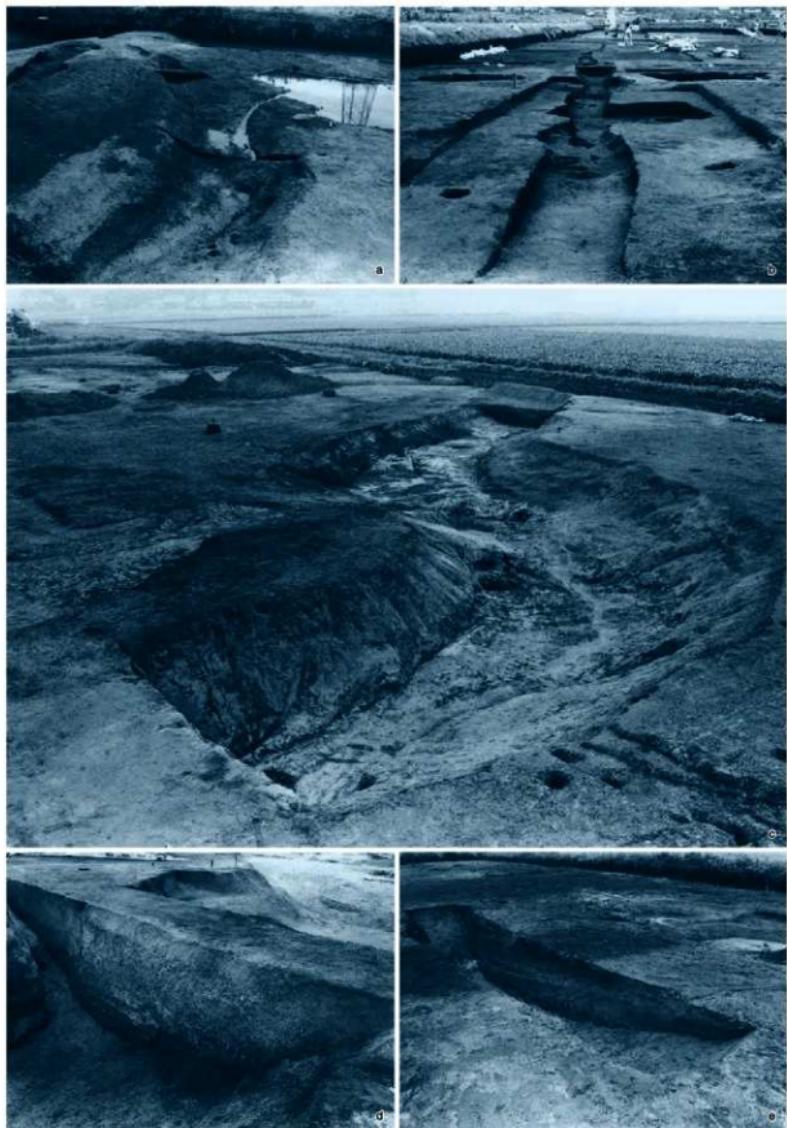


34 1～3号溝跡(西から)



35 1～3号溝跡細部

a 堆積土(北西から)  
c 2号溝跡内壁出土状況(南から)  
b 2号溝跡底部(西から)  
d 2号溝跡底部出土状況(南から)

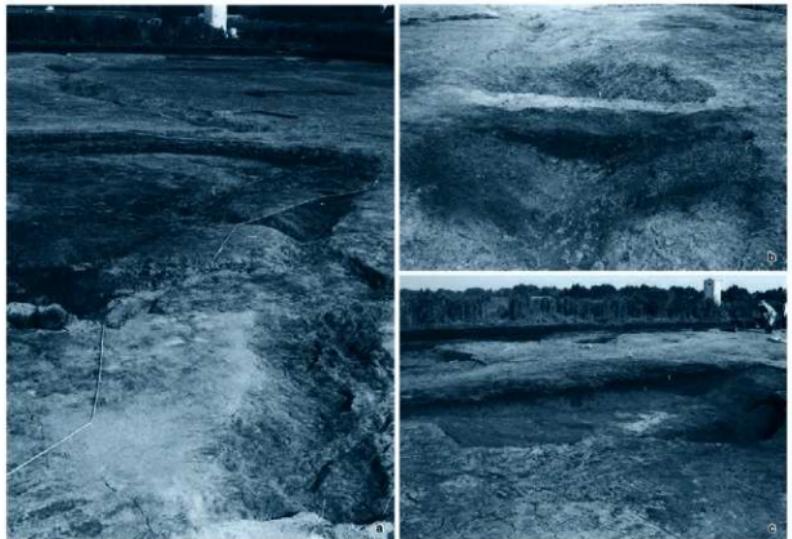


36 4・8~10号溝跡

a 4号溝跡(西から)  
d 9号溝跡堆積土(北東から)

b 8号溝跡(南から)  
e 10号溝跡堆積土(南西から)

c 9号溝跡(南西から)



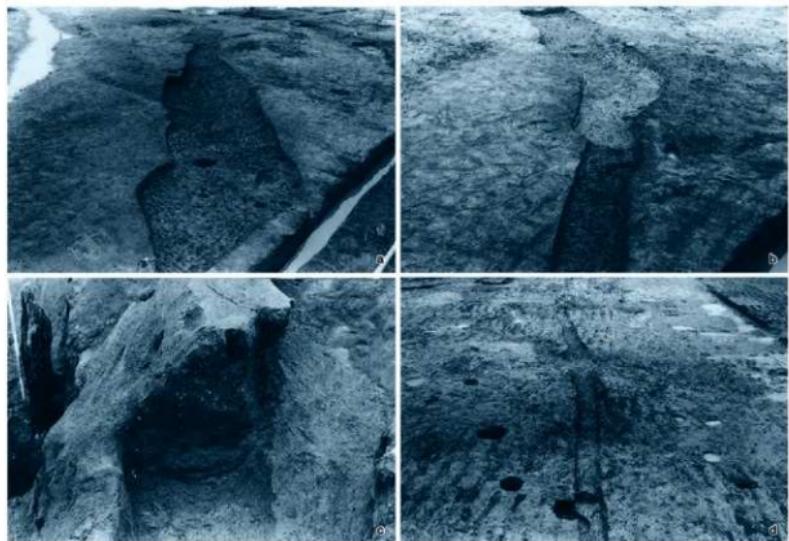
37 11・12号溝跡

a 11号溝跡(北西から)  
b 11号溝跡堆積土(南東から)  
c 12号溝跡堆積土(北西から)



38 12号溝跡(南東から)

沢東B遺跡



39 13~16号溝跡

a 13号溝跡(南東から)  
c 15号溝跡堆積土(東から)      b 14号溝跡(南東から)  
d 16号溝跡北側(南から)



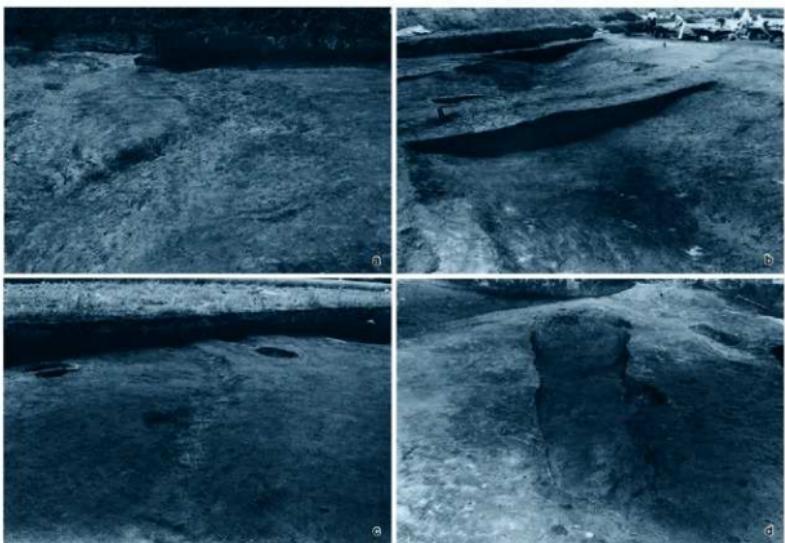
40 16・17号溝跡



a 16号溝跡南側(北から)      b 17号溝跡(南から)

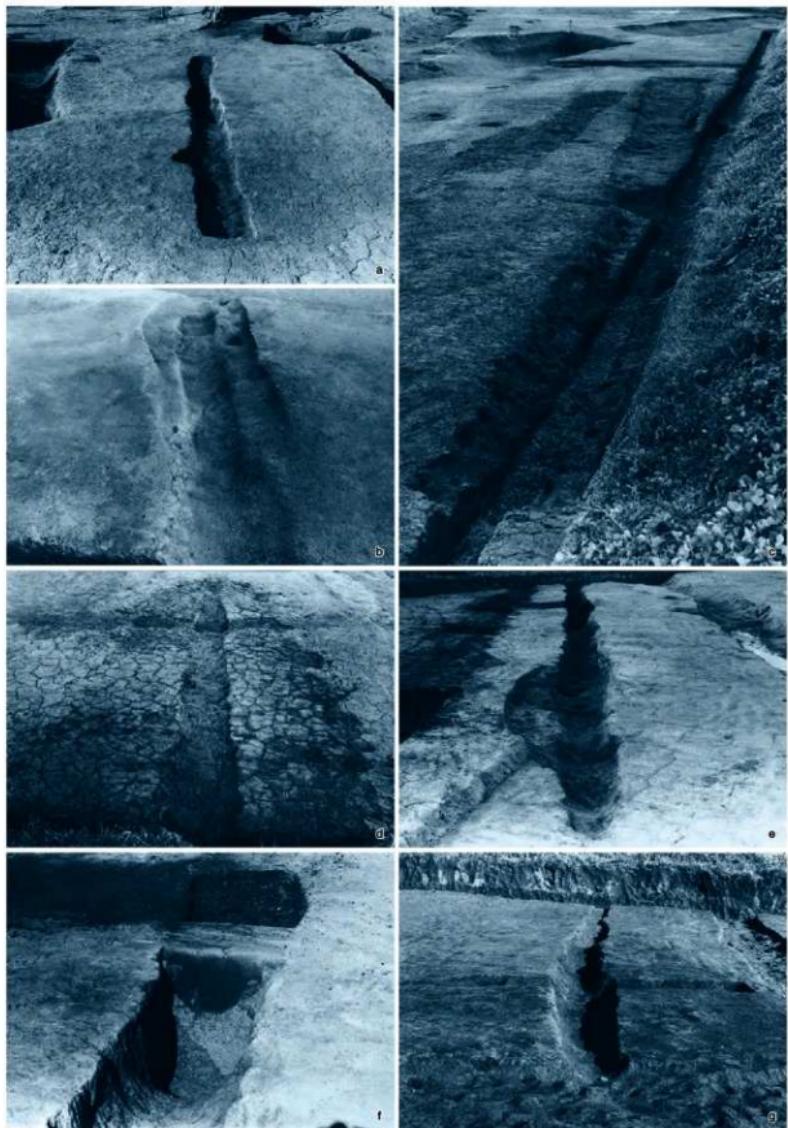


41 19号溝跡(西から)



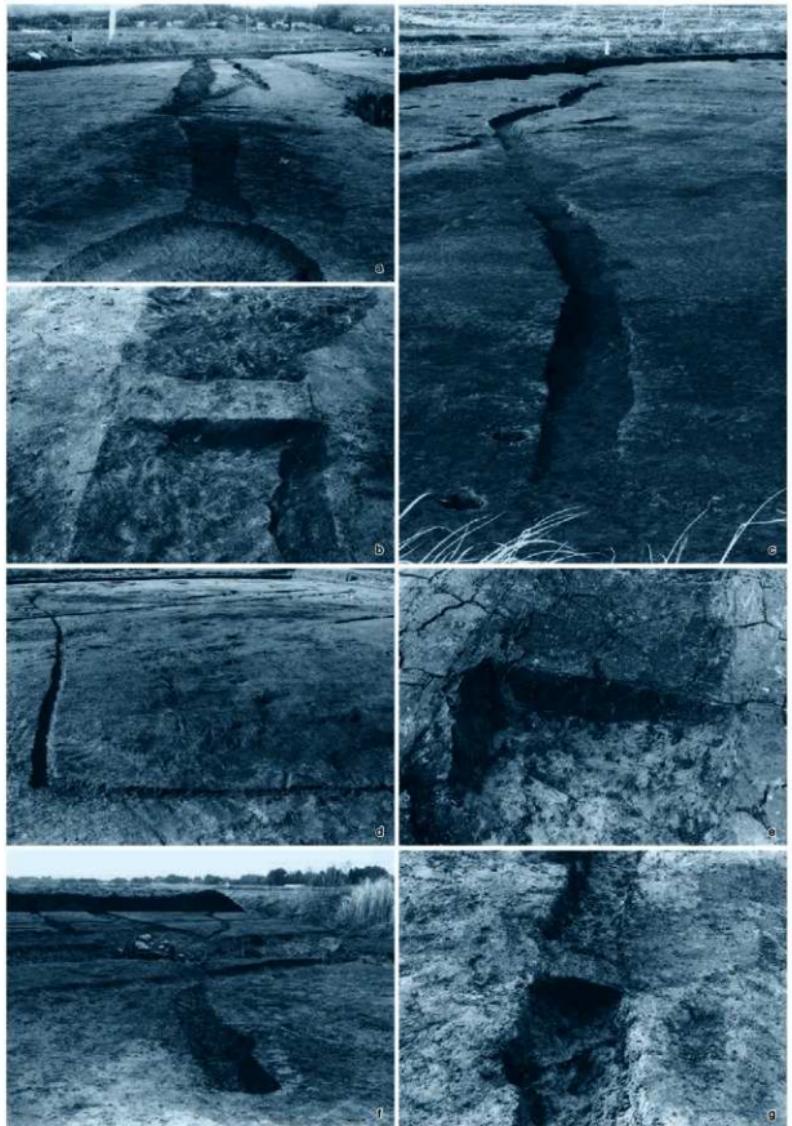
42 20~23号溝跡

a 20号溝跡(東から)  
b 21号溝跡堆積土(南東から)  
c 22号溝跡(北西から)  
d 23号溝跡(西から)



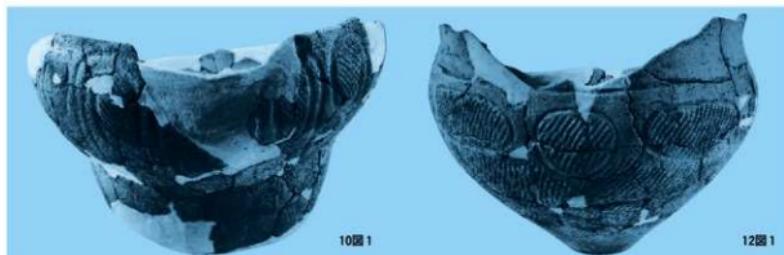
43 24~29号溝跡

a 24号溝跡(南から) b 25号溝跡(北から) c 26号溝跡(西から)  
d 27号溝跡(西から) e 28号溝跡(南から) f 28号溝跡堆積土(南から)  
g 29号溝跡(西から)

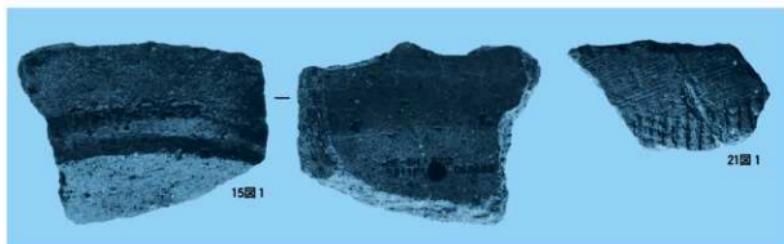


44 30~33号溝跡

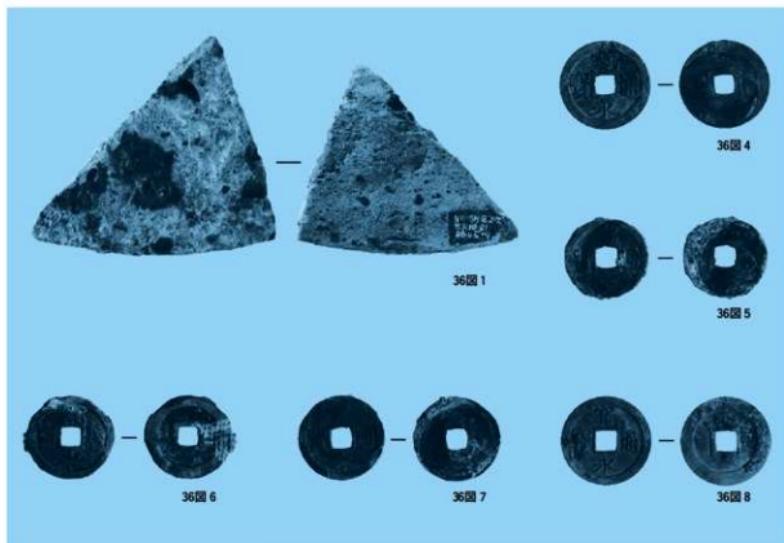
a 30号溝跡(南から)	b 30号溝跡堆積土(南から)	c 31号溝跡(南から)
d 32号溝跡(東から)	e 32号溝跡堆積土(東から)	f 33号溝跡(北西から)
g 33号溝跡堆積土(西から)		



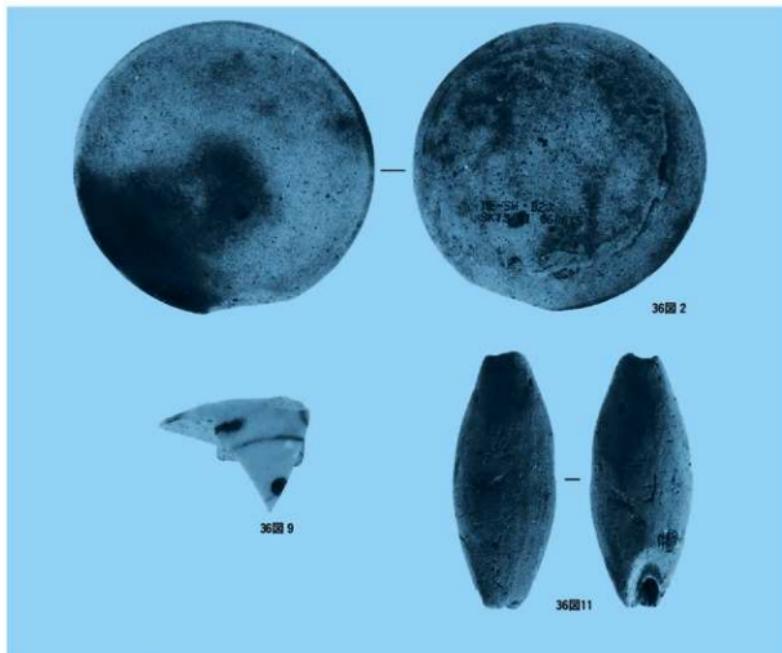
45 1・2号住居跡出土遺物



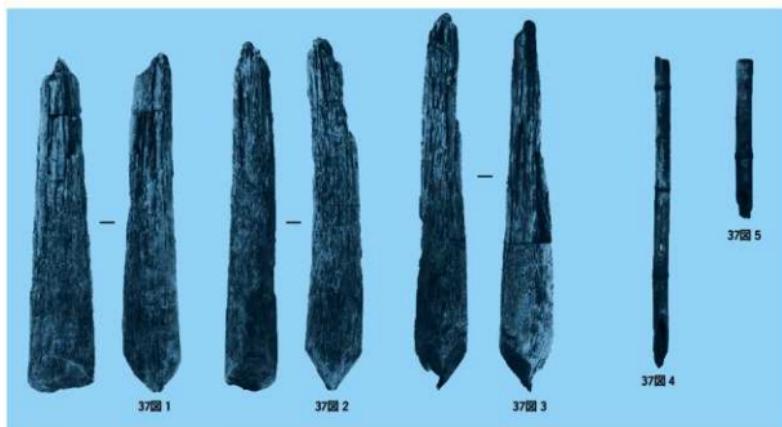
46 11・23号建物跡出土遺物



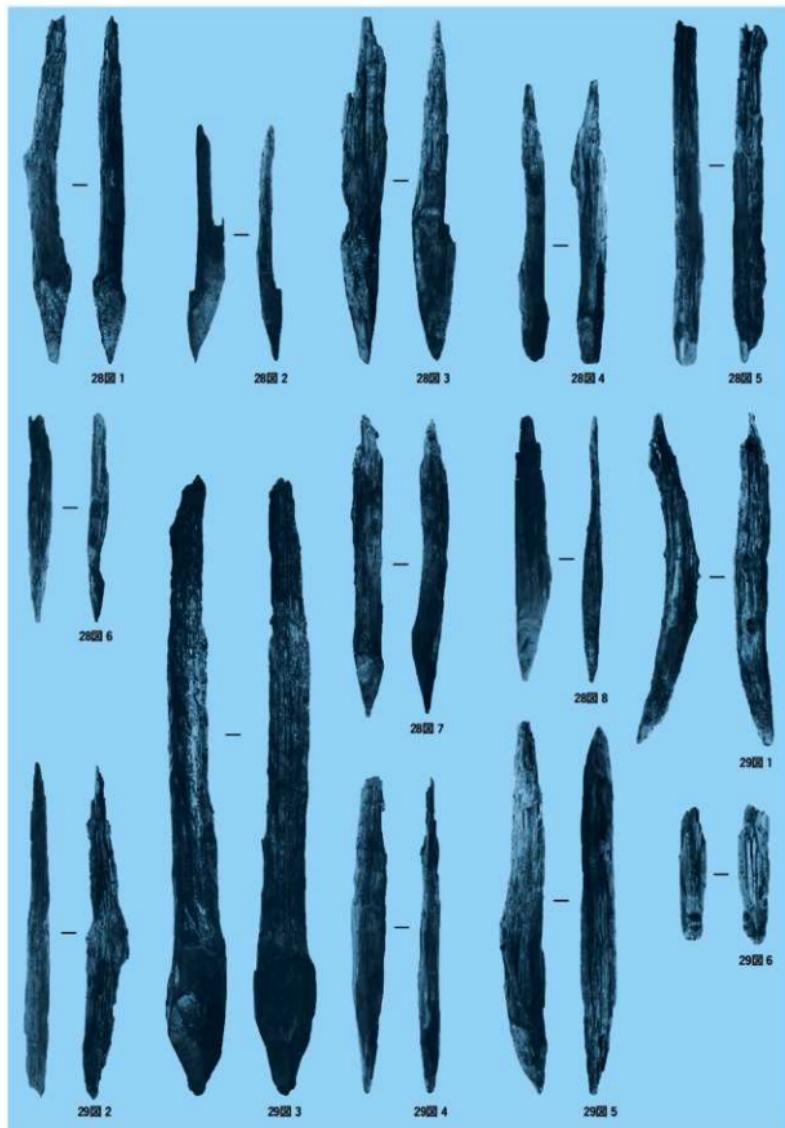
47 10・13号土坑出土遺物(1)



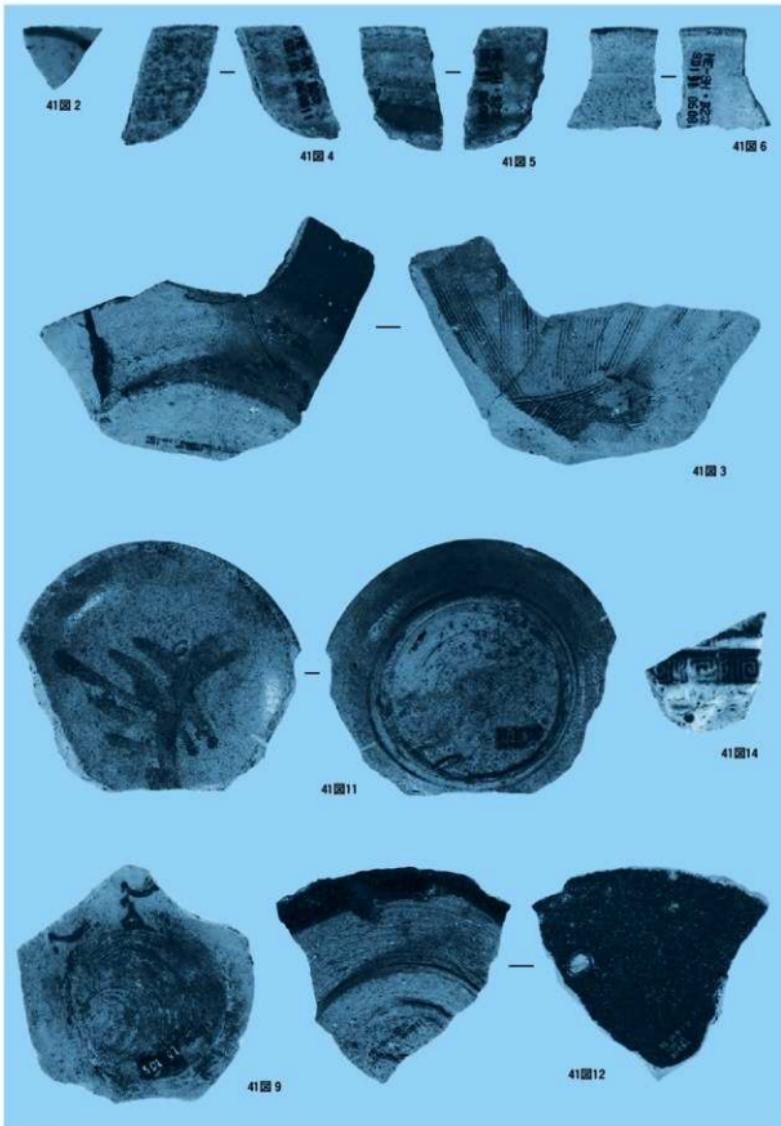
48 13・18・25号土坑出土遺物



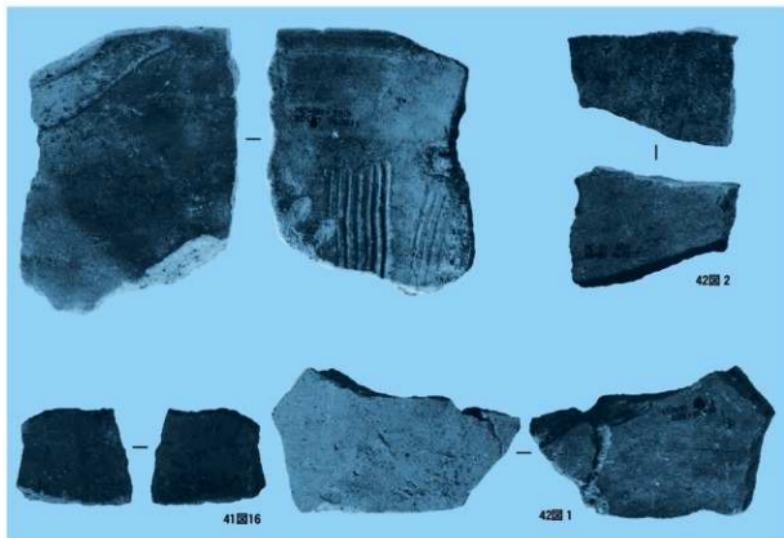
49 1号井戸跡出土遺物



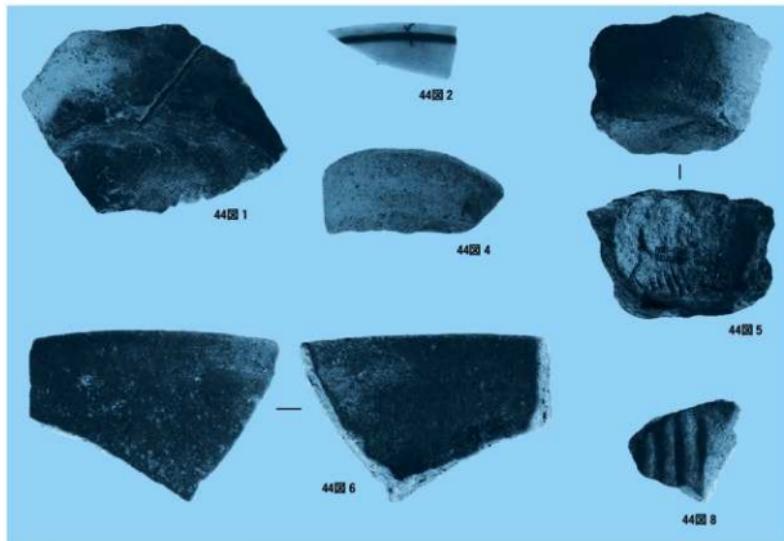
50 3号特殊造構出土遺物



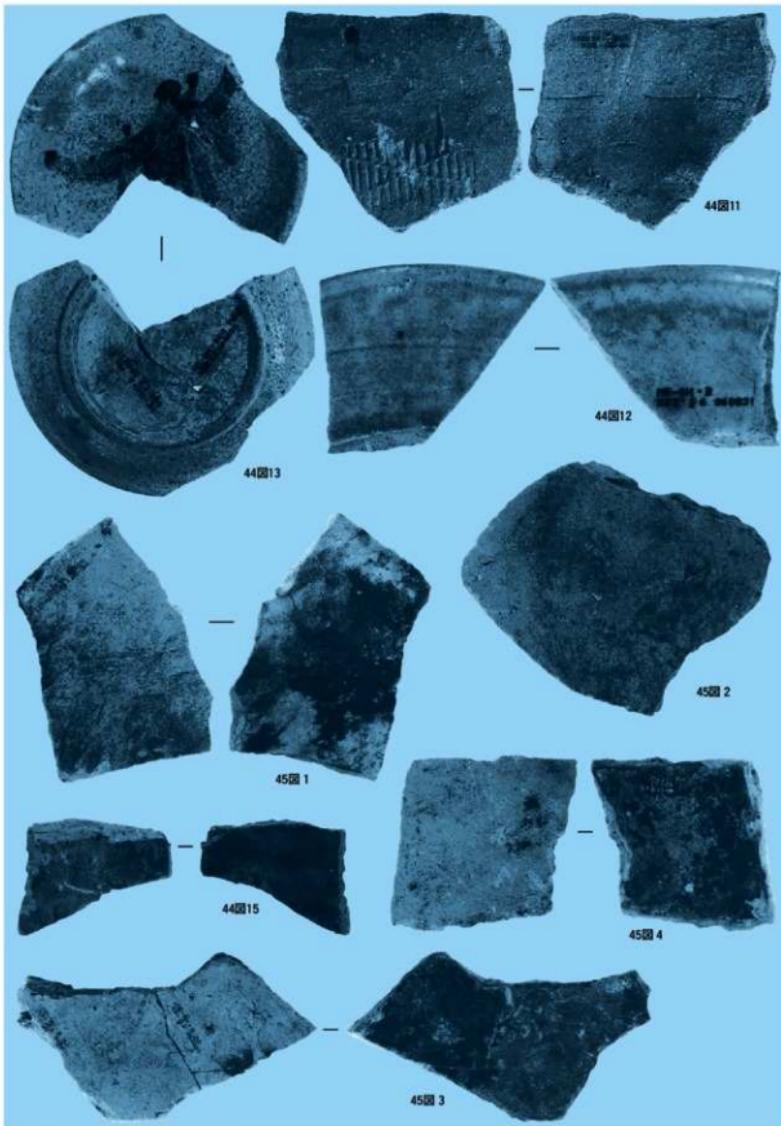
51 1号溝跡出土遺物(1)



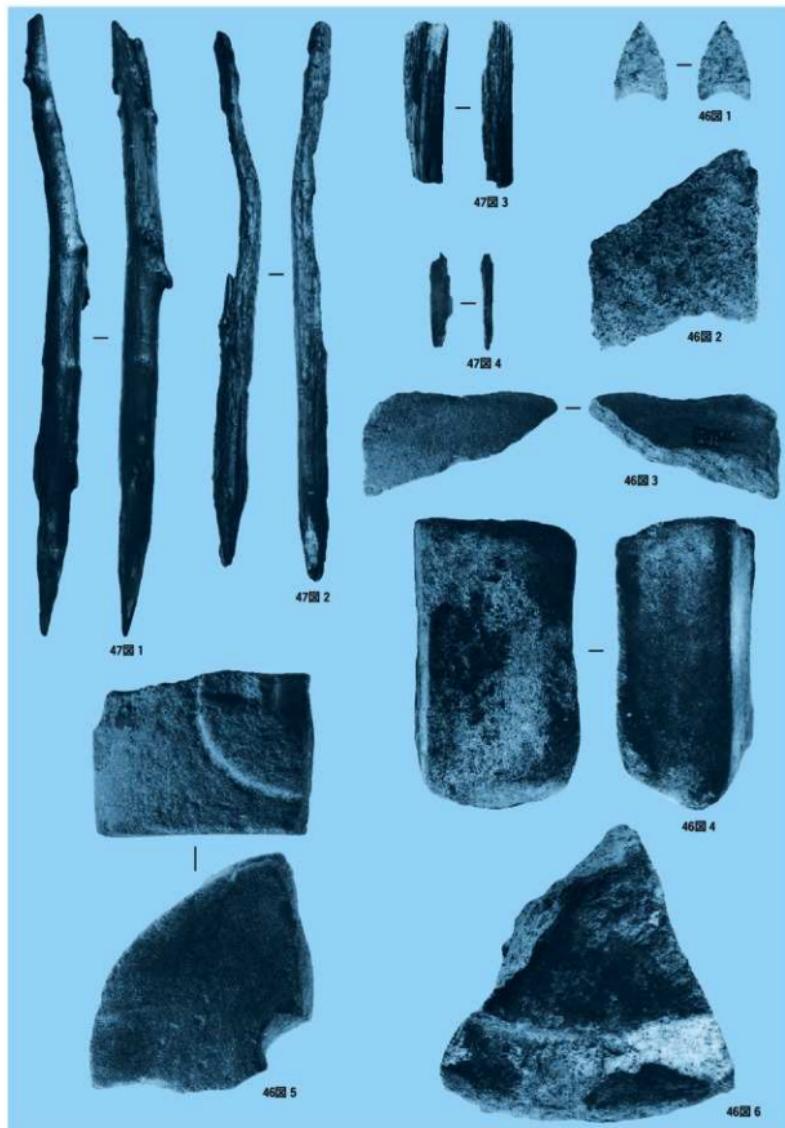
52 1号溝跡出土遺物(2)



53 2号溝跡出土遺物(1)



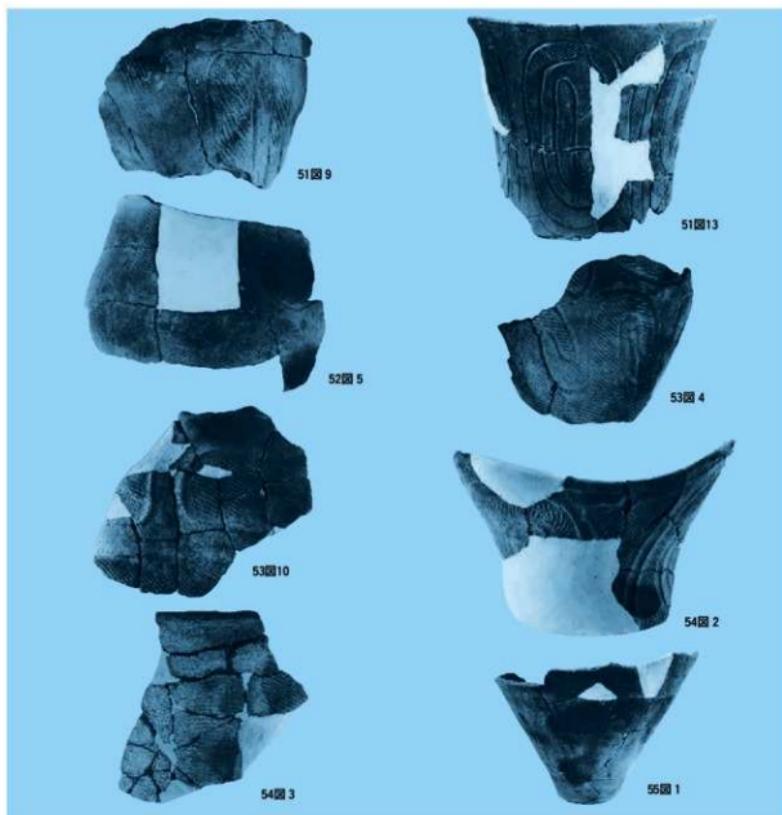
54 2号溝跡出土遺物(2)



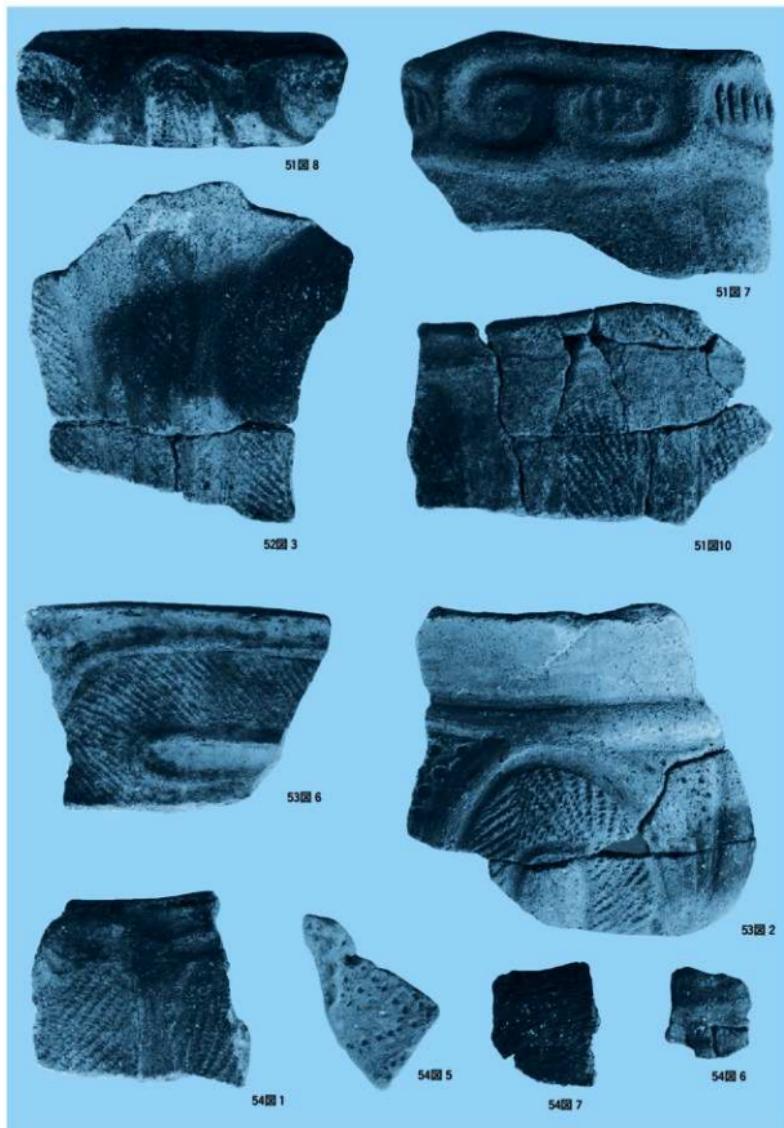
55 2号溝跡出土遺物(3)



56 2～4号溝跡出土遺物



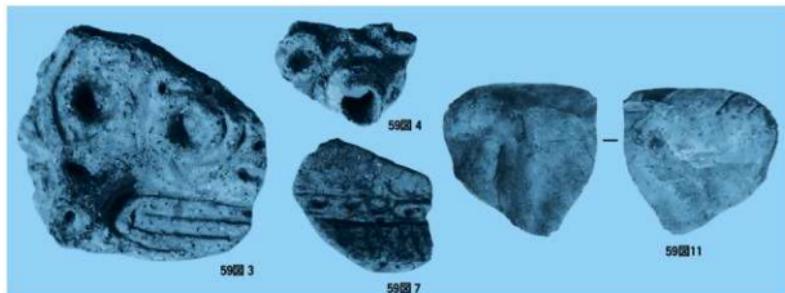
57 9号溝跡出土遺物(1)



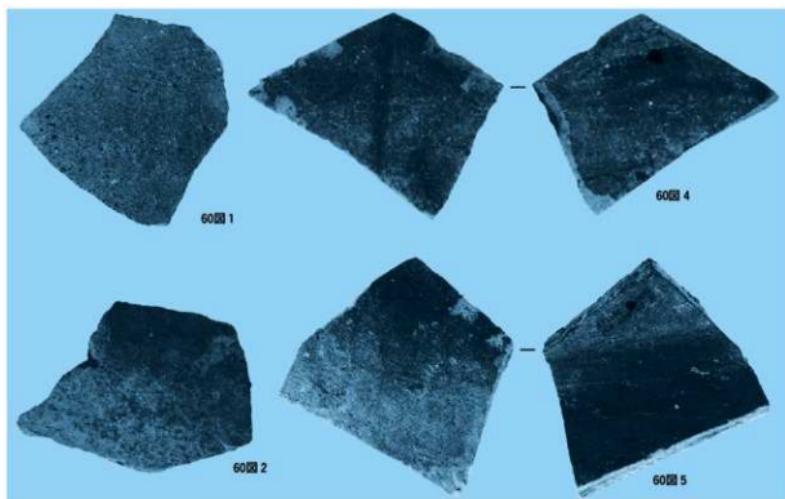
58 9号溝跡出土遺物(2)



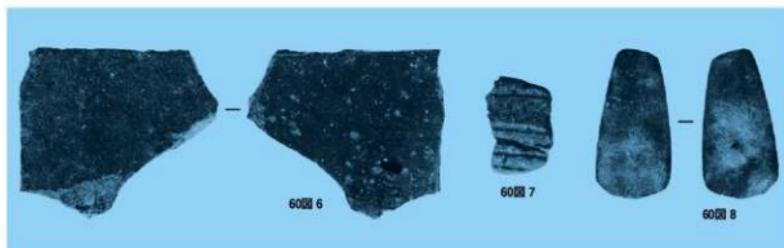
59 9号溝跡出土遺物(3)



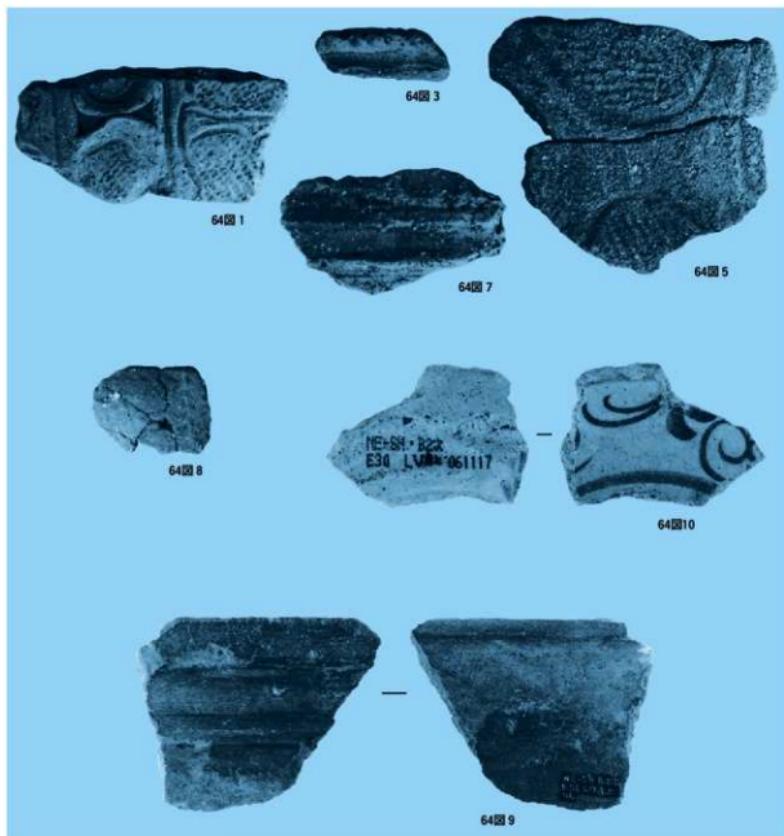
60 12·20号溝跡出土遺物



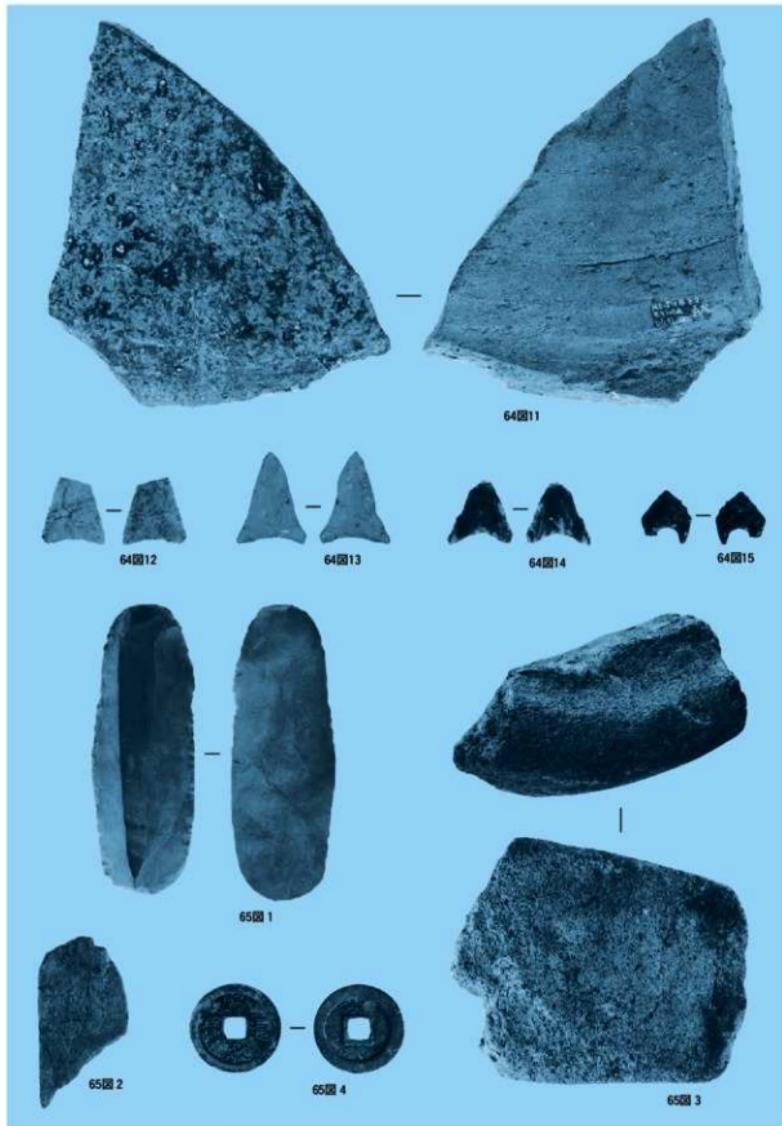
61 28号溝跡出土遺物



62 29・31号溝跡出土遺物



63 遺構外出土遺物(1)



64 遗構外出土遺物(2)

## 報告書抄録

ふりがな	じょうばんじどうしゃどういせきちょうさほうこく49						
書名	常磐自動車道遺跡調査報告49						
シリーズ名	福島県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第444集						
編著者名	福村圭一・坂田由紀子						
編集機関	財團法人福島県文化振興事業団 遺跡調査部 遺跡調査グループ 〒960-8115 福島県福島市山下町1-25 TEL 024-534-2733 FAX 024-525-7719						
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL 024-521-1111						
発行年月日	2007年12月3日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村 遺跡番号	遺跡番号	○'〃	○'〃			
沢東B (2次調査)	福島県双葉郡 浜町大字立野 字沢東 他	547	000137	37°31'00"	140°56'40"	2006年4月11日 12月15日	13,280m <sup>2</sup> 道路(常磐自動車道) 建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
沢東B (2次調査)	集落跡 館跡 屋敷跡	縄文時代 中世 近世	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 特殊構造 土坑 井戸跡 欄列跡 焼土遺構 小穴	2軒 21棟 4基 25基 5基 11列 2基 895基	縄文土器 石器 土師器 須恵器 陶磁器片 石製品 木製品 古銭 羽口片 鐵津	調査区南側からは、縄文時代中期末葉の集落跡を確認した。複式炉を作り、河川沿いに営まれた小集落と考えられる。 調査区北側からは、1次調査時に確認された弧状の溝跡の続きが検出された。底部は「障子塗」を呈し、出入口施設や門を作うことから、中世～近世にかけての城に囲まれた館跡であることが確認された。『奥相志』立野村の頃に記載される立野氏との関連が高いものと思われる。また、調査区南部から中央付近にかけては、近世を中心とする屋敷跡が散在することが確認された。	

福島県文化財調査報告書第444集

## 常磐自動車道遺跡調査報告49

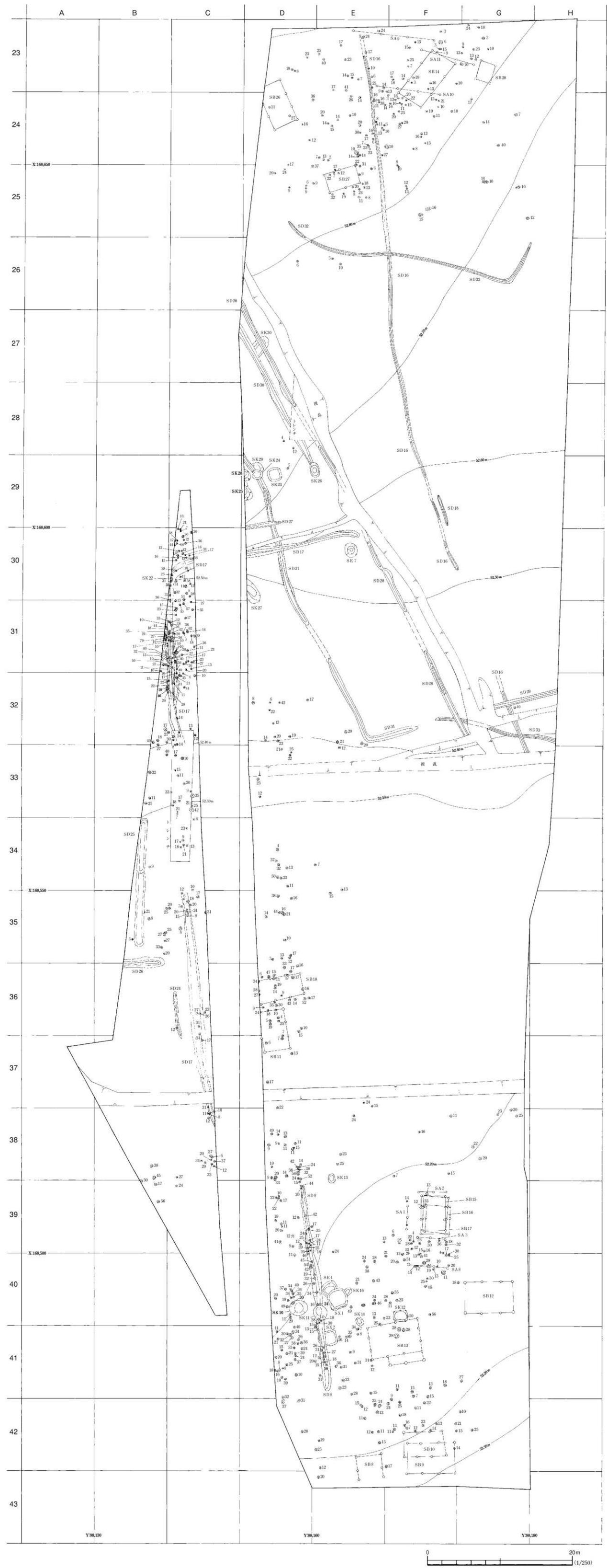
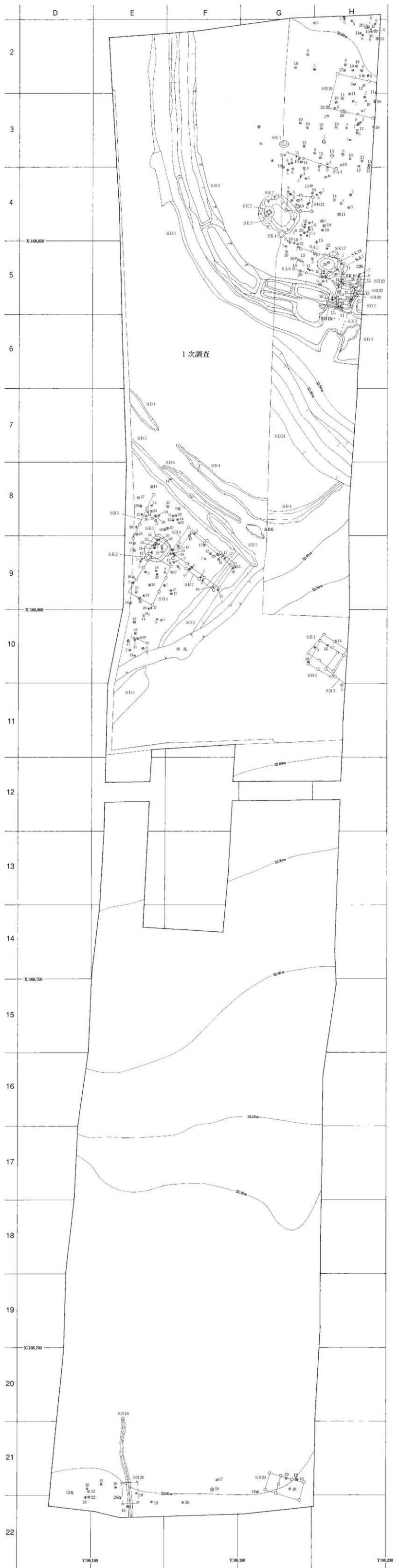
さわひがし  
沢東B 遺跡(2次調査)

平成19年12月3日発行

編集 財團法人 福島県文化振興事業団 遺跡調査部  
 発行 福島県教育委員会 (〒960-8688) 福島市杉妻町2-16  
 財團法人 福島県文化振興事業団 (〒960-8115) 福島市山下町1-25  
 東日本高速道路株式会社東北支社いわき工事事務所 (〒970-0101) いわき市平下神谷字仲田100  
 印刷 不二印刷株式会社 (〒963-8041) 郡山市富田町字権現林26-61

この報告書は中性紙を使用しています。





付図 沢東B遺跡遺構配置図(中・近世)